

がっこうぐらし！—
Raging World—

Moltetra

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本編・Raging World：とある隻腕の男は仲間を避難所に残し、1人で世界を彷徨っていた。そんな中、学園生活部の少女達と出逢う。

時系列は卒業後、キャンピングカーを入手した後になります。二番煎じ所じやないです。ね。

外伝・Refinement World：雅が学園生活部に出逢う前のお話……前日談のようなもの。

こちらは超絶不定期になります。ご了承ください。なお途中でルート分岐があり、学園生活部と出逢う筈のTRUEENDルート。出逢えないBADENDルートが存在

します。

(本来は学園生活部と出逢わない設定なので、どちらかというとならBADENDが正規ルートになります)

もし初めて見ると言う方は本編であるRaging World、その11話まで見る事をお勧めします。

外伝・Strange World：もしも主人公達3人が異変の初日から学園生活部に合流していたら……こうなっているかもしれない。

グロちよつと、シリアスちよびつとギャグ満載(予定)のお話になります。こちらは完全に別の派生になりますので、初めての方でも安心して見られます。

ですが本編を見ているとまだまだまともな主人公と本編での主人公の相違点など楽しめるかと思えます。もうひとつの外伝と同じく超不定期ですが、シリアスに疲れた時などに進めていくので大分早くなると思われれます。

ゆつくり書いていくつもりですのでもし楽しみにされていたならごめんなさい。

！注意！

- ・ オリジナルキャラによる展開
- ・ 世界観や設定の解釈に齟齬があるかもしれません
- ・ グロテスクな描写、又は人によって不快になる内容

- ・ 処女作による駄文、誤字
- ・ キヤラ達の精神崩壊要素、又は鬱展開

目次

Refinement World

プロローグ

Raging World

153	7.	7.	6.	5.	4.	3.	2.	1.	
	5.	狂創	遭遇	変容	変革	妹	本質	邂逅	
	閑話・あたらしいなかま								
		128	102	80	56	39	22	7	1

8. 新入

9. 調達

10. 再会

11. きつと何処かにある、いくつか

の気持ち

12. 瞳

12. 0001. 閑話・悪夢

13. 休日

14. お湯炊き

15. お風呂・前編

16. お風呂・中編

17. お風呂・後編

18. 奪還・前編

415	391	374	341	324	300	290	266	244						
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	--	--	--	--	--	--

2.	1.	S t r a n g e		2 8.	2 7.	2 6.	2 5.	2 4.	2 3.	2 2.	2 1.	2 0.	1 9.
ぶらつく・報告	けんせつ・計画	W o r l d		前兆	疑惑	飛鳥	不穩	合流	拠点	少女	決着	撤退	奪還・後編
699	678			668	638	606	591	571	553	534	511	474	449

Refinement World

プロローグ

来年は、生き残れているだろうか。ふと微かな希望に縋ってみる。でも……悲しいかな。どう計算しても、この1ヶ月先の事ですら予想が付かない。食料はある、武器は心許ないが俺達ならあんなヤツらに見つかる事はない。そう、俺達なら……

そんな慢心のような言葉を脳裏に焼き付ける。大丈夫だ、今まで何ともなくやってこられたんだ。こんな事になったのは全くの予想外だったけど、一先ず初動は成功した。スタートダツシユはなんとかできたんだ、ならこの後も……転ばない様に、あの化物共から逃げればよい。

「ミヤちゃん、寝れないのか？ 明日に堪えんぞー」

「そうだね……まだ慣れてないのもあるんかね。目が冴えて……あいつらが動く度に飛び起きるんだよ」

「耳良すぎだろ……」

月の光に照らされて、俺達はベランダで美しい星空と、眼下に広がる煉獄を見る。ヤツらは昼夜問わず動き続ける。眠る必要はないのか、いつでも低い唸り声を出しながら

よたよたと歩いているのだ。

そんな光景をまるで他人事の様に見つめてみると、不意に右肘にこつんと何か当てる。

「飲まないか？ これなら使い道もないし、不味くなる前に飲んじまおうぜ」

「……夜に隠れて酒盛りかあ、悪い事する奴もいたもんだな」

「おつ、じゃあいらないんだな？」

「いる」

差し出された缶酎ハイを受け取り、なるべく音を立たない様に静かにタブを起こした。アルコール度数6%とかいう表示に苦笑しながら、俺達は静かに缶をぶつけ合う。

そして生温いレモン味の酎ハイで喉を潤し、下に落とさない様室外機の上に缶を置いた。

「今日で1ヶ月。なんとか生き残れたな」

「……だね」

俺達は、この巡々丘に旅行に来ていた。内容としてはあるアニメの聖地巡礼……もとい忙しくなってきた俺達の久々の息抜きとして。とんとん拍子で休みが取れたり、ホテルの予約も取れたり怖いくらいだったが……まさかこうなるとは予想していなかった。

不幸中の幸いと言えるのは、こうなった時俺達はホテルの中に居た事だろう。前日はそこから中歩き回って疲れ果て、酒盛りしたのも相まって寝坊した。起きたのは昼頃……謎の爆発音が目覚まし代わりだった。

「とは言っても、この先どうなる事か。掃除はどうか終わつたけど血は流石に落とせないし。水道でも使えれば話は別なんだけどなあ」

「生活するスペースは綺麗だしいいんじゃない？ 感染症やら何やら気になる事は山ほどあるけど、今はこうして生きていられれば」

「……(もつとも)」

示し合わせた訳でもないのに、俺達が飲むペースは自然と合っていた。この先どうすればいいか？ そんな事を考えれば、絶望感に打ちひしがれてしまう。でも考えない訳にはいかなくて、どうにか壊れない程度に、手遅れにならない程度に考えなきゃいけない。

食料の備蓄はまだ大丈夫。困っている訳でもないが、余裕があるとは言えない。適度に調達しながら周辺の探索をして……どこかで武器を調達しなければならぬ。

「それで雅さん、今後の予定は？」

「食料と武器の調達、周辺区画の探索……無理しない程度にやっていきたいけど……それも無理があるかね？」

「うーん……まだ不確定要素が多過ぎるんじゃないですかねえ。武器はいいとしても、実際あいつらが予想外の動きしたらすぐお陀仏だし」

「難しいな……無難に行くなら今後とも隠密性を重視するけど、些か運べる量も制限されるし時間もかかる。それにもし回避できない状況に陥ってしまえば」

「……難しいもんだ」

「奴らの量は減りはしないが多くなる可能性はある。その内掃討にも手を出していかないと……」

頭の中で色々なタスクが組まれていくが、そのどれもが前提条件を必須としている。そしてその前提条件にも前提条件があり、その前提条件をクリアするには前提条件があったりクリアが難しかったり。考えてると頭の中がこんがらがって、感じ始めていた苛立ちを溜息と一緒にヤツらへと吐き出してやった。

当面は物資の確保。それはいつでも俺達に押し掛かる問題であり、いつまでも解決しない重要な物だ。それを安定させるには、ヤツらへの対抗策か、そもその数を減らせばいい。

その為にはどうすればいい？ このホテルにあったのは丁度いい太さの鉄パイプくらいしか武器になる物はない。リーチも1mはないし、相当接近しなければならぬ。まずはそれを使って、新しい武器を取るのが無難、と言えるのだろうか？

「よしつ、まずは研究だな。ヤツらの生態と、どういう動きをするのか確かめる。もしあのゲームみたいに人を見つけたら走ってくるんだたら……生き残るのは絶望的だ」

「それはないと思う。そうでなきや本当に絶望的だし、そもそも死体が走って来るとか……ないよな?」

「新鮮なヤツなら走るかもね」

「マジで? やめて欲しいなあ、マジヤバいぞそれ」

「ヤバいわ……本当に。ともあれ、遠征は明日。酒も入っていい感じに回ってきたしそろそろ眠れるかな」

「よっしゃ、寝るか」

缶に残った残りを一気に飲み干して、俺達は部屋へと戻る。

俺達が此処に来てから1ヶ月。土地勘はないし、あるのは頭の中にある駅前で見たくろ覚えの地図のみ。ここまで無難に、ある意味では消極的な行動しか取っていなかったが……ここが俺達のターニングポイントとなるだろう。

もし、俺達の他に生存者がいるのなら。どうか生き延びて欲しい。いつか手を取り合える日が来ればいいと思う。

でももしその生存者がちよつと野蛮で……端的に言つて略奪やら何やらをすれば……俺は全力で立ち向かおう。2人の親友を守る為、なんて洒落た事は言わない

が、それでも自分にとって……ある意味特別な存在だから。

R a g i n g W o r l d

1. 邂逅

最近、冷える様になつてきた気がする。気がする、というのは……まあ文字通りだ。俺はあの時以来、殆どの感覚が鈍くなつた。とは言つてもかなり様変わりした、という訳でもない。変わった事と言えば、少し不便になつた事とあまり食べなくてよくなつた事、眠ると必ずうなされる様になつたくらいか。

「……ふん、くつだらない」

食料調達に來たスーパ―、奥にある事務所では3つの亡骸が赤黒い染みの上に横たわつていた。1つはまだ中学生にも上がつてないような体格の子供、残る2つはそれぞれ男女で、子供と女の亡骸には顔に布が掛けられていた。

「――遺書。俺達はここで2ヶ月間耐え忍んだが、救助は來ない。時折他の生存者は來るものの、いつも物資を横取りしようと争う羽目になる。俺はこの世界を恨む、子供と妻を殺したこの世界を心から恨む……つはあ、くだらない」

まだ続きはあつたが、読む気も失せてぐしゃぐしゃに丸める。それを事務机の上に置くと、ポーチからライターを取り出す。

「死んで尚恥を増やすのも、な」

シユボツ——めらめらと燃え始める紙は瞬く間に灰になった。それを見届けると、亡骸に掛かっていた布を取り除いて男の手に握られていた包丁も蹴とばしてしまふ。

「まだもがいていれば、俺みたいに生き残れたのにな。……ここままでして生き残りたくはないか、逆に惨めだ。だろう？」

腐敗も進み、物言わぬ亡骸に向かつて問い掛ける。当然返事はなく、感染者の様に呻いたり動いたりもしない。これこそが本来の『死体』と言うべきものだ。久し振りに本来あるべき姿を見て、安心感を覚える。

とりあえず店は全部探した。得られたのは僅かな水と食料だけだが、ないよりはマシだろう。事務所から売り場へと戻り、途中に横たわる肉塊の山を踏み越えて出口に着く。日が暮れないうちに安全な場所へ行こう、そう思った時どこから車のエンジン音が聞こえてきた。

半ば突つ込む様に壁際に寄りカートの影に隠れる。駐車場に入ってきたのは白いキャンピングカーで、運転席と助手席には若い女が座っていた。

「チツ……死体に気付いたか」

2人の顔は途端に曇り、すぐにバックで退避しようとして——止めた。何事かと思つて車の後方を見れば、先程車が入つてきた場所から何体もの感染者が押し寄せてき

ている。あれでは車が通れない、トラックか、かなり頑丈な車でなきやあの肉の壁は突破は出来ないと素人目でもわかる。

なら、取るべき行動は……あの一団を他へ誘導するか、一掃するか。

しばらく見ていると、どうやら運転席と助手席に座る女達は言い争いをしているらしかった。誰が掃討に出るか……いや、むしろ行かせたくないのか。奥からはまた一人少女が顔を出して仲裁に入っているが雰囲気は変わらない。

誰が行くか、どういう手段を取るか決めかねている、と言った所か。

だが時間はない。そうしている間にも感染者達はゆつくりではあるが迫ってきている。完全に囲まれればそれこそ打つ手なし、詰むぞ。

「もういいです！ 私が行きます!!」

突然扉が開け放たれると、一人の少女がフライパンを手に車から降りた。

「やめろミキ！ 戻れ!!」

「誰かがやらないといけないんです！ それなら……」

「みーくん！」

開かれた扉からは車内の状況が鮮明に聞こえてきた。ミキと呼ばれていた少女は表情こそしつかりとしているものの、及び腰で武器も頼りない。そんな光景を見て、俺はもう我慢できなくなっていた。

こんな格好で他の生存者の前にも出て怖がられる。だとしても、目の前で年端も行かない奴らが無残に食い殺されるのは気分が悪い。それが全員美少女なら尚更だ。

大分使い古した斧を持ち直すと、物陰から出て全速力で車の方へと駆けた。急に出てきた人影に運転席に乗っていた少女は驚きの表情を見せるが、それに対し笑顔を見せる余裕などない。

「どけ!!」

フライパンを持っていた少女をまだ開いている扉に向かつて突き飛ばす。少々手荒だが、新しく出てきていたツインテールの子に受け止められ無事が確認できる。

「ええっ!!? だ、誰っ!!?」

「大丈夫かミキ!!? 怪我は!!?」

車のすぐ傍まで寄っていた一体に目を点け、俺は左手に持った斧を体ごと反時計回りに回す。十分に遠心力を稼ぎ、その一打をヤツの頭蓋に打ち込んだ。耳障りな音と共に嫌な手応えが全身を伝わっていく。打ち付けた方が刃ならもつと弱い力でも仕留められるだろうが……刃を抜く時間なんてないからな。

「車を出せ! 道は作ってやる!」

一瞬だけ振り返り一団にそう言っていると、すぐにもう一体の方へと向かう。時間はない、いつもギリギリだ。あの時右腕を失ってから、俺達はいつもギリギリだった。現

に……一振りでもここまで息が上がる。これらを全部相手にするにはちとキツイが足止めさえできれば——あの車さえ逃がせば後はどうにでもなる。

「手伝うぜー！」

軽く死を覚悟していた時、すぐ後ろから物凄いスピードで一人の少女が俺を追い越していった。何事かと思えば、スコップを頭上に振り上げて俺が狙っていた感染者に一撃を食らわせるつもりでいる。

「馬鹿言うなっ！ そんなもので何が——」

何ができる。そう言おうとしていた。全部言い切る前に彼女はスコップを振り下ろすと、まるでスイカ割りでもしているんじゃないかと言うくらい簡単に感染者の頭を砕いてみせた。

「“これ”を舐めて貰っちゃあ困るな。なんにせよ、シャベルは第一次世界大戦、その塹壕戦で最も——」

「喋ってる暇があれば殴れ!!」

唐突に解説を始めた少女に喝を入れ、新しく目星をつけた1体に豪快な予備動作で打ち込む。左手が射線に入ってしまったが蓄えた遠心力はその程度の障害物では打ち消せず、左手ごと頭蓋を粉碎した。

「せやあっ!!」

俺の後方に迫ってきていた感染者を少女が粉碎する。見ず知らずの相手によくここまで支援する気になるものだ。と少し感心していると、今度はその少女に感染者が手を伸ばそうとする。

「動くなよ!」

号令を掛けて、俺は半身で振り返りながら斧を投擲した。今度は正真正銘刃の方だ、当たれば命はないし、運が良ければ両断される程度で済む。見事な風切り音を響かせながら、斜めに放たれた刃は狙い通り顔面に突き立つ。その衝撃で1m程吹き飛ばされると、感染者はそれきり動く事は無かった。

「うわっ!? お前、自分の武器投げてよかったのかよ!」

「目の前でお前が食われるよりマシだ! それよりさっさと片付けろ、そろそろ体力がヤバイ……」

残る感染者の数はすぐにでも仕留められる距離に4体、向かってきているのが3体。斧を食らった個体はすぐに取りに行ける場所ではなく、当分は素手で相手をしなければならぬ。やはり投げるべきではなかったか? 遅すぎる後悔に苛まれながらも近場の相手に蹴りを入れ距離を取る。

その隙に右腰に差しあつた感染者用のナイフを抜くと、それを逆手で構える。使うかどうかはわからんが、とりあえず攻撃手段はあつた方がいいからな。

「クソが……わらわらと集りおつて……」

「な、なんて？」

癖で出た妙な言い回しに少女が反応する。一々解説する暇もない今、無視して目前に迫る1体につつこんで行った。

足を掬い転倒させたところに右足のストンプで頭を潰し、その間ツイントールの少女は2体を屠る。次にすれ違い様に眼球にナイフを突き刺し抉り、少女はその間離れた所になっていた感染者の元まで走り首を両断していた。

まるで修羅だ——恐れすらも感じるその戦いぶりは見事としか言い様がない。最後の1体、少女の一撃が頭部に命中するも、まだ活動していた個体に俺が馬乗りになる。そして確実に仕留められる場所、眼球にナイフを刺し込み、頭蓋の中を抉った。

「出せりーさん！」

その合図を受け、車は駐車場の外へと急発進した。通りに出た後、一瞬仲間を置いていくのかと思つてしまったがしつかりと安全な場所で停まる。俺はそれを見送つて、限界まで上がった息のまま斧へと向かい渾身の力で抜き裂いた。

「……助けてくれてありがとな。あたしは恵飛須沢胡桃」

「俺と話してる暇があるのか？ 早く仲間の所に戻つてやれ」

「戻るけど、恩を仇で返すのは嫌なんだ。お礼させてくれよ」

男勝りな口調で話す少女は、改めて見てもやはり美人……いや美少女の類に分類される風貌をしていた。こんな子が生き残っているとはな……感慨深く感じてしまうのは何故だろうか？ この世の地獄を見てきたから？ それとも人の醜い部分を直視してしまっただけか？

「……どうしたんだ？ 急に黙り込んで、そんなにあたしを見て……て。——っは!! い、いやいやいや！ お礼とか言っても飯とか、精々一晩安心できる場所で寝させてやるぐらいだからな!!」

——ただ単に癒しに飢えていただけかもしれない。こうなつてからまともに漫画やアニメを見ていないし、常にグロとスプラッターに囲まれていたからな、無理もないか。

「そんなものに期待してない。理性だけはまともだと自負している」

「ほんとかなあ……」

「だからさっさと仲間の所に戻って言うてるんだ。まあ、久し振りにまともな人間と話せて楽しかったよ、礼は要らん」

斧を肩に担ぎ、その場を去ろうとする。車のある方向に行くといらぬ心配をさせるだろうから……反対側でいいか。戦闘中は返り血が口の中に入らない様になっている所為でまともに息が出来ない。普通なら多くても3体程度の時しか相手をしないが、今回は

少し頑張り過ぎた。

「あ、おいつ！ お前、名前なんて言うんだー！」

ツインテの少女が手をメガホンの形にしてテンプレの様な言葉を叫ぶ。それに応えようか、一瞬迷って――

「名乗っても仕方ない、ただの――ッ!! 避けるよッ!!」

ただの通りすがりだ、なんてテンプレで返そうとした時、彼女の背後には感染者がいた。どちらかが仕留め損ねたのだろう、頭の左側が砕けてもなお、食欲に駆られている。

もうすぐそこまで伸ばされていた手を、持ち手の先端を持って限界までリーチを伸ばした刃先が捉える。少女は俺が振り抜く予備動作をした瞬間に察したのか一瞬で姿勢を低くすると左方向へと跳んでいた。

切先が感染者の右腕を斜めに切り落とす。丁度肘の辺りで構造的にも脆い部分だったのが幸いだ。勢いが半分程まで殺されるが、もう一回……！ いつもの反時計回りで振り返りざまに左脚を踏み込み、限界まで溜めていた力で横一文字に振り抜く。

その結果、標的の頭は額から上が吹き飛ぶハメになり、俺の意識も途絶える事となる。

……原因は酸欠。ただでさえ朦朧としていた中放った最後の一撃は俺の意識を奪うには十分らしかった。

「みーくん、この人息してくない？」

「えっ、それ本当ですか……？ ——いや、してますよ、すごく小さいですけど」

「痩せてるわね……ちゃんと食べてなかったのかしら……あら？」

声が聞こえていた。気絶するように眠っていたのか、いつもの悪夢はない。……いや、気絶してたのか。確か俺は、最後の1体を仕留めて……どうしたんだ？ ようやく体の自由が効くようになってくると、まず目を開ける。

「あつ、起きた！ 起きたよくるみちゃん！」

「おー、起きたか。気絶にしちゃあ長かったから心配だったんだ」

「ああ……どのくらいだ？」

「2時間くらい？ リーさん何してるんだ？」

どうにも身体がむず痒い。どこもかしこも温かみがないというか、妙に風通しが良い。そこまで考えて、俺はようやく正気を取り戻した。

「……何の真似だ」

風通しが良い理由、そんなものは決まっている。身ぐるみを剥がされ、たった今日の前に居る4人の少女の前で半裸で縛り付けられているからだ。生憎俺にそんな趣味はないし、見世物になっていい気はしない。武器もバッグも手の届かない範囲に置かれて

おり、この状況で俺の不利は確定……どうせこのまま盗るもん盗って放り出されるに違いない。

「ごめんなさい、　「やつら」に嘯まれてないかチェックしてたの。でも今の所は……大丈夫、かな？」

その中で一番しつかりしていそうな一人が俺の下半身を見つめながらそう言った。

「信用性はないだろうが嘯まれてはいない……今は」

「今は？　　どういう事かしら」

「この右腕は奴らに嘯まれた時、ウイルスが回る前に切り落とす。落とすのは一ヶ月前だ。縫合痕見りゃわかるだろう？」

「そ、それって……麻酔なしで……ですか」

「そうだ、もつとも痛みは感じなかったが」

「ええ……」

ドン引きしているのは2番目にしつかりしていそうな短髪の少女だった。改めて見れば、4人は本当に綺麗な顔立ちをしていた。こういうのは早々に囲われる事になるが、彼女達はそれから逃げてきたのだろうか？

最も、このツイインテの少女……恵飛須沢胡桃とかいう子の戦闘力を見るにこの4人だけで生き残ってきた可能性もある。それこそかなりの低確率だし、そうだとしたらかな

りの幸運だ。

「……まあ、とりあえず信じましょうか。さつきは助けられてありがとうございました、私は若狭悠里です」

「私は丈槍由紀、よろしくね！」

「直樹美紀です……」

それぞれの面々が自己紹介をしてくれる。ここまで面と向かつて自己紹介をされたのに、自分だけしないという選択肢があるのか？ 否、それはない。

相手は真面目に俺と交流を図ろうとしている、それを突っぱねる行為……ましてや助けて貰った恩を仇で返すなどあつてはならない。故に、ここでの返答はこちらも真面目に自己紹介をする事。

だがそれを苦手とするのが俺という存在である。幼少期からコミュ力を空回りさせ周囲を掻きまわし、ある時までずっとそのままだったのだ。本当に恥ずかしい、未練どころか後悔し過ぎて昔関わっていた人間の頭を砕いて回りたい程だ。……まあ生きていたらできないが。

「……雅だ」

「みやびくん？　なんか綺麗な名前だね」

「……」

「ん？ どうしたの？」

「いや——こうして拾ってくれた事には感謝する。だから俺は対価を渡してここから去ろう」

「なんか古風な喋り方しますね……」

「癖だ」

直樹は俺を不思議そうな目で見ると、ほんの少しだけ警戒心を緩めた気がした。どこかに共通する所を見つけたのか、瞳には暖かな物が微かに混じっている。これはいいとして……丈槍と名乗った少女、見た感じ中学生の瞳は誰よりも複雑だ。

外見はこんなに弱そうなのに、中身はしっかりと基盤が出来ている。俺より若いのに……まあ、このご時世嫌でもしつかりせざるを得ないか。

粗方目が合った奴の人間分析を終えると、ポケットから鍵を取り出した若狭が俺の手と足を拘束していた手錠を外してくれる。噛まれていないにせよ、力で勝る男を解放するか……迂闊な奴だ。俺が悪人だったらこの時点で1人人質を取って……後は自分のナイフを取れば好きにできるな。この女、見た目に反してそこまで意識が回らないか。

「その事だけど、私達は既に『対価』を貰ってるわ」

若狭はにつこりと微笑んだまま、自由になり立ち上がった俺に向かってそう言った。はて、何か目ぼしい物がバッグに入っていたか？ あるのは僅かな食料と水、後はライ

トと電池と予備の武器くらいしかない。

「あつ、別にあなたの持ち物から取った訳じゃないのよ？ 倒れた時にできた傷を手当する為に少し中を見させてもらったけど、何も盗つてはないから。対価つていうのは、私達があなたに助けて貰つた事、それだけよ」

「確かに、それは1つ貸しと言える。だが気絶した俺を匿ってくれた事でチャラ……それどころかむしろ俺が借りを作つたくらいだ」

「りーさん、こいつ侍みたいな性格してるからそういうのじゃ無理だと思う」

「さ、侍？」

思いもよらぬ一言について困惑してしまう。確かに俺の口調は一般男性よりか少し古臭いかもしれない。

「恩義だとか忠義だとか言いそう」

「あ、確かに言いそうですね」

いきなり侍認定された……確かに恩義だとか忠義だとか、筋の通らない事は嫌いではある……が、このご時世律儀に貫く余裕もなければ義理もない。と思つている。筋を通せば空から飯が降つて来る訳でもないからな。

「言わないから、確かに少しは気にするけど基本言わないから」

「少しは気にするんだ？」

恵飛須沢がニヤリと悪そうな笑みを浮かべて聞いてくる。ここで俺は感じた、遊ばれていると。

「いかんのか？」

それに対し半ギレ気味に返してやると、恵飛須沢は腹を抱えて笑い出す。元氣なやつぢやなあ……何故人を弄つてここまで笑えるのか。というか俺は何処に行つても誰からでも弄られるんだな。

「な？ やっぱこいつ悪い奴じゃないって。由紀の言つてた事、聞いてみたらどうだ？」

「そうねえ……ねえ、雅さん」

「何用か」

「ふふつ……ちよつと、やめろつて！ 真顔でふざけるなよ！ くくくつ」

「ふふつ……面白い人ですね」

「ほ、本当にサムライなのかな？ だつたら失礼な事したら斬られちゃうよね？ ぶれ

いものーつて」

「そうね、怒らせたなら怖いかもね。——それで、提案があるんだけど……もし寢床がないなら今日1日夜警をお願いしたいの」

To be continued...

2. 本質

それは、今まで聞いた事もない「提案」だった。

「夜警……？」

何故見ず知らずの男にそんな事を？ 少し話しただけで俺を見抜く……そんな技能がある筈がない。あるとしたら誰だ？ ただでさえ若くて、それに俺をすぐ解放する奴らにそんな……いや、百歩譲って分かったとしても意図が不明だ。

この車ならある程度囲まれても対処は出来る、その危険すらも排除したいならこの中の誰かが当番制で見張りをすれば——ただ、サボりたいだけ？ いやサボるなんて失礼な。慣れない人間からすれば徹夜は地獄だ、カフェインを大量にキメればまだしも、安定供給は出来ないしな。

とは言え、真意が掴めない。ここは出来る限り理由を聞きだして、謀ろうとしているなら法外な報酬でも吹っ掛けて諦めて貰おう。

「それは何の為に」

「夜を安心して過ごせる様に、重要だとは思わない？」

若狭、と名乗った少女はニコニコとしたまま、代表といった面持ちで俺の前に立つて

いる。他の子達もそれを咎めず、それどころか気にもしていない。

つまり、この若狭悠里がこの一団の長、という事だ。

「いや、重要だ。だがこの車ならある程度は大丈夫だ、と勝手に自己判断しただけだが……狙われてるのか？」

感染者への対策は原始的な仕掛けでも十分取れる。だが生きている人間にとつて、それは自分達は此処に居る、とアピールしているだけに過ぎない。

この状況になつてからもう半年以上経つ、生存者の数も最初に比べれば減っている……それでもずる賢い奴はいつまでも生き残り続ける。まるで害虫の様に、際限なく数を増やして。もつとも虫よりは緩やかなペースではあるが。

「……ええ、実はそうなの。毎晩場所は変えているんだけど、夜な夜などこからか嗅ぎつけてくるのよ……私達は皆女子だし、戦えるのもくるみだけだから」

若狭は僅かに顔を伏せ、心底疲れた様子で「演技」した。最初は半信半疑だったが、確信に変わったのは周りの反応だ。直樹は無表情ではあるが瞳には負の感情がそこまで見受けられない、恵飛須沢は上手く合わせてはいるが、詰めが甘い。

そして丈槍はなんのこつちやという顔をしている、お前がちゃんと合わせてれば6割は信じたぞ、逆にお前の所為で1割も信じられなくなつたけどな。今時嘘がつけない純真な子もいるんだな、どうかそのままできてくれ。

「自分で言うのも何だが、俺は人の心がある程度読めるぞ」

「ちよ、超能力者!? り、りーさん! バレてるよ!」

「ゆきちちゃん……」

「ゆき先輩……」

「はあ〜」

止めと言わんばかりにはったりを言うと、丈槍はまんまと引つ掛かった。それに対する周りの反応も見ると、正真正銘頭から爪先まで綺麗な嘘だ。

「……で、嘘を吐く理由は? この際包み隠さず言ってくれた方が嬉しいんだけどな」
「えーつと……あのね」

睨みを利かせつつ、丈槍は渋々口を開いた。内心少し驚いたのは、こういう時解決しようとするに出てくるのは若狭か恵飛須沢だと踏んでいたからだ。折角だからと少し聞く気にもなり、言い渋る丈槍の顔をまじまじと見ながら次を待つ。

「実は……雅、くん? が気絶してる間に傷の手当てをしてね、ほっぺたの。その時に消毒液とか持ってないかなーってバッグを開けたら手帳が出てきて……」

「ふん、手帳ね——は?」

もじもじと顔を赤らめたり青くしたり忙しう忙しい丈槍は、衝撃のカミングアウトをしてくれた。——手帳とは、俺が今まで日記代わりに使っていた物でそれはそれは色んな事

が書き記されている。どうでもいい事はその日の夕食、そこそこ重大な事は俺が一度精神を病んだ時、それ以外はその日の物資調達の結果や感染者の研究記録が載っている。

そして極めつけは……研究記録の後にある独り言。

「ご、ごめんなさいっ！ でも、その、何かアレルギーとか書いてあるかなって……」

「あ、アレルギーは……乳製品とトマト、あと柑橘系の果汁は肌に付くと爛れる……以外特にならない、かなあ……？」

今までの高圧的な態度とは打って変わって弱々しい物に変化してしまった俺を見て、恵飛須沢と直樹はこそこそと何かを話して時折含み笑いをこぼす。やめてくれ、そういうのは精神的にくるものがあるんだ。

「で、でも……友達が、いたんだよね？」

「ゆきちゃん……！」

丈槍がその事に触れた瞬間、俺を含めこの場の空気が変わった。

「ああ、いた。今は大きな避難所……と言えはいいか、そんな場所で暮らしている」

日記も見られた以上、隠す必要はない。恵飛須沢達や若狭が止めたという事はこの場に居る女子全員には知れ渡っているんだろう。そんな思いで、俺は思いの外すらすらと語り始める

「なんで雅くんも入らなかったの？」

「書いてあつただろ、この腕の所為だ。ここまで大きな怪我、向こうじゃお荷物確定だ。それに、嘔まれたから切り落とした……正直に言ったのが災いしたとも言える」

「でも、今もこうして……生きてるわね」

「ああ、そうだ。……腕もすぐに切り落としたしウイルスはそこまで回ってない、と信じてたい。まあ結果として、疑わしきは罰せよ、っていうのに引つ掛かった訳だ」

「それで、“自分は死んだ”という事にして一人で彷徨つてたと」

「早い話そうだ、その友達とやらには右腕の状態が悪化して感染症で死んだ、と伝えられている筈だ。伝言係がまともならな。——他に質問は？」

粗方聞き終わつたのだらう。彼女達は殆どが目を伏せ、黙り込んでしまふ。楽しい話でもないし当たり前か、助けて貰つた礼だけしてさつさとずらからう。そう考えていた時、ただ一人真つ直ぐ見つめてきていた恵飛須沢が口を開いた。

「じゃあ質問だけど。私達と一緒に来る気はない？」

「はあ？ また突拍子もない、警戒心皆無もいい所だ。見ず知らずの男と一緒に来ないかだ？ 馬鹿を言うな、俺をどう評価したのかは知らんが今夜中にお前ら全員が襲われるか殺されるかする予想もしなかつたか？ 俺はそこまで善人じゃないぞ」

優しさからの提案に対し、俺は思い付く限りの言葉で反論した。きつと目付きも表情も、無表情とは程遠いだらう。それを証明するように直樹と丈槍は俺が言葉を発する度

に体を震わせ、怯えている。

「知ってる、あんたの行いは悪人と同じだ。日記を見るだけでも性根が腐ってるって分かる」

「なら何故誘った。片腕だからと高を括ったか」

年下相手に何を噛み付く必要がある。一言「ない」と言つてこの場を去ればいいのに、何故ここまで噛み付き居座ろうとする。夜警なんぞ嘘だ、こいつらは俺の手帳を盗み見て、俺の罪も過去も全てを知つた。

消す理由は十分にある。まず素手でこのツインテの首をへし折ればいい。そうでなくとも意識を奪えばこちらの勝利は確実、敗北はあり得ない。だから俺はここまで喰いつくのか？ だとすれば結局高を括っているのは自分じゃないか、年下……それも女相手に、大人げないにも程がある。

「お前、泣いてるんだろ」

「……メクラか？」

「表面的な話じゃねえよ、あたしは中身の話をしてるんだ。本当は悲しくて寂しくて、誰かに泣きつきたいんじゃないのか」

「そんなのは誰だつてそうだろう、この状況なら尚更だ。だがあえて、俺はそうしないし思わない。少しでも隙を見せれば取つて食われる……泣きつかれるならまだしも、泣き

つきは絶対にしない。そんなもの……」

「あたしもさ、強がってた時があつたんだよ。あたしが頑張らなきゃーってがむしやらにさ……でもいつかは壊れちゃうだろ? ……でも今は、ほら、な? わかるだろ?」

口に出すのが恥ずかしいのか、惠飛須沢は周りの仲間を見渡して自嘲気味に首を傾げた。それが俺にとって、堪らなく眩しい。気の合う仲間、仲間の為なら自分が死ぬとしても守り通したい……こいつもそう思つたんだらうか?

まあどうであれ、もう俺にはそ思う相手はいない。そんな重荷を背負う必要はなくなった、なんせ安全な場所に辿り着いたんだから。俺は今こうして無秩序な所で彷徨つてはいるが、あいつらが安全な場所で生き残れるなら。

人付き合いなきゃならんのが一番の難点ではあるが、俺みたいに不愛想でもないし、問題ないだろう。

「だから、さ……なんか放っておけなくって。あ! 言いだしたのはゆきだからな! あたしが率先して引き入れたらいつて言つた訳じゃ——」

「あーはいはい、分かつた分かつたテンプレテンプレ」

「はあ!? テンプレってなんだよ!」

「お前がいくらか恥を晒した分、俺も晒してやろう。まあもう十分晒してる気もするが、さつきはつい感情的になつたが、その誘いは素直に言えば嬉しい」

「じゃあー！」

「だからこそ断らせて貰う。お前達の関係はある程度完成されているとは言え、俺が入ればいくらか均衡が崩れる。俺の所為で内輪揉めが起きるのも嫌だし、要らぬ心配をさせるのも嫌だ。何よりこんな甘ったるい所に居たら気がおかしくなりそうだしな」

「あ、甘ったるい!?!」

恵飛須沢が「甘ったるい」という言葉に反応して自分の服の匂いを嗅ぐ。それに釣られたのか丈槍、直樹が袖や襟を嗅ぐ。若狭は控えめにカーディガンを嗅いでいるが……自分でわかる訳ないだろ。——まあ、これではつきりした。

俺はこのほんわかした雰囲気には合わない。こんな綺麗で儂い感性を持った子達を穢す訳にはいかないな。

「甘いんだよ女の匂いは……そういう事だから、俺は今まで通り1人でのんびりやる。服をくれ、あと荷物も」

「……せめてコートくらい洗わせて欲しいのに」

綺麗に畳まれていた服達と一緒に前より重くなつたバッグが手渡される。不思議に思つて中を見てみると、そこには詰められるだけの食料と水が入っていた。

「厚意は嬉しいが、極力人の助けは借りない主義だ。自分達の飯を削つてまで人に優しくするな」

「それは助けてくれたお礼だから、助けじゃないわよ?」

「その件は俺を助けた事でチャラになったって言っただろ、むしろ借りがあるとまで言ったが手帳盗み見たからナシな。これで貸し借り無し、立場は対等だ」

「……そう、残念だわ」

さつきまで自分が座っていた場所に増えた分の物資を置いて、タートルネックから順に服を着る。

「本当に行つちやうの……?」

丈槍が今にも泣きそうな表情で服を着た俺の腕を掴んだ。俺はそれを優しく、手を触れないように振り払うとバッグを肩に掛け、斧を持つ。

「男に馴れ馴れしく触るなよ、気があると思われるからな。分からなかったら若狭か直樹の言う事を聞け、間違いはない筈だ」

「何であたしは除外されてんだよ」

「シヨベルで化物屠つてる奴に常識通じる訳ねえだろ」

「ああそつか……つて失礼だな!」

「ふっ……久し振りに楽しい時間だった、感謝する。次会う時は俺が“成った”時かな」

「縁起でもねえ……」

「大丈夫よ、くるみが介錯してくれるわ」

「……本当にぼっくり死なないでくださいよ」

「寂しいけど……達者で……って言うんだっけ、侍って」

各々が短い付き合いにも関わらず別れを惜しんでくれる。本当にいい子達だ、この先もずっと安全に……できるならちゃんとした避難所に辿り着ける事を祈ろう。

「武運長久を祈る、とかな。どうせ先に死ぬのは俺だ、あの世で待つてるから来るなら俺が興味ない年寄りの姿で来いよ」

縁起の悪い、俺なりの別れを告げると、外への扉を開いた。暖かな空間、そこに別れを告げて……冷たい現実に戻る。こんな場所二度と戻る事はない、血みどろで生臭い、死臭に溢れた世界が俺の居場所だ。こんな風にならなくても似たようなもんだし、ちよつと刺激的でワイルドになっただけ。

そう思っていた、現実に帰る。

「うおっ!?!」

「っ!?!」

——しばしの静寂。何が起きたか? 脳内で現状の分析が始まる。俺は彼女達の車から出ると、すぐ目の前に3人の男がいた。そのどれもが薄汚く悪臭を放ち、髪には風、顎には無精髭、手にはナイフや鉄パイプ。

こつそり近付いて扉の前まで接近しているとなると……よく考えなくても分かる、悪党だ。

周囲を見渡すと、どうやら河川敷のど真ん中に車を停めていたようだ。確かに感染者相手には効果的だが……生存者にはアピールにしかない。今回は見事にそれが発動した訳か。

「……え!? だ、誰!?!」

直樹がいつしかの台詞を再度放つ。その瞬間先頭にいた男に握られたナイフが妖しく煌めいた……気がしたがよく見れば血で汚れて反射する部分なんかどこにもない。直感に身を任せて後ずさると、その切っ先は俺の首ギリギリを掠めていった。あんなもので切られたら間違いなく感染症に罹る……首を狙ったのも意図的なら……間違いなく殺しにきたな

背後はすぐ車でこれ以上下がれない、次はないな。ここまで距離を詰められれば斧も振れないとなれば抜くべきはナイフ、一瞬で抜いて心臓か腹を搔つ捌けば無力化できる。

「武器を捨てろ! 言う通りにしねえと命はねえぞ!!」

テンプレ通りの台詞。俺は言う通りに斧を手放す——重力に従い斧は相手側に持ち手を向け倒れ、後ろの2人はその斧へと視線が誘導された事に気が付く。

「ナイフもだ、渡せ」

「わ、わかった」

怯えた振りをしてゆつくりとナイフに手を伸ばしていく。同時に後ろの彼女達の様子を見るが、恵飛須沢以外突然の事態に驚愕し身動きが取れずにいる。

「く、胡桃……スコップを置け」

「え、えっ？」

「大丈夫だから……置け……！」

「……わかった」

いきなり名前で呼んだ事に驚き、恵飛須沢はぎこちない様子でスコップを床に置いた。俺はそれを引き寄せて地面に落とす……これは見逃してくれるんだな、俺なら即刺してるのに。

「ナイフを渡せ、日本語わかるだろ？」

「わ、わかってる」

改めて腰に差すナイフに手を伸ばす。全員の視線が俺に向いてはいるがこの様子じゃ素人だ……勝率はある。徐々に手を伸ばし、無事にナイフを掴むことが出来た。そしてストラップを外し、いつでも引き抜ける状態になる。

これでまず1人目……2秒で2人目を仕留めれば……後は恵飛須沢のスコップでど

うにかなる。

「渡せ」

「……わかった、じゃあどうぞ」

引き抜こうとした一瞬、俺にとつては長い2秒間の始まりだった。

力強く踏み込み居合の様にナイフを引き抜くと、その切っ先を男の腹に喰い込ませ一気に入き切る。

日頃からメンテナンスを欠かさない刃の切れ味は抜群で、自分で言うのもなんだが中々器用なもんだと満足している。嫌な手応えとぶちぶちと臓物を引き千切る感触を終えると、男は嗚咽と共に数歩退いて前傾姿勢になった。

そして返す手で右側の男にナイフを投げ、運よく右胸に深々と突き刺さった。――
間違いない、2秒も経ってない……なら。

「うわああああ!?!」

「さあお前はどうか殺そうか? 丁度いい、生きてる人間がどこまで耐えられるか検証したかったんだ」

仲間達がそれぞれ大量に血を流す姿を見て完全に戦意を喪失する野盗の1人はその手に持っていた鉄パイプすらも落としてしまう。それに対し、俺はスムーズに斧を拾う中スコップを蹴って生き残りの足首にその先端をめり込ませた。

「ぐあつ!!」

あまりの痛みに悶絶し、倒れてしまう男。俺は内心安全靴を履いていてよかったと安堵する。

「はい、じゃあまずは右腕から」

「雅っ!」

恵飛須沢の制止を無視し、手足を空回りさせながら後ずさる男の右腕、そのギリギリの所に斧の刃を落とす。

「悪い外したわ、次は上手くやるから」

「やめ……やめて……お願いします……」

「じゃあ聞くけど、俺とお前の立場が逆なら……止めたと思うか?」

男はぶんぶんと首を縦に振る。瞳は恐怖一色で本質までは見通せず、実際どうするかは分からない。だが、さっきまで優位に立っていたこいつらは常に嫌な嗤いを顔に貼り付けていたのはわかっていた。

「じゃあもう1つ、俺が降伏したら彼女達は どうしてた?」

車から出てきて止めようとしていた恵飛須沢がぴたりと止まる。彼女も多少は興味があるのだろう。なら丁度いい、この状況下で、こういう奴らに捕まればどうなるか。彼女だけじゃない、他の3人にも再確認させるいい機会だ。

「や、優しく……逃がして——」

「嘘はやめようか、あと一回嘘を言えば肘から下を貰う」

「……3人で、回して……死ぬまで——」

その先を言う前に、俺は斧を振り下ろしていた。脅しでもフリでもない、狙ったのは腕でも足でもない——腹部だ。ただ無感情のまま、自由落下に任せて男の断末魔を待っていた。

「やめろっ!!」

気が付けば、刃先は男の寸前で停止していた。恵飛須沢が止めたのだ。

「……なぜ?」

「なぜじゃねえよ、わかんねえのか。それは人がやる事じゃない」

「こいつらは外道だが」

「それでも人間だ」

彼女の顔は怒りと、それと同じくらい悲しみに満ちた物だった。……いや、憐みか? だとしたら何に対する憐みだ。この外道か、そこから寝てる虫の息の奴らか。

「こいつらの肩を持つ訳じゃない、だけどそれ以上やったら……お前が戻ってこれなくなる」

「心配せずとも俺は今まで生身の人間をたらふく殺した、お前が持つてる“これ”でな。

……それでも止めるか」

「止める」

「なぜ」

「お前が泣いてるからだ」

「また……」

また馬鹿な事を。そう罵倒しようとした時、顔を何かが伝う感覚があった。驚いて下を見ると、いつの間にか土が水を吸った様に黒く湿っている。

まず疑ったのは雨だった、しかし上を見ても、多少の雲はあれど雨を振る気配はない。それどころか雨の匂いすらも感じられない。周りの土も、自分と倒れている奴らの真下以外は乾燥している。

なら返り血だ、腹を搔つ捌いたから返り血を浴びたのか。試しにコートで拭ってみても、辛うじて灰色が残る場所だと言うのに赤く染まらない。ただの水、でも雨でもない。「……わからないの？ あなた、ずっと泣いてるのに」

いつの間にか若狭達まで外に出てきていた。まるで幼子を見守る様に、彼女達は俺を囲う。あれだけ子供っぽい丈槍でさえ、急に大人びた表情で俺の顔を眺めていた。

「無理しなくていいのよ……」

「なっ……!? 止める、今はそれどころじゃ——」

身長差を無視した若狭の抱擁は俺の腕をも包み込む、半ば拘束の様だった。しかしその力は弱く、振り解こうと思えば容易く解ける。早くしなければ生き残りが逃げる、逃がせばあいつはきつと俺を恨んで、追い掛ける。今一緒に居る彼女達も標的に加えて。

「……い、く、くそっ！」

ずるずると後ずさっていた男が立ち上がり、全力疾走で逃げていく。追わなければ、殺さなければ、奴らみたいに起き上がらない様に頭を潰さねば。

追いかけてしようとすると今度は4人それぞれが俺の服を掴んだ。どれも力が弱く、俺が普通に歩きだせば離れてしまう力だ。なのに……おかしなことに動くのを躊躇ってしまった。本当に弱い力、建前だけの制止に俺は負けていた。

違うか、わざと負けたんだ。自分の弱さを『止められたから』と理由を付けて誤魔化して、こいつらの所為にして弱さを受け入れてしまったんだ。

「はあ……やってられん。何てヤツらと会っちゃったんだか」

アホらしい。止めたよ、俺は止める事にした。2人にや悪いが、少しの間……甘えようか。

すすり泣く声は1つ。誰の物かはいざ知れず、けれど一番近くから聞こえていた。

3. 妹

さて、昔の話をしようか。かつて全てを捨てたと思ひ込んでいた男がいたとき、その男は4人の賢女に諭され、女達を守る役目に就いた。その男の信念は2つ、自分を犠牲にしても彼女達を護る事、捨てられるまで付き添う事。それ以来、男はかつての仲間達と共に生きていた頃を思ひ出し幾分か人らしさを取り戻しているらしいよ。……まあ元々人並みではない部分もあるし、ある程度近くなっている、という感じではあるが。

「え、雅さんって先輩達よりも年上だったんですか!？」

「そうだ、21だからな。俺からしたら全員妹のようなものだ」

「みゃーくんが……お兄さん!？」

「そのみゃーくんってのやめないか、むず痒い」

「えー、だつてみーくんだとみーくん和被つちやうし、みゃーくんかなあつて思つたんだけど……だめ? 可愛いと思うよ?」

通りを疾走するキャンピングカー、その車内では新入りである俺が運転を務め、他の賢女様達はくつろいでいらつしやう。とは言つても若狭だけは助手席で色々とナビ

ゲートしてくれてはいるが、そういう彼女も俺が年上だと知ると流石に驚きを隠せない。

「可愛いさは求めていない」

「それにしても、雅君……雅さんが年上だったなんて。私随分失礼な物言いをしてたわね……」

「別に、その方が気楽でいい。若狭も恵飛須沢も直樹も、今まで通りタメ口でいいぞ」

「そうかしら……でも3つも離れてるとなると……」

「たかが3年だろ、中身はお前らと同じくらいで止まつてるよ」

「え、じゃあ見た目はおとな——」

「やめろ！」

ふざける丈槍を止める恵飛須沢に、その2人を見て笑う若狭と直樹。そんな4人に囲まれて、俺は今充実した日々を送っている。あれからまだ2日しか経ってないのが嘘のように、俺は彼女達に対して妙とも言える程親近感と好感を抱いていた。一方的な物かもしれないが、少なくとも俺は楽しいと思っている。久しい感情に戸惑いもしてるが……まあ、2人には大丈夫だと伝えてやりたいくらいだ。あいつらにとつちや俺は死んでるんだけどな。

「じゃあ雅さんも私達の事名前でごんでくれれば釣り合うんじゃないですか？」

「それさんせうい！」

「おつ、それもそうだな。あたし達がタメなのに名字で呼ばれてるつても……おかしくはないけど、なんか壁がある気もするし」

珍しく直樹が提案すると、丈檜と恵飛須沢が乗つかる。だが若狭だけは賛同する声を上げなかった。横目で見てみると、若狭は地図と睨めっこしたまま固まっている。今まで問題なく道を教えてくれたから方向音痴が発動した、とかではないだろうが……嫌だったのか、それとも他の理由で心ここにあらずの状態か。

「……悠里？」

「おおつ!! な、なんか……」

「一番はリーさんか、まあ競つてた訳じゃないけど……」

「なんか今更恥ずかしくなってきました……」

直樹や丈檜ですら恥ずかしがる事なのに、若狭からは反応がない。知らない内に嫌われてたか、それとも何か気になる事があるのか。どちらにせよ、今日の宿泊地点であるデパートまでの道は若狭抜きでは辿り着けない。早い所呼び戻した方がいいな。

「若狭ー、若狭!」

「えっ!? あ、はい! どうしました?」

「道はこれで合ってるか? あと若狭さえよければタメ口でいい、その方が気楽だ。」

……さっきの、怒った訳じゃないからな」

「あ、うん……わかったわ。道は——合ってるわ、次は300mくらい先で右折ね。ファミレスが目印になると思う」

「300右折、了解」

「みゃーくん、さつきりーさんの事名前で呼んだんだよ。聞いてた？」

「え、そうなの？ ごめんなさい、全然聞こえてなかったわ」

「えー、勿体ない……ねえねえ！ みゃーくん私も呼んでみて！」

「由紀」

「きゃー！」

女子グループに男が1人入るとこんな感じなんだろうか、と考える。残念、俺は男子校だったし、と言ってもほぼ言っていないし友達も作らなかったからそういう物には疎い。最低限の単位と最低限の会話しかなかった俺には友達との会話……ましてや女子との接し方すらもわからなかった。まあ女子グループとは言え歳は離れている。たかが3年と言ったが、それは短くも長い微妙な年月だ。ただ学校や階級が関係ない今の状況ではそこまで気にすることなく接せられると思う。俺も、さつき言った通り妹の様な感じで接すればいい。

「胡桃、美紀、悠里、奏楽……これで全員か」

「ん？ 奏楽って誰だ？」

「えっ、もしかして5人目が……いたりするの？」

「ああ、違う違う。奏楽は俺の妹の名前だ、つい出ちまったが」

「みゃーくん妹いるの!？」

「弟1人に妹1人、俺合わせて3兄妹だ」

「妹………るー、ちゃん」

「……」

兄妹の話は禁句だと、悟った。またも地図と睨めっこの状態になった若狭はぼつり、誰かを呼ぶ。それは恐らく、いや予想するまでもない。若狭には妹がいる。少しでも減速して地図を見れば、視線とほぼ同じ位置に小学校があった。……妹は小学生か、この状況になってから大分経つ、その子はもう——生きてはいないか、可能性は限りなく低い。

……奏楽は、生きているんだろうか。思考に少し入れただけで不安が次々と積み重なっていく。数分も考えれば、それこそ破裂してしまうだろう。若狭は、それを今まで耐えてきたんだろうか？

それとも、俺の様に思考の隅へと追いやっていたんだろうか。それどころではない、今はやるべきことがあると、忘れていた事も忘れて……不毛だ、意味のない思考に割く

キャパシティはない。

そういう風に割り切れる俺は、きつとまだ幸せだ。

「フアミレス……ここか」

距離と目印がほぼぴったりの地点で重なり、俺はハンドルを切った。つい癖で方向指示器まで出してしまったが、今の状況じゃ光で寄せ付ける切っ掛けにしかない。

「恵飛須沢、地図取ってくれ。若狭と交代だ」

「え？ ……うん、わかった？」

「直樹、丈槍、若狭を見てやれ。今晚の夕食と明日の朝食について深く話し合うといい」

「？ わかりました」

「そんなにご飯が待ち遠しいの？ みゃーくん男の子だもんね！」

「俺は『大人』だ」

ぼーっとする若狭と恵飛須沢が席を代わると、恵飛須沢は神妙な面持ちで俺の顔を眺めてくる。背後では直樹と丈槍が俺の言った通り今晚の夕食について議論しており、丈槍の明るい声が聞こえてきていた。

「……なあ、なんで苗字呼びに戻ったんだ？」

恵飛須沢はふとそんな事を聞いてくる。

「名前呼びでいいのか？ 男の、それもお前からしたらおっさんの俺に名前前で呼ばれ

でも嫌じゃないなら呼ぶが」

「別に嫌じゃないけど……」

「なら呼ぶか、胡桃？」

「うつわ……なんかぞわつとした」

「ええ……ならやめておこう」

「じ、冗談だつて……」

「どうだかな」

「ぼそつと言うのがいけないんだよ、もっとハキハキ喋れつて」

「当分苗字でいいなあ……」

「ごめんつて……少なくともあたしは名前がいいから」

「はいはい、胡桃さん」

「……やっぱぞわつとする」

「……もういい」

やはり女子高生というものは怖い。偏見だと思っていた事が、事実だと目の当たりにした瞬間であった。

日暮れ、この季節になると陽が落ちるのはかなり早くなる。もうすぐライトをつけな

ければ走れなくなる、そう判断した頃に丁度目的地であるデパートに到着した。

「探索はまた明日かしら……」

「そうだけど、どうせ中は真つ暗だしいつでも一緒だと思うんだよなあ……雅、大丈夫か？」

車から降りた一行はデパートに探索に行くか判断していた。暗くなればライトは必須、だが灯りを点ければ感染者が集まるのも必須。食料にはまだ余裕がある為、探索はまた明日出直そうかと若狭は意見を出した。それに対し、電気が通つてなければ中は当然暗い、結局ライトを点けるから変わらない、という意見は胡桃だ。そして俺は慣れない車を長時間運転した為に肩がこっていた。右はともかく左は……まあ変わらないか、ついでに湿布があれば頂戴しよう。

「問題ない、行くとしたら最低限自分の身を守る人員でのみ行くのが賢明だな。だとすると俺と胡桃のみになるが」

「私も行けますよ?」

直樹が手を上げて立候補する。なので試しに俺の斧を持たせてみると――

「おもっ!?!」

「これで重いと言っんじや自分の身は守れないな、行くなら2人だ」

「でも……車の方にも戦える人を置かないといざという時不安だから、やっぱり明日に

「しましよう?」

「じゃああたしだけ行ってくる」

スコップを肩に担ぎ、1人で行こうとする胡桃の前に立ち塞がり図体を活かして通せんぼをする。若干怒ったような拗ねたような顔で抗議するが、暗いせいでよく見えないという事にしておこう。……やっぱ美人だな。

車の窓からは丈槍が羨ましそうに顔を覗かせているが、彼女は今夕食の火の番をしている。ちなみにジャンケンで決めたが、俺と若狭は最初に勝ち抜いた。なおジャンケンで決めようと言ったのは丈槍である。

「許可できない、行くなら俺だ」

「あたしは元陸上部だぞ!」

「俺は剣道テコンドーCQCをかじりチームで最速と称されていた」

「チームってなんだよ!」

「サバゲーチームだ」

「サバゲーってなんだよ!」

「玩具の銃を持って撃ち合うスポーツの様な物だ、玩具と言っても当たれば怪我もするし重い。舐めて貰っちゃ困る」

「なんだそれ……ほぼ軍人じゃねえかよお……」

「ごっこ遊びだから違う。あとその口調直せ、可愛い顔が台無しだ」
「かわっ!？」

「雅さん、なにナチュラルに口説いてるんですか？」

直樹が冷たい目線で見つめてくるが無視し、俺は斧を肩に回して若狭の目を見る。

「危険よ、危ない事はしないで。折角できた仲間なのに、数日でお別れしたくないもの」
「……はあ、わかった。ほら車に戻るぞ胡桃、キビキビ歩けよ、流石に片腕じゃ担ぐ事
しかできないからな？」

「わ、わかったって！ 歩けるよ……歩けるから担ごうとするなっ！」

それぞれが車へと戻る中、悠里だけが暗闇に薄らと浮かび上がっているデパートを見
つめていた。

「……悠里先輩？」

雅と胡桃が続いていた美紀が有利の異変に気付き、声を掛ける。

「ん？ ああ、ごめんなさい。ちよつとぼーつとしちゃった」

「……どうかしたんですか？」

「ううん、何でもないわ。さっ、車に戻って晩御飯にしましょうー！」

美紀を心配させまいと空元気を出す悠里。しかし、内心は穏やかではなかった。

夕食を済ませた一行は各自が着替え、就寝の準備を整える。勿論着替えの間雅は周辺の巡回に出掛け、20分程で戻ってくるのが恒例化してきていた。午後9時、ライトのバッテリー節約の為に少女達は寢床に入る。4人分しかないベッドは雅の場所はなくいつもは少し狭いソファに横になって眠っている。だが日付が変わるまでは周辺の警戒を怠らない、それが雅と言う男だった。

最初は文字通り寝ずの番をしていたが、悠里に咎められ警戒は日付が変わるまで、と取り決められた。それ以降、取り決め通りに眠る様にはなっているが……新しい仲間ができてからも、彼の悪夢は止まない。

「……ん、夜……？」

悠里は珍しい事もあるものだ、と顔に掛かった髪を退かしながら体を起こす。普段は寝相もよくて滅多に寝返りもしない……それどころか夜中に起きるなんてのも殆どないのに、今日は何故か目が覚めてしまったからだ。

新しいメンバーが入ったから？ しかも男の人だから、無意識に警戒しているのかもしれない。そんな風に考えて、悠里は1つの事実に気付く。

無意識だなんて、普通なら男の人だからって寝ないで見張りそうなのに……私はちっ

とも警戒、それどころか心配もしていなかった。あの人なら裏切らないと、心のどこかで信じているのかもしれない。そうだとしたら私はなんて馬鹿なんだろう、あの人がくるみに言った通り警戒心がなさ過ぎる。もしあの人が悪人だったら、今頃私達は襲われてるか、死んでいるだろう。物資も車も奪われて、死体はそこら辺に捨てられてるに違いない。

「ふふ、馬鹿みたい……」

でも、そうはしなかった。今日運転を任せられた時もちゃんと指示した道を通って、私がるーちゃんの事を考えた時も――

それも、作戦の内かもしれないのに。私は自分より年上の人だからと、甘えてるんだ。今まで自分がしてきた事をあの人に任せて、縫っている。全部押し付けて、弱音を吐きたがってるのかもしれない。……あの人なら許してくれるだろうか、今までよく頑張ったと、褒めてくれるのかな。それとも甘えるなどと言って叩くのかな、ありそうだけど、なあと半分わかっている。

微かに喉の渇きを覚えて、悠里は寢床を出た。その途中彼が眠るソファを通り掛かる。

「……？」

少しだけ身じろぐ彼に、悠里は不審に思い顔を近づけた。もし怪しい事をしていれ

ば、すぐに追い出さなきゃ。窓から差し込む微かな月明かりだけを頼りに、彼を観察する。

「——と……そ……ら、しの……ぶ、……くっ」

「うなされてる……っ」

悠里はしばらく彼が呟く音を聞き続けた。昼間に言っていた妹の名前、そして昔の仲間の名前と知らない名前が1つ。それぞれを繰り返して呟きながら苦しそうに呻く。けれどその声は極めて小さく、ベッドで寝ていても殆ど聞こえない音量だった。

もしかすれば、この人も妹が大切で……きつと好きだったんだ。どこから来たのか、今までどんな思いだったのか。経過や出来事は日記でわかったけれど家族の事は一切書いてなかった。私の様に、忘れ去っていたのかもしれない。他の皆を引っ張ろうと強くあろうとしたのかもしれない。ううん、強くあろうとした事はもう分かっているんだ。この人は私と似ている、でも奥底は違う。あの下種の3人を躊躇いなく殺そうとしたのも、きつと過去に壮絶な物を経験しているんだ。この人は私と一緒に、弱い。

「……何をしている、若狭」

「え」

いつの間にか、彼の目は開いていた。よく見ようと近付いたままで、もしかすれば……いいえ間違いない誤解されている！

「反応に困るが……その」

「え、えつと……とりあえず外で話しましょう?」

「そ、そうだな」

驚いた。何が驚いたって、何か気配を感じると思つて目を開けると至近距離に若狭が居た事に驚いた。色々何重にも驚いているが、とりあえず起きると甘酸っぱい匂いが近くにあつた事が、そして超至近距離に若狭の顔がある事に驚いた。この俺が死の危険以外にここまで驚く事があるとは——それこそ驚いた。

「えつと……とりあえずごめんさい、喉が渴いて起きてみたら……その、うなされてたみたいだから」

「ああ、うなされてたか。眠ると毎回そうなんだ、やかましかったか」

「ううん、声も小さいし、全然……」

寝間着姿にカーディガンを羽織る姿は妖美でもあり、歳の幼さを感じさせない。とうか若狭はそもそも18には見えない程の見た目……もといすっかりした性格をしているから妥当とも言えるか。

「……で、なんであそこまで顔を近づける必要が?」

「えっ?! い、いや、その……暗くてよく見えなかったから……つい、ね」

「ああ、そういう事か。ならよかった、寝込み襲われたのかと思った……」

「お、襲いませんっ!」

「一瞬命の危険を感じたが大丈夫だったんだな、知らぬ間に怒らせたかと」

「……ええ?」

「え? あ、あく……身の危険の方でしたか、飢えてらっしやるんですね若狭さん。でもそういう事はもう少し大人に……いや18なら普通か? じゃあちゃんとした相手と

——

「——っ!!」

暗闇でもわかるくらいに顔を真っ赤にする若狭を見て、それも違うとわかる。ならやっぱり命の危険だったのか、まあ命までは取らないでも、怪しい真似をしたらって事だろう。まだ加わってから数日だ、見張られていてもおかしくない。

「あ、悪い勘違いしてた怪しい動きがないか見てたんですね、ほんと早とちりしてすみません若狭さん」

「——名前がいい」

ぼそつと、若狭はそつぽを向きながらそんな事を言ってくる。やめろ、いつの間にも好感度上げたつげとか疚しい考えが浮かんでくる。好感度なんか関係ない、俺はこいつら

を護っていくと決めればかりじゃないか。なのに好感度？ 疚しい、そんなものは不要な要素だ。好かれようが嫌われようが、そりや円滑な交流をする為には好かれている方がいいだろうが……とにもかくにも、そんな感情は持つてはいけない。

「そうか……じゃあ悠里」

「は、はい……」

「……特に要件がないなら寝直そうか」

「そ、そうね……うん、そうしましょう。それじゃあ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

悠里が車の中に戻るのを確認して、俺は寒空の下深呼吸をした。柄でもない、何ときめいている？ そんな感情は捨てろと言った筈だ、俺には不要、このグループで行動するなら尚更不要な感情なんだ。妙な所で男らしさは出さなくていい。そりや確かに皆魅力的ではある、だが俺の目的はそんな彼女達を害悪な物から護る事だ。感染者の討伐、生存者の分析や交渉、毒見や偵察に巡回に罠の設置、洗濯物の監視……は今後外して運転とか。

その為にも、感情は捨てよう。俺はただ、護る為だけにいる存在。感情は不要だ。要らない要らない要らない要らない要らない要らない。要るのは腕つぶしとやたら回転の遅い前世代の脳味噌ぐらい。これ以外は要らない。

そう繰り返して自分に言い聞かせながら、俺は10分程遅れて車へと戻っていった。空
白の10分、何をしていたのか悠里に疑問を抱かれている事を、俺はきつと一生知る由
はない。

4. 変革

翌日、俺達はデパートと言う名のダンジョンに朝から潜っていた。戦闘をこなす俺と胡桃を基準に2組に別れ、胡桃は悠里と食料調達に。一方丈槍と直樹は他の雑貨を幅広く見て回る事になったのだ。

「……クリア、来ていいぞ。そつとな」

昼間でも電気が無ければ店内は暗い。殆どがライト無しでは進めない暗さではあるが、十分に睡眠と休息を取っていれば集中力の持ちも違う。あの時は夜でも変わらないとは思っていたが、急いでもいけないんだな。

「ほ、本当にですか……？ ライトも持たずになんでわかるんですか？」

「人よりか耳と鼻が良くてな。奴らは呻き声もそうだが、独特の『臭い』がある」

「え、ええ？ 全然わからないです」

「まあわからんだろうさ、普通なら嗅ぐ機会はない。だが覚えておくといい、奴らは腐臭の他にもう一つ持っている。死期が近い人間から出る独特のものだ」

非常階段を音もなく上がっていく中、俺は室内用に持ち替えたレンチを握りしめて目的の階の扉の手前で立ち止まる。重い金属製の扉は若干立て付けが悪く、無音で開閉す

るには厳しい。

そこで2人を階段の踊り場で待たせ、俺1人がその扉を開けた。

予想通り、扉は軋む。非常口の緑の光すらもない真つ暗闇。その空間へ少しだけ顔を覗かせてゆつくりと呼吸する。

——近い？ 扉の音に寄ってきたか。どうするか、踊り場まで誘き寄せれば安全に排除できるが2人の前でショッキングな光景は見せられない。胡桃なら遠慮なくやれるんだけどなあ。

「……いますか？」

指示通りライトを布で覆い光量を抑えている直樹だが、不安なのか定期的に声を掛けてくる。それに対して掌を見せると、直樹は押し黙る。落ち着かない直樹に対し、1つ予想外だったのは丈槍が割と落ち着いて行動できている事だった。

必要時以外喋らず、足音も出来るだけ消して移動中は常に俺の右側に居る。直樹がそわそわし始めれば手を握ってやり、緊迫した状況になればしっかりと指示を仰ぐ。

子供っぽく詰めが甘いと判断していたが……改める必要があるな。

臭いの元がすぐそこにあると分かったその瞬間、目標は呻く。舌打ちをしてこちらの位置を教えてやりながら踊場へと誘導すると、標的は思い通りの動きをしてくれた。

「直樹、丈槍。悪いがここで仕留めさせてもらおう」

1つ断りを入れて、俺は感染者の頭にレンチを叩きつけた。威力は十分だったようで、その一撃を貰った感染者はそれ以降動かなくなる。念の為もう一撃入れ、バッグからライトを取り出した。

『これ以降は物資探索を最優先とし、感染者への対処は俺が引き受ける。俺の位置は常にマークし、もしもの時はそこに逃げ込め』

事前に2人に話しておいたプラン通り、状況更新の信号をライトの点滅で示してやる。それに対し、2人は手を振って応えた。

よし、ここまでは順調だ。衣料品が並ぶコーナーは扉を出てすぐではあるが、恐らく最低でも4体はこの階に巢食っている。

それに気を付けて無音で探せ、というのも厳しい——ここは1つこの階の感染者を全滅させてやれば間違いなく2人は安全に行動できるだろう。その為には感染者を誘導するあらゆる手段で自分の存在を示さなければならぬ。

その為にはどうするか？ 音を立てる、ライトを点けて堂々と歩く。そのどちらも日常ではありきたりな行動であり、同時に“奴ら”を惹きつける最良の手段でもある。

そうしようか考えていた途中、直樹が声を掛けてきた。

「あの……死期の近いにおいって、なんですか？」

その問いに若干迷ってしまう。あの時は病室で嗅いだ物だし、次に会った時は棺の

中。看取った訳でもなければその臭いを確かに、しっかりと分析した訳でもなかったからだ。

ただ、確かに感じた物と言えば……

「消毒液の様な、でもかなり生々しい感じの……上手くは表現できないが、実際に嗅げばわかると思う。そうとしか言えないが、本当に嗅げば分かる独特なものだ」

かなり大雑把ではあるが、直樹はふむふむと言った具合に理解していた。自分の理解し得ない範疇の事象は文字通り理解し難い。その人が言った様にしか学習できないのだ。それでも、直樹はしっかりと曖昧な俺の言葉を飲み込む。いつか役に立つと保険的な意味合いで吸収したのか、それとも今すぐにも理解しようと聞いたのかは分からない。どちらにしろ、微量ではあるが成長が見込める——そんな瞬間だった。

「まあ、分からないままでもいいんだ。そりや分かる方が色々と便利だけどな？ 本当ならお前らは安全な場所で飯でも作って、遠征は男が行って……上手く言えんがそういう場所にいるべきなんだ」

「そんな恵まれた環境……ある筈ないじゃないですか」

どこか悲しそうに呟いた直樹は少しだけ歩くペースを速め、俺を追い越していく。衣料品を扱うコーナーはこの階全体にあり、まず2人は扉を出てすぐの場所へと向かう。はぐれない様に後に続くが、2人が照らした服はやたらとコンパクトな物ばかりが

揃っていた。それもピンクだとか、真珠色で生地が細かいヤツ。どこかで見た気もしないが俺には無縁な物で、近視と薄闇というコンボで一瞬では理解できない。

「あつ、みゃーくんはあつち向いてて」

「ん？ あ、そうか……全員で同じ方向向いてたら警戒できないもんな」

「う、うん。そうだね？ ——あれ？ みゃーくんもしかしてニブイヒト、っていうのかな」

「察しは良い方だけどな」

「うぐっ!? そ、そうなんだね……」

丈槍のぼそつとボイスもしっかり拾ってやれるのがこの地獄耳のいい所だ。2人は反対の方向を向いて警戒していると、左からのそのそと音が聞こえてくる。

武器を握れば明かりは持てない。逆に明かりを持てば武器は持てず、有効なのは体術のみ。

その体術も決定打にはならず、完全に仕留めるには頭か首を踏み砕くしかない。正直やりたくないんだよな、あの感覚はいつになっても慣れない。

閃いた、ライトを口で咥えればいいじゃないか。径の大きい物なら無理だが俺が持つのは割とコンパクトなLED防水ライトだ。何度か血で汚れた事もあるが洗ったから大丈夫だよな？

レンチを辛うじて残る右腕と脇腹で挟んで持つと、恐る恐るライトを口に咥えた。当然喋れなくなるが仕方ない。

視界の中央を白い円が照らす。ああ、なんかホラーゲームをしている感覚だ。スタミナ上限が低くてオワタ式で片腕限定、体力なんてものはなくて頭を潰すまで延々とのたうち回るゾンビが相手。食料は少なく栄養を考えなければ死ぬ、そして水はちゃんと煮沸殺菌、ろ過しましょう……と。

間違いなくクソゲーだと評価されるな。まあ俺の場合自分で難易度上げちゃってるのもあるんだけど。……日頃からちゃんと筋トレでもしておけば、ここまで苦労はなかったんだろうな。

そのクソゲーの敵役であるゾンビはやつと目の前に現れた。なるほど、動きが遅い理由はそれか。

納得しながら、俺は悠々と左手に持つ得物を振り上げる——その直後、骨とその内容物が弾ける音は階全体へと響き渡った。

その後も俺は躊躇なしに感染者を屠る。何度も頭蓋を砕き、偶に他に弱点はないかと適当な場所を打つてみたり。

彼女達でも気付く程、辺りは臍物特有の生臭さが漂い始める。

「雅さん」

「……ん？」

安全を確保した後、死体を一カ所に集める俺に直樹は声を掛けてきた。

「無理して全部倒さなくても、いいんですよ？」

「いきなり何の話だ」

半ば自棄になりながら引き摺ってきた死体を並べる。こうして眺めると、本当に色んな恰好のヤツがいるもんだ。どこかの制服やちよつと洒落た服、そのどれもが血で汚れ、破れていたり引き千切られた跡があつたり。

元は同じ人間なんだと、再認識させてくれる。

「辛いんじゃないか、と思つて……」

「なんだ、また泣いてたか」

「い、いえ……でも悲しそうな顔してます」

悲しそうな顔、か。そんな顔を最後に見たのはいつだったかな。ここんどこ一人だつたし、いつでもピンチだった。悲しいなんて思いもしなかつたな。

まだ数日だが、俺はこいつらと会つて変わった気がする。笑う機会も段違いに増えたし、口を開く事も多くなった。当たり前だ、一人で笑つて独り言を言つてたら氣狂いのそれだからな。

「はーん、そうなのか。自分じゃ自分の顔は見えなくてな、さつぱりわからん。……お前

も似たような顔してるぞ」

「えっ？　嘘」

「悲しい、と言うより怖いか？　どちらにせよ心配するな、俺が生きている間はこいつらの事は全部俺が引き受ける。と言つても気休めにもならんか」

粗雑に並べられた死体を蹴りながら、近くにあつたカーテンを拝借して掛けてやる。少し難儀していると、直樹が反対側に回つて手伝つてくれた。

「いえ、安心できます。男の人がいるだけでも、違いますから」

そんなありふれた言葉を聞き流し、本当の気持ちを言わない事に少し不満を感じていた。俺は馬鹿だから、気持ちいを隠す事は苦手だ。溜め込めば自分の首を絞めるのと同じ、相手は気付かず自分だけが損をする。

だから俺は言いたい事はきつぱりと言つてやる。それが罵倒だろうが感謝だろうが殺意だろうが関係ない。このご時世、溜め込み過ぎても良い事はないんだ。飯も腐っちゃううしな。

「そっぴいや丈槍は？」

さつきまで荷物の整理をしていた丈槍はいつの間にかいなくなっている事に気付く。周りを見渡しても、姿どころか気配すらも消えていた。

「由紀先輩ならトイレに行きましたよ」

「は？ トイレ……？ クソッ！」

しまった、今までの常識通り女子トイレには入ってまで確認していない！ ったく何やってるんだ、仮に誰かいたとしても安全確認ですうとでも言えばよかつただろ。数秒入口で耳を澄ましていたが、あの時だけ動いてなければ感知できない。臭いも水の腐った臭いに掻き消されていたし。

そもそもトイレに行くとは思わなかった。出発前にトイレは済ませろと言ったのに……！

全力でトイレまで走る。直樹も事態を察したのか、数m後ろに追従していた。だが足の速さなら俺の得意とする物、そう簡単には追いつかれない。それどころかゆつくりと引き離していた。

「丈槍っ！」

扉の無い曲がりくねった女子トイレの入口に突っ込むと、そこには丈槍がいた。

「み、みゃーくん!? なんで……ここ女子トイレだよ！ 男子禁制だよ!!」

「ここだけ安全確認を怠っていたからな……入らせて貰った、異常なかつたか？」

「う、うん……そ、それよりここ女子トイレだよ!!」

「出すもん出したんだろ？ ならさっさと撤収だ、他の階に行くなり一度戻るなりするぞ」

モラルもマナーもエチケツトも持ち合わせない発言で2人は心底引いていた。そんな2人に気付かないフリをしてトイレを出る。腐った水の臭いつてのは耐えられはするが長く味わいたくはない。それに長々と男子禁制の花畑には居たくない。ゆつくりと花を摘んで頂こう。

「みゃーくんはトイレいいの?」

ハンカチで手を拭きながら出てくる丈檜とそれに付き添って出てきた直樹は壁にもたれていた俺を見つけて寄ってきた。

「節制してるからな、柴刈りの必要はない」

「えー、脱水症状になっちゃうよ?」

「そうです、水はこまめに摂らないとダメですよ」

「夏じゃあるまいし、問題ない。今まですつとしてきた事だから保証はあるぞ、余程動き回らない限りは。さあ、どうする? 帰るか、探索を続けるか。残りのスタミナと相談して決めてくれ」

いらぬお節介を躲す為に無理矢理話を替え、決断を急がせた。丈檜はうーんと考え込むと、ちらり……直樹を見る。その視線に気付いた直樹も顎に手を当てて考えるが、どちらが最善か決めかねている。そしてちらり……と俺を見た。

「お前ら決断力ないな」

「えへへ……どうしたらいいかわかんなくて」

「このまま他の2人と合流するのも1つの手ですよね」

「うーんそうか、ならとりあえず車に戻るぞ。戻るまでが遠征だ」

そうして、俺達は来た道に戻る。俺の信条は『即断即決即動即死』、ぱぱつと判断してぱつと決めてきつと動いてそつと死ぬ、これに限る。特に最後は肝心だ、無闇に苦しみを長引かせたくないからな。

車が見えてきた頃にそんな話をしたら、流石に最後は駄目だとお叱りを頂いた。それでも、死に際というのは重要だ。

一方その頃、悠里と胡桃は出来る限りやつらとは接触しない方向で探索を進めていた。食料品が並ぶ1階は悪臭でまともに呼吸が出来ないくらいで、特に生鮮食品——肉や魚がある場所に近付く程酷くなっていた。

しかし悲しい事に、缶詰が並ぶ棚はその売り場のすぐ隣。ハンカチで鼻と口を押えながら移動する2人だが、分厚い布越しでもバイオテロレベルの悪臭は衰えない。ならいつそなくてもいいか、となる訳もなく。

「マジ臭いんだけど……」

「喋るともつと吸っちゃうわよ、出来るだけ呼吸せずに行きましょう」

「んな無茶な」

何度吐き気を催したか分からない2人は、床に散らばる空き缶と荒らされた柵を見て嘆息する。それでもまだ開けられていない缶もあるのが唯一の救いだ。流石にこの臭いの中取りに来ようとする猛者はそういかなかったのだろう。

「お、由紀の好きな牛肉大和煮があるな」

「貰っていきましよう。お肉は貴重なたんぱく源だから」

2人は無事な缶詰を吟味しながらバッグへ詰めていく。由紀の好きな大和煮、生きていくのに欠かせない豆や魚、時折キャビアなんて缶詰もあるがそれは無視する。

そういえばあの人は何が好きなんだろう、と悠里は思う。たった数日ではあるが、彼は学園生活部とは一緒に食事をしていない。自分の物資が尽きるまでは自分の分を食べると言っていたが、何かを食べている姿を誰も見ていないのだ。

「そういや……アイツと飯食った事ないな」

悪臭の中、胡桃が鼻声で何かを思い出していた。丁度同じ事を考えていた事に悠里は微笑むと――

「そうね、その内一緒に食べてくれるわよ」

同じく鼻声で返答した。

「警戒してんのかな、それとも遠慮なのか」

「さあ……どうかわからないけど、警戒はないんじゃないかな」

「うーん、大人はわかんないんだよなあ。特にアイツは謎が多すぎて逆に怖い。でも奥底に何か詰まってるんだよなあ」

「ふふつ、よくわかってるのね」

「あつ！ そ、そういう恋愛の意味はないからな!? ただなんていうか、哀愁漂うというか、大人の秘密な感じがむんむんしてて」

胡桃自身よくわかっていないんだろう。ぶつぶつとああでもこうでもないという人問答をしながら時たま臭いで盛大にむせる。そんな姿がおかしくて、悠里は終始くすくすと笑い、同じようにむせていた。

30分後。先に車に戻り待機していた雅、美紀、由紀の3人は悠里と胡桃の帰りを待っていた。時刻は正午に近付き、雅は周囲警戒も兼ねて1人車外でおやつの時間を摂っていた。

「……遅い。潜ってから3時間経つのに」

不安を感じつい独り言が出てしまう。いけないいけない、これが癖になると本当に危ないんだ。ゲームでもそうだ、喋りながら歩いてる奴ほど見つけやすいし脳のリソース

を余計な事に割いてる分反応も遅くなる。頭であーだこーだ考えるならまだしも、本当に独り言はいけない。何より、黙ってる方が格好いい。

頭であーだこーだと考えながら、俺はポーチから金平糖を一粒取り出し、口に入れた。どんなに水と食べ物を節制しても、糖分はしっかり摂らなければならぬ。カロリー面でも優秀な菓子で自衛隊のレーションにも付くくらいだ。何より美味い。

「みゃーくん、りーさん帰ってきた?」

車の扉を開け、丈槍が聞いてくる。

「いや、姿もなければ気配もない。あと30分で帰ってこなければ搜索に行くつもりだ」
「そのときは私も行っていい?」

「駄目だ。搜索は1人で行く。理由を説明するにも面倒だから、分かってくれると嬉しいんだが」

「そっか……うん、わかった」

「よろしい。物分かりのいい子には褒美をやろう」

肯定した時の顔がちよつと心配で、ついポーチからまだ開けていない金平糖の袋を投げ渡す。

「わわっ……これ、金平糖? みゃーくん渋いねえ」

「金平糖を侮ってはならん、意外と優秀なんだぞ」

「ははっ、雅様からの褒美有り難く頂戴いたします」

「うむ、今後も精進せよ。しからばその度に褒美を授けよう」

うやうやしく頭を下げて金平糖を持つその手に、なんとなくジャーキーと乾パンも乗せてみる。最後のメインディッシュだったが……まあ面白いしいだらう。こういう所で交流すれば親睦も深められる。

「えっ？ こんなにいいの？」

「前払いみたいなものだ、その代わりちゃんと俺の言う事を聞けよ？ 特にジャーキーは3回分だからな、肉の価値は重い」

「そつ、そうだよ！ お肉は貴重だし、これはみゃーくんが」

「いいよ、食え。食わんと大きくなれんぞ」

ただでさえ身長の低い丈槍だからな……痩せ形だし。正直心配だ。
「なにしてるんですか……」

丈槍の後ろから本を読んでいた直樹が顔を覗かせる。丈槍の手の上にある食料を見て首を傾げ、理由を求める様に俺の目を見てくるもんだから……ちよつと遊んでやろうかと考えてしまった。

「年貢を納めてた」

「なんの年貢ですか……というかいつの時代」

「友達料」

「最低です、ね、由紀先輩」

「ええっ!?! 私お金取らないよ!」

「俺の立場は意外と弱くてな? 密かにこうやって飯を渡してたんだ……およよ」

わざとらしく嘘泣きまでして演技するが、その途端直樹は心底呆れた顔で俺を見る。

あ、バレたな。

「普段無表情で機械みたいな雅さんがそんな事で泣く訳ないじゃないですか……っついていかそういう顔もできるなら普段からしてください気持ち悪いんで」

「前から思ってたけどさ……割と、毒々しい事言うよね」

「変な事してるからじゃないですか。……はあ、もういいです」

「あ、おい待てい」

顔を引っ込めようとした直樹は改めてむすっと顔で出てくる。そんなボーイッシュ可愛い最年少後輩真面目毒舌密かな色気、他諸々の属性を持つ直樹にも金平糖の袋を投げてやった。

「美味いぞ、食え」

「……どうも」

一言だけ礼を言うと、直樹は引っ込む。そんな一部始終を丈槍と俺は微笑ましいと言

わんばかりのにやけ顔で締めた。

思えば、この数日で俺は変わった。変わり過ぎた程に。馬鹿みたいに冗談を言つて、下手な芝居を打つて、まるでこうなる前の馬鹿な自分に戻つたようだ。

そして同時にこうも思う、彼女達と一緒に居ていいのかと。あの時、俺はその場の空気でこのグループに入ったようなものだ。

あの時、密かに抑えていた感情が生身の人間を殺したことで爆発した。次第に強くなつていく悲しみの中、俺は丈槍の「一緒に行こう」という誘いに乗つた。悲しくて寂しくて、ようやく自分を認めてくれる生存者に遭えた事が何より嬉しかったのだ。

だが同時に甘えている節もある。優しくしてくれる悠里に、戦友だと慕ってくれる胡桃、妹の様に懐いてくれた丈槍に……まだ少し距離があるが一先ずは認められている直樹。

護つてやると明言した以上務めは果たす。約束は守るし、やつぱり止めたなんて言うつもりもない。でも自分がここに居てもいいのかと何度も思つてしまう。同時に誰がこの子達を護ると自問して、勝手に折り合いを付けてしまつていた。

「ねえ、みゃーくん」

いつの間にか俺の隣へと移動していた丈槍は含みのある言い方で俺を呼ぶ。最初は止めろと言つていたその恥ずかしいあだ名も、慣れはしませんが受け入れる事にした。

「なんだ」

「そんな深い所まで考えなくていいと思うよ」

「……エスパ―みたいだなお前、よくわかったな」

「もちろん、だつてわかりやすいもん」

いつだつて、丈槍はこの笑顔で周囲を癒してきたんだろう。破壊力抜群の笑顔は俺までも暖かな気持ちにしてくれる。

「目を細めて何かをじつと見てたら考え中、深く考えれば考える程近くの物を見てるよね」

「あー、そう言えばそうか。よく見てるな、惚れたか?」

「ほ、惚れてなんかないよ!」

自分でも知らない事を知られていた、その羞恥は結構な物でちよつとアウトな軽口を言ってしまう。いかんいかん、そういうのはもつとイケメンが言つてこそ映えるものだ。俺の様なネクラオタクが言つてもただキモいだけに過ぎない。

「冗談だ。まあどうであれ感謝する、ちなみに何考えてるかわかったか?」

「流石にそこまではわかんないかな」

一瞬お前が愛しくて仕方なかったんだ、とかいう訳の分からない言葉が候補として挙がったが、なんじゃそりゃとゴミ箱へ投げてやった。その言葉はまるつと削除され、つ

「言っちゃった、なんて事態にはならない。」

「まあそうだよな、わかったら怖いわ。普段俺が皆を見て可愛いなあとか思ってるのを覗かれてたら今頃スコップで打ち首だ」

「か、可愛いとか思ってるんだ……」

「あつ」

しまった、検門を上手く偽装した車列が通り過ぎていったぞ。さつき摘発して浮かれていたのか、俺は重大な問題発言をあるう事か丈槍に言ってしまう。黙ってくれと言えば黙ってくれそうではあるが……仮にそうして処罰を免れたとしても、罪悪感は一生涯残りそうだ。

しかしなんなんだ、最近訳の分からない事ばかり頭に浮かんで……今までの合理主義な思考は一体どこのリサイクルシヨップに売り払われてしまったのか？ この思考ルーチンじゃいつか本当に打ち首になるぞ。

とか考えている間にも低レベルな軽口とジョークが混じるし……駄目だな、一度自分を見つめ直そう。

「ま、まあ花の女子高生だしな。ニッポンの男共はJKという言葉に敏感なんだ、俺は違うけどな」

「えー」

「でも実際可愛いとか思っちゃうのは仕方ない。このご時世出会っても血生臭い戦いに発展するつてのに、こんな平和で美人のJK見てりやそう思うのも仕方ない、うん仕方ない。そういう事だから、俺は捜索行ってくるよ」

もう半ばヤケクソになりながら、20分も経ってないのに斧を手にデパートへと歩き始めた。流石に丈槍も苦笑していたが、気を付けてと手を振っている。いかんな……方向性を見失っているぞ。ようやくまとまな性格になつてきたと思えば変態コースとか洒落にならん。

そもそも何故俺はここまで変わってしまったのか？ うーん、議論の余地ありだな。

「あー、おい、雅!!」

考え込んで前が見えなくなっていた所に、メンバーの中で最も恐れている人物の声で我に返った。その緊迫した声色に何事かと、視界に移った2人に駆け寄る。

「っ!? 噛まれたのか!?!」

「いや、返り血だ! リーさんに1体近付いてたのに気づかなくて……どうにか間に合ったけど……あとまだ後ろに……!」

朦朧としているのかぐつたりとした悠里に肩を貸す胡桃は全身に血を浴び、悠里の髪や顔にもべつとりと赤が付いていた。噛まれていないとは言ってたが、傷口から奴らの血が入っても感染する。早急に血を洗い流して怪我がないか確認するべきだ。

会話の為に立ち止まっていた胡桃が後ろを振り返った時、丁度停まっているトラックの影から感染者が現れる。

「撒こうとして車の間を縫ってきたんだ、でも何故かずっと追い掛けられてる」

「了解した、こいつらは任せろ。車に着いたらすぐに血を落として怪我がないか確認しろ、あと30分経っても俺が帰らなかつたら死んだと思え」

「縁起悪い事言うなよ……とりあえず任せた！ 帰ってこなきゃあたしがお前を殺しに行くからな！」

「なんじゃそれは……」

胡桃達が真っ直ぐ車へと向かうのを見送ると、続々と姿を現す感染者共の前で斧を構える。そして近くの車のフロントに思い切り叩きつけ、盗難防止装置を作動させた。

けたたましく鳴るクラクションに感染者の目が集まる。その隙にまず1体目の頭に一撃を入れる。

「さあ、ここからは俺が相手になろう。ただ逃げるヤツを追い掛けるには飽きたらう？ 食らいたければ努力してみろ、勿論俺も食われない努力はさせて貰う」

そこそこの声量で見える範囲の感染者のヘイトを稼ぐ。これで少しくらいの音じゃターゲットは移らない。

「可愛い子達の為だ……一肌でも二肌でも諸肌でも、生皮脱いでやったっていい」

綺麗に洗ってぴかぴかだった斧はどんどん汚れていく。赤く、紅く、赤黒く、終いには真つ黒に。蘇芳色が地面に花を咲かせ、毒々しいピンクが頭蓋の隙間から覗く。

何体倒しただろうか？ 煩かったクラクションは途絶え、足元にはいくつもの肉塊が転がる。

何体かは脚や腕が飛び、俺自身も赤に染まっていく。10体、15体、20体と積み上げられていく屍は段々と死臭を濃く漂わせた。

同時に、俺の中にも前と同じあの感覚が戻ってきていた。

「雅ー」

俺の名を呼ぶ声に、横目で確認する。それはスコップを片手に加勢にきたらしい胡桃だった。

「胡桃か、若狭はどうだった」

「大丈夫、怪我もしてなかった。お前は？」

「問題ない」

いつの間にか最後の1体となっていた感染者の頭を砕くと、口元を拭って大きく息を吸う。数えるのも面倒な程の感染者を相手にして体はくたくただ、流石に今日は節制なんて言ってもらえない。

「お疲れ。っていうかすごいな、この数をやったのかよ」

「武器が武器だからな。相手が走って来るなら数体が限界だが、ただの鈍い馬鹿力なら引き打ちすりゃいい」

「そう言っても体力持たないんだよ……」

「体の差だ、諦めろ」

斧に付いた血と臓物を振り払い、戦闘終了の号令を全身に伝える。それと同時に限界を迎えた体はだらしなく脱力した。

「うわっ、大丈夫か!?!」

「疲れた」

斧を杖代わりになんとか立ち上がる。胡桃は返り血が付くのも厭わず肩を貸そうとしてくるがその手を拒み、最後の力を振り絞って一歩ずつ進んで行った。これからまた何処かへ向かうのなら、俺はへたり込んでいただろう。だが今は違う、「帰れる」からなんとか歩けているのだ。

「風呂入りてえなあ」

「流石に風呂は車にはないなあ」

俺の切なる願いは碎けた。もう川でも池でも貯水槽でもいい、水に飛び込ませてくれ。

でも贅沢を言うのなら、ちよつと熱めの露天風呂にでも入りたい。湯で温めた酒を星

空を肴にして一杯……無理だな。

「温泉入りてえなあ」

「あー、確かに入りたいな。最近肩こりが……」

「あつ、湿布忘れた」

胡桃の肩こりで出発前に湿布があれば取ってきてくれ、と言い忘れていた事に気付く。ダメ押しを食らって今すぐにでもぶつ倒れたい事この上ないが、そうなれば胡桃に迷惑を掛けてしまう。ここは我慢して、車でぶつ倒れよう。

「酒飲みてえなあ」

「料理酒ならあると思う」

「もうそれでもいいか……」

「アル中の言う事だぞそれ……」

それからも様々な願望を口に出しては胡桃が一々コメントしてくれるのが嬉しくて、車に着くまでずっと言っていた。

「右腕戻らねえかなあ」

「話を重くするな!」

そして自虐ネタを出しては怒られ、最終的には俺の手が届かない右肩を支えられていたのだった。

5. 変容

へとへとになりながら車に戻ると、車外には丈槍と直樹がいた。その様子は少々不穩で、話し声もいつもより荒い。今すぐにはないだろうが、放っておけば口論になる可能性もあった。

「あつ、胡桃先輩！　悠里先輩が！」

「りーさんがどうかしたのか？」

只ならぬ雰囲気を感じて、俺は血塗れのまま車の中へと入る。そこには――

「……お父さん？」

俺の事を父と見間違えたのか、悠里はあどけない仕草で抱き着いて来る。まずその事に驚いて、同時に感じた柔らかい感触にも驚き悠里の肩を掴む。

「雨降つてたの？　びしょ濡れじゃない」

引き離す前に離れた悠里の目は――明らかにどこか別の世界を見ていた。赤い雨なんて降る筈がない、なのに悠里はこれを雨だと言って、奥の棚からタオルを取って来

る。血塗れの制服も寝間着へと変えられていたが、抱き着いた所為で返り血の一部が染みついてしまっている。

「風邪ひいちゃうよ、服を脱がないと」

「いい、いい。自分で出来る……それより」

「んー?」

これも抱き着いた時に付いたのだろう。赤い液体が悠里の右頬に付着している。俺は渡されたタオルでまずその汚れを拭いてやり、悠里の前から消え失せようと思った。

「どこ行くの?」

「……忘れ物だ、しばらくしたら戻る」

振り返りもせず、悠里の「いつてらっしやい」を背で受け止めた。車を出ると、一部始終を聞いていた胡桃が顔面蒼白の状態で立ち尽くしている。それに同じく、丈槍と直樹も顔を伏せ一言も喋らない。

その沈黙を破るべく、俺は放心状態に陥っていた胡桃の顔をタオル越しに掴み、強制的に目を合わさせる。

「これは尋問ではない、聴取だ。悠里が襲われた時の話を聞きたい。……直樹と丈槍は悠里を着替えさせてやってくれ、俺が汚しちまった。あと俺の着替えを取ってきてくれるとありがたい……今俺があいつに会うのは危険要素が多すぎる」

「うん……」

「わかりました」

反論もせず素直に従ってくれた2人は車へと入っていった。胡桃も着替えさせるべきだが、状況が状況だ。今は事情を聴く方を優先しよう。シオルダーバッグを降ろし、コートを脱ぐ。それだけでも汚れはうんとマシになる。

顔や手に付いた血をタオルで拭きながら、まだ綺麗な部分で胡桃の顔も拭いてやる。その刺激でいくらか正気を取り戻したらしく、ぽつぽつと話し始めた。

「あたしが気付いたのは、リーさんがヤツに押し倒された時の音だったんだ。それまでは普通だったし、別におかしな所はなかった……と思う」

「……とりあえず今はお前の見た事全てを言え、それから判断する」

厳しい口調になっているのは自覚しているが、この事態でむしろ優しく問い掛けても効果はない。ここはまだ緊張感を与えた方が胡桃も踏ん張れる。あの2人の気の落ち様を見るに、悠里はかなりの影響力を持っている。それは数日しか一緒にいない俺でも頷けるし、悠里自身実際リーダーとして振る舞っていた。

「それから、慌ててシャベルを構えて、襲いかかったヤツを仕留めた。リーさんはぐったりしてたけど、倒れた時に頭を打ったと思って……」

「妥当だな、それ以降は？」

「その後はロビーを突っ切って、雅と合流した……車に着いて2人にリーさんを任せて、すぐに引き返したんだ」

となると、實際豹変した場面は見えていないのか。なら直樹に……いや、丈槍に聞くの
がいいか。直樹の性格だと内心はかなり混乱しているに違いない、そういう時に思考を
乱すと互いに悪い方向へと転ぶ。

いくらか落ち着くまではそつとしておくのが賢明だろう。

「わかった、とりあえず今の所は十分だ。悠里の所へ行つてやれ、ついでに丈槍を呼んで
来い」

「うん……」

「それと、悠里がああの状態になつたのはお前の所為じゃない。それだけは断言できる。
気休めでも優しい嘘でもないから安心しろ」

「随分落ち着いてるんだな……まあそうだよな、会つて間もないし」

少々棘のある言い方をした胡桃は、慌てて口を噤んだ。その直後、小さくごめんと
言ったのが聞こえる。

「構わない、そう思うのも無理はないからな。というより実際そうだ、それがある意味良
かったとも俺は思っている」

「……それ、美紀が聞いたら怒るだろうな」

「だろ。うな。……良かったと言った理由は1つ、俺もお前達の様に沈めば誰も助けられないからだ。全員の士気が落ちればチームとしても個人としても、性能が下がる。だが1人でもまともなら、鼓舞できる」

「お前らしいよ。短い付き合いだけど、何となくわかる。効率厨でケチで躊躇なくて、でもそういうのも必要なんだなって。今痛いほどわかる」

「憎まれ役だ、それが俺でよかったな。——さ、さっさと行け。丈檜を呼んで来い」

「ああ……しつかりしないとな」

気合を入れる様に、胡桃は両手で自分の頬をぱちんと叩く。その様子を見届けて、俺は車にもたれて空を見上げた。冬は空気が乾燥して空が澄んで見える、と言われる。雲を数えて、動物なんかに似た形を探す。生憎どれも不格好な形で動物には見えないが、1つ缶詰みたいな雲は見つけた。

胡桃に倣い、俺も片手で自分の頬を叩く。ちよつと強めに叩いた所為でクソ痛い。精神論は俺が最も嫌う倫理だが、電車の中で腹痛に襲われた時神頼みするのと同じだ、縋るモノがなければ人は希望を持ってない。

「みゃーくん」

「ああ、来たか。唐突で悪いが聞きたい事がある。胡桃が悠里を連れて帰った時からの状況だ」

丈槍はいつもよりかは静かだが、なんとか平静は取り戻せたらしい。俺の問いに腕を組んで考え込むが心当たりがないのか、うんうんと唸っている。

「考えるより見たままを教えてください、胡桃が悠里を連れてこの車に戻った後、胡桃はすぐに引き返していった。……そうだな？」

「うん、『リーさんを頼む、あと念の為怪我してないか見てくれ』って言ってすぐ行っちゃった」

「それからの悠里の状態を聞きたい。到着した時、まだぐったりしてたか？」

「うん、すぐに着替えさせて、血も拭いて……全部済んだ頃に一回起きたんだけど、私を見てる」

その答えで俺はやつと確信を持てた。悠里には妹がいた、それは昨日車内でわかった事だが——俺がうっかり妹の話をしたのが原因か。いや、それ以前から少し様子がおかしかった、俺の発言もあるが他にも何か原因がある。

「……ちなみに、お前達が集まった切っ掛けは？」

「みーくん以外は偶然学校にいたの、めぐねえって言う先生がいて皆で 学園生活部 “ っ て部活を作って——”

「なら直樹はどうやって？」

「シヨツピングモールに行った時に会ったんだよ」

「なるほど……そうか、わかった。とりあえず今は十分だ、ありがとう。また何か聞くだろうが——あと、何か思いついた事があれば言ってくれ」

現状を整理するには十分な情報が揃った。打開策が見えた訳ではないが、なし崩し的にやっついていくしかなさそうだ。それも慎重に。今皆は精神的に不安定になっている。

丈槍はまだしも、胡桃と直樹はレッドライン。そう言う丈槍も底が見えないだけで限界に近い可能性もある。

結果として、これは俺しかまともに動けない。信頼もそこまで勝ち取っていないければ各人の表面上ですら理解できていない。かなり難しい問題ではあるが……このまま崩壊させてはいけない。

なんとしても悠里を——いや、まずは周囲の精神を安定させる事に努めよう。異変が起きた悠里の心は壊れている、修復にはかなりの時間を要するだろう。

それに周りまで壊れてしまえば廃人グループの出来上がり。他のグループに見つかれば肥やしになるのは間違いないし、それだけはなんとしても避けなくてはならない。

「……無理しちゃ駄目だよ、すごく怖い顔してる」

丈槍は悲しそうに俺の顔を見上げる。無理を言うな、こういう時こそ無理をしなくちゃならない。自分で何を言ってるかわからなくなってくるが、とにかく今こそが無理の為所と言う物だ。

「お前こそ、無理してるんだろ。——無理するな、今は誰よりも無駄に長く生きたヤツがいる。いくらか無為に時間を過ごしたとは言え、形式的には“大人”なんだ」

「……そう、だね」

「今は泣くなよ、皆耐えてるんだ。悠里が戻ってから、鼻水と一緒に服に塗りたくってやれ」

「うん——今は、我慢する」

今にも泣きだしそうな丈槍の帽子を下に引つ張り、目を隠す。これなら泣いてるかなんてわからない、少しぐらいなら誤魔化せるだろう。そしてそつと、一回だけ優しく頭を撫でて、俺はその場から立ち去った。

——10分程経った後、丈槍は車の中へと戻っていった。中からはるーという声と、お父さんが帰ってこない、という不安の声。やっぱり、冗談なんかじゃないんだと再認識してから、またコートを羽織ってデパートへと潜る。目的地は1階、悠里が襲われた場所だ。

道中を軽く掃除し、後から胡桃が追ってきてきても大丈夫なように目印も付けて奥へと進む。途中から悪臭がキツくなってくると、近くの棚からマスクをぶんどって水を含ませ、耳に掛ける。それでも悪臭は衰えないまま鼻の奥を突いた。

「……………」

辺りに缶詰が転がる場所で、まだ新しい死体と血溜りが必死に存在を主張していた。襲いかかったであろう感染者は初老の男。その後頭部は鋭利な物で穿たれ、瑞々しい果実を覗かせていた。

とりあえず、だ。この男は関係ない。派手に血を被ったのもショックの1つだろうが、元を言えばそう簡単に接近を許す程無警戒ではない。

血溜りから辺りを見回すと、周辺には様々な物が転がっているのがわかる。空き缶、血、血、血、鞆、靴、血、死体、血、空き缶、ビニール袋、空き缶、空き缶、ランドセル。

最後に目に入ったものに近付くと、それは今時はよくある水色のランドセルだった。所々血で汚れており、この持ち主は既に死んでいる。そう確信できるのは上部……首に近い場所からおびただしい量の出血が認められるからである。

実際は違うとしても、ぱっと見ではそう判断してしまう。持ち主が首に噛み付かれ、動脈や気道を食い千切られる光景を想像してしまう——

「———そうか」

俺はこれの持ち主も、ましてや悠里の言う『るー』の姿も知らない。だから一番見覚えのある人物で想像した。そう、例えば自分の妹だとか。

首の一部を欠損させ、ひゅーひゅーと空気が漏れる音がする。何故だろう、まるで現実の様だ。のそのそと動く音も、空き缶を蹴る音も、偉くりアルで煩い。

「……………!!」

気付けば、目の前には件の感染者。このランドセルの持ち主であろう小さな体が迫ってきている。ライトを上、上に——だが首元が見えた辺りで止める。

あり得ない話だが、もしこの感染者が自分の妹だったら。そんな不吉を考えてしまうのだ。絶対にありえない……………でも着ている服は見覚えがある。

「馬鹿言え、余計な物を見せやがってツ!!」

持っていたライトを床に叩きつけて現実から逃げた。こんな事をしていてる場合ではない、今日の前にヤツは迫ってきている。なのに、投げ捨てる必要はあったのか？

「はあ……………はあ、クソが。クソ食らえだ、馬鹿が！ 自分の妹のランドセルの色くらい覚えてる！」

精一杯の怒号。やがてライトを拾い直す頃には、小さな感染者は消え失せていた。その場には打ち捨てられた水色のランドセルと、1体の肉塊のみ。

もしあそこで顔を見ていたら、どうなっていたのだろうか。きつと俺も狂っていただろう、正気を失い、馬鹿みたいに絶叫してたかもしれない。そして最後にはナイフで首を掻く切……………ありそうな話だ。

念の為ランドセルを開けて名前や連絡先が書かれている紙を見るが、そこには全く関係のない名前が記されていた。もういい、十分すぎる。悠里はこれを見た。そして俺と同じ物を見たのかはわからないが、まあ似た様な物だろう。

まだ使えるライトの頑丈さに感服しながら、ついでにバッグに缶詰を詰めて車へと戻った。

「あー！ おかえりなさい、お父さん」

そしてまた幻覚と疑いたくなる現実には直面する。ニコニコと本当に嬉しそうな笑顔を浮かべる悠里はべつたりと俺の腕に纏わりつく。今回は先にコートを脱いだから問題ない。

胡桃にバッグを渡すと、丈槍に状況はどうだと耳打ちする。すると、相変わらず丈槍を『るー』と勘違いしていると答えた。

「酷い顔してますよ、何かありましたか」

素っ気ない態度で直樹が聞いてくる。何かなら目の前で起こってるだろう、堪らず反論したい気を抑え、悠里を丈槍に任せ残り2人を連れて外へ出た。

扉を閉めて車にもたれ、会議が始まる。その合図は俺の小さな溜息に全員が眉を寄せた事だ。

「現場を見てきたが、確実に『それ』と言える物があつた」

単刀直入に言うのと、胡桃は首を傾げ直樹は更に眉を寄せ、明らかに不満を見せる。

「まず前提から話そうか。若狭に妹がいた事を知ってる奴は？」

「いや……」

胡桃は素直に首を振り、そして気付いた。その場にランドセルがあつたのを見たのだらう。途端に青ざめると、同じく俺の顔も凝視する。一方――

「知りません。ですが、何故あなたが知っているんですか？」

直樹は明らかな敵意を瞳に宿し、聞いてくる。まだ聞かれるだけマシか、その分こいつは楽でいいな。とは言っても気が抜けないには変わりない、言葉を選ばなければすぐにでも刃物が俺の首を切り裂きそうだ。

「昨日から若狭の様子がおかしかった。俺が妹の名前をうっかり出した時の事は覚えてるか？ その時、若狭は小さく『るー』と呟いた。そしてその直前から地図を見てぼーつとしていた……小学校の文字を見ながらな」

「じ、じゃあ……りーさんはランドセルを見て……」

「なんとか堪えていたが、良くない方向に転んだ。結果感染者の接近を許し、襲撃を受けた。まあ後者はそこまで重大じゃない、問題は――」

「悠里先輩が襲われた事が、重大じゃないですって？ よくそんな事平然と言えました

ね、人格を疑います」

ある意味予想通り、直樹は毒を吐く。それ自体はいい、問題はその語句に込められた感情だ。

「前者の精神的ダメージと比較して、という意味だ。言葉が足らなかつたな、申し訳ない」

「無表情で言われても全然説得力ないですよ」

「……直樹、俺自身語弊があつたり誠意が足りなかつたり、そういう所は自覚している。それについての苦情や説教も後でいくらでも聞こう。だが今だけは……俺の方針に口を出さないで貰おうか」

大人げない言い方をしたと、自分を恥じた。語彙力もなければ他人との会話経験やコミュニケーションも乏しい俺は選ぶ言葉も適切ではない場合が多い。それはたつた今発揮されて、直樹の敵意をしつかりと増強させてしまっている。

「っ！……わかりました……続けてください」

今にも嘔み付いてきそうな直樹だったが、怒りを堪えてなんとか話を聞く気になつてくれたらしい。

「ありがとう。……話を戻す。若狭が襲撃された事も重大だが、あいつの中ではそれよりも精神を破綻させるに十分な事が起きていたと考えられる。胡桃、若狭の妹がどこに

いるか知ってるか？」

「いや、いや……あたしも今初めて知ったし、妹がいるなんて今まで一度も……」

「私も聞いた事がありませんでした。それどころかそんな素振りすら見た事はありません」

「そうか……」

この状況になっても、今まで妹の事を全く気にしていなかった。周りを心配させまいと完璧に隠していたのか。

それでも……中学生ならともかく小学生の妹を放置したまま今まで悟られずに過ごせるのか？ 丈槍や胡桃はともかく、色々と鋭い直樹にも気付かれないなんてのは。確かに「夜警」を依頼された時も周りが上手くやれば騙されそうになったが、とても隠し通せるとは思えない。

他にも、俺を父親と勘違いしている理由も気になる。胡桃と直樹は普通に認識しているなら、若狭の記憶が巻き戻っている可能性は低い。直樹はこうなってから合流した、と言ってたが……こうなる以前から面識はあったのか？

「そういえば若狭とは前から知り合いだったのか？」

「いや、リーさんとは屋上に逃げた時初めて会って、美紀もモールで初対面だった」

「丈槍とは？」

「由紀とも屋上で初対面だったな、名前とかは知ってたけど」

「じゃあこうなってるから初めて会ったのか、直樹も?」

頭の中で相関図と作っけていきながら、直樹にも振る。するとしつかりと一度頷く。

「ふーん……」

この状況になってここまでの間柄になったのか。女子の親和性というか、コミユ力の高さは怖いくらいだな。

となると、やはり巻き戻しはないな。悠里の中で何が起こったのか、はたまた何を見たのか定かではないが今までどういう状態だったかが鍵となりそうだ。

……俺の場合、ある意味諦めているからこうやって通常通りいられている。あの年齢と頭じゃ1人では当然、例えば家族と一緒に居ても五分五分だ。それにこの街と俺が住んでいた場所じゃ、かなり離れてるからな。当日、その瞬間一緒に居なかった時点で詰んでいるも同然だ。

無理矢理頭の隅に追いやっている感じもあるが、距離合ってこそその割り切りなんだろう。これが家でこの事態に遭遇していたら絶対に正気じゃいられない。特に、死んでいたら尚更だ。

「りーさん……どうにかなるのか?」

不安げに胡桃が聞いてくる。

「まだわからない、今までどうやって区切りを付けていたか、耐えていたかがわかればいくらか解決策も見えると思う。……すぐには無理だ、当分は合わせるしかない」

出来る事は何か。それすらもわからない今、場を掻き乱してはならない。何気なく言った言葉や行動が悠里を悪化させては元も子もない。まずは情報収集だな。

「とりあえず、お前達が今までどうやって生きてきたか詳しく聞かせて貰いたい」

「わかった」

「それが悠里先輩を元に戻せる手掛かりになるのなら、手伝います」

それから丁度正午になり昼食で一旦区切ると、丈檜に悠里を任せまた同じメンバーで集まり今までの事を聞く。嘘の様な壮絶な話は、俺が経験してきた事より何倍も辛い物だった。

それまで引つ張ってきた佐倉慈という教師の死、それが原因で丈檜に異変が生じた事。度重なる不幸に挫けず、新たな引率者となった若狭悠里という少女は大人にならざるを得なかった。諸々を聞いてみると、そこに悠里の自由な時間はない。眠る時以外、必ず丈檜や他のメンバーの為に動かなければならない。文字通り、考える暇などなかったのだ。

「……なるほど、つまり若狭は『学園生活部』を保つだけで精一杯だった訳だ」

「で、でも妹の話が出れば！ めぐねえの車もあったし——」

胡桃はぼつと顔を上げて反論する。何を持って、どのような思いでそう言ったかは推し量れるが、あえて手を出して制止した。

「助けに行つたか？ 聞いただけで悪いが、それすら出来る余裕もなかったと思えるがな」

「それでも、多少無理してでも助けに行きます」

制止された胡桃に代わり、今度は直樹が胡桃の言いたかつた事を言う。

「無理だ」

「なんでですか!？」

淡々とした答えに、直樹は思わず叫んでいた。窓越しに悠里と由紀が顔を覗かせるが、胡桃が手を振つて安心させる。そしてまるで信用ならない相手を前にするように、直樹は胡桃の横に移りその手を握る。

「教師が死ぬまではバリケードの設置、教師が死んでからは丈槍のフオローと環境の整備。丈槍が現実から逃げた時も物資は不足していたし余裕はない。モールへ遠征に行つた時、ついで行けばよかつたかもしれないが……思わぬ拾い物もした」

あえて言つてやると、直樹ははつとする。それ以外にも行ける期間はあるだろう、だが悠里は何よりも仲間の安全を取つた。生きているかも知れない妹よりも、目の前で生きている仲間を守ろうとしたのかもしれない。それはそれで、非道な気もするけど

な。

「どうであれ、何らかの理由で若狭は救助には行けなかった。だとしてもあいつの精神力には感服する、妹がいるのに平静を装っていたんだからな。見ず知らずの同年代の為に、妹を見捨てたんだ。——傍から見れば」

「はた……から？」

ますます敵意の強くなった直樹に、状況が飲み込めていない胡桃。そして分かった気である俺はポーチから久し振りに携帯を取り出すと、ロックを解除して2人に画像を見せる。

「これ、妹か？」

「……それと、弟さん」

「そうだ、可愛いだろう？ 特に妹なんか最高に可愛い。でも弟は駄目だな、馬鹿で下品で、妹なんかと比にならない。なあ、妹可愛いよな？」

「は、はい……カワイイデスネ」

「弟の事ボロクソに言うなあ……」

「——まあ、どうせもう死んでるんだけどな。どうしようもない、だから気にしない事にした」

どうしようもないから気にしない。ある意味暗示の様に楔を打って、その隙間を誤魔

化していた。それがぼろっと取れてしまったのにも原因はあったし、似たようなものだ。

続いた俺の言葉に、苦笑していた2人の顔は途端に青ざめていたのは置いといて——
—電源を消して再びポーチの奥底へとしまった。

「まあ過ぎた事なんか気にしても仕方ない、若狭が助けに行きたいと言えなかったのも仕方ない。今までで分かったのは、とても助けに行ける状況じゃなかった、っていう事だ」

強引に切り上げて、地を蹴って寄りかかっていた状態から脱出する。

「とりあえずは現状維持、良くもならんが、悪くもならん。ゆっくり聞き出して道を探ろう。俺は若狭の父親を演じ、胡桃は学校に居た時の事を、直樹は妹……るーについて聞いてくれ。もし様子がおかしくなったり嫌そうな顔をすればすぐやめていい」

「わかった……ってどう聞けばいいんだ？」

「そういえば胡桃、俺があの下衆共に脅されてた時どう思ってた？」

「え？ ……ヤバい事になったな、どうにかしなきゃ……って。ああ、こんな風にか」

「そうだ。それとなく、な。あと丈槍についても……『あれ、そういえば由紀はどこに行っただ？』だけでいい。ただしこれだけは俺の目の前でやれ」

胡桃はうんと頷く。それに対し手で車を示してやると、すぐに車内へと戻っていつ

た。

「さて、直樹は言いたい事はないのか？」

ずつと黙って聞いてくれた直樹にも、念の為聞いておく。苦情と説教は後で聞く、と言ったからな。まあこの問題が終わった後、って意味だったが勘違いしてたら聞かなかつた事になるし、一応。

「強引すぎます、語弊も多いですし」

「すまない、何かと不器用でな」

「別にいいです……これのお返しに、って言う事にしておきますから」

そつぽを向きながらポケットからある物を出す。それはさつき何気なく渡した金平糖だ。こんな物でも、気を静めてくれるのか……ともあれ普段の行いが良かったという事だな。

「これ、5個入りじゃないですか」

「そうだな。何かのおまけだったのかは分からんがケチくさい」

「ピンクは由紀先輩、緑は胡桃先輩、オレンジは悠里先輩……」

それぞれの色をメンバーに当てはめていく。

「黄色は直樹で……紫が俺か？」

「いいえ、佐倉先生です」

「あ、そう」

自惚れていたのかと恥ずかしくなって視線を外す。そりやそうだ、会って間もない男に仲間意識なんか持たない。

「雅さんは袋です」

「なんか嫌だなそれ」

「いいえ、袋は大事ですよ。これがなければ皆どこかへ転がってしまいますし、汚れちゃいます」

「そうか……そう考えると奥深いな」

「そして開ければ、ぼいです」

「……やっぱ怒ってないか？」

樹氷の様に涼しげな顔のまま再びポケットに金平糖を突っ込んだ直樹は、黙って歩き出す。

……怒ってた。俺もかなりヤバい事言ってたしなあ、怒られても文句はない。今更だが、もつと言い方というものがあつたんじやなかるうか。

でも、今更か。そうだ、今更だな。言つた事はもう仕方ない、殴られようが毒吐かれようがゴミを見る目で見られようが、仕方ない。

「はい、怒ってます。でも雅さんに当たっても仕方ないので」

「……そうか」

「あと年下なんだから『美紀』でいいです、その方がやりやすいでしょう」

「ん？ それはどういう——」

「それじゃあ」

理由を聞く前に、直樹……美紀は車へと戻っていった。目当ての理由が聞き出せず消化不良に陥ってしまうが、少なくとも好かれてはいない。

だからとりあえず、その場は呼称の変更のみ、後は気にしない。と自分に言い聞かせて自分も車へと戻っていった。

6. 遭遇

翌日から俺達は調査を始めた。丈槍を『るー』のポジションに収め、悠里がどの時間に居るのかを探る。……話を聞く限り、丈槍は過去へと自分の意識を固定したとわかる。

学校で送る避難生活を『学園生活部』ただの部活として送り、荒れた教室で1人授業を受けていたと言う。なら悠里の場合はどうなのか、意識がどこにあるかで拒絶する単語や物が変わる、と俺は考えている。

胡桃が運転する車はいつもより比較的安全に道を疾走していた。途中打ち捨てられた車があれば、周囲の安全を確かめてから燃料を抜く。勿論、間違えてハイオクを入れない様に匂いではチェックするから今の所ミスはない。

「先輩、るーちゃんってどんな子なんですか？」

丈槍とアルプス一万尺で遊ぶ悠里に美紀が何気なく聞いた。すると、悠里は笑って「そうねえ」と何かを思い出そうとしている。ここで拒否反応が出れば、意識は現在にある可能性がある。

手遅れになった妹るーの代替として作った丈槍では、どうしても齟齬——矛盾が生まれて

しまうからだ。

「あんまり喋らなかつたけど、笑った時はとても可愛いわ。リーねーリーねーついても後ろを付いてきて、何をするにも一緒なの。ね?」

「うん、リーねー好きだもん!」

たつた今わかつた姉への呼称を早速実践した丈槍は愛くるしい笑みのまま悠里に飛び付く。迷いどころか初めからそうだったような違和感のなさは誰もが感じているだろう。……それが違和感として、危険信号を出している気もする。

「じ、じゃあお父さんはどうでしたか?」

今度は父親について聞き出そうとすると、悠里はきよとんとした顔で対面に座る俺を見る。マズい、何か気付いたか?

「目の前にいるんだから直接聞けばいいじゃない?」

「えっ、ああ……そう、ですよね? あはは」

さも当たり前のように言われ、美紀は手詰まりになる。ここは演技も上手いお父さん役である俺が助け舟を出そう。

「自分の事を教えるなんて恥ずかしいだろ、向こう行ってるから適当に話しておいてくれ」

「あら、いいの? 色々言っちゃうわよ……?」

「……程々にな。精々性格とか口調とか口癖で」

「はい。お父さん照れちゃってるのね。おかしいね、るー？」

「う、うん」

同意を求められるとは思っていなかったのか、**るー**は少々焦ってしまう。話させる為に俺は助手席に移動すると、参照用に置いてあった地図を持った。

「りーさん、どうだった？」

落ち着いた声で現状を確認してくる胡桃だが、内心焦っていると嫌でもわかる。ここはまだ綺麗な道だ。落下物も少なく、路面も安定している。なのに時折車は左右に揺れ、その度に慌てて進路を戻しているのだ。

「うん……まだ何とも言えない。拒否反応がどこで出るかさえわかればある程度算段は立てられるが」

「……特にヤバイ物に触れたら」

「良くて錯乱。記憶を消して、振り出しに戻る。悪くて発狂。クイツクセーブも伏線もまだなのに一発終了。クソゲーかよ」

「ははっ、お前も余裕ないじゃんか」

「お前が言うな。……正直ずつと胃がギリギリしてる」

少しだけ本音を出すと、胡桃は小さく笑った。遙か前方を見る彼女の瞳は、重く纏わ

りつく途方もない不安を孕んでいた。

「次、右側にあるコンビニ二手前にある道に入ってくれ」

「ん？ ああ、あれか。寄り道か？」

「いや、今日の目的地への近道だ」

「は？」

膝に広げてある地図のある地点を指で突く。それは出発時に全員で決めていた今日の目的地。市民図書館。

俺が子供用の絵本もあると言ったら、悠里は即決した。皆もそれに賛同し（まあ実際は仕向けた訳だが）夕暮れまでには到着する……その予定がいくらか早まったようだ。

「おいおい、お前交代してから一度も地図なんて……」

「一度見たら十分だろう。ルートも事前に話したじゃないか」

「……呆れた、もうお前が運転する時隣に座らねえからな」

「やめてくれよ、悲惨な光景見ながら運転しても気が滅入るだろう？ そんな時にふと隣を見る……」

言葉通り、胡桃はちらつと隣——俺を見た。

「癒されるだろ？」

「男見てもなあ……」

「お前そういう……趣味だったのか。まあ極限状態で半年以上女しかない所に居たら……わからんでもないかなあ。俺はならんけど」

「はあ!? そういう意味じゃなくて! 男見てどこに癒される要素があるんだって言うてんだよ!!」

必死に反論する胡桃を見て、俺は久しぶりに人を弄るといふ愉悦に浸っていた。いつもは俺が散々弄られてしよぼくれていたが……やつぱりここに来てよかつたかもしれない。

性別の違いこそあるが、特に胡桃は分け隔てなく話せる。丈槍もそういう意味では同じだが、胡桃の場合は同類という感じがするからだ。

ゆったりと右折して、安全確認の為に徐行する。胡桃は前方を、俺は左右の路地に脅威がないか、畏がないかを見てGOサインを出した。

「確かに俺を見て癒されるかと言えば、ない」

「だよな? 自分であるとか言つてたら道に捨ててくところだぞ、全く……」

「でも俺の場合、凄惨な景色の隣に胡桃や若狭が居れば癒される訳だ。地図を見ながら髪をかきあげる若狭、今どこにいるかド忘れして首を傾げる胡桃——」

「うっわキツシヨ」

「自分でもそう思うね。でもそういう所に救われてるんだよ」

若干恥ずかしいが、本音を告げておく。どことなく真面目さが伝わったのか、心底嫌うような顔をする胡桃もいつの間にか真面目な顔で聞いていた。

「そういう事なら……あたし達も助かつてる」

「んん？」

「今まで戦闘はあたし一人だったし、戦いながら皆を守るのは正直キツかった。でも今は……お前が切り込んで、あたしが守るって役割になつてる」

からかえるかと思えば、全くそんな話題じゃない。真面目そうにしたのもフリだというのに。胡桃の思わぬ部分を釣ってしまったな、これは。

「それは当たり前だ、年長者の俺が率先して切り込むのは——」

それは義務であり、至極当たり前的事。そうでなければ男が廢るし俺が居る意味がない。だから俺は——

「あたしは当たり前にしたくない。このままじゃ先に死ぬのはお前だし、お前が死んだらあたしが始末しなくちゃならないんだからな」

食い気味に言葉を被せてきた胡桃はさつきよりも険しい顔をしていた。何か意味がある、そこまではわかるが面と向かつて話していない以上表面上の感情しかわからない。そもそもこれも、完全ではない。

昔から、俺は何事も「かじる」で留めていた。何でも一つは極めれば良かったのに、

やる事なす事中途半端だ。その弊害がこんな所でも出てしまう。

「お前に手は掛けさせない、そうなたら必ず自分でけじめをつける」

「そうじゃない、死んでほしくないんだ。それにもし死んでも、お前が一人で彷徨って顔も知らないヤツに殺されるなんて嫌だ」

「……そうか」

短い付き合いだが、それなりに信頼してくれているらしい。まだ1週間だつてのに、男相手に死んでほしくないとは勘違いされてもおかしくない。

まあ、それ程貢献できていたつて事なのかな。まだ何もしてないつて思ってたんだけど。

「だからさ、たまには役割を交代するとか。そんな風に負担を別けよう」

「それは断る」

「……一応聞くけど、なんで？」

「……………今のは効いたぞ、危うく惚れたかと思つた」

「は!？」

「いやあ危ない危ない、お前に惚れたらどんな仕打ちが待っているか」

窓の方を向いて表情を隠す。そういう風に負担を軽減だとか、分かち合おうとか、そんな事はしなくていい。お前は丈槍と美紀、悠里と自分だけを守ればいい。俺は所詮後

から入った流れ者、守られる価値も理由もなければ……今後役に立つ見込みもない。

その点、こいつらはどうだろうか。生物的に言えば種の存続に女は必要不可欠。それを無視しても、男が女に守られるなど恥ずかしい。古い思想だと笑われそうでもあるが、俺は死ぬまで護る気である。

「あつ、あたしは惚れた男には尽くすタチだ！」

「いやあどうだか、尻に敷かれるなんて便利な言葉もあるしなあ。都合の悪い事は全部押し付けて——」

「いやいやいやいや！ 女をなんだと思ってるんだお前！」

「あんまり女らしくない胡桃に言われてもなあ」

「はあああああ!?!」

思わず左手で俺の胸倉を掴んでくる胡桃の代わりにハンドルのもう半分を握ると、必然的に距離が近くなってしまう。視界の隅で少しだけ狼狽える胡桃を見ないフリをして、ぐらつと揺れた車を立て直す。

「ちよつと2人とも！ 運転中にふざけないでください！」

背後から美紀のお叱りが飛んでくるとばつと俺を押し退け、運転に集中する。俺は勢いを殺しきれず窓に頭をぶつけるが、幸い割れる事もなく済んだ。

「さつきからなんなんですか？ 悠里先輩も気になりましたよ」

「悪い、少しからかい過ぎた」

顔だけ出してきた美紀に謝るが、不審者を見る眼差しそのまま返事をしない。次に胡桃の顔も見るが、少しだけ頬を染めている事に余計不審がついている。

「セクハラですか？」

「断じて違うからな。運転中殺伐とした風景を見てると気が滅入るから、横に美人がいると癒されるって——」

「セクハラじゃないですか」

「え、これセクハラに入るの？」

「女の敵ですね」

「うせやろ？ それほんまに言うてんの？」

「なんで関西弁……」

その後見事セクハラ容疑を掛けられた俺は美紀と席を代わり、しばらくの間丈槍演じる——と悠里の掛け合いを眺めていた。

図書館に着いたのはそれから約30分後。予想より感染者の数が少なかった為図書館から近い第1駐車場に車を停めて俺と美紀が探索に行く。人選は俺で、日頃から図書館に通う事もあったと言う美紀が適任と見たからだ、英語も読めるし。

そこそこ規模の大きい建物は殆どがガラス張りで中が見通せる。夕暮れ時で奥まで完全に見通せる訳ではないが、規模が規模だけに掃除も手間が掛かりそうだ。

正面の入口から50m程離れた車と車の間に身を潜ませた俺達は、外から見える感染者の数を数える。

「でも助かりますね、見通しもいいですし本棚の配置も見た目と実用性が兼ね備えてあります」

「見通しが良いのは一長一短だな。これから暗くなる、そうなれば俺達がライトを点ければ嫌でも目立つだろうよ」

「う……光に寄ってきますもんね」

「そう、外からの光も丸見えだ」

「……あつー！」

何か閃いたらしい美紀が鞆から数本のケミカルライトを取り出す。それを折ろうとした所で、俺はやめさせた。

「勿体ないだろ、光なんてどこにもある」

ヒントを示す様に、俺は隠れている車のボディを叩く。ライトとハザードは鍵がなくとも点けられる、鍵が付いていれば大助かりだが流石にそこまで美味しい話もない。

「なるほど、思い付きませんでした」

「ついでにクラクションも鳴らしてやるか？ 処理は大変だけどな」

「別に全部相手にする必要はないんですよ？」

「……それもそうか。一度車に戻ろう、この駐車場じゃ面倒な事になる」

美紀を連れて再び車に戻り事情を説明する。危険だと反対はされたが、美紀も一緒に説得してくれたおかげでどうにか実行の運びとなった。その為に車を安全な従業員用の駐車場に移動し、電気を消させて無音で待機するよう命じる。

悠里には防犯の為に嘘でもない理由を吹き込んで準備は完了だ。いざとなれば胡桃が安全な場所でクラクションを鳴らしてから車を移動させ第1駐車場で落ち合う。

1回なら通常、2回なら人為的なダメージを負ったかそれに準ずるもの、短い間隔で2回と長めの1回は可及的速やかに帰還せよ……即ち悠里や誰かが負傷した時だ。

細かい定義と取り決めを行った後、俺達は改めて出発した。

「ここにいろ、服を汚したくないならいいが出来るなら這いつくばれ」

「別に濡れてない方がいいですけど……なんで？」

「なに？ 姿勢を低く保つのは隠密行動をするなら当たり前じゃないのか？ 見られちゃいけないのは何も感染者だけじゃないんだからな」

「……え、あ、はい」

「え、嘘だろ？ よく死ななかつたな。今度探索する時にでも教えてやる」

この時直樹美紀は思った。この人はガチなんだなと。

正面の入口から100m程離れた場所にある車に近付くと、盗難防止装置があるか確認する為に一週回ってみる。案の定、アラームが搭載されている旨のシールを見つけると、いつか誰かが使うかもしれないのでリアバンパーの部分を全力で蹴る。

その瞬間異常を感じた車は喧しいアラームを鳴らしながら、ライトを点滅させ始めた。戻るといでもう2輦程起動させて美紀の隠れる茂みに戻り匍匐の体勢になる。

美紀も気が気でないらしく、ほんの少しだけ息が上がっていた。落ち着いて見えても、案外年相応な心を持っているようだ。

「よ、よくあんなの出来ませぬ……」

「慣れてるからな」

「まさか、こうなる前も色々悪さを」

「してないしてない、ほんの少し人よりか肝が据わって知識があつて、暴力に慣れてただけだ」

「色々信用なりませんよ……」

このやり取りも信頼性があるからこそだと、俺は思う。感染者は建物の2階から柵を破って床へと落ちる。数体は動かなくなり、しかし殆どは這つても音源の方向へと向かつていく。

「いいか美紀、これはステルスミッションだ」

「なんですかいきなり……」

煙たそうに冷たい目で見てくるが、互いに無表情のまま顔を見合う。その距離は近いが、場合が場合で美紀も気にしてはいないらしい。

「まあ聞け、冗談抜きで見つかったら終わりだと思っていい。1体が気付けば、俺達は対処に追われる。その1体を無音で処理できるかもわからないし、処理の間見られるかもしれない」

「……はい」

「処理は俺がする。お前は本棚の影や遅れて出てくる奴にだけ注意すればいい」

「もし、雅さんが危なくなったら？」

予想もしていなかった質問に、俺は何と答えようか迷った。いつも失敗したらどうしようだとか、そういう事は考えない様になっている。必要なのはあらゆる失敗を回避する手段を考える事で、自分の結末を予想する事じゃないからだ。

「……さあ、逃げればいいんじゃないか。車に戻って、あいつは駄目だったと報告してくれ」

「助けてくれって言わないんですね」

「自分から危ない場所に突っ込んでるんだから助けてくれなんて言えないだろ。お前は

別だ、危なくなったらすぐに呼べ。状況に寄っちゃ悪化するが」

アラームも鳴り止み、ある程度感染者共が車の方へ移動したのを確認すると、俺はゆっくりと中腰の体勢に移行する。美紀もそれを真似て、付かず離れずの距離を維持して付いてきた。

ライトは点けず、僅かな西日だけを頼りに建物の中に入り、シオルダーバッグに括り付けていたレンチを引き抜く。最近はもっぱらこればかり使っている気がする。でも室内だと使いやすいんだよね……長くて重いとどこかへ当たった時に音が出るし。

とは言ってももう少し威力が欲しいから先端に何か重い物でも付けなきゃ基本的に二撃要る。……あのゲームみたいにネイルハンマーでも使うか？ リーチがお粗末なのが頂けないが。

無事建物に入ると、横たわったままの感染者にまだ息がある事に気付く。落ちた拍子に脊椎でもやったか、どちらにしろ宿主が死ななきゃウイルスは死なない。

美紀に待てと合図をして周辺を警戒しながら傍まで近寄ると、その首を踏み抜き防止の鉄板が入った安全靴で踏み折る。気味の悪い音がロビーに響くが、もう殆ど外へ行ったらしく反応はなかった。

「……………めんなさい」

息絶えた死体に一言掛けて通過する美紀を見て、自分が何もしない事がおかしいのか

と錯覚する。そんな事はない、既に人ではなくなつた存在に敬意を払う必要など皆無だ。それに、いつ襲われるのかもわからない今丁寧には拝む余裕もない。

「子供用の絵本を5冊くらい、あと心理学と精神医学……漢字辞典もいるか」

「なんで漢字辞典なんか必要なんですか？」

「簡単な情報伝達に使える。本の文字に穴をあけるとして、穴のある文字を繋げていくと簡単な暗号になるんだ。使わなきゃ着火剤にもなるしな」

「ほんとあなたつて、一体どういう環境に住んでたんですか……」

「先人の知恵つてヤツだな」

落ちている本や筆箱なんかを蹴とばさない様にしながら、奥に行くにつれて暗くなる視界に目を細めて対応する。それすらも効かなくなればライトの出番だ、感染者がここに戻ってくる前に退散しなければならぬ。

「そろそろライト点けた方がいいんじゃない？」

「……そうか？ 確かにタイトルが読めなきゃ探しようがないか。極力外には向けず、必要最低限でな」

「わかりました」

よく考えれば、ここまでガチる人間に合わせてくれる人間もそうそういない。手を抜けば死ぬのは当たり前だが、どんな状況でもガチガチに縛り付けても人は付いてこない

のが常だ。となると、もう少し緩い方が良いか？

いや、それでもし美紀が死ぬば後悔するのは俺だ。悠里達も悲しむ。恨まれてでも厳しくして、それでこいつらが生き残れるなら。まあ、とは言つても探索中につまらないだ暇だと騒ぎ立てる性格でもないしな、特に美紀は。

「あ、心理学は上らしいですよ先輩」

「ん？ 上だったか……最初からライトつけてりや見逃さずに済んだのかな。——先輩？」

「あつ、間違えました」

「まあ好きに呼べばいい。丈槍みたいなのはごめんだが」

「流石にそれは……由紀先輩の呼び方は、嫌ですか？」

「別に？ あれは丈槍なりの親愛の証みたいなものだろう。あいつは人の裏まで見通すのが怖いけどな」

話しながらではあるが、俺達は十分に警戒しながら進む。流石に入口近くまで来た時にはどちらからともなく黙つたが、階段を上り始めたらまた世間話を始める。

「由紀先輩が、人を見通す？」

「ああ、何処まで見えてるかはわからんが悠里がああなった時の丈槍の目はぞつとした。人を見抜く奴の目は総じて底が知れない……今は付かず離れずの状態だから厳しいが、

チャンスがあれば一度聞きたいな」

「……悠里？ 前まで苗字呼びでしたよね？」

「あつ」

つい気が緩んでしまった。マズい、こんなんじや俺が詰め寄ったからおかしくなったんじやないかとかあらぬ誤解を受けそうだ。特に今日はセクハラ容疑も……あれは俺の知識不足が生んだ失態だが、あの夜は特におかしなことはしていない。

していない……と思う。

「じ、実はあの日の夜だな？ 俺がうなされているのを心配してわか……悠里が顔を覗き込んでたんだ」

「はい。……で？」

「それでとりあえず外に誘われて……警戒してた俺に真相を教えて貰って……急に照れ始めて？ 小声で名前でもいいって言われて」

まるで凄腕の尋問官に尋問されているように、たどたどしく状況を述べていく。出来る限りオブラートに包むべき所は包み、誤解をさせないように細心の注意を払い、一瞬で首に刃物を突き付けられる用意をしながら。

「……なんで先輩は照れたんですか？」

「俺が身の危険を感じたって言ったからかなあ……？ 殺される的な意味でね？ それ

を悠里は勘違いして照れたんですけど……」

「へー」

「そうなんすよ……ハイ」

しばらくの沈黙。じつと俺の顔を見定める美紀はいかにも嘘かどうかを探っている。そんな瞳を恐怖心いっぱいそのまま見続ける——その瞬間、瞳が曇った。

それは恐れ。驚きと迷いを微かに混じらせ、直後に必死に手を伸ばそうとする。その手が俺の服を掴む前に、全てを察していた俺は身体を左方向へと旋回させていた。

「みや——」

ぐぎやつ。本棚の影から出てきた感染者は顎にレンチを食らい一瞬ふらつく。回転の勢いを殺しきれなかった俺は、もう一回転して今度は左脚での後ろ蹴りに繋がった。

腹部に受け転倒する感染者に追い打ちを掛ける為、起き上がる前に胸へ右足を落とす。何本ものあばらを砕き、二撃目はさっきの死に損ない仕留めた時と同じく首をへし折った。

「……び、さん」

「なんだ」

「いえ……無事で、良かったです」

「ああ、お前のおかげだ」

直前とは全く違う様子の俺に、美紀は少し怯える動作をする。無理もない、戦闘になると性格が変わるとか創作じゃよくある設定だが、実際目の当たりにすると狂気を感じるものだ。

大口を開けて完全に絶命した感染者の下顎を蹴り上げて閉じさせると、更に本棚の方へ蹴って向きを変える。帰り際歯が掠って感染しましたとか、洒落にならんからな。

「お前がいなければ俺は間違いないで死んでたな」

「いえ……私が、喋ってたから誘き寄せてしまったんです」

「ここで問い詰めてくれなきゃ俺はこいつの前に突っ込んでたさ、それかお前がやられてたか。どちらにしろ、終わりよければってヤツだよ」

「……はい、ありがとうございます」

責任を感じる必要はないと言ったが、美紀は明らかに落ち込んでいた。自分のお喋りの所為で仲間を危険な目に遭わせたとも思っているのか？ そんなの、本当に危ない場所なら最初から喋るなど言っている。どうであれ、これ以上励まそうとしても無駄だ。

「心理学はここだな。とりあえず専門的な事はいい、浅くても症状が多く書かれている本を選んでくれ。俺は見回りに行ってくる、何かあったら呼んでくれ」

「はい」

「一応これは置いていく、もしもの時は使えよ」

念の為まだ綺麗なレンチを差し出すと、美紀は恐る恐るそれを手に取った。使わない事を祈るが、一応あればその分リーチも伸びる。

「でも、ちゃんと倒せるかわからないですよ……う？」

「別に処理しなくてもいい、それで突っついて距離を取るだけでも時間稼ぎにはなる。むしろやれる確信がないならそうしてくれ」

「わかり……ました」

「うん、警戒は怠るなよ」

美紀を置いて、空いた左手にナイフを持ち口にライトを咥えて探索を開始する。

とりあえず1周してみたが、これ以上の感染者はいないらしい。後見ていないのは奥にある書庫だが……どうも嫌な予感が。

このご時世床や地面に血が落ちているのは当たり前だが、どうにもこの部屋からは血痕が一直線に続いている。その先は1階と外が見渡せてソファもあるスペースだが……さては噛まれたな？

ご丁寧にドアノブにまで血が付いているし、扉のあちこちも血と所々に凹み。というか全体的に古い。3ヶ月は確実に経ってるな。試しに開いてみようとして——止め

ドアを開けた瞬間斧がスイングしてきたらどうするんだ、全く迂闊だな。ワイヤー起爆式の爆弾がある事も考えて、ここはブリーチングを参考に扉の横がいい。その扉の横を狙った罠があったら死ぬだろうがな。部屋にガスが充満してて扉が開くと火花が散る細工がされていたりだとか。

……そういうのなら俺でも作れるんだが、大丈夫だろうか？

——ええい、ままよ！

ノブをゆつくり捻り、まず第一段階が安全だと判断する。……これ引き戸か？ 引き戸だと罠仕掛けやすいんだよなあ。待てよ、もう一度考えよう。扉を開けるには必ずノブに手を掛ける必要がある……あ、高圧電流の心配を忘れていた。電流を流すなんて車からバッテリーを引っこ抜いて電極刺すだけで完成じゃないか。迂闊だ、迂闊すぎる。

とりあえず電流とノブを捻る時の罠はなかった。次に考えられるのはガスとワイヤートラップだが、ガスの場合は開けた瞬間臭いで分かる。

ゆつくりと捻ったまま無音で隙間を作る。しかし中からはガスらしき臭いが無い代わりに、濃密な死臭が漂って来る。

「なにしてるんですか？」

棚の影から美紀が現れる。慌てて静かにしろと合図を送りたいが、左手は既にノブを掴んでいて首を振る事しかできなかった。

「? ……あ、足でもつりましたか」

違う違う違う。確かに中腰で辛い体勢だけど足はつってない。仕方なく啞えていたライトを床に落とし、状況を伝えようとする。

「しーっ! 今中を確認するから待つて——」

——いろ。そう言い切る前に、近寄つてきた美紀は俺の手ごとノブを掴み、扉を引いてしまう。

「あつ馬鹿お前毘が」

「そんな物ある訳——」

——ないじゃないですか。と言い切る前に、俺はしっかりとその目で見た。扉の上から小さな角材がぼろつと落ちてきた事を。ぞつとした俺は全力で手を伸ばし、美紀の胸倉を掴んで引き寄せる。

勢いあまつて自分ごと後ろに倒れるが、その後もしつかり見ていた。丁度首の辺り……美紀で言えば目がある位置にぎろりと輝く切っ先。……やはり、ここに立て籠もつていたのは相当性格の良い輩だったらしい。

「きゃっ!」

なんとも女の子らしい声と感触、匂いに包まれながらも、無事美紀を受け止める事ができた。一安心して息を吐くと、がばつと起き上がった美紀は真っ赤になりながら俺の

上から退こうとする。その退く先も真後ろなもんだから改めて肩を掴んで引き寄せ、自分の右側……ロビーの方へと倒した。

「なななな何をしますかーっ!!」

「しっ! あれを見てみる」

半狂乱になる美紀の顔を掴んで、未だにぶらぶらと振り子運動を続けるナイフを見せる。その瞬間、真つ赤だった顔は真つ青に一瞬で様変わりした。

「ひえ……わ、畏?」

「だから言っただろ畏があるって。扉開ける時は如何なる時も畏と伏兵に気を付けろ」

「き、肝に銘じておきます……そ、それより!」

「だから静かにしろって……!」

自分でもどうかと思う程本気の顔をしてしまい、美紀は慌てて口を押さえる。だがしかし、俺が取った行動はインパクトがあり過ぎたのか押さえたままもごもごと話すのを止めない。

「なにぃ? 静かに喋れよ、なんだって?」

「むっ胸、胸触りましたよね……!?!」

「胸倉であつて胸ではない。じゃあ言わせて貰うが、あの瞬間掴む場所選ぶ程余裕あつたと思うか……!?!」

このままだとセクハラの現行犯になってしまふのもあり、ほぼ逆ギレの状態で反論してしまう。

「そ、それは確かに……そうですけど」

「ぶつちや俺は怒ってるからな、知識がないとはいえ迂闊すぎる。死んだらどうするんだ？ 現に今死にかけたからな、普通死んでるからな？ 今どれだけ幸運だったかわかるか？」

「は、はい……すいません」

「本当にやめてくれよ、ガス式だったら俺達吹き飛んでたからな？ 俺だけならまだいい、お前が死ぬと誰が悲しむか——」

「わ、わかりましたって本当にすいません……反省してます、本当に」

流石に言い過ぎてもいけないので、美紀が完全に意気消沈する前に止めておく。今はまだ本当に不注意な事をしたと反省して、俺が怒った事に成すがまま……という感じだ。ちよつとだけ言い過ぎたか？ いや死にかけたからこれくらいがいいか、軽いと意味ないしな……死にかけたのは美紀本人だし、途中からもう本気だったし。

「……いや、俺も少し言い過ぎた。すまない」

「……本当に、胸触つてませんか？ 感触覚えてませんか？」

……割としつこいな、貞操観念が強いんだろうか。いやでも会って間もない男に急に

触られたらびっくりするか。

「触ったの鎖骨辺りだしな……」

「た、確かに鎖骨辺りがちよつと痛いですけど……」

「わ、悪いな」

「あとナイフ持ったままで怖かったです」

「さ、逆手持ちだから多少はね？　そういう時の、ほら、持ち方だから。ほら刃も自分側だし」

なんとか言い訳を付けようと持ち方とかナイフにどれだけ慣れてるか見せる為に回してみたりだとか、必死に弁解する。最初は半信半疑で聞いていた美紀だが、次第におかしかったのか微笑みが混ざってきている。

「わかりました、助けて頂いてありがとうございます。……正直目とか掴み方とかは怖かったですけど、助けて貰った事に変わりはありませんし」

「そ、そうか……分かって貰えて良かった——あつ」

「え？」

「クソツ、イチャついてる場合じゃねえ」

「い、イチャ!?!」

「黙ってる」

辛うじて残る短い右腕を美紀の首に当てて下がらせる。それも色々誤解を招きそうなものだが、今はそんな事を考えている暇はない。空中で停止するナイフを押し退けて現れた人物がいたからだ。

その人影に気付き、美紀のライトが“それ”を照らす――

「お前は……！」

それは久し振りの……人間との再会だった。

7. 狂創

ナイフを器用に手で退かして出てきたその男は、この世界でのデフォルトになりつつある無精髭と疲れた顔、痩せこけた頬を張り付けていた。

『そこまで裕福じゃない村人』、というタイトルで保存しておけば間違いないそんな用途で使われそうな顔だ。

「お前は……！」

「人ん家の前でうるさいねキミ達、ここはラブホじゃないんだよ？ ……ああ？」

顔見知り、とは気軽に言えない仲だ。いや、仲というより……こいつは禁忌を犯した。「おお、久し振りじゃないか少年。元気だったかい……いや失礼、とても元気そうには見えなないね」

右腕を美紀の方へと伸ばしている所為で本来右腕の先端まで伸びているであろう袖が途中で垂れている。それを見て、男はニヤリと笑った。

「……行くぞ美紀」

長居は無用だ。ここがこいつの縄張りだとわかった以上選択肢は少なくなる。俺一人ならまだしも、美紀や車に悠里達を残しては満足に動けない。ここは一旦離脱

だ。

「おや？ キミ怪我してるじゃないか」

「……何？」

「えっ？」

男は美紀の大腿部を指さすと、確かにそこには傷があった。引き倒した時にガラス片が当たったのだらう。普段なら気にする事もない軽微な傷だが、微かに血が滲んでいるのがわかる。ここに感染者の血が入り込めば……ほぼ必ずと言っていい、感染する。

「戻ろぞ美紀、手当は後だ」

「いいのかい？ 女の子に怪我をさせたまま連れ歩いて？ おいで、私が手当てしてあげよう」

「構うな美紀、他人に頼つてまで治す傷じゃない」

「は、はい」

まだ俺の指示を聞いてくれるつもりでいる美紀はすつと寄り添ってくると、男から離れて外へ出ようとする。その瞬間、左肩に重い手が置かれた。

「おや、人の厚意は有り難く受け取らないと。それにキミ、私に借りがあるだろう？」

「そんな覚えはな——」

誘いも断つて早々に立ち去ろうとした時、男は美紀の背中にナイフを突きつけてい

た。しかし当の美紀は気付かず、俺だけに向けられた脅迫であると察する。

ここでこの誘いも断り出て行こうとすれば……今まで何を刺したのかもわからないナイフが美紀を傷つける。当たり所が悪ければ血管どころか内蔵までやられて、治療不可能の状態になってしまうだろう。

「……お言葉に甘えようか、美紀」

苦渋の決断だった。苦虫を噛み潰した様な感覚とはこの事か。出来る限り顔には出さず、ゆつくりと振り返って笑顔になった男の後を付いていく。

死臭の原因は中で枯れ果てていた女性の死体だった。もう何ヶ月もそこにあるようで、今時珍しく外傷も一切ない。服装から見ても若い女性だと判別できるが、腐敗の状況からそれがどういう顔だったか、どのような雰囲気だったのかはわからなかった。

「ああ、これは私と一緒に生き残っていた女性でね。半年ほど前に死んでしまったが……いい子だったよ」

色々な意味が含まれた言葉に吐き気を催す。美紀も何かを察したのか、死体をあまり見ずに俺から離れない。

「そこに座ってくれるかな」

要求通り美紀を椅子に座らせると、男は奥から救急箱を持ってきて机の上にあるライトを点ける。そこで初めて、男の詳細な風貌が見えてきた。

服装はあの時とほぼ変わらない。白のカッターシャツに黒いジーンズ、腕時計と趣味の悪いブレスレットを着けて、美紀が座る椅子にはこいつの上着だろう……紺のジャケットが掛けられている。

「手当は俺がやる。どこの馬の骨かもわからん奴にこいつを触らせる訳にはいかん」

「腕一本で？ 不便だし時間がかかると思うけどなあ」

「こいつのも合わせたら3本、十分だ」

救急箱を受け取ると、俺は美紀にライトで中を照らさせて中の物を確認する。ギリギリ使用期限の切れていない消毒液に、よれた包帯、滅菌パック入りのガーゼに使われた形跡の無いテープ。そしていくつもの絆創膏。

ナイフを右腰の鞆に納め、美紀の手当てを始めた。

「……はあ、いらん。俺達が持つてる分で事足りる」

そう言って美紀のバッグから小さな缶ケースを取り出すと、中から消毒液と絆創膏、俺のバッグからはラップを取り出す。

「悪いが、少し触れるぞ」

美紀が頷いたのを確認すると、微かに血の滲む傷口に容赦なく消毒液を掛けていく。沁みるのか微かに震えた美紀だが、気にせず十分な量を掛けると乾く前にサイズの大きな絆創膏を包装から口も使って取り出し、位置を示して美紀のライトと交換する。

美紀が綺麗に絆創膏を貼り終えてから足を浮かせてラップを巻く。蒸れるがやつらの血が入るよりかはマシだ。言わなくてもわかるのか、美紀もそれを手伝っている。

「……終わった、じゃあ帰ろうか」

道具をバッグに押し込んで美紀の手を取り立たせると、出口へと向かおうとする。

「おい、待てよ」

そこに案の定、不機嫌な声が投げかけられた。

「なんだ？」

「俺は治療の為安全な場所を提供してやった、何かくれてもいいんじゃないか？」

「安全？ 安全なんて俺でも確保できる。せめて清潔な場所を用意してくれ」

「ああ、確かに“これ”は不適切だった。でもこれはこれで思い出の品でね、中々手放せないんだよ」

男は死体の足を蹴りながら、ニヤリと嗤う。

「生きてた頃は上物だった。何でも言う事を聞いて何でも出来た」

「そうか、良かったな。もうそれじゃ犬の餌にもならんが」

「本当だよ、案外重くて後回しにしてたらこれさ」

不快な笑みを浮かべながら、男はナイフをチラつかせた。

「……ヤツてんだろ？ いくらかやるから回してくれよ」

予想通りの、下衆な言葉。俺は小さい溜息を吐くと、美紀を庇う様に立ちはだかる。

「非売品だ。それと俺もそういう関係ではなくてね……諦めてくれ」

「ああ？ 食えてねえのか、可哀相に。ちよつと脅せば簡単だぜ？ 今なら教えてやる

よ……」

「いらん。純愛派なんだ……車に戻れ、俺も後で合流する」

美紀にレンチを持たせたまま逃がす。終始静かな美紀だったが、逃げろと言った時もあつさり逃げてくれたな。いつもの調子ならいくらかイヤミと反論が飛んでくると思ってたが。

「あーあ、逃がしやがって」

「その死体よりも酷い見た目してりやそりや逃げるだろうよ」

「ああ？」

「今度は俺が出て行く番だな。それじゃ精々ごゆるりと……」
「それ」と楽しくやってりやいい、カツサカサでちつとも気持ちよくなさそうだけどな」

1歩2歩と後退すると、奴も同じく距離を詰めてくる。もう簡単には逃げられない、前回の因縁もあるしそうだとは思ってたが……厄介な事になった。

奴は台所で使うような果物ナイフを持っている。それ以外の武装は目立った物は無い。奴が部屋の隅にあるバッグに手を掛けようとした時、一瞬視線から外れたのを見越

して部屋を飛び出した。

さっき俺が美紀と一悶着していた場所を突っ切り、1階が見える吹き抜けへと到達する。階段に行くには一度この階の端まで行かなければならない。

「チツ……高い所はごめんだったのに」

一言嘆いて、俺は柵を飛び越えた。3m弱ある高さを落下し、左脚から順に着地して勢いを殺す。それでも片腕がない今威力は殺しきれず、右脚にびきつと嫌な感触が走った。

一瞬怯んでしまうが、折角視界を切ったのにまた捕捉されると面倒だ。多少足音が出ても早さを取った方が良い。

ガラス片を踏み割りながら、俺は従業員用駐車場のある建物の裏側へと走る。一回だけ振り向いてみると、ヤツは俺が飛び降りた地点から悔しそうな顔で俺が走り去るのを見ていた。

「あつ雅!」

「うわっ!?! 来い!」

前方から胡桃の声がしたと思えば、両手にそれぞれスコップと斧を持った胡桃とかち合う。返事をする前に投げ渡された斧を掴むと、そのまま引き連れて車へと走った。流石初めて会った時に俺を追い抜かした足の持ち主、そこそこのスピードで走っているの

に息も切らさず追従してくる。

「美紀から大体は聞いた！　大丈夫だったか!?」

「大声を出すな、敵は少ない方が良い。もし戦闘になっても俺とお前ならなんとか——
——ぐっ!!」

「雅!?!」

この角を抜ければすぐに車がある場所だった。なのに、何故か視界がぐらりと崩れる。何が起こった？　それすらも考えられない。まるで首から下が……全身の感覚がなくなつたみたい吹き飛んでいる。重力に従つて近くの車のボンネットに叩きつけられると、ずりりとアスファルトに落ちた。

目を見開いたまま数秒が経ち、途端にはつきりと思考が回復した。クソツ、顎に貰ったか。この感覚、脳震盪だな？　昔散々経験した感覚は懐かしさすらも覚え、すぐに自分が攻撃を受けた位置を判別して起き上がる。

「ははっ！　いい吹っ飛び方するじゃん」

そこには俺とは違つて取り押さえられている胡桃とさつきの男がいた。スコップを握つたままの胡桃だが、首にはナイフが突きつけられている。俺が軽く飛んでいる間問答してたか。

「お前大丈夫かよ!?!　今まるで死んだみたい……」

「そうだ、人は死ぬとさつきみたいに倒れる。今のは軽い脳震盪だから気にするな」

「脳震盪……？ え、でも普通脳震盪起こしたらもつと……」

「慣れた、訓練の賜物だな」

胡桃を安心させる為に強がって見せるが、実際視界はぐらぐらと揺れている。気持ち悪いし立つにもやつとだしでこの後戦闘になるとしても戦力外は確実だ。

「へえ」

斧を地面に立て、立つ補助をする。それを見て胡桃は俺が本調子ではないと一瞬で見抜いていた。

「何が望みだ、変態野郎」

「言葉に気を付けなきや、この子の血でお前が汚れちまうぞ」

「そいつが死ぬのは避けたいが……その程度汚れるとは思わんな」

「お前も中々変態じゃねえか」

「死体で楽しむ奴よりマシだろ。返してもらおうか……そいつは俺のだ」

斧を叩きつけ威圧する。胡桃は少し狼狽えるが、ここはこうでも言わないといけないんだよ。初物は貴重だからな、手を出したって事にしなきやどの男も興味と欲がうなぎ登りだ。

「純愛派って言ってなかったか？」

「言つてたな。だから俺のだつて言つただろ」

「はあん、そういう事か。……まあ後でいいや、キミさつきその車から出てきたよね？」

胡桃の首にナイフを突きつけたまま男は空いた手でキャンピングカーを指さす。だが胡桃は何も言わず、正反対の方向へと顔を背けた。

戦闘要員が2人とも無力化された今、対抗手段はない。銃でもありや話は別だが……そんな物使われた事はあつても使つた事なんてない。

「もし素直に案内してくれたらちよつと物を貰つたら許してあげるよ」

「……本当か？」

「胡桃、止せ。確証はない」

「でも素直にしてくれなかつたら……あの短髪の可愛い子を好きにさせて貰う」

「……くつ。あの、車だ」

「ありがとう、くるみちゃん」

気味悪く胡桃の耳元で囁くと、男は胡桃を移動させながら俺達の車へと近付いていく。クソ……迂闊だった。罾も何もかも、美紀の手当をした時から俺は間違つていた。

だがもし手当てしないまま奴らの血が入ったら、返り血を浴びたら即感染する。それを防ぐ為に、俺はあの場で手当てをした。

何もかも迂闊だ、この図書館があると云つたのも俺だ、此処に来るよう仕向けたのも

俺だ。それが全部裏目に出て、今こうして胡桃に不快な思いをさせている。

「あ、キミは後からついてきてね。背中を襲おうとすればこの子の首がぱっくり開いちやうから」

先に移動させている胡桃の背や腕をそれとなく触るヤツを見て、殺意がもくもくと沸いて来る。憎い、今すぐにでもその腕をへし折って、生きたまま案山子の様に棒に括り付けてやりたい。その汚い手で、息で、胡桃のすぐ傍にいる事が許せない。

なのに上手く立てない……走れもしなければ上がってきた胃液が歩行を邪魔する。昨日の夜食べた乾パンがほぼ形を残したまま出てきて、空腹感を覚えた。

奴が車のドアを開けて中に入っていくのを確認した後、ようやく全てを吐き出し身軽になった体で後を追った。その歩幅は情けないくらいに小さく、拙なかつた。

あいつは、なんとという名前だったか。掘り起こそうとする記憶の中、灰色の霧が邪魔をしていた。微かに見える断片はどれも懐かしい仲間達との記憶。あれは……いつの事なんだろうか。

「私の名前は遠藤光弘。5ヶ月前あの男に避難所を追放された身だけど、なんとか生き残ってる。キミは？」

車に戻ると、彼女達が持っていた手錠でそれぞれを拘束しながら自己紹介をしている男がいた。悠里は急な出来事に怯えっぱなしだがしつかりと妹を護っている。

「おい話がちが——」

抵抗する胡桃の頬を叩き、男は無理矢理従わせる。今までもそうやってきたのだろう、さぞ当たり前前のように手錠を全員の手首に嵌めると、やっと辿り着いた俺に薄汚い顔で微笑んだ。

「いらつしやい、まあ座つてよ」

まるで自分の所有物のように彼女達を1カ所に集め、冷蔵庫からペットボトルを取り出す。

「……ん？ これ誰が飲んだの？」

りーさんとマジックで書かれたボトルを皆に見せると、悠里が小さく声を上げる。

「ふーん……じゃあ貰うね」

光弘、そう名乗った男は遠慮なく悠里の水に口を付けた。焼餅なんかではない本物の憎悪が頭を支配する。今すぐにもあいつの頭をかち割って、脳髓をやつらの餌にしてやりたい。

「あー、でもキミは片手か。じゃあこゝでいいや」

俺の左手に手錠を掛けた光弘は近くにあった棚の取っ手にもう片方を掛けると、ソ

フアにとっかかりと座る。

「じゃあ私の持論を一つ。手錠を嵌められ、自由の利かなくなつた人間は奴隷同然だと考える。……どう？　そうは思わない？」

「いきなり何の話だ」

あつさりと思切られた胡桃は犬歯を見せながら怒りに震えている。他のメンバーも何の事やらと怯えながら疑問符を浮かべるが、俺は内心で奴の考えている事がわかつていた。

「奴隷は昔物として扱われてたんだよ。市場では奴隷商が建設用の奴隷を売つたり、家事や身の回りの世話をする女の奴隷を売つたり」

「で、今こうして自由を奪われている俺達は『モノ』だと」

「その通り！　理解が早いね、思いの外頭が良いみたいだ」

「お前のよりはマシな細胞と遺伝子を持つてるからな」

悪態をつくくと、光弘はむつとした顔で俺に近寄つて来る。何をされるかなんてわかる、むしろ狙つてたくらいだ。さつきからもぞもぞと順調そうに手錠をずらす胡桃に視線が行かない様に、わざとヘイトを稼ぐ。

「奴隷が口答えすんじゃないよ……」

髪を鷲掴みにされるが、俺は精一杯の嘲笑を浮かべてやる。光弘の視線は俺に釘付け

で、水面下で行われている脱出作戦には気付いていない。

代わりに戸棚に全力で頭を打ち付けられる羽目になったが、なんか段々と快感になってきたな……次喰らったら死にそうだ。

余計力が入らなくなってきた体で、この先どうにかできるのか不安にもなってきたが……胡桃さえ自由になれば。

「——くん、——みゃ——、みゃーくん、大丈夫……う？」

丈槍の声に応えて手を振るが、一同は不安そうに俺を見ていた。……もしかして俺は何度も呼びかけられてたか？ だとしたらかなり不安にさせたな。

「んー……どれも上物だなあ、でも一人にしなきゃ連れて歩くにも面倒だし、色々と用途のある奴の方が——」

「——つはあー！」

胡桃の掛け声に、丈槍を庇っていた悠里がびくつと震えた。近くにあつた缶詰を投げつけた胡桃はスコップを拾い、その剣先を光弘の腹へと突っ込ませる。

多少車が汚れるが、よくやった。勝利を確信した一同だったが、咄嗟の動きで光弘はナイフを胡桃の腕目掛けて振り下ろす。それを躲そうとした胡桃の腕は、光弘の腹部を的確に狙っていた剣先を狂わせた。

「危ないだろ？」

ナイフの刃は微かに胡桃の腕を切り裂き、赤い血を滴らせている。そこまで深い傷ではない、問題は――

「胡桃ちゃん！」

「つよし！ 決めた！ キミだ！」

胡桃を気遣う声を上げた悠里に光弘の指が向けられた。それは絶望の合図となり、丈槍含め全員の顔を蒼白とさせる。よりによって、悠里だと？ 今ともに抵抗できないどころか、少しでも間違えば錯乱してしまう悠里が連れ去られては後日奪還できるとも限らない。

特にあいつは、死体ともよろしくやる性癖の持ち主だ。

「い、いや……！」

「お、いいのかい？ キミが来なきやこの男が……その後皆が私と楽しむ事になるけど」この状況で生存本能を遺憾なく発揮しているらしい光弘は悠里を立たせると手錠を外し自由にさせる。そして一番容量の大きなバッグに入るだけの水と食料を詰めて、車を出て行った。

胡桃は冷や汗をかいたまま、滴る血を眺めている。美紀と丈槍はどうしたらいいか分からずにあたふたとしているが、やがて俺へと意向は移ったようだ。

「み、雅さん！ 悠里先輩が！」

「みゃーくん！」

「わかつてる……!!」

手錠を外そうとするが、痛いほど食い込む輪は簡単には外れない。玩具でもその役割はしっかりと果たしている。

「クソツ、仕方ない」

手錠ごと右肩で担ぐ様に戸棚に背を預け、一息で体を前方へと倒す。ばきつと破壊音と共に取っ手が外れるのを見て、俺は斧も持たず後を追った。

女一人を連れて感染者の中を突っ切るのは難しい。必ずどこか一方向でも警戒の要らない安全な道を行くのがセオリーだ。だとすれば……!!

ふらつく足取りのまま、建物の裏にある公園の方へ走る。特に確信があった訳ではない、激しい頭痛と朦朧とする意識じやまともな考えは一切浮かんでこない。でもなんとなく感染者のいなさそうな方向は分かる。さっきアラームを鳴らした正面玄関とは別の——この方向だ。

散在する放置車両を縫いながら、俺は幸運にも2人を見つけられた。

「悠里を……離せつ!!」

静かに忍び寄って不意打ちをする。普通ならそんな動きをするのに、馬鹿正直に突っ込んでいく。光弘はするりと俺の突撃を躲すと、悠里を押しやってバッグに手を突っ込

み、何かを取り出して俺の首に押し付けてきた。

刃物ではない。だがぴりりと冷えた物が当たる。

「しつこいよ、お前」

その瞬間、体中を針で刺されたような痛みに襲われた。声も出ず、ただひたすら自由の利かなくなつた体を地面に打ち付けて悶えるだけだ。

「お父さ……っ!!」

そんな俺の姿を見て、悠里は目を見開き頭を抱えた。声にならない声を上げ、打ち伏せた体に電極を当て続ける光弘も何事かと見やる。

悶え苦しむしかない俺は連続放電時間が限界に達し、途切れた電撃から逃れる為に地面を転がった。だが今までのダメージが重なつたのか、俺は半回転……ただ寝返りを打って空を睨む事しかできない。

「ん!? こんな時にー!」

スタンガンの使い方も知らない光弘は勢いよく投げ捨てると、よろよろと立ち上がる悠里に向かった。

「はー!」

先程まで抗いも出来なかつた女の子の肩に伸ばした光弘の手は、いとも容易く弾かれる。

「触らないでー！」

その気迫に押され、思わず後ずさる。声だけを聴いていた俺も思わず震えあがる様な……いや全身痙攣してるから常時震えてるのか。電撃でむしろすつきりとした頭で軽口を考える俺の元へと悠里が駆けつけてくる。

「雅さん!?! ねえ大丈夫? 返事して!」

力強く揺さぶる悠里に返答したいが、全身が痺れて動けない。動くのは眼球のみで、それが却って悠里を焦らせた。

「チツ、こいつつってんだろー!」

光弘が乱暴に悠里の肩を掴むが、がっしりと俺を掴んでいる悠里は簡単には剥がれなかった。そんな悠里を自棄になって引き剥がそうとする光弘に、悠里は必死に抵抗する。

そして、その目は俺の右腰にあるものに止まった。俺が普段から対感染者用に持ち歩いているサバイバルナイフだ。

止せ——制止の声は出ず、俺は僅かに目を見開く事しか出来なかった。悠里は一瞬でナイフを抜き振り返り様に光弘の腹部に突き入れると、そのまま押し倒す。

そこからは地獄だ。何度も、何度も、悠里は馬乗りになりながらナイフを突き刺した。ある意味一番見たくなかった光景かもしれない……あれだけ仲間を思いやり、見守って

きた人が生身の人間を相手取っている。

苦しむ声は次第に小さくなり、やがて無言になる。辺りに響くのは嗚咽と、ぐじゅぐじゅと水つぼい音だけだった。

「——ゆう、り……止せ、悠里」

未だに全身を針で刺された感覚があるが、ゆつくりと動かしていく。立てなくてもいい、あれを止められればどんな手段でもいい。

息を吸って踏ん張る。ずきずきと痛む右手も無視して、まだ無事な左手を悠里の脚へ……これじゃセクハラだが、まあ説教は後で受けよう。

「悠里……それだけやったら十分だ」

「でも……胡桃やあなたが」

「俺はともかく胡桃は大丈夫だ、報いはこれから受けさせる」

ようやく喋れる様になってきた。俺は悠里の持っているナイフを手放させるとその体を光弘の上から降ろさせる。こいつには十分ご褒美だ、変態だからな。

「ごめんなさい……ごめんなさい、今まで私」

「構わん。こつちに来い、そいつから離れるんだ」

さっきのこいつと同じ『来い』という言葉だが、悠里はしつかりと従った。真っ赤に染めた手を握ってやると、そのまま体重を預けてくる。まだ涙が出る分マシだな……人

を殺しても何も感じなくなれば、立派な人外の出来上がりだ。

「リーさん！」

図つたかの如く遅れてきた胡桃は俺達の様子を見て更に顔を青くさせた。そりやそうだ、悠里の手は血塗れで俺は死にかけみたいな顔をして、傍には血の付いたナイフが転がり抱き着いている所為で俺の腹は見えない。

ぱつと見じゃあ俺が刺されて悠里が圧迫止血してるのかと……………いや、ただ単にセクハラしてるだけにしか見えないのか？ まさか、な。

「お前つ、まさか…………」

「ち、違う…………誤解だ胡桃」

「刺し違えたか!? どこやられた!？」

「ち、違う…………よかった」

「よくねえよ!! 刺し違えて良い事なんかどこにもねえだろ！」

何かを聞き違えたのか、胡桃は迫真顔芸で俺の元へ駆け寄ってくる。愛されているんだな、としみじみ思いながら、まだ息のある光弘を見た。

「はっ…………そうやってイチャついてても…………現実は変わらないよ」

「そんな事わかつてる、クソみたいな世界で半年以上生きてりや尚更な」

「…………ちげえよ、お前の所為で、皆不幸になったんだ」

「……………何？」

普段なら死に損ないの言葉なんてまともに聞かない。紆余曲折が入り混じり、幻想に逃げ込もうとするのが常だから。だが、こいつの言葉に俺は反応せざるを得なかった。

「お前の所為で……………あのホテルに居た奴らも、俺も、この子達も……………不幸になる」

「黙れ、あたし達はむしろ救われてる。一生掛かっても返しきれないくらいにな」

「さあ……………そのうち取り立てが来るよ。なんせ私も、そうだから……………」

「取り立て？」

「お前の所為だよ……………みんな言ってたさ、お前は“疫病神”だ。……………無駄に力があつて、無駄に利口で」

「“お前さえいなければ……………皆幸せだった”」

それは、過去に聞いた事のある言葉だった。いつだ、いつだったっけ？ 小さい頃

……………いや、ある程度物心がついた頃……………違う、つい最近。いや違う。

「雅？」

「雅、さん？」

それはずっと昔から纏わりつく呪いも同然の言葉。散々言い聞かされて、一番忘れていた言葉だ。

遠い過去から、霧が晴れていく。怒号、呪詛、薄暗いリビングで語る大人達の話声。あの子さえいなければ、こんな事にはならなかったのに。

俺は呪った、俺を呪う人間を呪い、俺を嫌う人間を嫌った。俺を好いてくれる人間も本当は馬鹿にしていると決めつけて、瞳意思のあるモノ全部を呪った。

昔の事もごく最近の事も、全てが思い起こされる。なんで忘れていたんだろう、忘れていたのに何で普通にしてこれていたんだろう。

その時の情景と共に、本当の気持ち意思が溢れてきた。

怖い、気持ち悪い、何で俺が先頭に立たなきゃいけないんだ、皆を引つ張っていくなんでできない。またあの目だ……その瞳意思は嫌いだ。だから俺は、執拗に目を狙う。

気付けば、俺はナイフを握っていた。全身を刺すような痛み、がくがくと震える膝を折ったまま、眼下の点を穿っている。

「ああああああああああ!!!」

情けない悲鳴だ。そのうち奴らが聞きつけてやってくる……その前にやるべき事を

終わらせなければならぬ。

「雅！ 止めろ、止めろって！」

胡桃は必死に俺の手を押し返していた。それも虚しく、いつもとは比べ物にならない力で瞳^{意味}を削ぐ。最早形容もできないモノになってしまったその目を、執拗に抉っていた。

「どうしたんだよ!!? おい！」

「離れろ、お前の目はいらぬ」

「!? 目って……目が、どうしたって……」

狂気に当てられた俺は、一瞬だけ緩んだ胡桃の手を払ってもう一度突き立てる。最後の突きは奥深くまで到達し、断末魔はなかった。

始末の意味も込めて、刃先を捻る。一瞬だけ痙攣した身体からどろどろとしたモノが付着したナイフを引き抜くと、誰に掛かる事も気にせず振り払った。そして、それと同じ時に我に返る。

「……はあ、見苦しい所を見せたな。ある意味 “これ” の言った事は当たりだ」

「雅……お前」

今までにない憐みの瞳は、直視できない程澄んでいる。隣に立つ悠里も、もう抱き締めてはくれない。

「短くも濃い日々だったな、色々あった。と言っても、その殆どは俺が原因だ」

「だから出て行くって、言うのか？」

胡桃はスコップを握り締めると、俺のすぐ目の前まで歩み寄る。

「そうだったら殴り飛ばされそうだな」

「殴るぞ、本気で」

「次頭に受けたら死ぬ自信があるね」

「それでも殴る。死んだらもう一発殴って蘇生してやる」

「……それは体の構造的に無理だ」

「それなら——」

俺を見下ろしていた胡桃は膝を折って姿勢を落とすと、ゆっくりと俺の頭を掴んだ。

……頭突きかな？ 死の覚悟をしながら目の前にある膨らみを目に焼き付けようとし

ていると、それが飛び込んでくる。

「あ、あたしの事、俺のだって言ってただろ？ だからほら、ご褒美にちよつと勘違いさ

せてやろうかな、と」

「あらっ？」

「ん？」

思い掛けないサーブスイベントに、俺の脳内はピンク色どころか疑問符まみれになる。何故こうなったのか？ 大の大人が狂いに狂ったのが庇護欲を誘ったか？ あら

ゆる心理を頭をフル回転させて考えるが、どこにも答えはない。

何故このような行動に走ったのか、俺の中では、『ただ血迷った』という判断が下されていた。

「……理解、できんな」

「なんか感想とかないのかよ」

「案外柔らかいっすね、着痩せするタイプで？」

「変態か!!」

「事実なのに!」

頭蓋をミシミシと締め付けられながら甘酸っぱい匂いに埋もれ、俺はいつの間にか意識を手放していた。酸欠か、度重なる頭部へのダメージか、それとも実は幸せ過ぎて頭がパンクしたのか。後遺症的に一番最後を希望したいが、自分がそこまでピュアな心の持ち主ではないというのは誰よりも理解している。

後に聞いた話では、俺を運ぶのに学園生活部を総動員してもキツかったらしい。まあ完全に力の抜けた人間は重さが段違いだから、多少はね？

ただ胡桃のおかげで安らかな眠りに付けたのか、次に目覚めるまで悪夢は一切見なかった。

7. 5. 閑話・あたらしいなかま

市民体育館の隣に位置する運動場で、一行は休息をとっていた。見回りを終えた胡桃と雅の2人はそれぞれそこら辺で拾った棒切れに布を巻いただけの簡易な木刀を持ち、5mの間隔を開けて相対している。

「本気で来いよ、流石に片腕じゃあ手加減したら負けちゃうからな」

「俺にとっては棒切れという時点でハンデのつもりだが。本気を出させたくば斧を持つていら」

「斧好きだなお前……」

「使いやすいからな、素人が使っても威力がある。当たるかは別として」

互いに闘志を燃やす2人の様子を、他の3人は固唾を飲んで見守っていた。何故こんな事態になってしまったのか？ それはほんの30分前になる。美紀が何気なく言った「真面目に2人が戦うとどっちが強いのか」という言葉に、胡桃が「そりゃあたしだろ」と火を点けてしまった。

しかもその日は行く先々で道が塞がっていたり探索に行くとならわらと感染者が出てきたりと散々な目に遭い、気が立っていた雅は大人の余裕で受け流す事が出来ず「子

供には負けない」と反論してしまったのがこの模擬戦ケンカの始まりである。

だが流石に雅も本気で怒っている訳でもなく、内心は胡桃のガス抜きも兼ねて戦い方の稽古を付けようという算段だ。一方胡桃は意地になって本気になってしまったが、実際は修羅の如く感染者を屠る雅を相手にするのは気が引けている。

「えー、それでは……始め」

とんでもない事を言ってしまった、と後悔する美紀は気乗りしない様子で号令を掛ける。その瞬間、胡桃は陸上部の足を活かしてスタートダッシュを決めていた。

「相変わらず速いな、スポーツでもやってたか」

「元陸上部、だよッ!!」

1秒も経たない内に雅を射程に収めた胡桃は素人とは思えないフォームで上段から打ち下ろそうとする。それを中段で横に倒した状態で構えていた雅は、微かに体を左側へずらして木刀を打ち合わせる。

衝撃で切先が地面へ流され、胡桃の木刀が角度の付いた表面を滑る。完全に滑り落ちた所で、半身のまま雅は手加減して横一文字に木刀を払った。

「ぐあっ!!」

腹部に軽い一撃を貰い後ずさる胡桃に、雅は微かに体を揺らしながら距離を詰める。苦し紛れに振った胡桃の木刀は雅の髪を微かに撫でたのみで有効打にはなっていない。

武器を逆手に持ち替え、そのまま胡桃のパーカーの襟元へと手を伸ばす。すれ違う様に体を胡桃の真横に滑り込ませると、そのまま膝裏から柔道の太外刈りのような動きで片足を引き込み強引に押し倒した。

「なっ!? どっ触って!!」

「戦闘中にどこを触ろうが関係ない。あと襟だからな、人間が一番重心を崩されやすい位置に近い場所だから掴むんだ」

勢いよく倒れないように掴んだまま勢いを殺した後、硬直したままの胡桃の首に木刀を当てる。流石に急所には軽くとは言え当てる事は遠慮したようで、それでも勝敗は決していた。

「刃があれば致命傷、なくても喉仏を碎けば即死もあり得る」

「どつちにしろ死ぬじゃんか……」

「首はどんなに鍛えた人間でも弱い構造上の弱点だ、特に生きていれば尚更な」

「くそっ……もう一回だ」

雅が首に当てていた木刀を引っ込めてその場を離れると、胡桃はほんの少し沈黙してから起き上がる。その時の表情は距離のある悠里達も、背を向けていた雅すらも見ていなかった。

引き続き打ち合う2人を眺めながら、美紀達は冷や汗を流しながら見守っている。た

だ1人、悠里は違う事を考えているらしく、自分も戦えるようになれば2人の負担を減らせるのではと考える。

だが以前所属していたのは園芸部。特に武道や精通した武器もない悠里には敷居が高い。胡桃も似たようなものだが、陸上部の体力と幸運で今まで生き残ってきたようなものだ。

だがやつらに囃まれたら最後どうなるか、それは胡桃が身を以て教えてくれている。あの時は校舎の地下に抗体があつたからいいものの、今は何も無い。彼も含めて、一度の失敗で死んでしまう。

それがもし、私の原因で失敗してしまつたら？ 背後に忍び寄っていたやつらに気付かなかつた、物音を立てて見つかつてしまつた、考えればきりが無い。

2人は絶対に助けに来てくれると思う。私に目を配つて、最悪の事態が起こらない様にしてきているだろうと……でもその所為で隙ができてしまつたら。無理にでも助けようとして、自分を犠牲にしてしまつたら……そうなる事が、堪らなく怖かつた。

「相手をよく見ろ、完璧なヤツなんかいないし全く隙がないのはあり得ない。必ず体力に限界はある」

「ウソ……つけ、はあ……全然息上がってねえじゃねえか……」

「無駄な動きを削つて必要な分だけ力を入れろ、一気に踏み込もうとしても空回りする

ただだ」

「……こう、かよっ!!」

胡桃はぐらりと体勢を崩した——そう判断した雅は木刀を順手に持ち替えて右肩を狙おうと踏み込む。腕にある腱を狙った鋭い一撃は、容易に標的を切り裂く予定だった。

「……馬鹿な!」

胡桃はしめたと口角を緩ませる。先程雅がやって見せた回避法を見様見真似で試したら簡単に引掛かったからだ。コンパクトな動作で振ったとしても隙はある、特に彼の右側は死角も同然だ。

初めて彼女達の前で見せた驚愕の表情は、真に命の危険を感じている者の表情だった。とは言っても重心を崩し過ぎた胡桃はこのままでは倒れてしまう。その時、頭には彼が日常的に使って見せている動きが浮かんでいた。

「なるっ!!」

体を回転させ、遠心力を乗せて雅の脇腹へと木刀を入れる。その狙いは的確で、回避も間に合わないまま彼のあばらを軋ませた。

その衝撃は大したもので、彼自身が痛みと共に関心したまま横方向へ吹き飛ぶ。回避の為に跳んだ力も合わさり、見た目では派手に吹き飛ばされているようにしか見えな

い。

「あつやべつ」

土煙を立てて倒れた彼に、その場にいた誰もが駆け寄っていった。もしかすれば骨ごと内蔵が破裂しているかもしれない。もしかすれば、即死しているんじゃないかと。

「ごごごめん雅!! 大丈夫か!!? おい、おい!」

「あつ揺するな! 痛みが引くまで触んな馬鹿!! 倒れた人見つけたらまず揺するな触るなつて教わつてないのか!」

「ごごごめん……」

「ああ……でもこの状況でも武器を離さないのには我ながら凄と思う、切実に」

軽くのたうち回る様に痛みを耐える雅を見て、胡桃は慌てふためく。骨は無事か、内臓は……この様子だと大丈夫か? あらゆる最悪の事態が頭を過り、不安が募つていった。

「雅さん!」

「だ、大丈夫ですか!! 胡桃さんつ、やり過ぎですよ!」

「う、うん……あたしもやり過ぎたなつて……」

「みゃーくん、痛いよね? 立てる?」

雅は各々に軽い母性を感じながら、手を振つて無事を伝えようとする。

「えっ!? バイバイってまさか死んじやうの!？」

「嘘だろ!? おいこんなので死ぬなよ!」

「死なんわ!! 人間そこまで脆くねえからな! 案外呆気なく死んだりするけどしぶとい生き物なんだよ!」

あれ、でも人って脆いとか考えていた気もする。というか実際脆い所は脆いのだ、急所にさえ入らなければしぶといが人の急所というのは割とどこにでもある。内臓から手足の動脈、背中には神経と背骨があれば頭は硬くとも衝撃で中身がミキサ―される。

もし左側に食らっていけば、シヨックで心臓が止まっていたかもしれない。そう考えると人はなんて脆い生き物なんだろう、という結果に落ち着く。

「もうこんな事やめてね? 危ないし、怪我しちゃうもの。それに下手すれば死んじやうんだから」

「そ、そうだな……俺はともかく胡桃が死ぬのはヤバイ」

「あなたもよ! 死なれると困るの!」

「まあ、そうか。処理が手間だから……」

「からかっているのか自覚がないのかわかりませぬね」

「間違いないわかってない、こういう所鈍いからな。過小評価というか」

「みゃーくんはもう私達の大切な仲間なんだから、死んじやったら悲しいよ」

彼はそこまで思われているとは知らず、痛みに襲われたままつい笑ってしまふ。微妙に口角が上がったのを感じただけだったが、胸の内には確かな温かさを感じていた。

その様子を見て、周りを囲む少女達も嬉しそうに頬を緩ませて――

「あつ、みゃーくん笑った!」

「やつとかよ、全然笑わないから嫌われてるのかと思つてた」

「ほんとです、嫌うとまでは行かずとも厄介なヤツらだと思われてるのかなつて」

「……そう、か」

彼が最も嫌うのは慢心と過大評価だ。例え自分の事を好意的に捉えてくれる人間を相手にしても、例えそれがわかつていても認められるまではそういう反応は見せない。もしそれがただ表面上の付き合ひだけだったら、自分だけ仲良くなつた氣でいるのは迷惑になるからだ。

だから本当の意味で認められる事は、やはり嬉しかった。雅は性格もいいとは言えないし、お堅いと評価される事も多かつた。あまりお喋りできる方でもないし、端的に行つてしまえばコミュ障と言われる分類に入る。

「そうだよ、私みゃーくんの事大好きだもん! 胡桃ちゃんやみゃーくん、りーさんも皆みゃーくんが好きなんだよ」

「そうなのか」

「ば、馬鹿！ 勘違いするなよ、恋愛的な意味じゃないからな？」

「そんな簡単に勘違いするか。短い付き合いとは言え、丈槍の性格はある程度理解している」

「え、私ってわかりやすいの？ 浅い女なの？」

少しだけショックを受ける由紀に、雅はまたくすりと笑って首を振る。

「ある程度まではわかりやすい。だが決して浅くはない、お前は将来美人になるし性格もいい……いい子だよ」

「そ、そう……かな」

「ああ、そうだ」

顔を赤くする由紀に正直に答える雅は、立ち上がろうと上体を起こす。そこに左手が差し出され、彼は一瞬体を強張らせる。だが、それは危害を加えようとした手ではなく、ただ一心に厚意の手だった。

「遅くなっただけ……ようこそ学園生活部へ。今まで守って貰ってたのに悪いけど……ちよつと不安だったの、でもあなたの笑顔を見て良い人だって確証が得られた。これからも、よろしくお願いいいいかしら？」

その手は悠里のものだった。若干腰を落として視線を合わせようとしてくるのが彼

女らしい。ここで「重いから」なんて断るのは野暮だ、と考えた雅はその手を取り、悠里が引つ張つてくれるまで待つ。

絶対に1人では引つ張れないと思つていたが、悠里は少し力んだだけで男1人を引つ張り上げてニツコリと微笑んだ。

「勿論。拾つてもらつた恩だ……この身朽ち果てるまで御身を護ると誓おう」

芝居がかった動きで礼をして、恭しく手を握る。

「おおつ、侍だ……！」

「侍つつうか騎士だな、そこそこ様になつてるのがムカつく」

「いきなり喧嘩売りますか。仕返して倍吹き飛ばされても知りませんからね」

「俺の力じや吹き飛ばせないな、斧使つてもいいか？」

「殺す気だろ」

「冗談だ、女は……特に芸術品レベルの美人は触るのも怖い」

美少女揃いの学園生活部から目を逸らす……しかし四方を囲まれてるおかげで逃げ道は上しがなく、まるで誰かが亡くなつたかのような感じになる。その所為で既に1人美人を殺したと勘違いされたが、後の弁解により誤解は解けた。その代わりセクハラ認定は食らつたが。

何故可愛いとか綺麗と思つてそれを口に出してはいけないのか、彼は未だに理解して

いなかった。

●●月●●日、私達に新たな仲間が加わった。雅という、男の人だ。彼はスーパリーの駐車場で追い詰められた私達を助けてくれた。そんな戦いぶりを見ていた由紀ちゃん、一言「泣いている」と言ったのが私達とあの人の馴れ初め。

黒髪に琥珀色の瞳、元は灰色だったトレンチコートを着てシオルダーバッグと軍用のベルトでナイフといくつものポーチを提げている。白い肌は一見女の子みたいだけど、体つきは男の子らしい。少し前に細マッチョとかいうのが流行ったけど、あれより少しスマートにした感じ。

冷静で、まるで映画に出てくる特殊部隊のような人。胡桃はそんな彼に半分憧れていて、兄貴が出来たらこんな感じなのかな、と言っていた。

彼も胡桃の事は気に入っているらしくて、何処に行くにも「胡桃、出るぞ」と声を掛けていく。思えば、一番最初に名前呼び始めたのも胡桃だったかも。

今はもう、彼は私達には欠かせない。戦闘も勿論、精神的な支えにもなっている。大人在る安心感というのは、やっぱり大きい。……めぐねえが居た時はこんな感じじゃなかったけど、あれはきつと、お姉さんのような人だったからだろう。

逞しくて、凛々しくて、どこか古臭くて、それこそ侍のような喋り方をしたり立ち方

だったり。もしかしたら先祖は名のある武家かもしれない？ 名字も名乗らない彼は一体どこの家系なのか、と夜の巡回に出掛けたのを見計らって皆で話したりもした。

あの日から、もう2週間。色々あったけれど（特に私はいっぱい迷惑を掛けた）、彼は変わらず私達と接している。本来、男性なら少しは理性が薄れてきてもいい頃かもしれないけど、彼は今の所何もしていない。

「なあ雅、お前名字ってなんなんだ？」

「なんだ、藪から棒に」

車の屋根で辺りを警戒している雅に、胡桃がしたから声を掛ける。質問をされても応えはするが双眼鏡は目から離さず、常に一定の速度で全方向を見渡す彼にとって雑談は気が散るものではない。

「前から皆気になってるんだよ、名前しか教えて貰ってないし」

「あー、そうだったか。年上だからって名字呼びしないか？ それだけが気掛かりなんだ、壁があるような気がして」

「しねえよ、少なくともあたしと由紀は」

「あー、まあそうか」

悠里と美紀から名字呼びに変更されれば、彼はそこそこ傷付くとわかっている。あの

2人は真面目だし、年上相手にはきつと名字で呼ぶだろう。今更変えられても違和感があるし、かと言って教えないのも信用してないのかと疑われる。

「で、名字は？」

「……さあ。先祖はまあまあ名のある武家だった、とだけ」

「勿体ぶりがつて……まあいいや」

溜息を吐きながら去っていく胡桃だが、皆で予想していた通りの答えで半ば戦慄していた。先祖が武家、というのはどういうものなのか、よくわかっていないのもあるが、きつと大きな道場があつて幼い頃から武道を嗜んでいた……とか今の彼を見て密かに思っていた。

だが彼は決して打ち込んだ武道はなく、その殆どが基礎しか学ばない所謂「かじった」という経験しかない事を忘れていた。

言えないよなあ、仕えていた主に意見して追放されたなんて。悲しくなるから深くは調べてないけど。そんな先祖の二の舞にはならないように、という訳ではないが、少なくとも俺は自分が認めた相手にはずっと尽くしたいと思う。

でも間違つてる時は嫌われてでもしつかり物を言うのは……やはり血だろうか？

遺伝というのとは争えないもののだろうか。そういえば祖父も言いたい事言ったら会社クビになったとか言つてたな。やはり争えんか。

「雅さん、お昼ご飯できたから一緒に食べましょう？」

「ああ……すぐ行くこう」

悠里が食事に呼びに来ると、最後の一周を回って警戒を切り上げ車へと入る。

その様子を、1人の少年がスコープ越しに捉えていた。

「……次はアレかな」

カチャツ——ポルトを引き、弾倉へと弾丸を装填。続いて2発目を薬室へと装填し、ポルトを戻す。

そんな危機的状況にあるとは、雅を含め誰1人氣付いていなかった。

8. 新入

彼は、その日からずっと1人だった。

初めは他の人を見つけて、合流するべきだと考えていた。だけど、初めて見つけた生存者は物資を強奪する人達で……既に秩序を失い野蛮人しか存在しないと判断した彼は、今まで1人で生きてきたのだ。

「あいつらも、きつと」

引き金に指を掛けてじつと待つ。ほんの少し前、彼は初めて銃を持った。廃れた銃砲店にあった鍵の掛かった頑丈な倉庫、そのパスワードを偶然探り当ててしまったのだ。

中には散弾銃とボルトアクション式のライフル。ショーケースにあつたスコープを乗せて説明書通りにゼロインを合わせ、彼は今まで使ってきたのだ。メンテナンスは欠かさず、5発撃つごとに分解する。道具を持ち歩くには不便だけど、強力な武器の代償として嫌々でもやってきた。

ゲームで少しやった事しかない狙撃は滅多には当たらず苦労したが、最近はコツを掴んできて100mくらいのゾンビなら一撃だ。

「女の人がいいたなあ、捕まってるのかな……綺麗な人だし悪そうには——」

そこで人は見掛けに寄らない、という言葉が頭を過る。ダメだ、次見たら撃とう。この世界に優しい人なんてもういない。皆狂って、自分の事しか考えなくなってしまう。もう誰も、前みたいにはなれない。

「……殺すんだ、僕しか……悪人を倒せるのは、僕しかない」

誰もいない一室で、彼の悲壮な呟きははずたはずたになった壁に吸い込まれる。もう長くは生きられない——整備道具の殆どが占領するバッグには、それを確信させるように他には何も入っていないかった。

「なあ、雅……」

昼食の後。ハーブの図鑑を読んでいると隣でスコップを磨く胡桃が手を止め声を掛けてきた。

「ああ?」

本を読みながら生返事をするが、どうも声の感じからただの雑談ではないと思える。仕方なくしおり代わりに胸ポケットから出した結束バンドを挟んで机に置くと、胡桃もスコップと布を足元に置いて真面目な顔を真っ直ぐ向けてきた。

「なんか、変な感じがしないか?」

「なんだ藪から棒に……」

「ここに車を停めて3時間くらい経ったけどさ、なんかずっと見られてる気がするんだ」
「ほう」

丁度それは俺も感じていた……という事はなく、胡桃は最初はともかく、昼食を作り始めた時からそわそわしていたのはわかる。しかし女がそわそわする理由なんかいくらでもある、男が踏み込むべきではない問題から聞いた途端から向く先のない矛が文字通り自分に矛先が……なんて物まで、幅広いのだ。

よつて俺はそつとしておく、という選択を取った訳だが、胡桃はその「変な感じ」とやらを俺に相談してきた。それは数年でも人生の先輩である俺を見込んだのか、それとも唯一の男である俺を見込んだのか。

どんな理由でどんな俺を頼ったのかは定かではないが、胡桃は自分の肩を抱くようにして不安を表していた。

「なるほど。なら見回りにでも行くか、ここは安全だと確証が得られれば今夜も安心して眠れる……なんなら寝てる間俺が見張ってしよう」

「え、別にそこまでしなくていいけどさ。見回りは賛成かな……ちよつとりーさんに話してくる」

「ああ、俺は先に外に出てるからな」

「りよーかい」

車両後部の方で物資の数量確認をしている悠里へ話をつけに行く胡桃を見送り、俺はいつもの装備を装着する。ちよつと遠出をして、何か持って帰ってくるのも悪くない。

久し振りに酒でも飲みたいが……ウイスキーなんて置いてある家庭は少ないんだよな。消毒にも使えて便利だし美味いしの一石二鳥で今時どこにもない。それに彼女達の前で酔っぱらうなど、酒癖が悪い訳ではないが避けるべきだ。

いつもの斧を携えて、首に掛けてある指輪を取り出す。

——常に強くあれ。施しと情は捨て、血を求めよ。

そう念じて、闘志を燃やしながら外へと飛び出した。

「お待たせ、ついでに消毒用のアルコールがあったら取ってきて欲しいって言ってたから、川の向こうにまで行ってみるか？」

「そうだな……アルコールか」

「ん？ どうしたんだよ悲しそうにして、泣くのか？」

無表情だと言うのによく俺の心情を察せたな。これも時間がもたらす恩恵か、と訳の分からない事を考えてさつき思った事を試しに言ってみる。

「酒かあ、確かに映画とかでも度数の高い酒被せて消毒してたな。実際できるものなのか？」

「出来ない事はない。少なくとも40度以上は必要だな、本格的な消毒を望むなら60度以上と聞いた事があるが高すぎてもダメらしい」

「ふーん」

「でも40度程度でも菌が繁殖しないから洗い流す用途には使えるらしいぞ。40度と
言うると日本酒かウイスキーだな」

「酒の事はわかんないや、興味ないし。でもやけに熱く語るなあ、よく飲んできたのか？」
「週に一度は必ず飲んでたな。美味いんだこれが、割るよりそのままがいい」

「飲んだくれの台詞かよ」

呆れた様子で笑う胡桃だが、索敵はしっかりとこなしていた。橋を渡るだけだと言うのに、見通しのいい場所ですこまで気を使つてはこの先持たない。珍しく俺よりも気を使う彼女をカバーする為に、俺自身もいつもより慎重に進む。

橋は河川敷の分も含めたかなりの長さだった。片側1車線ではあるが、両側に歩道が設けられ車道とはしっかりとした柵で別けられている。ハンドル操作を誤つても乗り越えてもしない限りこちら側にはこない……そんな安心感を感じさせる重厚な柵の裏までも目を通して見られている胡桃には頭が下がる思いだ。

「どうだ？ まだ見られてる感じはするか？」

「うーん、前より強い？」

「近付いている……?」 直感も馬鹿にできないからな、目の前が隠れやすい地域なら尚更だ」

さつきよりも近付いてわかったが、この住宅街はかなりの広さがある。川沿いというのは立地的にどうなのか、と疑いたくなるが……遠くない位置に体育館と図書館も……なんだか頭が痛くなってきたな、というか図書館なんてものあったか? まあ地図か何かで見たんだろう。

ずきずきと痛む頭を振って、ばちばちと火花の散り始めた視界をリセットする。何かあったか? 最近日記も付けてないから記憶が曖昧になっても原因が分からないな。

「なあ胡桃、図書館って行った事あったか?」

「はあ? 何言ってるんだお前」

まるで頭のおかしい人間を見るような目で振り返るが、すぐに悪い事をしたような顔になって歩くのもやめてしまう。

「……雅さ、一昨日何してたか覚えてる?」

「模擬戦で痛い目に遭ったくらいか」

「じゃあ、先週は?」

「……先週? さあ、物覚え悪くてな」

「そ……っか。図書館なんて行ってないよ、大体行ってどうするんだよ」

妙に優しい顔をして答える胡桃に、俺は少し不信感を抱く。なんだ、この違和感は何？ 瞳を見ても、感じるのは憐みと悲壮。何かしら胡桃にとつて辛い事があったのは間違いない。それを俺が気付かなかった？ そんな事が……常に全員に目を光らせているのに気付かない訳が――

「もしかして模擬戦の衝撃で記憶が飛んじまったのか？」

「じゃあなんで模擬戦は覚えてるんだろう、その前に悠里がおかしくなって……」
「止めよう、その事は思い出したくない。……嫌な事が起き過ぎた」

「そうか」

とにもかくにも、本人が嫌がつてるなら無理して聞き出す事はしたくない。立ち止まったままの胡桃を追い越して、ついてくるのか心配になって後ろを振り返る。

胡桃は……泣いている気がした。実際涙を流した瞬間を見た訳じゃない、ただ目を擦っただけだ。目が赤くなってもなければ嗚咽が聞こえた訳でもない。ただなんとなく、その動作が泣いていたのだと……思い込んだだけだ。

「胡桃」

「うん、行こうか。リーさん達待つてるしな」

「……あまり溜め込むなよ。そういうのをぶつける相手でもあるんだからな、俺は。お前が壊れたら、きっと皆悲しむ」

「うん」

——無理だよ。あたしが頑張らなきゃ、皆を支えなきゃ。気付いてないんだろ。うけど、お前も限界なんだ。忘れているのもそうだ、覚えていれば自分を保てないからだろう？

だからあたしが……あたしがしつかりしなきゃな。頼りない兄貴分の為にも。

……何故だろうか。平気そうに振る舞ってはいるが、胡桃の瞳は暗い。でも全てを諦めているのではなく、暗さの中にも一抹の光がある。でもそれも、容易く消えてしまいうそうだ。

「気張るなよ、胡桃」

それだけ言つて、俺は前衛を交代した。目的地はない……ただ目の前にある住宅街を漁つて、消毒液を手に入れられればそれでいい。でも、消毒液なんてものが使用期限の間に合う物が丁度あるんだろ。うか？

他の薬ならまだしも、あまり怪我をしない家庭なら滅多に使わない物ナンバー1の消毒液である。大抵使つた時に使用期限が切れているか判断するし、切れていても気にしないのが我が家でもあつた。

まあそれなら度の高い酒でいいだろう。以前なら水道水でも塩素があるし十分だが、

今は貴重だ。こういう時こそ、サバイバル知識が活かされるといふものである。

橋を渡り、住宅街へと到達すると俺達は一件ずつ確認していく。人の痕跡、鍵は掛けているか。開いているかどうかは半々で、一度閉じている家をこじ開けてみると中は壮絶な状態だった。

それ以降、鍵の閉まっている家はあまり調べていない。俺なら構わず調べて回るが、胡桃が良い顔をしないからだ。

「ん？」

「なんだ」

17件目の家が空振りに終わり、俺達は流星に諦めかけていた。その時、胡桃が少し離れた場所にある家を見て首を傾げる。

「何か今人がいたような……」

「ああ、いてもおかしくないな。どこの家だ」

「ほら、あの黒い車の停まっている言えの2つ奥。2階の窓から覗いてたんだ」

「ふーん」

「大人には見えなかったな……男の子だったと思う」

「そうか」

興味なさげに駐車場に停まる車の中を覗いていると、胡桃は足早にその家へと向かっていく。

「おい、あまり関わるな。良い事なんか一つもないぞ」

「でも子供なら助けないと」

「お人好しだなあ、子供なら尚更タチが悪いってのに」

子供特有の残酷さを知らないのか。自分勝手なものもそうだが、躰がされてなければ野良犬よりもタチが悪い。しかも言葉を話せる以上付け上がってくるしな。妹は大丈夫だったが、弟と同等かそれ以下だったら速攻首を飛ばす自信があるね。

「そこまで小つちやくなかつたから大丈夫だって!」

「成長してりゃその分力が強いんだよ、しかもこの時期まで生きてるって……嫌な勘違いでもしたらどうするんだか」

放っておく訳にもいかず、仕方なく胡桃を追った。件の家は周りと同じ様に西洋風で、赤茶の外壁とミルクティーのような瓦のお洒落な家だった。駐車場も2台分あって庭も広い……貧乏という訳ではないらしい。ああ、余計タチが悪い。

胡桃は扉の取っ手を掴み、ゆっくりと引いて鍵が掛かっているか確認する。非常に警戒心が薄いか対人戦闘の想定が薄いか知らないが、特に引つ掛かる素振りもなく易々と開いてしまった。

「誰かいるかー？ 別に攻撃も盗みもしないから出てきてくれるとありがたいんだけどー」

「俺なら絶対出て行かない」

「うるさい」

「帰るぞ。無理矢理引き摺りだしても迷惑だ」

忠告も聞かず、ツインテの美人は呼ばれてもいないのにずかずかと入り込んで行ってしまう。あーあ、撃たれても文句言えねえな。もつとも、この国は銃刀法という面倒な法があったから安心できるが。

仕方なく俺も中へ入ってみる。至って普通……廊下には小さな絨毯に靴箱の上にはいくつか小物が置いてあったり少しお洒落なくらいか。少し荒れているが、手入れもされているようだ。

首の高さにワイヤーが張られてもいなければ見えにくい釣り糸が足元を這っている事もない。なんて平和な場所なんだろうか。

「おーい、入るぞー？」

当然返事はない。靴を脱いでスリッパに履き替える辺り凶々しさが滲み出ているが、裸足と言う訳にもいかなから正しいな。

廊下への一步を難なくクリアし、感圧板がない事が確認できる。さあ、家の中に落と

し穴でもあるか？ 床を抜いて尖った棒を上に向かせた古典的な物でも十分人を殺せる。そこに汚物を塗れば更に感染症がプラス、ハイリスクな罌の出来上がりだ。

後は絨毯でも敷いて置けば簡単なカモフラージュに……誰も家の中に落とし穴があるとは思わないだろうからな。

「ちよつと止まれ、髪に蜘蛛の巣が掛かってるぞ」

「え!？」

止まれと言つて素直に聞いてくれるとは思えないので、背中に伸びるツインテを指さして注意を逸らす。目論見通り、胡桃はぞつとした顔でありもしない蜘蛛の巣を取ろうと立ち止まった。

その隙に持つていた斧の先端を目の前にある絨毯の上に置いてみる事にする。

「え、ないじゃん……良かった。なにしてんだ?」

「いやな、落とし穴でもあるんじゃないかと」

「ある訳ないじゃん」

ゆつくり力を弱めていくと、ずるずると絨毯があるべき床を無視して下へと落ちていく。自分でもまさかある訳ないだろうと思つていたのもあり、思わず眉を寄せてこの先にいくつもあるであろう罌を考えてしまう。

「ええ……家の中に落とし穴なんて作れるのかよ……」

「地面の上に直接床がある訳じゃないからな。絨毯を退けてくれ」

胡桃が端を持って絨毯を退かすと、大体50cmくらいの穴の中に木の板が置かれていた。そこにはこれでもかというくらいに長い釘が突き出ており、赤黒く染まっている。

外の感染者の物か、それとも誰かが踏んだ後か。どちらにしろあれが刺さればただの刺し傷にはならないな。

「これ自分が踏んじやうと思うんだけど」

「踏まなきやいい。位置知ってるんだからな」

「……踏むとどうなる？」

「そうだな、破傷風になって死ぬ。ゆっくりじわじわと」

遠い目をしながら答えると、胡桃はぶるつと体を震わせて大きく穴を避けようとする。

俺なら落とし穴が見破られた時用の仕掛けも用意しておくが、流石にそこまで頭が回らなかつたらしく罨はなかった。

リビングに人影はなく、それどころか入った形跡もない。罨があるなら人の形跡があるのは当然だが……この階は使っていないのか？ 奥にあるトイレや風呂場には人が通った形跡はあるが、単に水の貯蔵目的だろう。

なら、胡桃が人影を見た2階こそが拠点か。妥当だ、感染者は階段を苦手とする。人間を相手取るにしても侵入経路が限定された地点なら防衛もしやすい……戦力と食料が十分なら、の話だが。

だが侵入経路が少なければ逃走経路も少なくなる。その不利を覆す余程有効な戦術か武器を持つのか？ こう考えさせられるだけでも十分だが、俺が考えすぎなのかもしれない。

「敵は上だな、俺が先行する」

「敵かどうかまだわかんないだろ？ なんでも敵だつて決め付けるなつて」

「味方じゃないからな、味方と確証が持てない存在は敵だ」

斧を胡桃に持たせてナイフに持ち替えると、一段ずつ慎重に階段に足を掛けていく。一段目だけ引っこ抜いてさつきと同じ罠を置く手段もあつたが、流石にそこまではやらないか。

ガタはきていないようにで軋む事もなく、ようやく折り返し地点に到達する。コの字型に続く階段の中腹で、いつもの様に片目だけを覗かせて先を見た——

そこには、見慣れない物体を持った少年が1人。胡桃の見た物は見間違ひではなかったようだ……ただ彼が持っている物は見間違ひであつてほしい。ほんの一瞬目が合った瞬間、死を覚悟しながらも体ごと引いてその場を離れようとする。

「うわっ!? な、なんだよ!」

「いいから戻れ! あんなの手に負えんぞ!!」

頭でどうこう考える暇もなく、俺は情けない様子で胡桃の背を押してリビングの方へ帰る。

「待てっ!」

ズドオンツ——身も竦む轟音が背後で響いた。落とし穴の横に小さな穴が開き、耳元では空気を裂く音が鼓膜を震わせる。

「銃持ちだ! 帰るぞ胡桃、ヤツは一人で生き残れる。俺達の手なんか要らないってよ!」

「はあ!? 銃なんてなんで……」

「んなもん知るか! ……ったく、あんな子供より俺が持った方が絶対に——」

「愚痴言つてないでさっさと逃げろって!」

玄関までは射線が通っている。残りはリビングにある窓を破るか、あの少年を倒すしか生き残る術はない。裏口があれば手っ取り早いが……そう上手くはいかないだろう。

背後を気にしながらも台所の方へ行ってみると、幸運にも裏口がある事が確認できた。特に指示する事もなく胡桃は全力で扉に飛び付き、鍵を開け始める。

その間にも階段の方からはどたどたと追って来る足音が聞こえる。

「まだか胡桃」

「ちよ、ちよつと待つて……鍵が2つあつてな……？」

「お前不器用か？」

「違うつて！ なんでかわかんないけど開かないんだつて！」

四苦八苦している様子の胡桃を押し退けて鍵を見る。一見普通の鍵だが、普通に戻してみようとするとまるで何かに引つ掛かっているかのように動かない。

「……んん？」

「開かないよな？」

ならこれでどうだとツマミを押してみてもこれ以上奥にはいかない。だが多少前後の遊びがある。……なら引いて回すのか？ 外から道具を差し込まれて解錠する手段があると聞いた事がある。ならそれに対する防衛法は蓋を付けるか押し引きでしか作動しない鍵だ。

試しに引いてみると、少しだけ鍵が持ち上がった。そのまま回すとすんなりと回り、解錠に成功する。

「よし、先に——」

「動くな!!」

この国じゃそうそう体験できない事象だ。銃を向けられ、「動くな」と命令されるなん

て。俺はぴたりと命令通りに動きを止めると、ゆっくりと声の方向へ向き直る。

胡桃も同じように固まっているが、恐怖心からか得物も放して俺の肩に縋りついていてた。

「……何者だ、お前達」

「俺の名は雅……消毒液を見つける為にこの住宅街に探索に来た。こいつはその助手みたいなものだ」

「女の子を危険な場所に連れてきたのか」

「ああ、そうだ。こいつは腕つぶしも強いし機転が利く。勿論危ない時は一番に逃がすが……生憎俺は片腕で物も多く持てなくてな」

半分以下になつた右腕を上げて余つた袖を垂らして見せると、少年はほんの少しだけ狼狽えた様子を見せる。だが胡桃は余裕がないのか、いつもの軽口どころか自己紹介もできずに顔を青くしている。自分の予感がこのような事態で当たるとは思っていないかつたのか？

「お前さえ良ければ銃を降ろしてはくれないか、この子が怯えてる」

「……無理だ、まだお前達が悪人じゃないと保証されてない」

「そうか、当然の事だな。なら逃がしてくれる訳にもいかないと」

「……そうだ」

若干躊躇いを含んではいるが、完全に嫌がつている訳ではない。必要とあれば殺すぞ……下手な真似をすれば体のどこかに風穴が空く。胡桃は戦力外だし、そもそも銃に対抗できる武器なんて何も無い。人が持てる最高の遠距離武器なんだからな。

ここは歩み寄ってでも解放されなければ……とは言っても譲歩し過ぎても怪しいからほんの少し、即答しても対策があると思われるから少し考えたフリをしなければ。

「そりゃ困ったな。ならせめてこの子を俺の後ろに回しても？ いや、身体検査を受けようか。武器は勿論持っている、俺が渡そうか？ それとも壁に手を付けて君に取らせたい方がいいかな？」

「……じゃあこっちに来い」

「わかった。ちなみにこの子は今丸腰だ、普段人間なんて相手にさせないんでね」
ナイフを持ったまま左手を上げて、ゆっくりとリビングの方へと出て行く。

「み、雅！」

「大丈夫だ、そこに居ろ。馬鹿な真似はするな？ 俺はまだ死ぬ訳にはいかない」

近くのテーブルにナイフを置くと、少年に体の正面を向けて立ち止まる。どうすればいい？ と若干おどけた態度で首を傾げると、銃口を下げて俺の腹部を漁りに掛かる。

「おい、近距離用の銃は？」

「なんでそんな事——」

「ん？ どうしたんだ胡桃、なにしてるんだ？」

俺に言われた通り何もしていない胡桃に声を掛けると、少年はいとも容易く引つ掛かった。

「甘いな」

完全に下がった銃口の先端を踏んで顎に軽く拳を入れると、一瞬だけ意識が飛んで体から力が抜ける。その隙に銃をもぎ取ろうとするが引き金には指が掛けられていて暴発してしまった。足から強い衝撃が伝わってくるのも無視して、意識を取り戻した少年の額に頭突きをかます。

「がっ……お前っ！」

ボルトを引かぬまま銃口を向けるが、流石にそこまで無知じゃないらしく突っ込んで来ようとする。ある程度速度も乗っていた少年の鳩尾に腰に構えたまま銃口で突きを入れると、堪らず少年は床に突っ伏した。

「子供が銃を持つな、使い方分かってるのか？ 俺も人の事言えんがな」

銃口を床に付け、ボルトを引く。空葉莢が愉悦をも感じさせる音を出して床に転がり、残りの弾があるか確認する。中にはまだ弾が入っており、覗いてみると弾頭が4つ見える……5発装填か、だとすると最初の1発は葉室に装填していたな？ 危ない事をする。

うずくまっている間にボルトを戻し装填すると、距離を取って机で銃を支持して狙いを定めた。……照準はそこで呻いている少年だが、流石に子供を撃ち殺す程俺も人間止めてない……と思う。

「出てきていいぞ胡桃。武器を忘れずにな」

「……何がどうなってるんだ？ これ」

「銃口管理が甘かったもんでな、ちよいと拝借した。さあ、持っている武器を全て床に置け。銃器なら銃口を誰もいない方向へ向けて引き金は触るな。触った瞬間撃ち殺す」

「お、おい……流石に子供相手に」

「武器を持ってば女子供も関係ない、馬鹿な真似をすれば死んでもらう」

少年は震えながらポケットからライフルの弾を取り出し、腰に手を回すとやたらゴツい物体をゴツイ音を立てて床に置く。それは銃口とストックをいかにも「無理矢理」切り落とした散弾銃で……持つてるじゃないか、近距離用の武器。初めからアレを出されてたら最初の1発で死んでたな。

「胡桃、それを持つてこい。引き金を触らず、銃口は誰にも向けるな。ついでに弾も」

「う、うん」

胡桃は恐る恐る散弾銃を持ってくると、テーブルの上に置いた。

「動くなよ？ 銃を使わずとも人は殺せるからな」

ライフルのボルトを引いてテーブルに置くと、散弾銃を手に取ってブレイクオープンさせる。上下二連式……競技用か？ 弾は入ってる……12ゲージか、鳥撃ちだよな？ まさか00バックなんかじゃないよな？ それこそスラッグなんて入ってたら失神モノだ、楽に死ぬるだけマシかと言えばそうだが、やはり大口徑というのは怖い。

「まず明言しておこう。俺は君を撃つ気はない、身の危険を感じればまだしも無抵抗の人間を撃つ程性根は腐っていない。……まず1つ、君の名前は？」

「……神崎、樹」

イツキ、と名乗った少年は痛みも引いたのか反抗的な目で俺を見上げていた。その瞳に屈さず、俺は散弾銃の銃口を樹に向ける。勿論引き金に指は掛けない、暴発してもいのように多少銃口も上に向けてある。

「銃はどこで手に入れた」

「近所の銃砲店、倉庫にあった」

「そうか。……そうだ、胡桃、お前の自己紹介がまだだったな。名乗っておけ」

「この状況で自己紹介させるとか……まあいいや。あたしは恵飛須沢胡桃、こいつのお守役だ」

「お守が怯えて抱き着いてくるのかねえ」

「うっさいなー、お前も怖がってただろ!？」

「銃向けられたらそりゃ怖いよ、怖さは知ってる。……身を以て経験するとは思ってなかったがな」

漫才の様なやり取りに、樹はくすりと笑みを零した。よかった、少しは警戒心を解いてくれたか？ つつても銃を向けられてたら無理な話か。……まあいい、ここはこいつの城らしいし、さっさと出て行こう。

銃口を外し、ブレイクオーブンさせて弾薬を床に落とす。ライフルの方も弾が全て排出されるまでボルトを前後させると、全てテーブルの上に置いてナイフも回収した。

「それじゃ、俺達は帰らせて貰う。後は追うなよ、背中を撃つのも勘弁してくれ」

「……え？」

「何も盗る気はない。俺は止よそうと言ったが、胡桃がどうしても確かめると言ってるから来ただけだ。お前の生活の邪魔はしない……ただ銃の安全管理はしっかりな、身を滅ぼさぬよう気を付けろ」

「あの……さつきから見ると、銃に慣れてませんか？」

随分柔らかくなった口調で樹が体を起こす。瞳には最早敵意は見えず、警戒心は解いているように感じる。これにこつちも気を許して隙を突かれるのも嫌だから、許しはしないがな。

「多少は慣れている、海外で撃った事もあるしな。……いいか、この銃はM700、歴史

ある神聖な銃だ。間違つても真つ当な理由もなく人を殺すな」

ちよつと大袈裟に言つてやると、樹は背をぴつと張つて俺の話の聞き始める。面白い奴だ、こういう奴には暴発なんかで死んで欲しくはない。今まで銃を扱つてきた以上、人よりか技量もあるんだろうし。

「銃口の管理はしつかりと、汚れたり歪んだ弾は使うな。整備もしなきゃ当たりもしないぞ」

「……わかつてます、整備だけは……やつてるつもりなんです」

「ほう、いい心意気だ」

「何か困つてるのか？ あたし達でよければ相談に乗るからさ、言つてみるよ」

そんな見ず知らずの相手に悩みなんか言うかよ。いきなり踏み込んだ話をすると思われるのは世の常だぞ。

「……もう食料もありませんから。この辺はくまなく探して、全部食べちゃつて、もう……」

「移動すればいいんじゃないか？ 銃が使えるなら車も余裕だろう。もう免許なんて言つてる場合じゃないしな。胡桃も無免だし」

「なっ!?! あたしが無免だとかは——」

反論する胡桃の顔を押しさえ付けて黙らせると、浮かない顔のまま微動だにしない樹の

答えを待った。

「僕、車が怖いんです……昔事故に遭ってから、後ろの方に乗るならともかく……運転席とか助手席は」

「……なあ、雅」

胡桃の言わんとする事は容易に理解できた。目を見なくとも分かる、どうせこいつを連れて行こうとか言うんだろう。確かに銃器を扱える人員がグループに居るのは何にも代え難い戦力となる。だが銃器は誤射や暴発、弾薬にいつでも囚われる物だ。

だが例え銃器を封印したとしても……もう一人人員が増えれば勿論食料の消費スピードも増す。俺は出来る限り食べない様にはしているが……増してないと言えは嘘になる。

「……悠里や丈槍は許すだろうな。美紀も、見るからに子供のこいつを見捨てる真似はしない」

「じゃあ、賛成なのか……?」

「いかんともし難いな、寝床はどうするんだ?」

「うっ……ソファ?」

「結構キツイんだぞアレ、まあたまに外で寝てるからいいけど」

「はあ!? 外で寝てんの!?!」

「あー今のナシ。何はともあれ、俺は賛成も反対もしない。日和見と言われればそれまでだが、まずは全員の意見を聞かない事にはな」

何を言っているのかと理解していない樹を前にして、俺と胡桃は凍えの相談を終える。そしてその結果――

「なあ、イツキ。お前……あたし達と一緒に来る気はないか？」

お人好しの胡桃は、この子を見捨てる選択は出来なかつたらしい。

樹は喜んで胡桃の誘いを受けた。終始瞳を観察していたが、どこにも曇りはなく謀る気はないとわかる。だがどうかな、この年は若い力をどこに放出するかで難儀する年代だ。正確な年齢は聞いていないが、あの美人揃いの車内で正気を保っていられるか………となると、俺も十分危なっかしい。なのに全くその気が起きないと言う事は……やはり彼女達を妹判定にしているのは十分効果がある、と言う事だ。

それでも時折危なっかしい感情が湧かない、と言えば嘘になつてしまう。非常に危ない、危なっかしい。しかし俺は負けない、こんな邪なる感情に支配されてはいけなないだと、日々に言い聞かせている。

無事キャンピングカーへと辿り着くと、俺は念のため樹と共に外で待っている事に

なった……というか強制的にそうした。その間悠里達と簡単に相談し、改めて樹や他メンバーも交えて協議する予定となっている……というかそうさせた。

「お待たせっ!」

「早くない?」

車に戻ってから5分も経たない内に胡桃はスコップを肩に担いでニッコリと微笑んでいた。遅れていつもの格好の悠里も中から出てくると、背にM700を担いだ樹を爪先から頭より上にある銃口まで眺めて小さく頷く。

「あなたが神崎イツキ君?」

「は、はい!」

「銃を扱えるのね?」

「は、はい……」

「……そう。戦える人が増えるのはありがたいけど、あなた歳はいくつなの?」

面接かよ。内心突っ込みつつ、不穏な動きを見せた瞬間腹を搔っ捌ける位置でナイフを構える。

「16です……」

「私達より年下……雅さん、ちよつといい?」

「……ああ、構わん。胡桃、こいつは頼んだ。変な真似事したらすぐに呼べ、なんなら

金的でもして止めていい」

「はっはっ」

悠里に右袖を引かれながら、車の反対側へと移った。声を聞かれない様に、耳元で話そうとした悠里が背伸びしてくるので俺が腰を曲げて対応する。

「流石に子供に銃を使わせるのはどうかと思うんだけど……」

「俺もそう思う。実際、奴は俺に銃を奪われて形勢逆転されてるからな。まあ、このご時世道徳なんて無意味だが」

「でも銃を取り上げるって、あの子からしたら不安よね？」

「勿論、自分の武器が奪われるのはストレスになり得る」

「……どうしたらいいのかしら」

目を細めていつもの思案顔になる悠里に、俺は帰路の最中に考えていた案を提示した。

1、要事以外銃器は薬室に弾を込めず保管する事。2、同伴者の許可なく銃器の使用はしない事。3、要事以外銃器を持つ等の行為は原則禁止とする。4、散弾銃は雅が持つ。5、仲間に向けた瞬間敵対したと判断し即殺害する。

なんとなく考えつく物を並べただけだが、ある程度効果はあるだろう。そんな思いで悠里に伝えると、しばらく考え込んだ後大きく頷いた。

「うん、そうね。とりあえずはそれで……銃は危ないけど、奪われたと思われないうちになきやいけないし」

「捨てるとも言えない以上仕方ない。ある程度信頼出来たら近接武器も薦めてみよう」

「……でもなんで散弾銃は雅さんが持つの？」

当然その事については聞かれると確信していた。予め用意してあった答えを出しておくが、実の所真意は別にある。

「誤射の危険度も威力も桁違いでな、いざ敵に回すと厄介なんだよ」

「……もう敵になった時の事まで考えるのね」

「銃を持っている以上、力は俺よりも強い。その分、上下関係はしっかりしなければならぬからな」

「もう、考え過ぎだとも思うけど……私達の事も考えてくれるのよね？ ありがとう

♪

眩しい笑顔に思わず顔をそむけ、俺は胡桃と樹の元へと戻ろうとする。その途中、悠里は弱々しい表情を見せながら俺の腕を掴む。

「……なんだ」

「ううん、何でもない。……私は、雅さんの事信頼してるから。それだけ、言いたかったの」

「ん？ 意図が見えないな。どうした急に」

目を伏せてるおかげで感情は読めない。その瞳にどれだけの闇が覆い被さっているのか……どうにも測る事ができない。

俺の質問に答えぬまま、悠里はその場を去ってしまった。一体どんな意味があったのか、胸にかかる靄は……何故だか思考を乱す。何故？ 胸に違和感があるというのに、頭が鈍るのか？ そもそも、何故胸に……心なんて、脳内物質の反応で感じた信号に……いや、胸で感じ取る様にできてるのか。

頭を振って鈍った思考を持ち直すと、俺も悠里の後を追った。

神崎樹、16歳男性。性格は勇猛果敢に見えて無謀な筋在り……しかし尊敬を抱いた者には相応の対応を取る。何故だか、俺はその対象になったらしい。

要観察対象……性格や他メンバーとの交流方法を見るに目立った問題はなし、だが緊迫した状況でどのような行動をとるかは不明。要観察対象、常に見張り、感情を察するべきである。

他メンバーへのセクハラ、接触への警戒を厳とする。悠里にも協力を仰ぎ、過去の調査の許可も得られた。要観察対象、例え忘れてしまっても、この者を見張れ。

そして常に動向を書き記し、異変を察知せよ。悠里達に危害を加えさせてはならぬ

い。

9. 調達

彼はただ一つの信条を己に課し、生き抜いていた。常に強くあれ——手記の初めに書かれた殴り書きがそれを強く表し、彼女達の胸を打ったのだ。

密かにそれは新しく仲間となったイツキにも伝えられ、彼の評価は更に上がった。……だが、伝えられたのはそれだけではない。他にある「違和感」もまた、彼以外の全員で共有し、補うと決め合っていた。

イツキが加入した翌日。様子はまだ変わらず、怪しい動きは見せていない。先程彼女達が着替えているタイミングで車に入ってしまったそうだが……なんとか許して貰えたらしい。幸運な奴だ。

「照準完了、いつでも撃てます」

「好きなタイミングで撃て。ガク引きに気を付けろよ」

「了解」

イツキが銃を手に入れた銃砲店に探索にきてみると、思いの外感染者の数が多かった。よってある程度離れた所から一発だけ狙撃し、銃声によって奴らを集めようという

算段だ。胡桃は付近の住宅に潜伏させ、銃声から数分後に裏口から突入するよう伝える。
ある。

そして狙撃手であるイツキと観測手である俺は、狙撃後速やかに離脱し別方向から再度合流する。イツキは倉庫のキーを知る重要人物……聞き出して俺と胡桃だけで取ってくるのも可能だが、上手い事使われたと思われぬ為にも同行して貰っている。

……本音を言えば銃を扱えるヤツを悠里達と一緒にできないのだが、それは胡桃にも言っていない。まるで弟ができたかのように楽しげに話しているのに、水は差したくなかった。

耳をつんざく程の轟音が室内に響く。ラッパ状のマズルを後付けした銃からはさぞ遠くまで銃声が聞こえている事だろう。現に、銃砲店の前どころかその奥の物陰から感染者が顔を出し始める。……ちよつと多くないか？ そこまで都会って感じの街並みでもないんだがな。

「命中なし……まあいいだろう、離脱するぞ。葉莢は回収しろ」

「了解……葉莢いるんですか？」

「いい音がするからな、上手く誘き寄せられる。マズルは捨てておけ」

イツキは厚紙で作ったマズルをナイフで裂いて床に投げ捨て、ボルトを引き戻してスリングを肩に通す。撤収の準備が整い、目を合わせながら軽く頷き合った。

それから3分もしない内に全速力で胡桃の待つ銃砲店に向かい、微かに開かれた裏口からナイフを手にクリアリングしていく。イツキも同じようにナイフを抜いているが、その手付きは少々拙い。

「胡桃」

「はい」

姿の見えない胡桃を呼ぶと、ひよこつと近くの部屋から顔を出す。

「異状は？」

「ないよ、でっかい銃声以外何にも」

「そうか。……倉庫とやらまで案内してくれ」

「はい」

元氣よく返事をしたイツキが先導し、俺達は奥まった場所にあつた部屋に入る。そこには重厚な金庫やロッカーがあり、いかにもこの店の「商品」達が収められている場所だとわかる。

手始めに右側にある奥から2番目のロッカーの前に言ったイツキは、ダイヤル錠を回し数字を揃えた。3782、全く関連性がない……流石に生年月日や記念日ではないらしい。

いい値段をする工具を使つても断ち切れなさそうな太さの錠が大袈裟な音を立てて

外れると、イツキは扉を開いた。

「うわー、これが全部銃？」

「全部ではないが、殆どが銃の部品だ。殆どストックやフレームだな……ここはカスタムもやってたのか？」

「そうみたいです。俺はこの中からこの銃と上下二連を取ったんです」

「そうか……他は開けられるのか？」

「はい、弾の入ってるあの小さな金庫だけですけど」

そう言つてイツキは入口近くにある金庫を指さす。小さな、と言つてもロッカーに比べれば小さいというだけで、よく飲食店なんかで売上金を保管する金庫よりも大きい。なら他は番号がわからなくて開けられない、という事か。

カウンターがある方に行つてみると、これまた重厚なシャッターによって正面の入口は塞がれている。そのおかげでショーケースや展示されている殆どの銃は無事で、スコープや銃なんかもそのまま残っていた。

「そう言えばイツキはどうやってここに入ったんだ」

「裏口の鍵をちよつと……こじ開けまして」

「手癖が悪いな……今時ピッキングなんてできる奴いないぞ」

「え、雅はできないのか？」

胡桃が意外そうに聞いてきた。それに対し、俺は途切れた右腕を振ってみせる。

「片手でできるか。精々昔ながらのウオード錠くらいだ」

「なんだそれ」

「ゲームとかでよく出てくるだろ、地下ダンジョンとかボス部屋とかの鍵」

「ああ、あれか」

特徴的な形のククリ。RPGにでも出てきそうな剣錠。そして軍や特殊部隊に卸しているメーカーの民間用のサバイバルナイフ。刃物も幅広く揃えられており、思わず食いついてしまう。

特にあの手斧……バランスも良さそうで投げ用にも使えそうだ。似たようなのをどこかの軍が使っていた気がする。

「ここでサブの刃物を揃えるのもいいな。胡桃、お前は特に必要だぞ。スコップ1本でやっていけると思うな？」

「あたしはこれだけでいいよ。それにもし危なくなっても、守ってくれるだろ？」

「限界はある、俺の手を煩わせない為にも……ナイフの1本くらいは持つておいて欲しいものだが。なんなら肥後守でもいい」

「……なんだそれ」

「ジェネレーシヨンギャップというのは残酷だな」

「ヒゴノカミってなんですか?」

追及を溜息で強制的に跳ね退け、カウンターの裏側へ回っていくつかの武器を取る。手斧に頑丈そうなサバイバルナイフ、そして折り畳み式とそうでないステイレットをカウンターの並べ、その内図体の大きなサバイバルナイフはイツキに差し出す。

「感染者用に使え、長生きしたけりゃ決して飯の袋を開けたり缶を開けたりするな」

折り畳み式のナイフは耐久性に問題がある。真正正銘最終手段に使う事になるだろう。その分一体型ならいくら荒く使っても持つだろうし、胡桃に持たせよう。

「胡桃はこつちだ。服の上からタクティカルベルトを着けてそれに着けておけ」

「え? あたしベルトなんて持ってないぞ」

「この店にあるだろ、好きな物を着けろ。イツキもな。戦闘員は全員ベルトを着けてナイフを携帯する事を義務付ける。ポーチも動きが鈍くならない程度に着けるといい」

「おお……本格的ですね、雅さん」

「何当たり前の事を言ってるんだか、遊びでやってるんじゃないんだ。余裕あるなら戦闘用のナイフは2本持つてるといいぞ、安心感が違う」

「重そう……つてかそんなの体に括り付けてあの速度かよ。結構追い付くの大変なんだからな?」

2人にあれこれと装備の事を告げてベルトやポーチを探させている間、俺は銃器が保

管されている倉庫に戻る。さつきは2人の前だから知らぬ顔をしていたが……やはり見間違いではない。

部屋の隅には罨が置いてある。昔ながらのトラバサミや、檻——目当てはその奥にある、日本刀らしき物体。

まさか途中に罨が張られていないか入念にチェックしながら、俺はその白鞘の細長い棒を手取る。ずっしりとした重みは間違いないと金属が使われていると確信できる。それに、この重さは模造刀ではなさそうだ。

「……頼む、刃が潰れてませんように——っ!!」

脚で挟みながら力を込めると、思いの外軽い力で引き抜けた。薄闇の中白銀の輝きを見せる刀身……それを傾けて——

「っしやあっ!!」

鋭利な角度がある事に、俺は渾身の叫びを響かせていた。

「ど、どうしたんですか!?!」

何事かと飛んできたイツキになんでもないと答えつつ、刀を鞘に戻す。少々重いが斧には及ばない、家宝にしよう。

「どうしたんだよ……いきなり大声出して」

「これを見ろ」

先程と同じくカウンターのの上に白鞘を置くと、2人は神妙な面持ちでそれを見た。あまりこういう物に馴染みがないのか、僅かに反りがあるにも関わらず首を傾げる。

「……日本刀、ですか？」

「左様、これは日本刀だ。見た所刃もついている。実はあの部屋に入った時から見つけていてな、『え、あれ刀じゃね？ マジかよあれ絶対刀だよな？ えっ嘘!!? マジテンションアがるんですけど』と内心考えていた」

「お前無表情の癖に心の中じゃそんなテンションなのかよ!!」

「やかましいわ!! 俺だってテンション上がる時だってある! ……普段は落ち着いているが」

「そ、そっか。そうだよな、誰にだって興奮する事の1つや2つ」

「なんかその言い方語弊がないか？」

「いいんですよ雅さん……少しくらい興奮したって」

「だから変な意味で聞こえるからやめろって! つうか手慣れた感じで弄ってくるな新入り風情が!!」

あまりにも大声を出した所為でシャッターがたがたと揺れる。しまった、いくら陽動したとは言え奴らは元いた場所に戻って来る習性がある。まだ仮説段階だが、これ以上の長居は良くないな。

「撤収準備だ、可能な限りの弾薬と先程言った武器装備を調達し拠点へ戻る。5分で済ませろ」

「了解です！」

「……はあ、イツキが来てから活き活きしてるよなお前」

「無駄口を叩くな。ベルトにナイフ括り付けて腰に巻け、ポーチも忘れるな。マジックテープよりバックル式の方がいいからな」

てきぱきと行動するイツキを尻目に、胡桃は浮かない顔でベルトに大きめのポーチを着けていた。直接目を見ている訳じゃないから深くは理解できないが……どこか影がある。というか、会った時からそうだ。——胡桃は、常人とは思えない雰囲気を持っている。

模擬戦の時食らった力……この体格の女が片手で出せる力とは思えない。色々な現象が作用してあそこまでの衝撃になったと半ば言い聞かせていたが……やはりあの力を出せる筋肉があるとも思えない。

「な、なんだよ？ 急に」

それに、匂い。他の面々は女性特有の匂いを発している。だが胡桃からは……辛うじて残っているが弱い。まあ元々の体臭の強さもあるだろうけど。

「……体調悪いのか？」

「はあ？」

「顔色悪くないか？」

「そ、そう……？　暗いからじゃ、ないかな」

バツが悪そうに一瞬だけ目を逸らすと、すぐにはつとしたように胡桃はすぐに視線を俺へと戻す。……曇り、いや淀みか？　綺麗なものだが、どことなく暗い物が見え隠れしている。なんだ、その瞳は。

膨れ上がっていく不安とあり得るかもしれない不幸に、思考が支配されていく。そして最も身近で、最悪な一つに繋がってしまった。

「まさか、俺達が来るまでに噛まれた訳じゃ……ないよな？」

「噛まれて……ないよ。ただちよつと……さ、大人ならわかるだろ？　女の子なら体調の悪い日だってあるんだよ」

「ああ、そういう事か。無粋だったな」

——今問い詰めても効果はないと判断し、警戒心を解くフリをしてみる。すると胡桃も苦笑しながら準備に戻る。手先は微かに震え、いかにも何かを恐れている……これで俺が迫っていれば、どうなっていただろう？　最悪の場合、錯乱した胡桃は力づくでも拒絶するか……自刃してたかもしれない。

そのリスクがある以上この先にはいけない。もし勘違いで死なせてしまつては、彼女

達に顔向けできないからな。

「準備完了しました！」

「あたしも」

バッグをいっぱい膨らませたイツキが胡桃の隣に整列し、右手で敬礼する。そんな姿がおかしくて笑ってしまいそうになるが、なんとか堪えて毅然とした態度でうなずいた。

「撤収する。イツキ、悪いがこれを持っててくれ」

「はい！ 命に代えても守り抜きます！」

「刀なんかを命を懸けるな、どうせ命を懸けるなら横にいるヤツにでもしておけ」

「べ、別にあたしなんか命懸けなくていいから……どうせならそのバカにしとけて」

俺と胡桃が正反対の事を言うと、イツキはどうしたらいいかわからず慌てふためいている。それもまたおかしくて、胡桃は堪らず吹き出していた。

「俺はいい、自分の事は自分でやる。けどもし、女を護れて死ねたなら……本望だと俺は思う。看取られればもつと満足だ、泣いてくれたらもつと嬉しい。価値のあった人生だと思えるはずだ」

「そう、ですね。そうだと思います」

「だろ、なら護るのは女だ。だが自分より若い奴が死ぬのは男でも御免だな。だからお前も安易に死に急ぐなよ、突っ込まれちゃ護れないからな。それに最初に死ぬのは俺だ」

「自分が一番死に急いでる癖に……その破滅願望どうにかならねえのかよ、お前が死ぬくらいキツイのにあたし達が生き残れる訳ないだろ」

グチるように言った胡桃は一人で勝手に裏口の方へと歩いて行ってしまう。呼び止めようとする間もないくらいに早足で、まるで何かから逃げた様だった。

「胡桃さん、雅さんの事好きみたいですから……死ぬとかそんな事言わない方がいいですよ」

「好き？ そう見えるか、ただ情が厚いだけだぞ。まあ確かに簡単に死ぬだとかは言わない方がいいが……あれを好意と捉えるとは、若いな、お前も」

「うーん、そうですね？ どう見ても好意にしか感じなかったんですけど」

「そうやって勘違いするなよ？ 車内恋愛は禁止だ、良い事ないからな。例え相思相愛でも、周りが迷惑する」

「う……やっぱりそうですね？ はあ、雅さんが許してくれるとは思いませんでしたけど」

ん？ その言い方だと誰かを少なからず好いていたと言う事か？ どちらにせよ、こ

のグループでは諦めて貰う他ない。彼女達は同性ながらの繋がりによって精神状態を維持している。深みには嵌らず、しかしある程度依存する事によって辛うじて後ろ向きにはなっていないだけだ。

そのバランスを崩してはならない。悠里が異変に見舞われた時も、彼女達は崩壊しかけているんだ。もつと強い依存対象ができれば……例えば、恋だとか。

1人が抜けたその穴は、楔が抜けた状態に等しい。どうなるかなんて——わかりきっている。

「……俺なんかが許可するのもおこがましいが、やめておけ。お前じゃなく、彼女達に長生きして貰いたければな」

「はい……それに、遅れてきた僕が入り込む隙間なんてありませんし」

「隙間は腐るほどあるだろ。相関図作っても俺は一番端にちよこんといる存在だぞ」

「ええ？ 雅さん意外と鈍感なんですな、たった1日でも見てればわかるのに」

「夢見がちだな、若い証拠だ。そんなもの、そのうちどっか行っちゃまう。期待なんかするな、外れた時にショックが大きくなるだけだ。行くぞ、撤収だ」

近くに立て掛けておいた斧を肩に担ぐと、顎で出口の方を指した。バッグと新しく調達したポーチ、それに入りきらなかった物をいっぱい抱えたイツキを先導し、俺達は帰路につく。

その頃、車で待機している3人は小さな会議を開いていた。議題は、「男女をどのようにして仕切るか」。雅だけならまだしも、年頃の男も新たに加わった学園生活部は未曾有の危機、の危機に瀕している……と考えたためだ。

「車を2台に別けるとかありますけど、はぐれてしまったら危ないですし……燃料の消費もかさみますよね」

「ええ、無限という訳ではないものね。この車も手狭になってきたし、元の持ち主には悪いけど乗り換えるべきかしら」

「えー！ 私これ気に入ってるのにー」

由紀が「ひんしゆくだー」と抗議する中、美紀と悠里は腕を組んだり頭を抱えたりとしながら知恵を振り絞る。だが、これと言った名案は浮かんでこない。

男女、という性別の差は世界中どこにでもある差別だ。特に男性は、魅力的な女性の前では理性を失い本能のまま行動する……と判断されている事もある。実際は違うが、これも個人によって度は変わる。

それがよりにもよってこの世紀末な状況ならどうだろうか？ 秩序は崩壊し、ほぼ人と同じ見た目を薙ぎ倒したり逃げたりするこのご時世で以前の常識は通用しない。

それでも雅は割と常識的な所はあるが、所々冷徹な点も垣間見える。その内に秘めた

闇も、悠里にとつては不安の種だ。

「雅さんは大丈夫ですけど、イツキって子は……」

「あの子は雅さんに随分懐いてるみたいだから、言う事は聞くとと思うわ。でもその雅さんも、これからどうなるかはわからない」

「……信用していい訳じゃないんですけど、そうですね」

「そうですね。いつそ誰かとくつつけば心配なくなるかしら？」

悠里の何気ない発言は、本人も含めてその場全員の認識を揺らした。彼が誰かと付き合うとして、その相手はいったい誰なのか？ 現実的に考えれば普段から共に行動する事が多い胡桃。だが、悠里や美紀、由紀にも気遣いを忘れず常に優しくあろうとしている。

普通なら普段の過ごし方から誰を一番好んでいるかわかるものだが、全く分からない。というのが彼女達の内心だ。

「く、胡桃ちゃんかなあ？」

「胡桃先輩でしようけど、傷の事は……どうするんでしょう？ 噛まれた痕なんて見つけたらあの、問答無用で……」

「……やりそうですね。でも話を聞くぐらいはしてくれと思うわ、それに傷も少し塞がってるし、今にやられた傷じゃないってわかんと思うの」

「でもわかんないよ？　もし前みたいにおかしくなっちゃった時にバレたら……」

「おかしくなったって……その言い方はないと思います由紀先輩」

「う……口が滑った……ごめん」

悠里は胡桃の腕の傷の事も含めて、もし雅が誰かと付き合ったら……と想像してしまふ。楽しいに、殆ど見せない笑顔をその人間にだけは見せて……そんな光景を思い描いた瞬間、胸に何か針が刺さったような感覚を覚えた。

まさか自分が嫉妬するとは思わず、予想外の感情に内心狼狽えてしまふ。なんとか顔には出さずに済んだが……いつの間にか、淡い物を抱いていると気付いた。

「傷の事は後々折を見て打ち明けるとして——今回はここまでするまでにおきましよう？

ちよつと早いけど、胡桃達が帰ってきたらすぐご飯が食べられる様に準備しようと思ふの」

「賛成です。今日は大収穫になるぞって雅さん言っていましたもんね」

「さんせいっ！」

夕食の準備に取り掛かり始めた3人は、かねてより雅達の帰りを待つ。

——今正に、胡桃達が危機に瀕しているとは知らぬまま。

10. 再会

「この部屋に入れ、鍵は掛けるよ。イツキ、絶対に胡桃を護れ。俺は少し様子を見てくる」

「馬鹿！ 何言ってるんだ！ お前絶対戦いに行く気だろ!？」

大声を出す胡桃を睨んで制すると、一瞬の隙を突いて身を引く。この状況で全員がこの部屋に入って隠れても、見つかった時に打つ手がない。

それなら、少しでも傷を負わせるか数を減らすか……いつそ明後日の方向まで引つ張る必要がある。その為に今一番使える人材は……俺だ。

「雅さん、俺なら狙撃できます。俺に行かせてください！ 片手しかない雅さんに無理は——」

「500m狙撃が確実にできるようになったら任せよう。今は無理だ、子供らしく影で震えてろ」

「絶対駄目だ、行かせるなイツキ！ 今までは運が良かったんだよ！ 次は絶対に……」

「胡桃、この世に絶対はない。俺が合図するか、安全だと確認できるまで移動は禁じる。

安全が確認できたら真っ先に車に戻って移動しろ、悠里達も危ない」

「ダメッ！ 行くな雅っ!!」

「……また戻ってくる、約束しよう。どんな姿になっても、絶対“会いに行くよ”」

2人を突き飛ばして扉を無理矢理閉めると、ノブを斧で打って少しだけ歪ませる。これで少し開けにくくなるだろう……中からも同様だが、胡桃の力なら開けられるはずだ。

どうして今こうやって逃走を凶っているのか……それは俺達が銃砲店から出て30分もしない頃の事だ。

俺達は浮かれていた。絶大と言える火力を持つ銃の入手、そして弾薬も豊富に入手し、当分困らない戦力を得た。

俺自身も白鞘の日本刀を手に入れ、仲間達の護身用ナイフも手に入れて装備は潤沢になった……俺達、『学園生活部』の戦闘力は格段に向上し、生半可な脅威など跳ね退けられるようになったと。

しかし、帰路の途中俺達はある一団と出逢ったのだ。

「武器を置いて、持っている物を全て渡して貰おう」

金髪に染めた男は明らかに安物のクロスボウを手に、他に3人の生存者を連れて俺達の前に立っていた。

「断る、と言えば？」

見る限り飛び道具を持つのはあの金髪だけ。他は皆木刀や工具で武装している。クロスボウを持つ男の腰には矢筒が提げられ、5本のボルトが入っている。今装填されているのも含めて、装弾数は6発。

取り回しの良い武器であれば、最初の1発さえ無力化できれば押し勝てる。それこそ、何人かは——いやあいつら全員が死ぬ事にはなるが。

「誰か1人死ぬ事になるな。おっと、馬鹿な真似はするなよ？　俺は今まで狙いを外した事がないんだ。一瞬で頭に穴が開くぞ」

「ほう、触れる距離で撃ったのかな？　それなら当然だな」

「……ふざけるなよ、薄汚い恰好の癖に大口叩いてんじゃねえぞ」

リーダーは思いの外気が短かった。片手でクロスボウを格好良く構えているつもりだろうが、その構えは腰が入っていなければ照準さえ覗いていない。その状態で当てるならやってみろ、と言いたいくらいの馬鹿な格好だ。

「ああ、イツキ。持っている物を置いて、本物の構えを見せてやれ」
「了解」

小声で発砲を許可すると伝えると、イツキは微かに頷いた。左側に立っていた胡桃を数歩下がらせ、斧の刃に近い部分を持って重心を調整する。

あのクロスボウ、よく見れば弦はワイヤーではない。ならパラコードかと思えば、そ

うでもないのだ。なら何か？ スリングショットなんかで使うゴムだ。そんなものでいくらか重量のあるボルトは飛ばせない。弾速も玩具おもちゃも同然だろう。

イツキはゆつくりと手に持っていた袋やらを地面に置くと、瞬時に右肩に掛けてあつたM700を腰だめに構える。そして一瞬でボルトを引いて装填すると、肩に付けてしやがむと同時にスコープを覗き、照準する。

「っ!? それ銃——」

「目標、金髪の右手。撃て」

「了解！ 撃ちます！」

乾いた音と同時に、目前では血飛沫が舞っていた。俺の言った通りに、金髪の男の右手は弾けクロスボウを落とす。すぐに装填音が聞こえ、直後に空薬莖が転がるいい音が聞こえた。

「これ以上痛い思いをしたくなければ退いて貰おう。利き手が潰れるのはさぞ不便だろうが……まあ俺には関係のない事だ。次は殺す、だが楽に死ぬるとは思うな」

持っていた斧の刃を返して威圧してやると、チンピラ共は容易く恐慌状態に陥つてくれた。敵部隊の戦意喪失、この勝負は俺達が勝った。後は報復されないよう入り組んだ道を通り、車へと帰るだけだ。

「くそお!!」

——だが、予測は外れたのだ。

「——!? まずいつ、胡桃!!」

「雅さんっ!!」

パアツツ。

息が切れる程に走る。アパートに2人を押し込み、俺は追っ手を振り切る為あえて囿りとなった。車とは正反対に走り、拳銃を装備するあのチンピラ共……どこかの大学か、それとも自発的に組織した何かなのかわからないが、若いメンツばかりで体力がある。逃げ切るのは難しかった。

「いたぞ!!」

「クソツ」

度重なる銃声。幸いにも被弾はなく、あの時背中に食らった1発のみに留まっていた。だが最初は良かったものの、出血は路面に痕を残す。この丈の長いコートを伝うとなると、それなりの量だ。早い所止血しなければ血が足りなくなる。

——が、止血するにはまず隠れる必要がある。その為には痕を残してはならない。どこかに立て籠もるのもありだが、救援はこないんだからな。

背後で響く銃声に怯え、柄にもなく前進を震わせる。なんと無様な……どんな時でも余裕を見せて、どんな相手でも圧倒するのが信条だが、応戦出来ない以上逃げに徹する他ない。

クソツ、だからと言ってこのまま逃げ続けるにも限度がある。体力も限界、止血もしなければならぬし敵の数は増えていくばかり。もしかしなくてもこれはピンチというものではなからうか。

いやこれは明らかにピンチだろう？ 状況的に不利は確定で死にかけている、確実にピンチだ、間違いない。

途中にあつた路地を曲がり、近くにあつたゴミ箱を倒して先に進む。自分では完全に避けたつもりだったが、目測が甘かったのか蹴ってしまった。

「追ええっー！」

音で居場所を感知され、甘い狙いの「38SP1」が肩を掠める。アドレナリンで抑制された痛みがズンと伝わってくるものの、特に意識する事もなく全速力で次の角を曲がった。

「悪く思うなよ……！」

角を曲がってすぐの場所にあつた家屋の玄関が破壊されてる事に気付き、中に入る。少し古いが曇りガラスの玄関を閉じると、すぐ外で何者かが走り去っていく足音が聞こ

えた。

だがこちらには気付かなかつたらしく、幸いにも足音は段々遠くなっていく。

「……………つはあ、はあ」

気付かない内に息を止めていたらしい。安心して死臭と生モノが腐った空気を吸い込むと、改めて気を引き締めて中の探索に移る。

中には珍しく感染者の気配はなかつた。平屋建てらしく、どこを探しても感染者の姿はない。ただ死臭だけが辺りに立ち込めているが、見た限りその原因となる物はどこにもなかつた。

しめた、と少し奥まった位置にある居間でバッグを床に降ろし、テープとツ包帯を取り出す。見れば、偶然中にあつた双眼鏡の一部を貫いて弾丸は背中に着弾したらしいかつた。

「はあ、また医療品が減るのか……」

愚痴を垂れ流しながら、包帯を巻く為にバッグのベルトを締めて巻く補助をしながら手当を行う。ガーゼの位置は適当だったが、違和感の位置と大体重なってるから大丈夫だろう。仮に外れてたとしても、包帯は必ず当たる位置に撒いておいた。

時折外の物音に注意しながら、なんとか止血……もとい時間稼ぎを終わらせる。

これで当分は血液がガーゼか包帯に吸われて地面には落ちない筈だ。どちらにしろ、

腰に布を一枚挟んでおいたから数十分は持つ。だとしても見つければ全てが水の泡だ、これらは一層発見されない様に注意しなければならない。

それはともかくとして、奴らの戦力を再評価する必要がある。最たる使用武器は主に木刀や鉄パイプ、自動車に使う工具だが、何かの拍子に銃を使う奴がいる。

恰好や装備にある程度階級が物が高い者に限定されるようだが、リボルバー式の拳銃を使用するらしい。……この国で手に入るリボルバーとすれば、警察で採用されているS & amp; WのM60、それかM360J——サクラ。

どちらも装弾数5発で使用弾薬は「38SP」弾。38口径の比較的小口径な部類に入る拳銃弾だ。以前はそんな小さな口径で大丈夫なのか、とも思ったが……今となつちや、45ACPとかでなくてよかつたと思つた。

発砲音の軽さから見ても間違いないだろう。現に、脳内物質で抑制された俺でも冷静に止血できている。車に戻れば、彼女達が卒倒する傷ではあるが……死なないだけ幸運だ。

「止血は完了した。後は敵を撒いて戻る事だが……いかんせん数が多い。例え見敵必殺と心掛けたとして……」

自分に言い聞かせる為にも、あえて独り言を漏らす。ある程度落ち着いてはいるが……あまり意味はなかつたらしい。これもアドレナリンのおかげだな。

「まずは敵対勢力から逃げ切る事。敵の所属を聞く暇はない……胡桃達の為にも、まずはあのアパートに戻る必要がある」

あのアパートからは——色々道を曲がったりはしたが、少なくとも1kmは移動している。今まで隠れ潜んできたイツキもいるし、隠密性は申し分ないだろう。なら一度あの部屋に戻り、2人の所在を確認してから悠里の元へと戻るべきだ。

「よし……」

自分の頬を叩き、気合を入れる。大丈夫だ。いつもより慎重に……人が通るとは思えない場所を時間を掛けてでも通れば、必ず帰れる。

相手は素人だ。特に専門的な訓練を積んだ訳でも——それこそ本格的な射撃訓練を何十回とした訳でもない。それは今までの命中率が物語っている。

だからここは——本格的な知識を取り入れた俺こそが……俺が有利となる戦場だ。

玄関ではなく、縁側にあったガラス戸を開けて外へ出る。手入れをされず荒れた外垣の僅かな隙間を見つけて隣の敷地へと入り込み、死角を利用して次々と移動していく。

流星に家を1軒1軒調べてはいない様で、奴らは今も道路を駆けずり回っているに違いない。ただ気まぐれで……特に察しのいい輩が調べに回ってくる事も意識せねばならない。

1時間近く掛けて2人と離れたアパート近くに戻ると、もう追っ手の姿はなかった。

幸運ではあるが、それはほぼ全員に情報が渡っている証ともなる。30分みすればほぼ全員に場所が割れるとして……その時間のロスは有効活用する手立てにもなりえるな。

3階建てのアパートの201号室の扉を3回ノックする。しかし返事はなく、試しにノブを捻ってみると容易く開いてしまった。

流石に移動したか。一応中に入ってみると、名kには何も無い。ただ廊下には感染者の死体が1つ転がっており、大きな血溜りの先に足跡はなかった。

俺なら、少し凝った場所に痕跡を残すだろう。そう思って玄関のすぐ傍にある靴箱を開けてみると、1枚のメモが見つかる。

—— 搜索する人数も減ってきたので先に車へ戻ります。2時間後に午前中に相談していた場所に移動します。

午前中？ 今日の前中に話したのは食料と燃料の調達について……その目途を立てたのは、銃砲店から北に約2kmのスーパーだ。30分歩いたとしてそのペースは少々早め、間違いなく1kmは移動している。だとすると、目的地は3番目に近い業務用スーパーだ。

中々、頭のいい少年だ。1番近くではなく、3番目を選ぶところが用意周到さを感じられる。雑談の途中に捻じ込んだ事も、しっかり覚えていたか。

メモをライターで灰にすると、斧を持ち直して部屋を出る。追っ手はほぼいなくなっ

た。しばらくすれば搜索範囲を拡げるだろうが、その前に圏外へ出れば問題ない。もし見つかったとしても……

「3人程度なら……抹殺してやればいい」

既に慣れ切り震えなくなつた手で斧を握りしめる。——いつかその報いがくるとしても、今だけは。この先もそう思うかもしれないが、いつしか本当に1人になつた時に受けよう。せめて彼女達と一緒に居る時だけは……それは、欲張り過ぎか。

荒田案気持ちを胸に磔にするような形で扉を開ける。廊下に出て左右と眼下に広がる道を見渡すが、相変わらず追つ手はいなかった。

よし、人目はない。この隙に乗じて少しでも距離を離せば——いや、ここは時間が掛かっても慎重に行くべきか。途中の住宅地を梯子しながら、適度に索敵を嘯ましつつ移動しよう。そうすればいつかきつと……

その頃。無事車へと戻つたイツキと胡桃は悠里達に事の顛末を話していた。厄介な生存者に出くわした事、そして雅が——背に1発受けながら囀を引き受けた事を。

「……まさか、そんな」

「本当です。雅さんは……僕たちを逃がす為に体を張つて——」

「……考え得る、いえ、もう既に考えられた行動ね。あの人なら、自分を犠牲にしても

逃がしてもおかしくない……」

冷や汗を一筋流した悠里は、肩で息をする2人を前に顎に手を当てて必死に考える。彼を助ける方法……しかし生半可な手段を取れば……彼の事だ、きつと常人では考えない行動をしている。素人考えでは却って邪魔をするかもしれない。

とは言っても何もしないと云う訳にはいかない。捜索隊を出そうにも、私達は素人だ。唯一銃を扱えるイツキ君でも——以前彼が言った様に、1人にするのは危ない。「待ちましよう。イツキ君が書き置きをしたスーパーの裏に車を停めるわ」

「救援に行かないんですか!?」　せめてこの近くの家に伏兵を——」

「それが外れたらどうするの?　彼が戻れば、待ち伏せに出たあなたを呼び戻しにまた出て行ってしまおう。ここは合流地点に……雅さんを信じて行動するべきよ」

短い付き合いではあるが、イツキは反論できなかった。殆ど戦闘や戦術の知識がない彼女達でも雅の行動倫理はある程度理解している。それがある程度理解の及ぶイツキなら尚更だった。

雅は……何かあれば率先して向かっていく。例えそれが自らを死に追いやる選択だとしても。それは、1発背に銃弾を受けていても尚囿を引き受けたのが何よりの証拠だ。

「……雅さん」

イツキを含め、その場にいた全員が息を飲んだ。雅が銃弾を食らっていた事。多数の敵に追われている事。あらゆる要因を含め、元からある信頼も重なり、平常心を奪うには十分だった。

「あそこだ！」

「動くな！」

予測は甘かったと言える。創作地点を大幅にずらしたと思っていたが、少数は元の地点に残っていた。この組織を管理する指揮官は余程有能化、運がいい。

「——はあつ！」

銃を持つ敵を優先的に攻撃しながら、俺は度重なる戦闘を乗り切っていた。殺す訳ではない。出来る限り気絶や捻挫、酷くても骨折に努め殺すのは最小限に留める。それでも危ない時は凶らずとも死者が出る。

いつもよりも気を張り、隠密性も捨てて息の上がった状態で斧を振るう。その度に昔習った剣道と同じ掛け声が出ていた。

「退け、お前では相手にならん」

近接武器を持つ敵は戦意を喪失するとは言え、生きて返す以上情報は漏れる。見敵必

殺と心掛けたのに出来る限り不殺を心掛けるのは情けか、己の甘えか。どちらにしろ不利な事に変わりはない。

報告される前にその場を移動しようとするとなたな敵に発見され、戦闘になる。それに逃げる為にまた殺さず……繰り返した。

敵は常に2人で行動している。編成は必ず拳銃と近接武器。発砲前に警告は欠かさず、静止しないと確認を取ってからハンマーを上げる。……明らかに統率されている。それも、かなり影響力の高い人物だ。

「はあ、厄介な」

上手く統率しているヤツが上に居る限り、部下もレベルが高くなる。上には必ず幹部が付き、下っ端に命令が行くまでに凶らずとも命令は簡略化、もとい修正される。

だからこそ、こいつらは行動こそ少しだけ先回りする事が出来る。道なき道を行く、その手段は潰された。道と家屋の壁を抜ける方法を失った今、残るは……

「屋根か、地中か。この地域は地下鉄がないから、残るは屋根……難しい」

生憎俺は極端な高所恐怖症だ。自分の身長を含め3mでも恐怖を感じる。もつと言えば、2mの時点で微かに跳ぶのも躊躇われるのだ。自分の身長+30cm……なんとも言えないボーダーに屋根を伝う手段は途切れる。そもそも屋根を使えば降りる場所や発見される確率も上がる。特に今回は避けた方が良い。

適度にルートを変えながら目的の地まで進むうとするが、その途中まで前とは違いことごとく発見されてしまう。まるでいちいち民家の庭に人を置いている様な、そんな錯覚をするくらい頻度だ。

「ほ、本当にきたー！」

「動くなよ!! ゆっくり立って武器を捨てろ！」

諦めて投降する姿勢を見せながら、隙を見て拳銃を持つ人員の腕や手首を叩いて回る。銃器をすべて回収していたら今頃どうなっていたか……今更損得勘定なんてしたくないが、余裕のある時に何発か抜き取ってはいる。大元となる銃器も一丁はバッグに仕込んではいいるが、これ以上は重量の関係から難しい。

必死に命乞いをする敵に蹴りを入れて気絶させると、そのまま逃走する。

今手元にある「38SP1」弾は20発ちよつと……本体に装填されている分も含めて人間を相手にする余裕はある。ただ片手と、全く扱った事のない銃というハンデが大きい。

それに何より、武器で人を打った感触もないまま人を殺す事に慣れてしまったら……俺はただの殺人鬼か殺しを楽しむ狂人になってしまふんじゃないかと思う。

ここは少し無茶をしても枷を嵌めなければならぬ。俺に何十発と撃ってきたこいつらでさえ、人を撃つ事には躊躇って見えた。だからこそ俺はこうして生きている訳だ

が……そんな甘さも、捨てるべきなのかどうか悩む。

「うわあつ!? で、出たっ!」

「騒ぐな」

道に出た瞬間1人の男と遭遇し、逃げられる前に柄で足を払い転倒させる。周囲に人影はなく、はぐれてしまったのかこいつは1人で移動していたらしい。

ぶつけた後頭部をおさえて悶える男の足を掴み近くの建物の影に引きずり込むと、斧からナイフに持ち替えて首筋に突きつけた。

「1人か? お前達は何故そこまでして俺を追う。心当たりがない訳じゃないが、流石にやり過ぎだろう」

「ひ、1人じゃない! 近くに仲間が沢山いる!」

今にも死にそうな顔で答える男は目を見なくても虚勢だとわかった。こいつがどんな動きをしていたのかはわからない、だがあそこまで2人組にさせていたのに、こいつだけ1人で行動しているのはどう見ても異質だ。

服装を見ても代わり映えもしなければどこか洒落てる部分もなく、寒さを凌げれば何でもいいという恰好だ。右腕には色落ちして最早元は何色だったのかわからない腕章。

俺ですらある程度地味な色合いにしているとは言え趣味でコートを着ているが……こいつ、さてはカーストが低いな。

「じゃあ急がせて貰う。もう一度だけ聞く、何故こうまで必死に追い掛ける」

ナイフの側面を首に当ててやると、びくつと震えてからゆっくりと口を開き……話し始める雰囲気になる。

「お、お前が……感染者だから。片腕で斧を持ったコートの男、俺達がずっとそいつを探してた……」

「……何故俺が感染してると」

「お前から話したんじゃないのか？ 避難所に受け入れて貰えず、お前は行方を眩ませた。でもその後、ランダルの社章を付けた研究員がきて……過去に噛まれても生き残っている奴がいれば、差し出せって」

「見返りは？」

「もつと安全な場所と、食料の提供……」

——なるほど。だから躍起になって俺を追うのか。統率された男達も異常とも言える先回りも、それを成す士気もこれで納得できる。だが、問題はこの追跡力の高さだ。最初は痕跡も残さない様に移動していたのに、奴らはほぼピンポイントで網を張ってきた。それを可能とするのは……

「どうやって俺の動向を掴んでいる」

「……お前の事をよく知ってるヤツが、参謀だからだ」

「——なに? ……まさか」

俺の事をよく知る人物。それだけでほぼ特定できる情報は、なんとも信じ難いものだった。……俺は昔から人と関わる事を苦手としていた。引越しや転校も多く、深い所まで知り合った仲はそうそういない。

そして俺の行動を戦術的に先読みする程の理解と、拳銃の使用許可まで出し2人組を徹底させる用意周到さ。……間違いない。

「……まさか、^シ忍^ノ?」

「そうだよ……! お前のその腕をぶった切った奴だ! 恨んでるんだろ? 噛まれたから、腕を切り落とされたんだろ? 麻酔も無しで!!」

「恨んでなんかいない、むしろ罪悪感すら感じる。腕を切断しろと言ったのは俺自身だ——ちよつと位置はズレたが、今も感謝している」

恨むものか。あいつには辛い思いを散々させてしまったが拳句、果てには俺が死んだと嘘を伝えて去ったのだ。……と言う事は、伝言係はきちんと仕事をしなかったか。事後の守秘義務までが嘘の伝言の要だと言うのに。

「なるほど、大体わかった。最後にお前がどういう役割なのか。ついでに俺の動向をどこまで掴んでいるか教えてほしい」

「お、お前が他の生存者と一緒にいるという事はわかってる……車のある場所も。今頃

別動隊が確保しに行ってるよ……」

「ほう、一応聞くが車の場所は河川敷近くの空き地か」

男は小さく何度も頷くと、冷たい殺意から逃れようと身をよじる。ああ、こいつがどういう役割なのか聞いてないが……まあいいだろう。

瞬時にナイフを逆手に持ち替え、ガラスブレイカーとしての役割も持つ柄で顎を打つ。ちよつと強くやり過ぎた感じもするが、狙い通り白目を剥いて眠ってくれた。

起きない内に上着のポケットを漁ると、中からじやらじやらと弾丸が出てくる。だがその弾はどれも一見「32ACP」に似ているが、そのどれもが一回り小さい。

「……………？　なんだこの弾？」

底部を見ると、少々汚れているが、32……と刻印されているのが見える。そこでやつと「32ACP」弾だと気付いた。もしかやと思ひ男の腰にあるポーチを漁ると、金属質の物が触れる。

それをゆつくり引き出してみれば——黒星か？　後ろ側が丸みを帯びた特徴的なフォルム。でもフロントを見るときゅつと引き締まっついて、いかにもガバメントだと言える形状ではない。

頭の中で知り得るすべての拳銃を思い出していくが全く心当たりがない。観念して銃本体の刻印を見ると、ブローニングと刻まれている。

ああ、昔警察が採用していたM1910だ。今じゃ殆どスクラップになつていて思つてたが、運よく免れたのか、予備役として保管されていたのか。どちらにしろ今の俺には大変ありがたい自動拳銃だ。

少し時間を食うのを承知でバッグから銃撃で穴の開いた缶詰や工具、その他あまり必要じゃない物を切り捨ててポーチからバッグへと荷物を移すと、すぐ抜ける位置に銃をしまう。マガジンは3本……予備弾薬は30発以上。これだけでも大漁と言える。

問題はこの後撃ちまくる状況になるかもしれない事だが、流石に自動拳銃を向けたら投降してくれるだろうか？ ……流石にそんな甘い状況はないか。

「うーん……」

痣になつた部分を押さえながら悶える男。俺はすぐさまその場を去り、3本道を横断してまた家屋の敷地を乗り越えていったり潜ったりしていく。流石にプロックを変えれば対応できないのか、待ち伏せどころか巡回すら遭遇する事はなかった。

その分、また別の脅威と鉢合わせる事にはなるが……銃を持つているかよりはマシンだ。最近は俺も気配を消すのに慣れたのか、感知される前に潰せるようになってきたしな。

悠里達はいくらか時間を掛けて、待ち合わせ場所であるスーパーに到着した。決して

目立つ場所ではなく、いくつか車が放置されている区画に車を停めて近くにあったボロボロのブルーシートをフロントに被せると、胡桃はスコップを、イツキは銃を持ってそれぞれ周囲の警戒へ出た。

「……悠里先輩、雅さん撃たれてるって、言っていましたよね？」

「ええ、言ってたわ。走れるなら大丈夫だとは思うけど……もしかすれば」

「そう、ですよ。出血が多ければ……雅さんならそのくらいわかってるでしょうけど、追われてる身じゃ」

イツキが持ち帰った折り畳み式のナイフを手に、悠里は入口の近くにある椅子で顔を伏せていた。美紀の声も、由紀のすすり泣く声も、どこかの空で……必ず生きて帰ってくると思いながらも不安になってしまう。

信じていない訳じゃない。それどころか今までの誰よりも強くて、堂々とした人だと思う。それが表面上の、取り繕ったモノでも……そうあろうとすることに意味があると思う。

でもそんな人でも限界はある。刃物で切れば怪我をするし、血が出る。血が沢山流れれば貧血にもなるし、いつか死んでしまう。

「……ちゃんと、止血してるわ」

「はい……ライターで炙って無理矢理止血したりしてそうですけど……背中じゃ無理で

すよね」

「火は……あの火は怖がつてたから。もう——覚えてないでしょうけど」

いくら短い時間でも、すごく濃密な過ごし方をしてきた。それなのに、彼は殆ど覚えていない。兆候はあった……つい昨日のことまで忘れていた日もあった。その度に、私達は彼に合わせていた。

原因はわからない。もしかすれば由紀ちゃんみたいに、何かから逃げているのかもしれない。……でも、忘れがちになったのは確実に「あの日」からだ。

あの日、遠藤と出逢った彼は……あの男の最期の言葉で我を失った。私も人の事は言えないけど……私自身の行動も引き金になったのだろう。でもああしなければ、あの男は彼を殺していたかもしれない。

結局とどめを刺したのは彼だけど、あの感覚は今もこの手に残っている。引き抜く時の柔らかさと言い、流れる血の温かさは……少しだけ——

その先が頭の中に現れる瞬間、扉が勢いよく開け放たれる。彼が帰ってきたとすぐさま頭を上げるが、車内に入ってきたのは見た事もない男の人だ。

「……どうも、ちよいと邪魔するぞ。俺は「忍」、以前雅と一緒に行動していた——まあ、親友、つて言え方がいいか? とにかく元仲間の1人だ」

「雅……さんの?」

あの人と同じく灰色のコートを着たその男は、彼の物より綺麗なコートポケットから煙草を一本取り出すと、昔ながらのライターで火を点ける。そして深く息を吸うと、白く煙たい息を車内に充満させた。

「あ、此処禁煙か？ 禁煙なら悪い、この一本だけ吸わせてくれ。朝から吸えてなくてイラつき始めてたところなんだよ」

「仲間って、本当ですか」

美紀がナイフを手に一歩前へ出ると、忍と名乗った男は眉を寄せる。……仕草や話し方が少し似て……似てるどころか、殆ど共通している気がする。掴み所のない雰囲気とか、視線の動かし方。でも一番はその背にある武器。

「ああそうだ、あいつは俺と同じく元々この街の住人じゃない。あの時偶然旅行にきてたんだ。他にももう一人連れてな」

「……そのもう一人は今どこに？」

「避難所にいるよ。定員間近で不要人員の切り捨てが始まってな、でもあの人はすごいデキる人だからそうそう切り捨てられないだろうけど。ま、とにかく元気でやってる」

「じゃああなたは……何をしにきたんですか」

「あいつを連れ戻しに来た。感染してもなお、理性を保ち“成らない”人間。いわゆる

『抗体持ち』でなあ……今の人類には必要不可欠なんだよ」

ならない？ 聞き慣れない言葉を聞いて、どこにも主語がない事に疑問を抱く。そういえば、彼も私達と会った時に言っていた気がする。……次に会う時は、なった時かもな、とか。

なる、というのがそもそも何なのか。言葉の前後からゾンビ化だとはわかるけど……もしかして彼らはあのゾンビの事を深くまで解明しているんだろうか。

そう考えてもおかしくはない。なんせ感染法から進行の症状まで事細かに研究していた人の仲間だ。どんな実験や観察をしていたかはわからないけど、人より多く知っていたとしても特別驚かない。

「抗体……？」

「あいつはゾンビ化のウイルスに対して抗体を持っている。……ワクチンを手に入れ、接種したからな」

「え!？」

私と美紀は同時に驚きの声を上げていた。……彼が、ワクチンを打っている。それがもし胡桃が打った物と同じだとしたら……抗体を持つ人間を狙うこの人達にとつて狙いは雅さんだけじゃない。もし胡桃が状況を見て、打開する為に突入して来たら……取り押さえられたらきつと身体検査も受ける。右腕の傷は一瞬でバレるてしまう。

「あいつがどこにいるかわかるか？」

落ちそうになった灰を慌てて携帯灰皿に落としながら聞いてくる男に対して、私達は首を横に振った。

「……そうか。なら少し待たせて貰ってもいいだろうか？ どうせこの場所も知らせてるんだらう、あの怖いお子さんもそこそこ頭が良いらしいしな」

「まさか、イツキ君を……」

「捕縛した。かなり物騒な物も持ってたからな。……つたく、雅も馬鹿やるなあ。聞けば銃相手に格闘戦挑んだらしいじゃないか……流星にヒヤツとしたね、死なれたら困るのに」

「そんな彼を撃つたのでしょうか？」

「当てるな、とは言ってたんだけどね。まあ人間ミスは付きものさ、あいつも9ミリ弾で死ぬタマじゃないだろ」

へらへらと笑う男には、信頼かただの楽観視かわからない意思があった。やがて火を消した吸殻を灰皿に入れてまたポケットに突っ込むと、その際にちらりとコートの下にある物体に悠里が気付く。

「……あれは、もしかして銃？ 雅さんなら今の一瞬でもどういう銃なのか判別できるんだらうけど、私じゃさっぱりわからない。でも相手が銃を持っているのなら……今の

私達じゃ分が悪い。散弾銃もイツキ君が持ってたし、距離が近くても外にもいっぱい人がいるかもしれない。

「無理言うけど、怖がらないでくれると嬉しいね。俺も雅さえ連れ戻せばすぐに帰るよ」
「……みゃーくんは、連れてかせない」

私達の寝室から由紀の声がした。涙ぐんだか弱い声に、目の前の男も特に警戒する事なく見やる。

「はっ!? バカッ!!」

すると男は瞬時に横つ飛びで車の外へ飛び出すと同時に、周囲に居たらしい人達を集め始める。

何事かと思い由紀ちゃんを見ると——その手には大きな拳銃が握られていた。

「由紀先輩!? いつの間にそんな物……」

「みゃーくんに教わったの、銃の撃ち方と、人に向ける時の方法」

「ダメよ由紀ちゃん! 銃を置いて!」

「いやだっ! みゃーくんと胡桃ちゃんがいなくなったら、私がいみんなを護るんだって……約束したから! ……でも、これほら。オモチャだから」

最後だけ小声で銃を軽く振って見せた由紀ちゃんは、指で大きな回転部を小突く。するとそこからはなんとも安っぽいプラスチックの音がして、明らかにオモチャの銃だと

わかった。

「……………え？」

「……………これも教わったんだよ。銃の事知ってる人はこれを見せると逃げるんだって」
「そ、そう……………なんだ」

満面の笑みで銃を構えて見せる由紀を前に、2人はただ啞然とするしかなかった。

その頃、雅は目下女性陣の救出任務に掛かっていた。水面下で遂行されているその作戦は、由紀に合図を出す事から始まる。時刻は午後4時近く、陽は段々沈み始めている。それを利用して、車内で見知らぬ男の登場で戸惑い偶然外を覗いた由紀にペンライトで信号を送ったのだ。

——ガンバレ、ナントカナカニイルヤツヲソトニダセ。

(……………チカチカしてる。はっ、これはモールス信号!? すごい、みやーくんモールス信号もできるんだ! でも私よくわかんないや、胡桃ちゃんならわかるかもしれないけど……………いないし)

由紀はさっぱり理解せぬまま、小さく指でまるを示す。

俺はそれに対し渾身のグッジョブを送ると、そのまま次の行動へと移っていた。

イツキは捕まっている。見張りは2人……………どれもサクラで武装してはいるがア—

マーは着ていない。しかしどいつも黄色い腕章を着けてるな……何か他とは違うのか？

胡桃がどこにいるかわからないが……車の中かもしれない。けどイツキだけ外で監視してたのか？ あり得るつちや断然あり得るが、別れ際のあの調子だと胡桃も外に出てる気がする。

まあどちらにせよ銃を持った相手にシャベル一本で突っ込ませる気もないし、むしろいなくて好都合か。まずは見つからずにイツキを解放してサクラを持たせて、なんとか戦意を削げば勝てる。ただ問題は忍がこの追跡部隊を率いてる事だが……まさかここにはいないよな？

あいつなら絶対戦意を失ったりはしない。それどころか俺の行動なんて筒抜けもいい所だ。……あいつの腕前にも、距離が近ければ人質を取っても狙撃されかねない。

「バカッ!!」

「!?!」

茂みからじつと機を伺っていた所に、車内から見覚えのある声を上げて1人の男が飛び出してくる。

「全員車を囲め!」

その号令と共に周囲を見張っていた全ての人員が慌てふためきながらキャンピング

カーを囲い始め、イツキの見張りについていた2人も例外なくその包囲に加わった。

何が起きたかは知らないが、これは間違いなくチャンスだ。今の内にイツキを解放して……解放して、どうしようか。

と言つても車に銃を向けて包囲しているこの状況がずっと続くとは思えない。長くても5分であの男……よく見れば、あれは間違いなく忍だ。あの銃の構え方、基本とも言える構えを踏襲したあの構えは——昔と全く変わっていない。

音もなく移動し、スーパールの敷地をぐるつと回りイツキの捕まっている正面にある植え込みに辿り着く。舌打ちして注意を引くと、ちらりと顔を覗かせてイツキと目を合わせた。

「雅さん……っ!」

「静かにしろ、今拘束を解く。……自由になったら店に駆け込んでくれるか? 上手く注意を引いてくれれば後は俺がやる」

「で、でも銃を取られて……」

「大丈夫だ、替えは持つてきた」

視線が完全に逸れているのを見計らい、木陰からイツキの手足を縛る結束バンドを切る。そして自由になった所で、バッグからサクラと10発程予備弾薬を持たせた。

「出来る限り殺すなよ。……行け」

「はいっ……」

俺が完全に木陰に隠れたのを見計らうと、イツキはわざと音を立ててスーパーの中へと走っていく。それに気付き、1人が警告もなしに発砲した。

「許可なしにぶっ放すな!!」

忍が頭をはたいて止めさせる。幸いにも命中弾にはならなかったようで、弾は向かい側のコンクリ塀にめり込んでいた。ただ偏差がもう少し精確だったなら……もしかすれば死んでいたかもしれないが。

「2チームで捜索に当たれ、残りはここを制圧す——」

命令の途中で申し訳ないが、どちらにも行かせる訳にはいかない。とっておいた。308Win弾の葉莖をスナツプを利かせて明後日の方向に飛ばすと、ほぼ駐車場の反対側だというのにここまで気持ちいい金属音が聞こえてくる。

「葉莖……7.62か?」

聞き覚えがあるだろう音に忍が振り返った瞬間——俺は走り出す。誰よりも速く、静かに……ほぼ直角の位置から同タイミングで胡桃も走り出しており、途中で目が合う。

「忍っ!!」

胡桃に気付き銃を構えようとする忍に声を掛けて、少しでも思考を乱そうと足掻く。

迷え、お前ら「色持ち」も、忍も。

何の意図か、ルーマニアの国旗と同じ配色をした腕章をする忍は俺に銃を向ける。……だが、案の定引き金は引かれず、そのまま俺のラリアットを食らい地面に倒れた。「全員動くな!!」銃をゆつくり地面に置き、変な動きを見せればこの足元に転がってる奴が死ぬぞ。勿論俺を撃てば、さつき逃げた奴が撃つ。銃はもう渡してあるからな」

「相変わらずだな、雅……でも下が硬い場所でラリアットはやめてくれ」

「受け身取れただろ、訓練の成果だな」

「背中いてえんだよ」

「俺だっついてえよ撃たれてんだぞこっちは。まだマシだろ、湿布でも貼っとけ」

「はい、全員武装解除で。雅がハンドガン持ったら例えショットガン持っても勝てないから」

他ならぬ忍が銃を置いて両手を上げると、その場にいた色持ち達も続々と武装解除していく。

「はあ……じゃあ、話聞かせて貰おうか。周りのは抜きでな」

「……そうだな、久し振りに——」

ゆつくりと起き上がった忍は、銃をホルスターにしまうと痛むらしい背中をさする。

「——昔話でも、しようか」

11. きつと何処かにある、いくつかの気持ち

——昔話をしようか。

俺達がこの災害に巻き込まれて、既に半年が過ぎた。最初は3人だけ、まるでゾンビのような大量の人間を相手に、ずっと逃げ続けていた。

でも、あいっだけは違った。夜中にこっそりと部屋を抜け出して、街に出ていたのに気付いたのは1ヶ月以上経った時の事だ。隠し通せていると思っていただろうけど、服の襟に小さな赤い染みを見つけた時の衝撃は今でもしっかりと覚えてる。

数日後、あいっは感染者を殺し始めた。どこから拾ってきた鉄パイプで的確に頭を潰して……無表情だったけど、どこか後ろめたさを感じてるのはすぐわかった。

最初は俺も現実を見れなくて足手纏いだっただけど、あいっが1人で感染者の群れに突っ込んで行った時にやっと気付いた。

お前は——ずっと死にたがっていたんだと。……死に場所を探していたんだろう？ 無価値と無意味を嫌い、自分を過小評価してしまうからこそ。

俺達はスーパーの搬入口から中に入り、崩れたダンボールや棚を整理して安全な陣地

を作ると束の間の休息を取っていた。俺は背中 of 銃創と日課である右腕の消毒をする為に席を外し、1人物陰で木箱に座る。

「雅、ちよつと話があるんだけど」

空のダンボール越しに胡桃の声が聞こえる。今は悠里達と一緒に忍から現状を説明されていたと思つてたが……抜け出してきたか。

「悪いな、今治療中だ。壁越しでよければ聞こう」

「手伝おうか？」

「いや……少し刺激が強いだろうから遠慮しておく」

「でも背中だろ？ まあいいや、入るからな」

「おい……聞けよ」

微かな音を立てて退けられたダンボールの隙間からシャベルを持った胡桃が入ってくる。傷口も含めて、昔より大分痩せてしまった体を見られるのは少々恥ずかしい。筋肉も何もかも、少し前からなくなってしまった。

それなのに前と変わらない力を発揮できるのは不思議ではあるが、見た目にはわかりづらい筋肉もあるらしい。忍も細くても俺より力はあるしな。……今じゃ俺の方が細かいかもしれないが。

「無理矢理でも手伝わないと、膿んだりしたら大事だろ？」

「まあ確かに……見えないから助かりはするが、割と酷い傷だぞ」

「……うわっ」

背後に回った胡桃は心底酷いものを見たような声をあげると、傍にあつた袋から消毒液とガーゼを取り出す。……俺の持っている医療品はもう残り少ない。忍がいくらか持っているだろうか？ 持っていたとしても、今じゃ無関係の人間に物資の援助を頼むなんて正気の沙汰じゃない。

「これ、本当に酷いな……抉れてるじゃないか」

「深いか？」

「そこまで深くはないけど、ん？ でも5mmでも肉が抉れてたら深いって言うのか？」
「それはまだ掠り傷だな。銃で撃たれて外科手術がいらないうら運がいい。適当に包帯巻いていってくれ。出来るならどこかから肉を移植したい所だが……そんな設備ないしな」

「肉を……移植？ もう次元を超えてる気が……とりあえず、消毒するからな」

スプレー式の消毒液を吹きかけられ、いつもとは比べ物にならない痛みが右肩に響く。つい怯んでしまったが、胡桃は構わずに続けてくれていた。なるほど、思いの外肝が据わってるな……ちよつと前の平和ボケした世界の女子高生ならまず傷口を見るのは無理とか血は苦手だとか言うのも多い。

消毒が終わった後に右肩の激痛が続く間に右腕の縫合部の消毒も済ませる。化膿もなければ蛆もない、ここだけはいつも運がいいと思うくらい治りが良い。流石にカッターで少し切った、というレベルじゃないから類を見ない遅さではあるが……仕方ない。

「なあ、雅」

「なんだ？」

包帯を巻きながら、神妙な声で話し始めた。顔は見えなくとも、聞き慣れない声色にいつもより優しい目に返事をしてやる。すると、背中に何かがかつんと当てられる。

……金属の様な冷たさではない、銃口とか刃先ではないな。温かくもないから手でもなさそうだが……でも肌のように柔らかくもないな？　なんだろうか？

「……あたし、話さなくちゃいけない事があって」

「らしくないな、重要な事か」

「まあ、うん。そうなるかな」

「胡桃さえ良ければ言ってみろ。悠里達の事か？　それとも、忍達に問題でもあったか」

「……あたし自身の事。例えばさ、これは本当にシミュレーションの話だけど——」

「例えばあたしが、あいつらみたいになつたら……どうする？」

弱々しく、年相応な少女の声だった。いつもは隠しているんだろう、微かに声が震え

ているのは恐怖からだろうか？ さっきも言ったが、本当にらしくない。いつも表には出せない物を出してきたと言う事は……今日の一件で相当参ってしまったかもしれない。

おかしくはない。圧倒的な物量で銃を持った人間の敵、今じや俺の知り合いで友好的な素振りを見せてはいるが、いつ手のひらを返されるか堪ったものじゃない。実際俺も少し怖い……よく知った相手でも、その前に目的が——忍が俺を追う意味を、知っているからだ。

「そうだな、どうして欲しい？ 俺が生きている内にそうなったら胡桃が言った事を忠実にこなそう。でも聞けない事が2つある」

「……え、それは……」

少しだけ怖がる胡桃に勘違いさせないように、あまり間を置かず口に出してやろう。これだけは誰の言葉でも聞けない。例え脅されたとしても、ただ1つの例外を除いて曲げる事はできない。

「1つ、残りの学園生活部を見捨てる可能性がある事はできない。2つ、俺1人にならない限り、一緒には死んでやれない」

「じゃあ、雅とあたしだけが生き残ってあたしがあいつらと同じになったら……一緒に死んでくれたって言ったら、死んでくれるのか？」

「勿論、俺の生きる意味もなくなるからな。ただし、本当に俺とお前“だけ”になったらだからな。……一度捨てた命だ、今更生きようと足掻くのも情けない」

「ははっ、本当に武士みたいだなお前」

「褒めるなよ。——で？ 聞きたかったのはその例えだけか？ 2人きりになって、お前が死んだ時に俺も死ぬ。それだけか？ まだあるんだろう」

少し肌寒いがもう少しこのままでもいいだろう。折角胡桃が俺を頼ってくれているんだ、こういう時くらいしか年上というアドバンテージは活かせないし。

「ううん、いいや。なんか満足しちゃったし。じゃあもしあたしが“なったら”、介錯してくれよなっ？」

「いいだろう。もつとも、その可能性は限りなく低い。出来る限り最初の死者は俺にするよう努力する」

「また言ってるよ、この破滅主義者。いいよっ、じゃああたしも最初に死ぬようにするかー！」

「ほう、じゃあどちらが互いを守れるか競争だな」

「いいぜ、じゃあ守れなかったら罰ゲームな！」

全く酷い競争を始めたもんだ、と自分でもツツコミたい。でもおかげで胡桃も少し調子を取り戻したらしい。ちよつと吹っ切れた感じもして危なっかしいが、こうすれば胡

桃も1人でどうにかする事はないだろうか？

俺1人で突っ込めなくなったのはあるが、最悪気付かれずふらつと消えて、知らぬ間に戻ればいい。

「死んで責任取るとか腕もぐとかじゃなきゃいいぞ。直接ダメージが入るのはナシで」

「じゃああたしが怪我したらそのコート貰うから」

「……マジで？ これ割とお気に入りで……まあいいか」

「その代わりお前が怪我したらあたしのパーカーあげるから」

「着れないしかさ張るし使い道ないからいらない」

「そこまで言う必要がある!? 着れないの一言でいいじゃん！ ……うーん、じゃあス

カート？」

「喧嘩売ってるだろ、もっと使い道ないじゃねえか」

「はあ!？」

いつしか軽い口論になる間に、治療は終わっていた。帰りが遅いのを気にして忍と悠里が見に来た時には本気の喧嘩をしていると思ひ込まれて本気で止められたが、原因を話すと2人は呆れた様子で溜息をついていた。

そのうち忍は「相変わらずミヤちゃんはマイペース貫いてんな」と苦笑していたが、その意味を理解するのに俺は30分近く掛かった。というかパーカーの「使い道がない

“は地味にアウトだと、そう気付いてから悠里に声を掛けられる度内心ヒヤヒヤしていたくらいだ。

でも胡桃自身も気付いていないのか、それとも誰にも言わずなかった事にしてくれたのか……どちらか、そのどちらかでもない何かかはわからないが夕食の時間まで音沙汰はなかった。

そして夕食時。ちよつと埃っぽい倉庫を換気して新鮮な空気を取り入れると、30人近い忍達一行と学園生活部が穏やかに揺らぐ火を囲みスープを食す。数人でグループを作り、俺達は学園生活部に忍を加えて食事を摂っている。

面目上俺達は捕虜……もとい要保護対象としてご馳走に預かってはいるが、実際は肩に受けた傷の礼らしい。

とは言っても俺もそれなりに殴ったり絞め落としてたりしてるからどうだろうか？

この状況に不満を感じたり疑問を持つ人間がいてもおかしくない。というかそもそも……1人、あの金髪の右手を貰ってるからなあ。

この場にはいないようだが、今頃どこかで激痛に苦しんでいるに違いない。

「……雅さん、僕、ここにいていいんでしょうか」

「大丈夫だ、あの時命令を出したのは俺だ。負い目を感じる必要はない。……でも、すまなかった。殺さずとは言え、生きている人間を撃たせてしまった」

「い、いえそんな事は……あの時僕がやらなければ、きつと今より酷い事に……なつてたかも」

「どうだろうなあ、正直自信がない」

忍は俺達の声が聞こえているにも関わらず、干渉してこない。関わらない様にしていくのか……？ ちらつと忍を見てみると、ほぼ同じタイミングで忍もこつちを見たらしく目が合う。

そしてほんの少し微笑むと、すぐにスープの中にある豆を口に放り込んでいく。数秒目が合ったただけだが、まあ問題ないらしい。

「あいつの事は気にすんな、殺すつて脅したんだろ？ なら相応の報いを受けた、むしろ軽かったんじゃないか？」

「右手が使えなくなつて軽いつて事はないと思いますけど……」

「片手なくても問題ないだろ、そこに実例いるしな。それに、もうそんな事誰も気にしてない」

「そんな事つて……忍、さん？ は大丈夫なんですか？」

今まで口を閉ざしていた悠里が忍を氣遣うが、当の忍は大丈夫だと短く笑つてまた具を掻き込む。……ああ、あの金髪の男、死んだんだな。どこからともなく確信めいた感覚が生まれて、また改めて忍と目が合う。

「……そうか」

「ああ、そうなんだ」

「? ……いきなりどうしたんですか? 2人で示し合わせたように」

「なあに、俺達には言葉も要らない意思疎通の方法もあるんだ」

「えっ!!? そうなの? どうやって?」

丈槍が興味津々で聞いて来るが、俺と忍は揃って「さあ?」と首を傾げる。実際、特に何かを決めている訳ではない。探索や警戒度を上げて静音に努めた時の手信号なんかは決めていたが、こういう時の意思疎通は本当の以心伝心……テレパシーのようなものだ。

しかもそれは忍から俺への一方通行ではなく、忍からも例え無表情でも俺の考えを読んでくる。半ば怖い所もあるが、どこか精神的に見えない物で繋がっているんだろう。

「えー! 教えてくれてもいいのにい」

「ごめんな、俺もさっぱりわからないんだよ。ミヤちゃんはぱつと見無表情だし何考えてるかわかんないけど、よく見ると意外とわかるもんだぜ。喜んだり、拗ねてたり……歩き方に出やすいものもあるからよく見とくといい」

「余計な事は教えなくていい」

忍が変な事を言うから彼女達の目が一齐にこつちに集まってくる。特に意識はして

ないが、勝手に食べる動作がぎこちなくなつて……それが更に恥ずかしい。

「言わなくても分かるだろうけど、今はすごい照れてる」

「クソが」

「へえ、雅さんも照れるんですね。初めて知りました」

「そうねえ、いつも無表情だったけど、今までも何度か照れてたりしたのかしら？」

「え、じゃあ実はあの時すごい恥ずかしがつた……とかあるの？ いったらう？」

「……クソが」

チリ味のスープを勢いよく飲み込むと、すぐに立ち上がって席を外す。こんな所にいられるか、俺は外に出させてもらおう。

「イツキ、哨戒に出る。ついてこい」

「はっ、はい！」

「あ、逃げた」

同じくイツキも勢いよくスープを掻き込むと、背後に置いてあつた銃を持つて後に続く。胡桃のにやけ顔が恨めしい……さつきは若干弱つていたのに、ちよつと気を使えばこうやって弄ってくるのはどうにかならないものか。

「巡回ですか？」

「いや、とりあえず屋上で警戒だ。陽も沈んでるし皆の活動時間も終わる……それまで

付き合つて貰えるか？」

「はい、喜んでお供します！」

「……気負うなよ」

出来るだけ人に見られない様に外へ出る。臨時で設けられた縄梯子を使つて屋根に上がると、そこには見知つた顔の男達が4人いた。

……金髪の男を撃つた時隣に居た2人と……ああ、尋問した奴か。残りの1人は見覚えがないが、若いな……イツキより若いんじゃないか？

「あ、あなたは……」

「邪魔するぞ。自分の目でも状況を確認したいんでな」

かなり距離が空いているうちから4人は後ずさり、道を開ける。当然だが、友好的な雰囲気ではないな。誰もが恐怖心を抱いてはいるが……1人だけ、一番若く見える少年だけが明らかに敵意を持っている。

あの時こいつはその場に居なかつた。俺達の行動は話に聞いただけで、実際に見た奴よりも精神は打ちのめされてはいない。不意を突かれる可能性があるな。

「ふむ、お前らチームか」

「え？ 忍さんから……聞いたんですか」

「いや聞いてない。だがお前達は互いに警戒心を持つていなかった、むしろ少しでも当

てにしている節がある……深くはないがな。あ、昼間はすまなかつたな、あの金髪は死んだらしいが」

「……………そうですね」

「ん？」

先程から固く拳を握っていた少年が、ついに怒りを表し始める。表面的な物ではない、本物の怒気。その異質さにイツキも何かを確信したのか、腰から散弾銃を取り出す。俺が随分軽い対応をしていたのもあるが、こうもあっさりくるとはな。予想はしていたが随分と短気らしい。

「お前が……班長を殺したんだ！」

その拳を高く振り上げた瞬間、残りの2人は慌てて止めようと動く。だがそれぞれバラバラの場所に下がった所為で拳を振り切るまでに取り押さえるのは無理そうだ。梯子を上り、先人達を警戒させない為にも銃を構えていなかったイツキも含め、止められるのは俺しかない。

喧嘩もまともにした事がないんだろう。どれだけ訓練を重ねても、実際動く時に発揮されるかどうかはわからない。それが感情に身を任せた動きなら尚更。

素人のようで体重もロクにない少年の拳を、俺はあえて顔面に受ける。

「やめろっ！」

「雅さん！」

腰が入ってないな。当たりはいいが、顎を狙っている訳でもない。頬骨を打ち自らの拳も痛めるだけだ。

「よくも……」

「よせイツキ。……まだ満足してないだろう、次はちゃんと踏み込んで打ってこい。腰を回せ、軸をぶらさず、尚且つ全力ではなく8割程度で打て。下手に力を入れるとむしろ弱くなる」

「偉そうにツ!!」

続いて2発目、3発目と無抵抗で顔面に受ける。次第に慣れてきたのか、3発目にはかなり重くなっていた。

流石に脳も揺れ始め、1歩後ずさってしまう。ふらつくし気分が悪い……視界はチカチカ眩しいし、正に星が回っている。

「このツ!!」

丁度10発目を受けた所で、完全に意識が飛んだ。ただでさえ硬い足場に倒れ込み、背中に排水溝の網があつて尚更痛い。気付いた頃にはイツキがサクラを抜き、少年に向けて拘束していた。

「よせって言っただろ……男ならこれが一番速いんだよ……」

「で、でもここまでさせる必要は」

「こんなもんだ。まだまだ気は済んじやいだろうが、一先ずこれで勘弁してくれないか？ 俺も今まで散々痛い思いをしてきてるからな」

口元を拭い血を吐き捨て、俺は屋上の端……小さなLEDランタンとプラスチック製の箱が置かれた場所へと行く。イツキはサクラをポーチに戻し、狙撃銃を持つとゆっくりとついてきていた。

静かな夜だ。どこもかしこも荒れ果てて、電気もガスも止まってしまった今人にとつて住みづらい環境になっている。それでも、俺は星と月明かりの下でゆっくりするのは好きだった。

双眼鏡を取り出すと、付近の家屋や建物の窓から遠くの草むらまで見える所全てを観察していく。

ひんやりとした空気に時折吹き付ける木枯らし、前よりも寒さに耐性がついたおかげで外に長時間いても体調を壊す事はない。昔はちよつと夜風に当たっただけで風邪をひいていたっけか、夏の日差しに当たれば倒れ、冬の乾燥した空気は喉と肌を痛める。むしろ前の方が生き辛かったかもしれない。今は日々の食事も危ういが、この悲劇とも言える環境を乗り越えて強くなれる。

「周辺に敵影なし……物音ひとつしませんね」

「ああ、忍達が事前に掃除したらしいが……しつかりやったらしいな」

塀で銃を支持するイツキは白い息を吐きながら家屋の窓を観察している。もし動く物があれば撃つ前に報告位はよすだろうが……まあこんな時間に外出する奴らもないだろう。

「……雅さん、ちよつと嫌な話してもいいですか」

「なんだ、藪から棒に」

近くにあつた箱を引き寄せると、地べたに胡坐をかいて箱の上に肘を置く。特に意味はないが楽な体勢だ、長話に丁度いい。

「雅さんが1人で行つちやつた時、僕心のどこかで嬉しく思つたんです」

「ほう、それで？」

「もし雅さんが命を懸けて僕達を守つて、残りが僕になつたら……まあ、なんていうか。前より近く美紀さん達と一緒にいられるんじゃないかって」

「ふーん……残念だったな、案外しぶといんだ」

「はい、驚きました。撃たれても生きてるんですもん、もう無敵ですよ。……でも、帰つてきてくれて」

自嘲気味に微笑むイツキは、俺の帰りは絶望的だと思つていたらしかつた。視界の端で銃口が微かに上を向いたかと思うと、隣からは鼻をすする音が聞こえる。

「現実逃避、してたんですよ。僕だけが生き残っても守り抜ける気がしませんし」
「本当は帰ってこなくてもよかつたんじゃないのか？」

「そんな事ありません。助けられた時……生きてる姿を見た時、すごく嬉しかったんですから」

「……そうか」

感傷に浸る中、ふと背後がざわついた。不審に思い振り返ってみれば、俺と瓜二つづ方をした忍が立っている。

「……本題に入ろうか、重役だけで話そう」

「ああ」

一言答えると、俺はイツキの肩を軽くたたいてその場を後にした。

重役だけ。忍の言った言葉に少々違和感を覚えていた雅だが、その答えは学園生活部が所有するキャンピングカーに入ってからやっとわかった。

「……悠里、お前もか」

「ええ、あなたがいる『学園生活部』の部長ですもの」

ランタンの微かな光の中、3人は灯りを囲む様にソファに座る。雅と忍が対面し悠里がそこにキャンプ用の椅子を置いて三角形の様な位置になった。

「直球で言わせて貰う。雅、俺と一緒にこい。俺達はあのウイルスの抗体を持つ人間を探している……そしてそいつは、俺達を知る限り一人、お前だけだ」

「あなたはどうか聞きたかったの。内容は怪我の治療中に大方聞いたわ、でも誰かが止めて出した答えはしつかりとした答えじゃない……そう思って」

「それも含めて、まだ言えてない事もある。……心して聞いてくれ、お前が善意でついでくるなら、俺達はそれをぶち壊す事になる」

「……どういふ事だ」

悠里も一緒に、雅は背に冷たい物を感じ始めていた。

「結論から言えば、お前は『使い切られる』。あらゆる実験のテスト、抗体を培養する苗床……人の扱いなんざどこにもない、酷い仕打ちを受ける」

「そんなの……聞いてないわ」

「今言ったからな。だからそれでも決めろ……正直、連れ戻すなんて目的を掲げておきながら俺はお前を逃がす気である。その為に、こうまでして接触を凶つたんだ。……手違いはあつたけどな」

懐からスキットルを取り出した忍は蓋を開けて雅へと渡す。恐る恐る手を伸ばし、匂いを嗅いだ雅は……柄にもなくニヤリと笑い、ぐいっと一口飲んで突き返した。

「はあ……久し振りだな、これも」

「だろ？ この前たまったま見つけたんだ。それからずっとおいた」

「……………？ 何を飲んでるの？」

不思議そうに小首をかしげる悠里を見て、雅は久し振りの味と懐かしい感覚に普段思わない感情を抱いてしまう。

「酒だ、今のご時世酒は貴重品だから……ちよつと後味が気に食わんが」

「ん、いつもJIMBEAMじゃなかったっけか」

「俺は安酒しか飲まなかったからな、Nikkaなかったか？ あれがいい」

「飲めるだけマシだと思えよ」

「まあ確かに」

愉快に話す2人はスキットルを飲みまわしながら、いつの間にか昔話やこうなる以前の話などに花を咲かせていく。重要な話をしていたのに行方はどうなったのか？

悠里はそう聞きたくとも楽し気な2人に水を差す事ができずにいる。

「あ、あの……そんなに飲んだら酔っぱらっちゃうわよ……？」

「ん、酔う為にこうしてるんじゃないか？」

「違うでしょ？ 大事な話をしてたじゃない」

「まあそんな大きな事は後で決めればいいさ、お嬢さん。雅は酒飲みでな、週に一度飲まない禁断症状が出るくらいだった」

「3日に1回だったなあ」

「アル中かよ」

もうすっかり酔いが回った彼らは、次第に声も態度も大きくなり始める。だがそれも一定以上にはいかないのか、いつもより少し……雅の場合人並みの感情を表に出す辺りで止まる。

それもそれで新鮮で悠里は観察していた気もしたが、車内に充満する酒臭さを止める必要もある。

「飲むのもいいけど、話が終わってからね……？　ね、雅さん。今はあなたの未来を決める話をしてるんだから」

「ああ、すまない。少し調子に乗ってしまったな。……まあ答えは決まってる、俺はお前とは行けない……悠里達が新しい生き甲斐なんだ。……お前には、非常に失礼な事だが」

「研究者達の組織は馬鹿にできない、簡単には逃げきれんぞ」
「……俺がいると、迷惑が掛かるか」

悲しそうに呟く雅は、ひっそりと悠里の顔を盗み見た。それに気付いたのは忍だけだが、雅が抱く微かな思いにも長年付き合ってきただけあつて気付いたらしい。ほんの少し寂しくもあるが、彼の意思を尊重すべきだと……そう感じていた。

「そんな事ないわ、雅さんがいて私達はすごく助かってる。イツキ君もあなたも、もう学園生活部の一員よ？ だから誰が欠けても皆が傷つく……」

「そうか。……と、いう事で、やっぱり俺は悠里達と一緒に行くよ。見逃してくれたとかは……可能か？」

「勿論、その為にも最低限の人員で来たんだ。今夜あえて全員を眠らせるタイミングを作る、その時に出て行ってくれ。ある程度離れるまで車を押しで行ってもらう事にはなるが」

「わかった、すまないな」

「気にすんな」

忍が最後の一口になったスキットルを雅に投げ渡すと、静かに車から降りて行った。取り残されたのは悠里と、ちよつぱり酒臭い雅。何とも言い難い難い空気の中雅が最後の酒を飲み干すと、空のままコートの内ポケットにしまつて席を立った。

「はあ……準備しよう。皆には俺から話しておく、あとは荷物の確認と……」

「ねえ、雅さん？」

「なんだ？」

視線を伏したままの悠里は雅に声を掛けたが、その先は唇を噛んで言い淀んでいた。果たして、この先を言っているのか。何かを躊躇っているのは雅にもわかるが、その内

容までは分からない。

「迷うくらいなら言わない方がよい。その方が、時に双方にとって良い事もある」

「……そうね、また今度にするわ。でもこれだけは言っておきたいの——私は、あなたの事好きよ?」

「……………ん、おかしなことを言うな? まあいい、ありがとう。荷物の確認は悠里に任せる、俺は他の人員に現状報告に回る」

「えっ、あのまだ先があつて——!」

一体何の事か。意味をしつかりと受け取らないまま、雅は若干駆け足で車を出て行った。

久し振りに飲んだ酒の所為か、はたまた……まあ度も高いし酒の所為だろう。久し振り過ぎて心拍数も高い、この調子だときつと顔も赤いだろうな。

意味などいらぬ。そんなもの、知らなくていい事だ。現実を知れば、きつと幻滅する。期待しなければ悲観的にも捉えず、ただ認めて貰つたと……それだけ覚えていよう。

12. 瞳

「出発しよう」

皆が寝静まった午前2時、右腕に括り付けたL字型ライトの赤い光を頼りに、俺達『学園生活部』は行動を開始した。

「よし、じゃあ押すぜ」

「頼む」

膝の上にM1910を置いたままハンドルを握る。ライトも点けぬまま、ギアをニュートラルに入れた車はゆっくりと動き出していった。

当初の予定では、最低でも300m程離れてから車を動かす事になっている。途中誰かに見つければ忍以外はイツキが射殺し、その後エンジンを掛けて全速で離脱する。

感染者は胡桃が対処し、それ以外は非力ではあるが車を押しして貰っている。本来なら男である俺が加わるべきだが……片腕ではな。

無事スーパリーの敷地から出ると、進行方向に人影が見えた。感染者か、人か。どちらにせよ2人に声を掛けなくては……開けてあった窓から小声で障害物がある事を伝えた瞬間、その人影は赤い光を4回瞬かせた。

「……人だな」

「心配するな、あれは忍だ」

「忍さんですか？ 見送りに来てくれたんですね」

「……見送りか、そうだといいが」

僅かに道路端へと寄った人影に近付いていくと、やっとそれが忍だとわかる。手には俺と揃いのライト……餞別にくれたもので、レプリカではあったが物は確かだった。

「どうしたんだ、忍」

「いやな、親友との別れなのに顔を出さない訳にもいなくて——」

「また悠長な事を……勘付かれたら終わりだぞ」

「そうだけだな。まあ勘付かれても俺がどうにかしてやるよ。——それともう一つ餞別があつてな、渡しそびれたのもある。これさえ渡せば、もう心残りもない」

「……？ なんだ一体」

背筋に何やら薄ら寒いモノを感じた瞬間、忍はすつと右腕を上げた。

「これ、渡しとくよ」

一瞬銃を向けられるのでは、と恐怖したが、忍の手には星明かりを受けて鈍く輝く指輪が乗っていた。それは昔、俺が勝手に憧れて似たデザインの指輪を買った時の……ほぼ揃いで会う時はいつも着けていた指輪だ。

「何故……」

「なんていうかな……気持ちだ。その代わりと言っちゃなんだけど、お前のドッグタグの片割れ、貰えないか？ そうすれば、死んだって話が少しは信じて貰える」

彼女達に断つて一度車を停めると、俺は首に掛けていたドッグタグの片方を外し、忍に渡す。それと引き換えに指輪を貰うと、空いたチェーンに通して再び繋ぎ直した。

「……ありがとう、あとごめんな。一緒にいてやれなくて」

「俺がお前達を置いていった側だ、謝るな。尊さんにもこつそりよろしく言つといてくれ」

「ああ」

拳同士を軽くぶつけると、忍は数歩下がって木陰が作る闇に消えて行つた。忍者かよ、あいつも俺に染まったかな？

「……行こう、止めさせて悪いな」

「ぜーんぜん、それじゃ……せーの……！」

丈槍の小声での掛け声に、車は再び動き始める。やがて十二分の距離を移動した後、俺達はエンジンを掛けて自然光だけを頼りにその場を去つた。

キャンプをしよう。丈槍の唐突な提案に、俺達は快諾し山奥にあるロッジへと来ていた。痕跡を隠し、潜む為……皆にはそういう目的もあると言つて収めてはいるが、実際には今までの出来事を整理する為の休息でもある。

「ココア飲む？」

「ああ、ありがとう」

キャンプらしい銀色のマグカップになみなみと注がれたココア、そして2人分のベンチの隣に座るのは悠里。俺は久し振りに手記へと記録をつけながら、今まで起きた事を記憶の限り綴っていく。

所々抜けが……というかほぼ覚えてはいない。俺は昔から物覚えが悪いし、嫌な事は忘れるタチだ。今現在も忘れてるなら、それはきつと覚えていても苦しむだけなんだろう。

「……疲れたわね」

「そうだな、皆も無理をしているだろう。そろそろこういう時間も必要だとは考えていたが……」

「由紀ちゃんはそのいう子なの、思えば……いつも助けられてたわ」

「あいつは人を癒す力に長けている。俺には成し得ない、一種の才能だな」

「そうね」

すぐそばに組み立ててあった机にココアを置いて、現在のたまかな物資と武器、イツキの所持弾薬を記録する。まだ余裕はある……どこかに居を構えれば安定もするだろうが、生憎最低基準を満たす施設も限られている。あったとしても、既に誰かが使っているだろう。

……現状整理だ。今現在の人員は俺を含め6人、リーダーに若狭悠里を据えて、恵比寿沢胡桃、丈槍由紀、直樹美紀。新規加入に神崎樹、俺。

悠里は女子4人の中でも特に大人びた風貌と性格を持ち、見事にリーダーを務めている。料理も家事もそつなくこなし、力仕事も男と同じ量をこなす。だが体力はやはり女と言った所で無理はさせられない。

病弱という訳でもなく、しかし内面は少々危なっかしい。フラッシュバックの気があり鍵となるモノを見聞きしてしまうと情緒不安定、もしくは極度の逃避に走る傾向もあった。

決して万能ではない……仕事ができる人材ではあるが、圧に耐えきれぬ程頑丈ではない。当然の話だが、丁寧に扱わなければすぐに砕けてしまうだろう。

胡桃はこのグループにおける要だ。近接戦を得意とし隠密性にも長けている。たったそれだけ、いてくれるだけで心強い。根は強いが、やはり何かしら闇を感じさせる時がある。まだ聞かせてはくれないが、いずれ力になればようやく及第点に達せられ

た、と言った所か。

ある程度の死線を共に潜り抜けてきた事もあって信頼も築けているのが嬉しい。ある意味女子の中で一番話しやすく反りの合う存在だ。言動の割に身振りや見た目は女性らしいのが近付き難い要因となっているが。

健康面に問題はない。訓練にもしっかりついてこれるし、心配事はほぼないと言える。

丈槍由紀。子供の様な健気さと無邪気な笑顔は別の意味での武器となる。だがその芯は全く読めず、目を見ても一時の感情以外に読み取れたものは一切ない。過去のトラウマも含め、要観察対象だ。

直樹美紀。同上——別の意味で近寄りがたい雰囲気醸し出し、由紀よりも謎に包まれている。しかし信頼はある程度築けているようだ。

神崎樹……特記事項なし。時折俺を信仰するような言葉や行動をとる。危なっかしい……幻滅させたら撃ち殺される気がしてならない。しかし銃の技術は素晴らしい。味方にいる内はその火力を大いに活かせるだろう。要観察対象から除外……今は俺の右腕となってくれている。

「……いきなりこんな事を聞くのも失礼だけど、雅さんは悩みとかないの？」

ココアを啜る悠里は、ふとそんな事を聞いてきた。言われて思い浮かべてみるが、前程風呂呂に入る頻度が落ちた事以外に悩みはない。新しいグループで、武器も充実し仲間同士のいざこざもない。皆が円満で支え合っている。

「ないな」

「それは、忘れてしまうから？」

「それもあるだろうな。強いて言う悩みもない、少なくとも自分の面倒は自分で見れる……といいんだがな。そんな訳にもいかなんだろう？ 忘れてるだけで1日1回ハグされてたりとかしたら死にたくなるけど」

「ふふっ、それはないから安心して。大丈夫よ、あなたが忘れてしまっても……私が全部覚えてる」

「それはそれで怖いな……悠里の時間さえあれば、忘れてる事を教えてほしい。俺が一体……どんな事をしていたのか」

愚問、墓穴を掘る行動だと分かっているけど、俺はあえて聞いた。だがさつきまで笑顔だった悠里は……途端に顔を伏せてあからさまに口を閉じてしまう。

もしかすれば、俺は悠里や他のメンバーを護れていなかったのか？ あれだけ誓い、ほざいておきながら……

「……私はね、忘れてしまってもいいと思うの。自分が耐えられないから、完全に壊れて

しまうから忘れるんだって。だから……知らなくていい事は、それでいいと思う」
「それでも頼む。忘れていてもいつかフラッシュバックする、急に知るよりよっぽどいい。Need to knowも大事だがな」

——しばしの沈黙。一旦は口を開こうと顔を上げた悠里だが、俺と目を合わせた瞬間にまた噤んでしまう。ただ躊躇っているだけじゃない、他に色んな感情が入り混じっていて……最早混じり過ぎて本人も訳が分からなくなっているようだった。

「ごめんなさい。私も心の準備が必要で……今度、色々整理したら話すから」

「……わかった。悠里の気持ちも考えずに無理を言った、すまない」
「ううん、いいの。自分の事なのに、わからないって怖い事だもの」

それはしつかりと重みのある言葉。どちらからともなく、もう目も合わせない。胸の内にある混沌と不安を漏らさない様に、俺達は小さなベンチで同時にココアを口に含んだ。

うん、とても美味しい。ちよつと熱めだが、すっかり冷えてしまっている体に染み渡っていく。自分で淹れてもここまではならない、例えばインスタントであつても……俺が触れた物は例外なく不味くなる節があるからな。

いつか、こうやって誰かと一緒にココアを飲んだ時があつた。それはいつの頃か、相手は誰なのか。

忘却の果てに消えてしまった“普通”の頃の記憶も、誰かに聞けば教えてくれるのだろうか。心の準備があるとしても、いつか教えてくれる相手が。

「悠里が手を加えた物はなんでも美味しくなるな……」

「そ、そう？ 普通に淹れただけよ。特別な事なんて何もしてないし……」

「それも才能だな、その点俺は——」

触れた物全てを腐らせる。どんなに綺麗で強したたかなモノでも、一度触れれば——台無しにしてしまう。だから俺は、*“疫病神”*なんだ。

気が遠くなる感覚から逃れようと、俺は唇を噛んだ。まだ口の中にココアが残っていたのか、それとも強く噛み過ぎたのか。一筋の雫が流れる感触が辛うじてある。

寒い。今年は特に冷える。昨日まではそんな気にしなかったのに、今はとてつもなく寒く感じられた。指先はかじかんで、足なんか感覚がないと言うか……筋肉が強張ってがちがちになっている。

「雅さん？」

訝し気に顔を覗き込んでくる悠里に、俺はやつと焦点を合わせられた。いや……これは、悠里か？ ぐにやりと歪んだ像はそれが人かどうか……辛うじて人と認識できて、長い髪に茶髪と言うだけじゃ情報量が少なすぎて誰だか特定できない。

「……奏ソウ楽ラク？」

誰かの名前を無意識に告げて、俺は身体の自由を完全に奪われた。暗い、寒い、怖い。ひとつひとつは何てことない、簡単に払拭できる不満だ。でも一気にその3つと、上手く思考が纏まらない安直な今の頭では——その悪夢は、易々と体の制御を奪う。

彼の手記、初めは血文字で書かれたある文章から始まる。

「常に強くあれ。施しと情を捨て、血を求めよ」

それはきつと、この世に絶望した彼が未練を断ち切ろうと掛けた暗示のようなものなんだろう。どこかおかしな意味にも取れてしまうけど、その奥、遙か深層にある決意染みた何かを感じ取る気がする……のは私がちよつと夢を見過ぎているからだろうか。

彼は度重なる人体実験を行っていた。生存者と出会い、家路の途中裏切られそうになった時。ゾンビの群れに突き飛ばされた彼は叫び、四方から呼び寄せあえて逃げ道を潰した。

当然一般人では太刀打ちできる訳もなく、その生存者は噛まれてしまった。そして、彼は助ける素振りを見せてゾンビから逃げ出すと縛り上げたのだ。

1、感染してからゾンビ化までの時間。2、ゾンビと化した存在の弱点。3、視力と聴力の把握。……4、自己暗示の有効化。

最後はあくまで私の予想にすぎない。でもそんな気がする。実際これ以降の文面や

筆跡はどれも落ち着いていて、達観しているからだ。それは今とほぼ同じ、私達がいっつも接している彼。

——雅の、作られた人格。

「……改めて見ると、結構えげつない事もしてたんですよね」

美紀は彼が落とした手記に目を通しながら、ベッドの隣で顔を伏せる悠里に声を掛けていた。

「必要な事だった。私達も、色々確認したりはしたでしょ？」

「でもここまではしてません。全身解剖とか……」

「必要だったのよ、きつと。調べて調べて知り尽くして、万全の状態じゃなきゃ守れない。そう書いてあるでしょう？」

「そう、ですけど……」

悠里は美紀と出逢った頃の様に、由紀の症状をそれでいいと諭す時と同じ様子だった。

悠里先輩も、弱い人だ。何かに依存しなきゃ……私も依存してない訳じゃないけど、誰よりも弱い人を守る事で自分を律している。

でもそれじゃいけない。胡桃先輩も、由紀先輩も、イツキさんも、皆この人を守って

自分を守っている。誰よりも強くて、誰よりも弱い。背反と矛盾を孕んだこの人は誰よりも厄介だ。

「私、薬を探してきます」

この人の為なら、例えただの風邪でも喜んで犠牲にしてしまうだろう。だからここは、一番まともな私が行くべきだ。

「……私も行くわ」

「いえ、悠里先輩はついててあげてください。薬探しは私一人で十分です、周りに家も少ないですし」

「危険よ」

「大丈夫です、胡桃先輩の時の実績もありますから、信じてください」

悠里先輩の考えを先回りして、私は無理矢理一人で出掛ける許可を取った。イツキさんからはもしもの時にとら発装填の拳銃を貸して貰って、リュックサックを背負うと黄昏時の森を抜けていくつか民家のあった場所に行く。

彼には、一体何が見えているんだろう。何を考えて、何を感じて、どう判断しているんだろう。

そこには自分自身が生き残れるように勘定に入れているのか？ きつと違う。今までの行動はどれも自分を度外視した判断ばかりだった。

きつと、彼には私達を護るといふ考えしか頭にないんだ。あの人の目に、私達以外のものは写っていない。

例え私達全員が鏡の前に並んだとしても——彼の瞳には、彼自身は見えないんだ。

日が暮れてきた頃、ようやく民家がいくつか集まる場所に着くと、一番手頃な平屋建ての家、縁側の割れた窓から音もなく侵入した。

今更驚きもしない。床や壁には赤黒い染み、物は散乱して、どこもかしこも埃とカビの臭いがする。でもどこか嗅ぎ慣れない臭いもあつて、つい小さく咽てしまった。

——奴らは呻き声もそうだが、独特の臭いがある。

いつか彼が言っていた言葉が頭を過る。死期の近い人間が出す独特の臭い、死臭とも言われるその臭いを、今私はこれの事なんだとどこかでわかつてしまっていた。

——本当ならお前らは安全な場所で飯でも作つて、遠征は男が行つて……上手く言えんがそういう場所にいるべきなんだ。

そんな場所、ある訳ない……改めてそう思う、思つた筈なのに。私は最近、危険な目に……そうでなくともゾンビ達の前に出た頻度はどのくらいあつただろうか？

前よりもかなり減つている。一度全員がゾンビよりも危険な男に捕まつた事もあつたけど、あれを除けばほとんどない。私達は移動しているのに、ちつとも危険な目に

あつていない。

雅さん達が帰つて来るまでに、早めにご飯を作ろう。そんな事を言つてた……実現している？ 胡桃先輩は相変わらず前線に駆り出されているけど、私達はもう……安全な場所にいたんだ。

「あつ？」

臭いを手繰つて、台所のある一室に出た。そこにはもう腐り果てた一人の死体と、今なお朽ちようとする一人……真つ黒で、まるで泥人形のような見た目をした一人が台所に向かっている。

私の情けない声を聞きつけて、その人は振り返つた。所々白い物が見えた、まるでミイラのような顔をしたその人は……やっぱり、死んでいる。死んでいるのに、動き続けていた。

既に瞳も腐り落ちていなのに、じつと目が合つてしまう。ある筈のない瞳を吸い込まれるように見入つて、私は何かを理解してしまった。

「……ただいま。さようなら」

初めて銃を撃つた。しっかりと握り方も教えて貰つて、反動は肘で吸収する、というのも教えて貰つたのに。その銃の反動と撃つた後の重さは、ずっしりと重い。

「……………あははっ」

倒れた老婆の傍らには、もう誰かも判別できない……老爺がいる。首には出刃包丁が突き立っていて、もうかなり前に死んでしまったと分かる。

老婆の左手、そこには所々黒ずんだ指輪が握られていた。力尽きて緩くなった手から、その指輪を手取る。金のリングの内側には、ローマ字で「N A O K」とまで彫られているのがわかる。

それ以上は汚れがへばりついていて読めない。でもその汚れは簡単に拭き取れそうで……今すぐにでもその先が読めそうで。

でも私は、あえてそのままにしておいた。

薬はその家の小さなケースの中にあつた。何故かここにある、とわかってしまうのは……もう昔の記憶を頼りにした直感だ。まめに補充する人達だったらしく、使用期限はまだ過ぎていない。

私は救急箱の中身をほぼ全てバッグに詰めると、帰路につく。案外呆気なく目標を達成してしまった。早く帰ろう、なんだかんだ考えても、やっぱり私の居場所はあそこなんだ。

あの人がいても、皆があの人を頼りに生きていてもいいと思う。私も……少しは頼ってみよう。少しだけ弱くなってしまった自分を慰めて貰おうと、自然と駆け足になっていた。

私の帰りを、皆は待っていてくれるだろうか。喜々としてロッジの扉を開けるとなんとも言えない悪臭が辺りを漂っていた。

そして、廊下の先には人影がある。ライトで照らしみると、床にはまだ新しい血痕と、それを引き摺った痕。

「おかえり、美紀」

彼はいつもの声で私を迎えてくれた。でも左手には血の付いた斧と、顔には返り血がべっとり付着している。

「み、雅さん……一体何が」

「ちよつと侵入者が来てな、由紀が襲われた」

「由紀先輩が!？」

「相手は生きた人間、初老の男だ。おかしな事はされていないが少々手荒に扱ったようだな……今話を聞いている所だ」

冷たい声は私の心を容易く凍えさせる。矛先は私には向いていない、にも関わらず何とも言い難い恐怖が込み上げてきていた。

「皆さん大丈夫なんですか……」

「問題ない、今は俺が寝ていた部屋に集めている。美紀も行くといい……俺はもう少し

処理が残っている」

そう言つて、雅さんは私の返事も聞かないまま奥へと戻つていく。がりがりと床を削る刃先の音。新しく引かれた赤い線は、いつも殴打しかない雅さんが本気だとわかつてしまう。

小さく身震いしながら、私は血筋を避けながら先輩達が集まる部屋に急いだ。

扉を控えめにノックして、私は扉を開けた。中には皆が揃つていて、由紀先輩は私の顔を見ると笑顔で迎えてくれる。

「みーくん！ おかえり！」

「由紀先輩、雅さんから先輩が襲われたつて聞きましたけど……」

「うーん、襲われたつていうか、お話しただけだよ。今いる仲間は安全なのかーとか、特にみゃーくんは片腕だからすごい怖がられてたよ……」

「そ、そうですよね、普通は怖がりますよね」

「それを階段の影で話してたのを胡桃ちゃんに見つかつて、丁度起きてたみゃーくんを呼ばれちゃつたんだ」

「あたしも驚いたからついで大袈裟に言つちまつたけど……悪い事したかなつて」

「胡桃が大慌てで飛んできたから雅さんも完全にスイッチ入つちやつて、止められなかつたわ……」

なんだ、じゃあその人は無害なのか。……じゃあ、あの血は？　まさか雅さんも無害な人に攻撃なんか……あ、でも胡桃先輩が詰め寄られてるって報告したならやつてもおかしくない。

それに、雅さんも由紀先輩が「襲われていた」と言っていた。何か害があるとわかったのか、それとも抵抗されたのか。

「それ雅さんに話しました？」

「ううん、俺が話を付けてくるって何も聞かずに行っちゃった」

「ああ……手遅れですね、それは。外凄い事になってましたし」

「ええっ!?　と、止めに行かなくちゃ!」

「ダメです、私が行ってきますから先輩は此処にいてください」

悠里先輩と胡桃先輩とそれぞれアイコンタクトを取って、私は部屋を出た。相変わらず酷い臭い……でも今更こんな事で根を上げたりなんかしない。一番奥の部屋に伸びる血痕を辿って部屋の前に行くと、低い声が2つ聞こえてくる。

「なつてからどれくらい経った」

「3日、3日経った。でも私じゃもうどうする事もできん……」

「はあ、だろいな。そんな貧相な体でまだ新鮮なヤツを殺すのは文字通り骨が折れる。で、どうする?　俺がやつてもいいのか?」

「……頼む」

少しだけ開いている扉から片目だけを覗かせると、今まさに「処理」が行われる所だった。初老の男性……と雅さん。そして血痕の主は一番奥で蠢く女の子だとわかる。私よりは大人だけど、まだどこか幼い……そんな彼女は両足から血を流して、斧を振り上げる雅さんを見上げていた。

「世知辛い世の中になつたもんだな……」

ぐしゃつ。

血飛沫とどろつとした物が辺りに飛び散ると、雅さんは刃を亡骸から引き抜く。

「あんたはどうする」

「……一緒に、いかせてはくれないか」

「わかつた。なら一番楽な方法を取ろう……せめてもの慈悲だ」

雅さんは斧を壁に立て掛けると、ポーチから見慣れない物体を取り出す。かしゃりと音を立てて男に向けられたそれは、私とは違う形の拳銃だった。

男は少女の手を握ると、真っ直ぐ雅さんの目を見る。

「ありがとう。片腕では生き辛いだろが、どうか私達の間まで」

「勝手に押し付けるな、俺は俺のやりたいようにやる。……でも、考えておく」

次は銃声を建物に響かせて、「処理」は終わった。

胸の鼓動は痛いくらいに早くなっている。ここまで近くで、人の死を見てしまうなんて。その場から動く事も出来ず、黙って振り返った雅さんと目が合ってしまった。「……盗み見とは趣味が悪い。あの翁も無様な死に面を人に見られたくはないだろう、部屋に戻るぞ」

コートに新しい染みを作った雅さんは、斧に持ち替えて部屋から出てくる。扉を閉じる時、ほんの一瞬だけ2人の亡骸を見つめたのは……何か、知っているからだろうか？「あの、風邪……大丈夫なんですか？」

重苦しい空気に耐えきれず、私は随分的外れな質問をしていた。さっきの今、人が死んだと言うのに風邪の心配をするなんて。

でも、雅さんはそれを咎める事はない。ふん、と小さく鼻を鳴らして「大丈夫だ、疲れが溜まっていたのかもしれない」とだけ答えると、先に歩き始めてしまう。

斧からはぼたぼたと血が滴っている。ぽつ、ぽつと一定のペースで床に落ちる音も増える汚れも気にせず……こういう所で、私達の「違い」が出てくるんだと思えた。

「あなたは……雅さんは、何者なんですか」

私はそこから一步も動かず、しばらく歩いた彼に問い掛ける。その問いに、彼は立ち止まり宙を見上げた。

「さあ、俺は誰なんだろうか。記憶は曖昧、この名前も……本当の名前じゃないしな」

「えつ、偽名……ですか？」

「偽名と言えばそうだが、何も隠す為にそう名乗った訳じゃない。俺は、そうありたくて『雅』と名乗っている」

「じゃあ、本名は……」

「さあ……弱かった頃に呼ばれてた名前なんて、思い出したくもない」

なら、今は強くなれたんですか？ そう口に出そうとして、やめた。その言葉は彼と私を切り捨てるに違いない。今もなお、彼は強くあろうと足掻いている途中なんだから。

そうでなきゃ……そうじゃなかったら、今の私は、なんなの？

『お前も瞳を得たのか、美紀』

「……え」

『ようこそ、こちら側へ——もう後戻りはできない、手遅れだな……かわいいように』
「何を言ってるんですか」

此方に振り返り、虚ろな目を向けた彼の口は、動いてなどいなかった。それでも、彼の声は聞こえる。いつもの抑揚のあまりない声。それはその目を見た時だけ聞こえて……瞳の奥にあるモノに、私は気付いてしまった。

「……そっか、そうなんです。雅先輩」

「そうか……俺はお前を、護れなかったのか」

2人は、血に塗れた廊下でただ静かに佇む。片方は、後悔を。もう片方は理解してしまつた事を、理解した。

「……雅さんに、美紀さん？」

「何してんだ？ 2人して」

「……」

その光景を見た悠里達は、2人の目を見て絶句した。暗く、離れた場所からでも……儂いランタンの光だけでそれは判別できたからだ。2人は同じ瞳をしながら、ほぼ同時に悠里達へと振り向いた。

弱く儂い、たつたそれだけの灯りでも——眩し過ぎたのだ。

「……イツキは？」

「イツキは……えつと、今外で警戒してる」

「勤勉な奴だな、もう夜だつてのに。俺が呼び戻してこよう。悠里達は飯の支度を頼めるか」

「え、ええ。わかつたわ」

いつも通りの雅に悠里はほんの少し安心して、次に美紀を見る。だが異状を感じたの

はほんの一瞬だったらしく、何もおかしな所はない。胡桃もまたそう感じている。

たまたま、シヨッキングで薄暗い空間に淡い光が合わさって見せた幻想なのだろう。見れば見る程異状なんてどこにもないし、美紀も普段から大人しい性格をしている。

「じゃあ夕飯作りましょうか？」

「そうですね、何がありましたっけ」

「レトルトカレーがあるから、カレーだな！ 由紀もカレー好きだし、なっ？」

「……うん、私カレー好きだよ」

いつもと様子が違う由紀に少々違和感を感じながらも、一同はコンロが置かれる部屋へと移動していく。

「今日はカレーらしいよ、雅」

「……そうか」

雅は月明かりすらない敷地を、ただ歩く。そこではたった一人で会話する男の影がひとつ。

宵闇の中で、彼は無音でイツキがいるであろう場所に向かった。

— 閑話 —

雅「飯だぞ」

樹「わああああああああああつ!? 何も無い所から現れないで下さいよ!!! なんで? 今さっきまでそこ見てたんですけど!」

雅「夜間のカモフラ率を舐めないでもらおうか、90超えてるから」

樹「今の人だとカモフラ率って言ってもわかんないですよね」

雅「とりあえず苔生やして蛇食つとけばいいんだよ、ちゃんとトカゲで握力はあげとけよ?」

樹「色々混ぜってますよそれ。——トカゲってなんですか?」

雅「悲しいなあ」

12. 0001. 閑話・悪夢

寒空の下、声高らかに響く笑い声は……乾燥した空気を吸い込み、喉を痛ませる原因にもなり得る。正直言つて自殺行為だ、だがあえて私はそれをやめない。やめられない。

「あはははははっ!! あははははは、やめっ、やめてっ! あははははははっ!」

「何笑つてんだ、狂つてんのかお前」

「まさか! 私は狂つてなんかないよ! でも……ぷふふっ! 面白すぎてとまらないんだよ!」

「はぁー!」

クソ長い溜息を吐く男は、近くの倒木に刺さっていた斧を抜き肩に担いだ。ちよつと汚れてるけど、手入れもされていればしっかり刃も研がれてる。職人氣質、というものなのかな?

「それ以上笑つたら首落とすぞ」

「あはは! できる訳ないじゃんっ! 私を殺すなんて、自分の首でポウリングしてストライク出すくらいムリだよ!! あはははははっ!」

「……本当に煩わしい、どこまでも気の狂ったヤツだなお前」

冷めた目で見つめると、彼女……？ まあどちらでもいいか。急にけたけたと笑っていた様子から一変し、死んだ魚の様な目になる。

「仕方ないよ、それが私だもん。そうしなきゃ、保てないんだよ」

「はいはい、じゃあ好きに笑つてろ。……理解できんな」

「ふふつ、仕方ないね。あなたはもう捨てちゃったんだから。なのに迎えに来たの？ 必要ないから捨てたのに、最近よく連れ戻そうとしてくるじゃん」

「さあ、どういう事だか。俺自身よくわからんがあいつらが笑っているのに俺だけが笑わないなんて……おかしいだろ」

「あははっ！ おかしいね！ 本当にそれはおかしいよ。まあ私も暇しないけどさあー、いちいち呼び戻すのも面倒だしっそ連れて行ってくればいいのに」

「不可能だ。足手纏いになる」

がつん。斧を再度倒木に突き立てる。私達が座るこの木はとても大きくて、でも長さがあんまりない。だから2人座るにはちよつと狭くて、1人が座ると片方はもたれるか、立つかのどちらかになってしまう。

でもすぐ向こうにはちよつと細い木で、2人分座れるものもある。私は何度もあつちに座ろうと誘った。でも断られてしまう。

あれは2人分を支えられない、中身が腐っているんだそう。そんな事ないよと嗜めても、絶対に私を座らせてはくれない。あいつばかりずるい、いつもここに座って、たまにもたれたり半分だけスペースを開けてくれたりするだけだ。

「えー、ケチだなあ。そんなので楽しいの？ 私は楽しくないな、つまんない。やっぱり皆と話して、笑うのが一番だよ！」

「楽しみたい訳じゃない」

「じゃあなんで生きてるの？ どうせいつか死ぬのに、我慢ばかりして死ぬより好きな事して死のうよ！」

「俺一人ならな」

「えー、ケチだなあ。楽しくなさそう、辛いし怖いし痛いし。そういうの全部押し付けて、自分だけ良い思いしちやつてさ。それでいいの？好きなのに、伝えずに死のうとするなんてヘンタイさんもいい所だね」

「好きに言ってる」

血に濡れていく。大きな背中、真っ白の肌、自慢の斧。全部が赤く、黒く、どろどろと混沌と貪欲に凄惨で悲惨で無価値無意味全てが無駄で愚かで無意味で無意味で無意味で無意味で無駄無駄無駄無駄無駄無駄。

「黒いね、真っ黒だね。でも楽しい、面白い、嬉しい……？」

「全く知らないな」

「ああ……濡れちやうね、本当は奥底にあるものを全部曝け出して、好きにしたいのね。このままじゃ濡れちやうね、このままでいいの？　このままいけば、きつと後悔しちやうね」

「……何を言ってるんだ、お前」

飲まれる。体がどろどろとして、底のないものに。これは憧れ？　それともただの願い？　渴望したものなんじゃないのかな。それはきつと、心から望んだものだよ。なんで無意味で無駄な事を続けるのかな？　皆を守って、良い事はあった？　された？　今まで何をされて、何をしてきた？

「何もしていないし、されていない。それでも俺は——」

いつの間にか、ちよつと寒い森の空き地にある風景は崩れていた。赤黒く、どろりとした臓物の地面。そこかしこに眼球や内蔵が蠢いて、こつちを見て、構ってほしそうにこちらを見ている。仲間にしてほしそうだ、仲間になりますか？　——いいえ。臓物達は地面へと沈んで行った。でもまた出てくる、仲間になりますか？

——いいえ。足元の瞳は全部潰す。気付けばあちこちに瞳があるし、もう全部は潰せなさそうだ。

「クソが！　毎晩毎晩……しつこいにも程がある!!」

おいしいものをたべよう。おいしいものはいっぱいある。

「いらぬい……雑草でも食ってた方がマシだ」

おいしそうなにくがある。だからいっぱいいたべよう、きつとあたたかくて、きつとおいしい。

「いらぬい……指でもしやぶつてろ」

なんで俺は生きているんだ？ 何の為に、誰かを愛せる訳でもない。しつかりと抱き締められる訳もない、触れない、褒められない、使い古されて捨てられる。もうどこに希望があるのか。どこに行けばいいのか。わからない、わからない、どうすればいいのか。

人を殺した、感染者を殺した、いっぱい殺した、沢山殺した、皆殺した。いつかあいつらも、殺す日が来る。ならいつそ、いつか壊れてしまうのなら。

ぷつり。全ては途絶え、常世へと返る。

「大丈夫？　すごいうなされていたわよ？」

そこはいつもと同じ、車の中。

「昼寝とかいい度胸してんな、また模擬戦でもするか」

「えー！　だめだよ、また怪我しちゃうよ」

「そうですよ。次は死んじやうかもしれないから駄目だつて、決めたじやないですか」
「あはははははははははっ!! 皆面白いね! ほら、笑いなよ。いつも人殺しの目をしてないで、笑いなよ。ねえ、笑いなよ、ねえ、笑いなよ」

「どこに笑える場所があるのか」

いつもより一人多い車内は、たった一人の笑い声で喧しい。

「私ね、あなたの事好きよ」

「あたしも好きだぜ、世界で一番な」

「私も! —— 君のこと大好き!」

「……私もです」

そしていつしか笑い声は増えていく。全部で5つの笑い声、どこまでも響いて、次第に単調なものへと、嘲笑へと——

「死んでしまえばいいのに」

「そうだな、邪魔だし死んでくれよ」

「うん、邪魔なの。だから死んでよ」

「……死んでください、あなたはどこにいても、疫病神です」

いつしか、それは俺を憎む声へと、やがてずっとずっとになった肉塊へ吹き捨てる、微かな笑みへと。

ああ……助けてくれ。

何故俺はこうまでも、弱いんだろう？

わかってるでしょ、価値がないからだよ。ふふっ、おかしいよね。君は無意味で無価値で、どこにいても無為に食物と備品を荒らし、誰にとつても害悪で邪魔なものなんだよ。

なんでわからないの？ ずっとこうやって教えてあげているのに、なんで諦めてくれないの？ 便利だね、そうやって全部忘れて、全部なかった事にして、全部自分のおかげだつてこじつけて、全部自分が護つてあげたつて思い込んで。

お前がいなかったら、もっと上手く行つてたんだよ。

「はっ!？」

外は夕暮れ、橙色の光に包まれ、車内にはカーテンの隙間から暖かな光が差し込んでいた。

「……チツ、またか」

いつの間にか眠ってしまったらしい。外を見ると木々の間にロープを張った簡易物干し場で、彼女達は楽し気に洗濯物を取り込んでいる。

——赤く、黒々とした染みはあちこちについていて。よく見れば彼女達の髪や服も汚れていて——振り向いた顔は、あちこちが引き裂かれていて。

「……ははっ、面白い。面白いな、全く」

いつの間にか壁も境界もなくなっていて、俺の体は貪り食われていた。ぐちゃ、ぐちゃ、ぐちゃ、ぐちゃ、肉が千切れる、腹には穴が開いて、紐状のねろつとした臓物を引き摺りだしてはそれが俺の首に巻かれて、皆は笑って俺を殺していた。

「ああっ!？」

悪夢だ。寝ても覚めても悪夢の中? 一番質が悪いじゃないか。

「ど、どうしたの!？」

由紀が驚いた顔で汗だくになった俺の顔を見て、すぐさま畳もうとしていたタオルで拭いてくれる。優しい子だ、でも俺は……なんでここにいるんだっけ?」

「大丈夫? 怖い夢見たの?」

「あ、ああ。柄でもないが……少し怖かったな」

「ああ、そうなんだ。本当に柄でもないね」

いつの間にか、タオルは麻縄に変わっていた。首が絞めつけられ、由紀の3本目の手が俺の腰にあるナイフを抜いてぐさぐさと掻き巻る。

まただ、まだ俺は、抜け出していないらしいな。……いつになったら終わるんだろうか？ 俺の夢は痛みもリアルなのが嫌な事の1つだ。ああ、痛い。死ぬほど痛いよ。

「じゃあ死んじやえばいいのに……ふふつ、なんで死なないの？ 死んでよ、なんでお前は生きているんだ」

見覚えのない男、薄汚い服に身を包んだ男、どこかで見た風貌をした男、頭の半分が砕け、顔も分からない男。……もう嫌だ、なんで俺がこんな目に。

体を焼かれる。バーナーのように全方向から炎が噴き出していて、体中が熱くて息が出来なくて、水が欲しいと願えば今度は水の中。苦しい、息が出来ない。全方向から圧縮されて、体中の骨がばきばきと砕けて丸くなる。

気付けば脚と手の爪先から千切りにされて、気付けば目を挟られて元々あった虚空の奥に吸い込まれる。くるしい、くるしい、体中に剣山が刺さって、丸鋸で3枚に卸されて、ローラーで延ばされて首から下がじりじりとプレスに掛けられる。爪に釘が貫通し、肋骨が一本一本飛び出ていく。

ああ、くるしい。たすけはこないものか。手足が捻りもがれて、口に散弾が発射され、

次には小さな釘と画鋏を飲まされる。

気付けば、笑っていた。痛かった、苦しかった、その度におかしくて笑ってしまふ。楽しい、いつもは笑えないから今笑おう。いっぱい笑って、いっぱい――

「……最悪の目覚めだな」

それは何度目かの目覚め。近くで家計簿をつけていた悠里がおはようと笑顔を見せてくれる。

「ああ、おはよう」

俺は何度目か分からない笑顔で、悠里に笑いかけていた。

13. 休日

直樹美紀は、静かに狂人への道を踏み出した。悲しきかな、そんな事を言えば俺が狂人と言っているようなものだ。でも間違ひなんかじゃない……壊れ方は人それぞれ、現実逃避に走るのは代表的な例で、一例は今此処にいる。

現状、俺が知る世界には人として道を外れた存在がうじゃうじゃという。その次に辛うじて話を通じる奴、次に道を外れかけた奴が。

俺は今どこにいるんだろう？ 人ならざる怪物達の返り血を浴びながら考えた。灰色の空、粉雪が舞う遙か彼方を見て――

「雪……ゆき、か」

道を違えようとする存在を如何に元の道へと戻すか。軌道を変えてやるのか？ それとも押しやって元に戻すか？ ちよつと手荒でも、無理矢理突き飛ばして戻してやるか？

その答えは、未だ知れず――ただ純白の儂い結晶を手に乗せる。だがすぐ傍には紅があり、少しでも逸れてしまえば純白は途端に紅く染まる。

「あいつには人を癒す才能がある……使い方さえ間違わなければ……」

正しく扱えるのか？ 何度も失敗し、苦汁と共にあらゆる人間を陥れてきた俺が。善意で、お節介で、気まぐれで……やる事なす事全てが裏目に出てきた俺が。

——動くな、ただ傍観していればいい。どんなに酷い仕打ちを受けていたとしても……俺が触れれば、もつと酷くなるに決まってる。

「雅さん、終わりました」

「……終わったか、なら帰るぞ」

「はい」

紅い死線を地面に残しながら、俺達はロツジに戻る。バッグいっぱい物資を詰め込んだイツキはちよつと辛そうで、でも今の俺に手伝つてやれる余裕はない。

「今日は一段と冷えますね」

「雪降ってるからな」

「……雅さんも、なんだか冷たいです」

「そうか？」

何かを感じ取っているのか、イツキは恐る恐る俺の顔を覗き込みながら何かを読み取ろうとしている。それを防ぐ為、俺はいつもより表情を固くして対抗する。

誰も俺の出身なんざわからない。どんなに優秀なカウンセラーや心理学を専攻した奴らでも、1人としてズバリ当てた事なんざないんだから。

「相変わらず、秘密主義ですね。僕じゃ力不足でしょうけど、頼ってくれてもいいんですよ。」

「極力人の手は借りない主義なんだ。手を貸すのはともかくな」

「はあ……本当、絵に描いたような強キャラ感ですよ。羨ましいです」

……強くなかない。見た目だけでも、そう取り繕っているだけで……実際は妬んで恨んで、人の不幸を一心に喜ぶ悪役キャラだ。

「僕なんか、どれだけ努力しても脇役かモブの一般兵がいいところですよ」

「俺はそうは思わん。そうやって迷い、決断し、成長していくのは王道展開だ。……そして、不要になった頃に師の役割をする奴が死ぬ。よく見るだろ？ 憧れたなら、そうならうと踏ん張ってみろ。俺もそうやってきた」

「誰に憧れたんですか？ 父親とか？」

「父親はいない、母親も俺が幼い頃死んだ。憧れたのは……誰だっただろうな、今じゃもう何も覚えてない」

がらがらと音を立てる斧を肩に担ぎ、重苦しい空気を払う。イツキもそれ以上聞いている事はなかった。ただ重そうに、リュックを担いで……銃を持ってやる事もできないが、もしこの先急用があればあいつの武器がなくなってしまう。伏射でしかまともに撃てない俺が、銃を持つには相応しくない。

そう自分の中で結論付けて、俺は先頭を歩く。次第に強くなっていく雪は髪や肩を濡らし、まだ乾き切っていない奴らの血を落としてくれた。

「おかえりー!」

「おかえりなさい、どうだった?」

ロツジの皆が集まる部屋に入ると、それぞれが温かく迎えてくれる。今回の遠征の成果を示す為、俺はすぐ後ろに続くイツキを通す為に道を開ける。

「おおつ、今日もすごい量だな。一体どこからかき集めてくるんだ?」

「普通に家や店を漁ってるだけです。何処に何があるか、雅さんが教えてくれたおかげです」

「よくわかるなあ、初めて行った所だろ?」

「昔から物探しは嫌と言う程経験してるからな、慣れだ慣れ」

「今度あたしも物探しの訓練受けよっかな」

「やめておけ、技を身に着けるといふ事はその境地に身を置くといふ事だ。なんでもかんでも手を出すべきじゃない」

適当な事を言っただけであしらいながら、俺とイツキは机の上にバッグを置いてソファにどっかりと身を沈めた。この部屋は隅々まで掃除が行き届いていて、俺達が出て行った

時よりも綺麗になつてゐる気がする。

「2人とも、ココア飲む?」

「あ、頂きます」

俺は首を横に振ると、悠里は微笑みながら軽く頷いた。ローテーブルを挟む形でもう1つ置かれてゐるソファには本を読んでいる美紀と、今日の成果を見たいらしい由紀が俺と同じく勢いよく座る。

「由紀先輩、あまり揺らさないでください」

「ごめん……でも何があるかすつごく気にならない?」

「……別に。雅先輩、成果はどうでしたか?」

「俺は初めだけで殆ど外で待つてたからな、中に何があるかは……使いかけの石鹸くらいしかわからん」

斧の先端に袋を被せてソファの後ろに置く。美紀は俺の答えに小さな溜息を吐き、また小難しい英文が書かれた本に視線を戻した。

「はいココア」

「あ、ありがとうございます悠里さん」

悠里はウェイトレスの様に上品な動きでイツキにココアを給仕し、俺の隣に空いた僅かなスペースに腰を下ろそうとする。

すぐさま俺が位置をずらして空けてやると、悠里は難なく座る事が出来た。

「あら、ありがと」

「邪魔なら一言邪魔だと言ってくれ。なんなら俺は立つてる」

「別に邪魔じゃないわよ？ 座れそうだなって思ったから」

「……そうか。イツキ、今日の成果発表といこう」

「は、はい！」

俺と悠里の会話に何故だか赤くなっていたイツキに命令すると、イツキはバッグから次々と物資を取り出していく。

缶詰にパスタ、日持ちする食材や日用品がずらりと並べられていく。

その中には一目ではよくわからない物もいくつか含まれていたが、すぐさま悠里や胡桃達が確保したものもあつて重要な物資らしい。

「成果は以上です」

空になったバッグを脇に下げたイツキに、一同は盛大な拍手を以て功績を称えていた。

「すごいじゃない！ 結構残ってるのね？」

「ほんと、この量はすごいな。生活必需品もしっかり持つてくる有能さ、流石学園生活部で一番気の利く男だ」

「うんっ！ いくつかんずごーい！」

聞いている側でも恥ずかしくなってくるレベルの称賛にイツキはたじろいでしまう。胡桃の言葉が若干気になってしまいが、それよりも気になる事がある。先程から本を開いたまま会話に参加しない美紀だ。

美紀なら多少毒を吐きながらも軽く褒める程度はすると思っていたが、顔も上げずにただ固まっている。由紀や胡桃も気になってはいるようだが、美紀が何らかのアクションを起こすか原因が判明しなければフォローもできないのだろう。

「それじゃ、ここにーっ提案がある」

このままではジリ貧だ。この複雑な場の空気を換える為にも、何かイベントを企画しよう。

そう考えても遊びだとか楽しむ事についてはさっぱり頭の回らない俺では、こんなありきたりなイベントしか思い付かなかった。

美紀も含めて、皆の意識が俺に向けられる。それを確認してから、俺はこのキャンプの目玉となる計画を打ち出した。

「風呂に入りたくはないか？ このロッジの裏手に旧館がある。そこは今倉庫として使われているが、中にまだ真新しいドラム缶が放置されていた」

「お風呂入れるの!?!」

目を輝かせる由紀に頷くと、胡桃が腕を組んで何かを考え始めた。大方必要になる材料や手順でも考えているんだろう。

工程自体は簡単な物だが、その前準備に手が掛かるのがドラム缶風呂の面倒な所だ。化学薬品や劇物、早い話人体に有害な物が入っていたドラム缶を使うのは好ましくない。

輸入物の飲み物か、その他の固形物ならば念入りに洗えば無害だが……灯油やガソリンが入っていた物が殆どなのだ。

「お風呂、いいわね！ 最近特に寒くて川も使えないし」

「ああ、蓋も取れるタイプだし。中身も何も入っていない……綺麗過ぎて怖いぐらいだった」

「ここも一応そういう場所だし、ドラム缶風呂として使ってたのかもしれないな」

「その可能性もある。いずれにせよ、試す価値はあるな。問題は水だが」

付近に沢はあるが道はない。運ぶとなると人力で少しづつ運ぶしかない。

「あたしが来た時、近くに井戸があったんだ。ロッジには泊まらなかつたけど、敷地内にあると思う」

「……なるほど、もしその井戸が生きっているとすれば水の問題は解決だな」

くたびれたパンフレットを拵げて地図を見ても、井戸のマークや表記はどこにもな

い。だがこのロッジの場所と入口の構造からするに、テントを張って寝泊まりする地点は大体わかる。

最悪この敷地全体をしらみ潰しに探せばいいし、時間もまだ昼前だ。いけるな。

「雪が降ってるが……雪の中入る風呂も乙だな。ドラム缶を設置、燃料となる薪や枝を探す班と水を探し調達してくる班に別ける。それぞれ希望はあるか？」

「はい！ 私薪集めたい！」

「設置班は力仕事だが」

「え!？」

「ちなみに必ず女性一人が設置班に入ってもらおう。出来る限り視線の通らない場所にす
るつもりだが、後から文句を言われても面倒だからな。ちなみに胡桃は水探しの班に確
定だ」

「ま、そうだと思ってたけどよ」

「あと俺は設置班だ。俺と胡桃はそれぞれの班のリーダーという事で……後は適当に決
めてくれ」

自慢の斧を手にとると、胡桃も同じくしてスコップを手にとり部屋の方へ移動した。
それぞれパンフレットを手にとり、井戸がありそうな場所を協議する。

胡桃の大体の記憶で場所はいくつか絞り込めたが、どこもここから遠い。水を運ぶの

は骨が折れるな。

「雅さん、班分け決まりました！」

「ん、どうなった？」

「悠里さんと由紀さんが設置班で、力のある僕と美紀さんが水班です！」

「そうか、了解した。では本作戦の詳細を伝えよう」

「総員、傾注!! 司令官自らブリーフィングを担当してください。一言一句聞き違える事のないように！」

「なんだそれは」

「あはは……なんとなく、言ってみただけ」

胡桃のおふざけに乗っかろうかとも考えたが、あえて普通に行く事にした。この中で胡桃のテンションに付いてこれているのはただ一人、イツキのみである。

彼は胡桃の気合の入った言葉に背筋をピンと伸ばし、まるで法王の演説でも聞くのかというくらいに畏まっていた。

「……えー、まず水の調達をする胡桃班。井戸を見つけたら一人報告しに来てほしい。詳しい場所を確認後、車を使うか否か、応援を寄越すか否かを決める。設置班としては旧館の建物の影を設置予定としているが状況により変わる。手掛かりは残しとくんで、まずは旧館に報告にきてくれ」

「わかった」

「了解」

「……はい」

三者三様の返答をに頷いた後、俺達は扉を開けて作戦開始となった。それぞれ必要な物を手に、正反対の方向へと向かう。

「お風呂の場所、もう決まってるの？」

「見晴らし良い場所がいいな！」

先導する為に少し早めに歩いていた俺の両隣に、ご機嫌の2人が笑顔で付いてくる。正に両手に花、生憎持つ事はできないが、眺めて愛でる事はできる。

「見晴らしが良いという事は覗かれる可能性も増すが、いいのか？」

「え？ 覗く人なんているの？」

「俺とかイツキに覗かれる、とか考えないのか？ 俺達も一応男だぞ」

「んー、別に気にしないかなー。2人は人が嫌がる事しないって知ってるもん」

純粋な言葉に、俺は柄にもなく苦笑してしまう。そうやって人を真つ向から信用できるのはある意味良い事だ。だがそれは時に毒にもなる。誰もが人を信じ、助けてくれるような善人とは限らないんだから。

「嫁入り前の身で無闇に肌を晒すな、って言うのはもう昔の話か……」

「確かにちよつと古いと思うけど、考えは立派だと思つうわ」

「今となつちや水着も薄着も当たり前だからな」

「そうね……でも見せる相手も重要なのよ？　よく知らない相手に水着姿を見せるなんてしないもの」

「そういうものか。まあ、どうであれ景色は心配しなくていい。天候さえ良ければ上を見てみる、国宝級の絵画よりいい物が見れるに違いない」

旧館に到着すると、壁際に斧やバグなどの荷物を置いて中に入っていく。

かなり昔のシンブルな作りをした建物には所狭しと物が並び、中央にやつと一人が通れる程度の通路が設けられている。

蜘蛛の巣や前回来たときに散らかしてしまつた物を左右に退けながら、俺達は手前から2番目の部屋へと入つた。

「これだ、掃除すればまだ使えるだろう」

青く塗装されたドラム缶は錆びも殆どなく、中身もかなり綺麗だ。鼻を突く薬品の臭いも変なぬめりもない。

「あ、ブロックもあるよー」

「ん、そうか。ならやつぱりこれはそういう目的で使われてたみたいだな」

部屋の隅にはコンクリートブロックがいくつか積み上げられており、近くには丸いス

ノコもあった。ビンゴ、ドラム缶も含めてこれは風呂用としてある物だ。

だがここまで通ってきた通路はドラム缶を通せる幅なんてない。持ち上げればなんとか持つて行けるだろうが……片腕で持ち上げるのは難しいな。

「窓から出すか……」

この部屋の窓は小さいものの、なんとか通す事はできそうだ。ただ窓自体を外す必要があり、外れなければ最悪ぶち破る羽目になる。

「私とりーさんで持つて行けないかな？」

「難しいだろうな。窓から出した方が無難だ、予定地も近い。すまないが手伝ってくれるか？」

「うん！」

「じゃあ私は他に使える物がないか見てくるわ、出す時になったら呼んでね」

「了解した。念の為武器は手に持つておけよ、ただし抜き身で持つな」

「はいはい、もう心配性なんだから……」

悠里が部屋を出て奥へと去っていく。それを見送ると、大きく息をしてこの胸騒ぎを落ち着けようとする。

だが長年使われていない建物の中はそれはもう埃っぽく、息を吸った途端に激しくむせてしまう。

「みゃーくん大丈夫!? もしかして体調悪いの?」

心配そうにする由紀に手で心配するなどジェスチャーしながら、建付けの悪い窓の鍵と一緒に無理矢理こじ開けた。

「昨日も寝込んでしまったし、やっぱり無理しない方が……」

「気にするな、あれはまあ……過労みたいなものだ」

新鮮な空気を胸いっぱい吸い込むと、すぐ後ろに居る由紀に向き直る。

「……それより、頼みがある」

「んー? なに?」

「美紀の様子がおかしいのはわかってるな? その原因を探るのを手伝ってほしい。

……というより、美紀を元に戻すにはお前にしかできないと思ってる」

「そ、そんな私……なんにもできないし……」

「そんな事はない。お前は今までグループを纏めてきた影の支配者も同然……その功労は計り知れないだろう」

「影の、支配者!」

思えば、俺が由紀に真正面から頼るのはこれが初めてだ。なんだか変な単語に反応した由紀は頭の中でポーズでもキメているのか、「ふぉー」とか唸りながら興奮している。

……そういえば、何故由紀はこのような性格をしているんだ? この歳まで普通に生

きてきたならある程度現実を知って達観……ある種中二病みたいなモノを発症していてもおかしくないのに。

高校を卒業するまで、いや卒業してもこんな風に子供っぽいのは生まれ持った性格なのか、それとも何か原因があるのか。

過去に由紀が闇を抱えていた事は知っているが……一応山は越えたと聞いている。それでも性格が以前と変わらないのはまだ解せない部分があるのかもしれない。

「……みゃーくん？ どうしたの？」

仮に、そうだとするならば。堕ちた美紀を引つ張り上げる役目は重すぎるかもしれない。一緒に引つ張り上げてやろうにも、俺は由紀と同じ場所には立っていないんだから。

かといって美紀と同じ場所にいるかと問われれば、それも違う。足場にもなれなければ、もたつく美紀の尻を蹴り上げてやる事もできないのだ。

「急に黙り込んじゃうと……ちよつと怖いよ？」

「あ、いや。悪い、ちよつと考え事をしていた」

「みーくんのこと？」

「そうだ。それと、お前の事も」

「え、えっ!？」

「何故赤くなる……まあいい、窓を外すぞ。ささくれた木に気を付けろ」
「う、うん」

もうしばらく、じつくりと考える必要があるな。由紀の癒し能力は絶大だが、由紀が壊れてしまったら……一瞬で俺達は崩壊する。俺やイツキはともかく、一瞬で彼女達へと伝染するだろうからな。

結論からして、今は保留だ。時間を掛けるべきではないとわかっているが、現状も把握せずに突つ込むのは愚かである。何を知ったか、見たか聞いたかは知らないが……美紀がああなった原因は自分で行かしよう。

そう自分に言い聞かせ、俺達は黙々と窓を外す作業に取り掛かった。

寒空の下。しんしんと降る純白の結晶の中、胡桃達はようやく水源を見つけていた。彷徨う事30分以上。もしかすれば雅達はもう設置して薪を集めてるかもしれない。昔ながらの井戸の持ち手を握り上下に動かすと、最初は出が悪かったもののしばらくしてからかなりの量が汲みあがってくる。この調子なら使えそうだ。

でもとりあえず報告に行かなきゃいけないけど……

「車は問題なく通れる……ポリタンクは1つだけ空があつたよな……」

「はい、あともう少ししか残っていないのが1つですな」

「じゃあそれも使うとして、2つか。足りるかな？」

「大きさにもよると思いますが、3往復ぐらいですかね？」

「そっか、じゃあ報告ついでに車取って来るわ」

イツキと美紀にこの場を任せ、胡桃は一人で歩き始めた。……リーさんはまだわかるけど、なんで由紀が向こうなんだろう。っていうか、仕方ないけど……仕方ないけど、あたしが水班つてのはなんかなあ。

「どうせなら、あいつと一緒にの方が気が楽なのに」

ふと愚痴が漏れる。その瞬間、いつの間にか「彼」の事を考えていると気付き冷えた切った手で両頬を包んだ。

「……ば、バツカみたい！ 漫画じゃないんだから!!」

恥ずかしすぎてお湯が沸かせそうだ。もう殆ど体温もないようなものだけど、頬はほんのりと暖かくなっている気がする。

——そうだ、そうだった。あたしはもう、普通じゃないんだった。あの人、忍さんから雅がああ薬を打ったと教えてもらった。感染しているのに、それでも雅は普通の間と変わらない。

美紀もリーさんも、何よりもイツキすらも変化に気付かない訳がない。あいつは……体が冷たくなる事すらないんだ。

それを考慮すると、やっぱりあたしは……

独りでに落ち込んで雅に心配でもされたら癪だと、頬をパチンと叩いて気付けをす。あいつの負担を増やす訳にはいかないんだ。

ここであたしの事で雅に無理をさせたら一生後悔するかもしれない。その為にも、あたしはいつも通りでいなきゃいけないんだ。

もう一度頬を叩いて、あたしは走り始めた。旧館までは走れば20分も掛からない。運動にもなるし、この変な気持ちを吹き飛ばす切っ掛けになつてくれるに違いない。

予定より早く旧館に到着すると、建物の裏からリーさんと由紀の声が聞こえてきた。その声を頼りに裏側に回つてみる。

「よーつす、井戸見つけたけど」

「おう、あつたか。どうだった？」

「問題なく使えるよ、そつちは？」

「元々風呂用としてあつたものらしくてな、上々だ。悠里がキャンプ用の固形燃料も見つけてくれたし後は着火剤か小枝と落ち葉さえあればいつでもいける」

「なにそれ？ すごいトントントン拍子だな」

「ああ、怖いくらいだ」

効率のいい薪の組み方を固形燃料で実践している雅は、近くに転がっている木材なんかを由紀に取ってこさせたりしていた。

なんかガラス片も転がってるけど……ああ、窓ぶち破ったな？

「みゃーくん！ これ使えるかな？」

「ん、ダンボールか。これで着火剤の問題は解消したな。後は水だ、2人を貸そうか？」

「いや、車さえあればすぐ持ってこれるかな」

「そうか、なら車で行くといい。だが由紀、一応手伝いにいつてやれ」

「はーい」

別にいいのに、なんで由紀だけ？ 超笑顔であたしの方にくる由紀はその理由を知ら

ないみたいで、聞く意味はないみたいだった。

なら雅に直接聞けばいい話なのに、なんでかそれは躊躇われる。

「覚えてし、本も燃料にするか……」

「勿体ないでしょ？ 今後の為にも残しておきましょう」

「一度読めば覚えるもんなのになあ……」

「私が読むのよ」

なんだか、りーさんと雅の邪魔をするような気がして——そもそも邪魔ってなんなんだろう。2人はそういう関係だったっけ？

「いや、そんな素振りとは……してた、かな。雅達が帰って来た時、リーさんわざわざ雅の隣に座ろうとしてたし……」

「胡桃ちゃん？」

「ん、ああ。じゃあ行くか」

……後ろ髪を引かれる、つていうのはこういう感じなんだろうか。

「いや！　そもそもなんでこんな残念な気持ちになってるんだ!?　別に雅が好きなのに。でもないので。どちらかという、今までずっと一緒にいたりーさんが自分の知らない顔をしてたりするのが気になる……のかな？」

「多分そうだ、きっとそうだし、恐らくそうなんだろう。」

「楽し気に談笑する2人を背に、あたしは車に向かう。雅の方は相変わらず表情の変化に乏しいけど……なんだか、最近はよく笑う様になつた気もする。今だって——」

「はっ、なんだそれは」

「おかしい話だけど、真実よ」

「……どちらにせよ、面白い話だな。全くお笑いだ、イツキも笑うだろう」

「くつくつくと堪える様な笑いは、あたしの心を揺さぶるには十分だった。あいつは、リーさんといるとよく笑う。あたしと居る時は……殆ど笑わないのに。」

由紀を胡桃に預けて見送った後、俺は先程悠里からこつそり耳打ちされた。あるモノの処理の為、旧館の奥に来ていた。

「……哀れだな」

「そうね……でもきつと、この人も——」

「言うな。やりにくくなるだろ」

「……ごめんささい」

それきり、悠里は顔を背けていた。俺達の目の前には、壁に固定された棚に柱に己を固定した感染者がいる。腐敗状況はそこまで酷くない。恐らく、あの翁と少女の関係者だ。

俺と同じ年頃だろうか？ 傍らには鉈が転がっており、その刃先は酷く汚れ、所々欠けている。元々古ぼけていたのだろうが、近頃まで現役だったと見れる。

「護れたのか？ 俺が言う義理はないが、後悔のない生き方ができたか？」

——あの少女と同じ面影を持つ感染者は、低く唸りながら俺を見た。驚く程大人しく、まるで最期を悟っているかのようだ。

「……できる訳ないか。お前もあの子も、成っちゃったんだからな。……全くお笑いだ、何で俺はこうも……誰かの介錯をする機会が多いのか」

やんなっちゃうなああと、小声で呟く。斧を振り上げようにも色んな場所に引つ掛かつ

て使えない。だから、そこに転がる鉈を借りる事にした。

再度振り被ると、斧よりも短い鉈はすんなりと持ち上がってくれた。先程まで顔を背けていた悠里も、意を決したのか正面を見据える。

メキヤツ、という音と共に斧とは違う感触が手に伝わってくる。短い分、しつかり碎いたんだと認識させられる。嫌なものだ。

「さ、風呂の準備に戻ろう」

「……ええ。それにしても、雅さんつてすごく切り替えが早いわね？」

「過ぎた事を気にしても仕方ない。今とその先だけ考えりゃいいんだ、先も辛いなら今だけ見て、今も辛いなら昔を思い出せばいい」

「昔も辛かったら？」

「そんな奴はいないだろう。何もかも辛くて不幸な奴が生きれる訳ない。こうやってのうのうと生きてる以上楽しみがあるんだよ」

鉈が食い込んだままの死体がある部屋を出ると、その重厚な扉を閉めてその前に荷物を積む。これで扉は見えない。家探してもされな以上、アレは見つからんだろう。

死んでからどうなるうが関係ないと俺は考えるが、生きてる奴らからすれば……死に様を知らない奴らからすれば情けない恰好で死んでると思われるかもしれない。

それはなんだか、嫌なものだ。誇りある死に方をした奴が貶されるのは良くない。

あの翁と少女を護っていた奴だ。どんな結末を迎えたにせよ、それまでの行いは誇れる事だったと確信している。

「なあ、悠里」

「? どうしたの?」

「俺は今まで重大な事を忘れていたよ」

それは死の宣告も同然。こればかりは少々誇張し過ぎている感じも否めないが、重大な事には変わりない。

「……火の番は、誰がすればいい?」

「火の番?」

「常に最適な温度に保ち、湯で火が消えない様に見張り、護衛の役割もこなせる奴は……胡桃は、できるのか?」

「……どう、かしら?」

微かに苦笑気味になった悠里と、さあつと血の気が引いていく俺。ここは祈るしかないが、もし胡桃がこなせなかったら……というか、胡桃も風呂に入る訳で。

……ヤバい。ヤバいぞ、これは。最悪の事態に陥った場合、素っ裸の女子を守りながら血飛沫を撒き散らす羽目になってしまう。

おお、神よ。なんと残酷な事か。男と女、その違いを作ってしまった神はその弊害を

理解していないときた。なんて事だ……まあ、当たり前だな。神などいないからな。

俺は悔いた。もしかすれば、この先俺自らが彼女達を傷つけてしまうかもしれないという可能性を生み出してしまったと。

14. お湯炊き

「諸君！ 我々は遂に、この第一作戦を完遂した！ だが新たな問題も発生している……この聖なる窯を維持する『火防』^{ひもり}となる者を選定しなければならぬ」

大仰な手振りも交え、実に臭い台詞で集まった一同に現状を説明した。だがこの言葉を理解する者は少なく、感動の眼差しで俺を見るイツキと胡桃、後は事情を知る悠里しか俺の言っている意味はわからないらしかった。

「……つまり、どういう事ですか」

「火の番する奴がいけない。俺がしようにもお前らの入浴中ずつとすぐ傍にいるんだぞ？ 気が休まらないだろうし何より不快だろ」

「私は気にしないよ？」

由紀が天使の笑みで答えてくれるが、「俺は無理」と即答しておいた。

「じゃああたしがーってなる所だけ……ごめん、焚火とか、した事なくて……」

「ああ……やはり、こうなってしまうのか」

「私は気にしないわよ、ね？ 美紀さん」

「はい、流星に進んで見てくる事はないでしょうし」

「あたしも別に気にしない……か、なあ？」

最後の胡桃による微妙な返答がトドメとなり、俺は項垂れながら親指を立てた。

「……よろしい、ならば俺が火防となり、この目を潰そう。そして唱えるのだ——『B
onefire……』」

「何言つてんだコイツ」

「やたら流暢に喋らないで下さいよ、それも真顔で……ぶふっ！」

「詠唱でもしようか？ 固有結界でも出そうか？ それとも落ち着いて素数を数えてみようか……」

「雅が壊れた！」

「やめろオ!! おのれ眠り竜……俺の特大剣折りやがつてエ!! ソウル返せよオ!!」

もう何が何だかわからない事態になっている時、ふと優しい香りと共に温かい物体が頬に触れる。それは悠里の手で、優しく俺の顔を包んでいた。

「落ち着いて？ 色々な事を思い出してるんでしょう？」

そうなのか？ 確かに過去の記憶で、トラウマに近いものだ。俺は過去にあらゆるトラウマを抱え、それを忘れてきた。何かの言葉や風景を鍵に、それを思い出してしま

う。
俺が落ち着くように、悠里は優しく頬を撫でてくれる。頭に昇った血がようやく収

まってくる、自分はなんて恥ずかしい状態なのだろうと思ひ知る。

「……………よし、では火の番は俺が受け持つ。その間俺は何も見ないし聞かない、ただ目の前で揺らぐ火だけに集中しよう」

「だ、そうだから水を入れて火を点けましょう」

非常に落ち着いた、むしろ冷え切った思考で俺は着火する。落ち葉と小枝、散り散りにした紙片をダンボールの上に纏め、ライターで着火する。そこからいくらか火を大きくさせると、やつと風呂の下にある薪へと移した。

「絶望を焚べよ……………」

「まだ引き摺るんですねそれ」

「言ってみたくないか？ この状況だと笑えない冗談だが……………」

俺と同じく火を見守るイツキは、面白おかしそうに笑う。それにつられて、俺もほんの少しだけ笑ってしまった。こんな俺でも人を楽しませる事ができるのだと。

ドラム缶の半分くらいまで注がれた水を温めるにはどれ程待つ必要があるだろうか？ 正直準備ややり方までは知っているが細かい事まで熟知している訳じゃない。

温度が高すぎれば水を足せばいいが、それにも限度がある。静かに燃える火の前に、俺達はただ待っていた。

「……………で、どれくらいで沸くんのだ？」

「さあ、わからんな。沸いたら知らせるから時間を潰してこい」

「でも雅さん1人だけ残していくのも……」

「構わん、1人は慣れてる」

余ったブロックを椅子代わりにして、どつかりと腰を落ち着ける。これからは長丁場だ。冬の寒さも、目の前にある火がいくらか和らげてくれる。

どれくらい掛かるかはわからんが、入れる頃には陽も落ちて綺麗な星空が見れるはず……だといいが。生憎空は雲で覆われ、粉雪が舞ってるし。

それもそれで良いが、折角なら綺麗な星に囲まれて風呂に入りたいものだ。

「……やっぱり、私も付き合おうわ」

「やめておけ、今の時期は特に冷える。部長が風邪をひいて誰が指揮するんだ」

「ならあたしならいいだろ？ 寒さには強いんだ」

「うちの主砲が風邪をひかれるのも困る」

「なら私は!？」

「論外。部屋に戻れ」

「もう誰も外にいさせない気ですね、諦めましょう」

珍しく美紀が空気を読んで全員を部屋へ戻そうとしてくれる。各々それは深く理解しており、溜息を吐いて俺達がいた新館へと戻っていった。

「……はあ、1人になるのは久し振りだな。最近、いつでも誰かと一緒にいて……若干疲れてた所だ」

小枝を火に放り込むと、パチパチと音を鳴らして火の粉が舞う。定期的に枝やら葉やらを投げ入れて遊んでいると、段々眠たくなってくる。

いかんいかん、火の番が眠っては……それも真冬の雪が降っている時に眠るなど手の込んだ自殺というものだ。

気付けにポーチから銃を取り出して軽くメンテナンスを始める。バネはへたつてないか？ スライドに砂が噛んでいないか？ 銃口に土が詰まってなんかしてたら撃てないからな。

ついつい細かい所まで見てしまう。それでも、銃に異常は一つもなかった。日頃の整備と丁寧な扱いの賜物だ。そもそも全くと言っていい程使わないのが問題であるが。

「風呂……風呂か。ご飯にする、お風呂にする、それとも……とかいうのは発祥はどこなんだろうか？」

どうでもいい事に頭を回しても、なんの手掛かりがない以上アニメやゲームなんかで見たシーンやその亜種の使い方しか思い出せない。まずい、このままでは眠ってしまう。

そうならない様に、俺は頭の中でその台詞を彼女達に言わせてみる。

『おかえりなさい、雅さん！ お風呂にしますか？ ご飯にしますか？ それとも戦闘訓練ですか!?』

『よし！ ならとっておきの訓練をしてやろう!! まず腕立てだ、背中に俺を乗せて300回やつてみせろ!!』

何故一番手がイツキなのか、というツツコミは置いて……俺は鬼畜か？ 50kg以上ある俺が背中に乗った状態で腕立てとか、地獄だろ。

いや、それ以前に俺はいくらか軽くなっている。腕1本とその他無駄だった脂肪を落として今なら一体いくつなんだ？ アニメキャラの摩訶不思議な体重に近付いているかもしれない。

よし、もうこれ以上考えるのは止めよう。そもそも俺は『彼女達』に言わせようとしたのに、何故男であるイツキに言わせたんだ。まさか実は女か？ まさか、あり得んな。『みやーくんおかえりっ！ ご飯とお風呂と私！ どれにする?』

『寝る』

『ふええっ!?!』

うむ、由紀だとしてもこういう回答になつてしまう。あの純粋な眼差しで私にする? なんて聞かれたら外面は無反応でも内面はドギマギして仕方ない。

というか由紀に家事スキルはあるんだろうか? なんだか何もかも失敗して結局俺

が主夫みたいになる未来が見え隠れするが……人は見掛けに寄らないからな。

それより、台詞的に仕方のない事だとしても結婚している、的な想定をしている自分が気持ち悪い。

『おかえりなさい、雅先輩。ご飯にしますか？ お風呂にしますか？ ……それとも、私、ですか？』

『全部……飯風呂夜伽の順で』

『よ、とぎ？ ……はっ?!? そ、そんな……』

うわあ……きめえ。これは自己嫌悪に陥らざるを得ない。いや、これは彼女達に様々な台詞を言わせて反応しないかのチェックでもあるのだ。少なくとも自己嫌悪に陥っている今は問題ない。オールグリーン、正常だ。

『おかえりつ、雅！ 飯食うか？ 風呂にするか？ それか——うう、言わせんな馬鹿！』

『ん？ 何をだ？ 口に出さなきやわからない事もある。どうか勇気を出して言っ欲しい、そうすれば俺達はもつと分かり合えるだろう』

『そ、それは……えつと、その……ようするにだな？ え——』

ええ、よくありませんね。きつと映画を見ようとしても言おうとしたに違いない。一緒に純愛モノの甘ったるい映画を見よう、と誘いたかったんだな間違いない。

俺がそういう関連のジャンルに疎いから遠慮してしまつてるんだ、そういう事だな。ようするに映画を見よう、そういう事だ。

「よく帰つたね雅、ご飯にする？ お風呂にする？ それともお一人様ご案内、かな？」

「ファツキユー」

「随分と直球な答えだ……雅らしいね」

「違うそうじゃない」

どこからか勝手に入り込んできた思考を、持っていた小枝と一緒に火に投げ入れる。それきり、毒電波はなくなった。

「み、雅さん？ さっきから何ブツブツ言ってるの？」

「!？」

今度はマジモノの声に、俺は慌てて振り返つてしまった。そこにはいつもより一枚多く厚着した悠里が心配そうに俺の周囲を見渡している。

だが当然何者の姿もなく、何かに見間違えるような影もない。気付けば既に陽は落ちていて、悠里の手には穏やかな光を放つ灯りがぶら下げられていた。

「誰か、いるの？」

「いや、誰もいない。俺一人だ。……今のはただの独り言だよ」

「……そう」

ダウンのジャンパーを羽織った悠里はハンカチを取り出して地面に敷くと、そこをろうとする。

「待った」

「？」

「これを使え」

それを許さず、俺の座っていたブロックを悠里の元へ押しやる。

「悪いわ、ずっと見てくれてるのに」

「これくらい何も悪くない。ただの見栄だ……女性を冷たい地面に座らせる男にはなりたくない」

「ふふつ。じゃあありがたく使わせて貰うわね」

地面に敷いていたハンカチをブロックに敷こうとした悠里を俺はまたも止めて……今度は無言で着ていたコートを脱いで折り畳むと、ブロックの上に敷く。

そして仰々しい手振りで座る場所を示すと、悠里はまたふふつと笑ってやつと座る事が出来た。

「寒くない？」

「問題ない。俺は冬生まれだからな、むしろ寒さが心地いい」

「そうなの、じゃあ冬は好き？」

「一番好きだな。夏は暑苦しいしセミファイナル食らうし、祭りに花火とイベントも多
くてな」

「いいじゃない、お祭りも花火も楽しいでしょ?」

「……いいや」

温度を確かめる為、風呂の中に手を突っ込みながら俺は否定した。祭りも花火も、た
だ嫌いだけで面倒なイベントだ。何より、1人で行く必要もなかった。

忍や尊さん達と行く機会もなく、俺は殆ど冷房の効いた部屋でゲームしてたな。
……まだぬるいか、もう少し火を強くする必要があるかな?

「まあ、風呂上がりにキンキンに冷えた酒を飲む時くらいだな、夏様々だと思うのは」

「はあーあ、忍さんも言ってたものね。雅は大酒飲みだーって」

「あいつも人の事言えんよ。で、ここにきた目的は? 他愛のない話をする為じゃない
だろう」

追加の燃料を放り込みながら、俺は地面に座った。はらはらと舞い落ちてくる雪と空
を眺めて、なんとなく感傷に浸ってみる。

「他愛のない話をする為よ? 1人だと寂しいと思って」

「はあ? そりやまた物好きな……」

「あと……この前の事について、しっかり話しておきたくて」

「この前？」

この前と言うと、忍と別れた時だろうか。あの時、悠里は今度にすると言ってたし……それにしても早い段階で話すもんだ。

「私、あなたの事好きって……言っただじゃない？」

「……ん？」

そうくるとは思わず、俺は無意識に首を傾げてしまった。俺はてつきり、あの時言わなかった事を言われるものだとばかり考えていた。だが悠里にとって、それよりも大切な事らしい。

ま、まあ確かに俺はあの時最後まで話を聞かなかつたからな……だからと言って、こう訂正してくるといふ事は。やはり人としてとかあなたの存在を認めていますよ的な意味だと念押ししたいんだろう。

「私はあの時、確かに好きだと言ったわ」

「ああ、言ってたな」

「でも……実の所ちよつと誤解というか、伝え間違つた所があつて……」

申し訳なさそうに横目で見てくる悠里に、俺は覚悟を決めてその先を促した。実は、好きと言つたのは嘘……というのは前提として、本当は疎ましく思つてるだとか、そつちの方を予想していた。

「みんなあなたの事好きだって思ってるわ。それはあなたもわかるでしょう?」

「まあ、なんとなしに?」

「でも、私の言う好きは、そうじゃないの」

「ごくりと、唾を飲み込んだ。死の宣告……そう確信して予想もしたのに、今の今までそれを匂わせるワードが出てきていないからだ。

状態や口調、声色全てを鑑みても、マイナスの要素が見当たらない。だからほんの少し期待してしまう自分がある。でも、その期待はすぐさま砕かれるだろう。ふつふつと湧き出る喜びも、覚悟したつもりなのにどこかでそんな訳ないとタカを括っていた自分も。

「——私は、あなたが好き。ら、LOVEの方よ? わ、私は……雅さんを、男性として好きな……」

「はい? ラ、ラブの方ですか? 冗談はよしてくれ、そうやって上げて落とすのはこの世界の常套手段じゃないか。嬉しくない訳じゃないが、素直に喜べない。

ある意味、俺達にはフラグが立ってしまったようなものだ。そう思った瞬間、俺は周囲に誰かがいないか、倒れてくる物や爆発する物を火に入れていないか確認する。

「ど、どうしたの!?!」

「いや……周囲に危険がないか確認しただけだ。それより、それはどういう——」

「どうも何も、そのままの意味よ……気付かないみたいだから、私から……言ったの」
パチパチという音は慎ましい拍手のようにも聞こえて、俺は目の前で儂げな光に照らされた彼女を前に動揺してしまう。

よく見れば悠里の顔は真っ赤で、耳まで赤くなっていた。そうだとわかった瞬間こっちまで恥ずかしくなってくる。……クソ、こんな展開予想もしてなかった。

そりゃこんな可愛い子から告白されればすごい嬉しいし、本来ならひやつほう最高だぜと大喜びしてのた打ち回る自信がある。だが！ だが、だな？ 俺はこの学園生活部に入る時、いくつか決めた事がある。

悠里と、俺の本心に応じるといふ事は……その最初の取り決めに破ってしまう。

「……返事、聞いてもいいかしら？」

「あ、ああ……その気持ちには正直、嬉しい限りだ……」

「え……じ、じゃあー！」

ぱあつと花が咲いたような表情で飛び付いてくる悠里に、俺は顔を背ける。

「な、なんで……こつちを見てくれない、の？」

「嬉しいが、その気持ちには応えられない。俺はお前達を護る、その為だけに今生きてい
る。俺がこの部に入ったのは、お前と恋仲になりたかったからじゃない」

「で、でも……」

「まだ一ヶ月も経ってないんだな。なのに俺はここまで変わった。まるで、平和だった頃に戻った気分だ」

前よりも笑う時が多くなった。他人と居て楽しい、面白いと感じられた。彼女達を見て、胸が躍る瞬間もある。……死にたくないと思つた時、俺は悠里の顔を思い浮かべたりもした。

それだ。一番変わったのはそれだとわかる。俺は死にたくない。どこかしら諦めて、その場の流れに身を任せてばかりだった俺が、珍しく死にたくないと思つている。

今にも泣きだしそうな顔をした悠里に相對したまま、恐る恐る頭を撫でてみる。一瞬驚いたように体を震わせたが、決して嫌がる素振りは見せなかつた。

もしかしたら恐怖で動けなくなっているだけかもしれない。怪物同然とは言え、平気で「元人間」を屠り、生きている人間ですら容易く手に掛ける殺人鬼。

そんな俺に、人を好きだと言える権利はない。好かれる権利も、毎朝おはようと声を掛けられる権利も。

「ありがとう、俺を好いてくれて。それだけで十分だ……それ以上は、幸せ過ぎて死にそうだから。イツキもいい男だろう？ 年下だが、将来有望だ」

「……そんな泣きそうな声で言つたって、説得力ないわ」

「だよな、でも本心だ。俺は今すごく幸せだ、このまま死ぬんじゃないかと思えるくらい

……むしろ今死ねたら、とても気持ちよく死ねる……でも——」

「でも、それは出来ない——でしよう？」

先読みされたのがおかしくて、俺は感情のままに笑った。胸の辺りにはじんわりと温かいものが広がって……どうやってこんな感覚が生まれているんだろうと不思議に思う。

悠里も見事的中させた事に微笑み、顔を上げる。悠里の瞳には、俺の顔も映っていた。両目から涙を流し、ぎこちない笑みを浮かべている。

「私ね、こうも思うの。あなたが私達を守る為だけに生きる、そう決めたのはまだ空っぽのあなたで……今のあなたとは別人なんじゃないかって」

「詭弁だな。どんなに状況が変わっても、過去は覆らない。俺は言った事には筋を通すように心掛けている、だから悠里……お前とは——」

「……そういえば、誰かと付き合わない、なんて言ったかしら？」

「イツキに言ったんだ、車内恋愛は禁止ってな」

「そうなの……口に出してしまったなら通さなきゃいけないわね……でも私は諦めないから。女の子をここまで誘惑しておいて逃げられる訳ないからね？」

誘惑……？ 俺がいつ誘惑したんだ？ もしかして無意識の内になんか誘惑した行動を取っていたのか？ だとしたら事案確定だが、生憎もうそれを罰する場所も人もいな

い。

何が何だかわからないと言った状況を打破する為に、ダメ元で風呂に手を突っ込んでみる。すると、かなり長い間話し込んでいたのかちよつと熱め程度の湯ができあがっていた。

「よし、新館に戻って風呂が沸いたと伝えてくれ。後は順番を決めて、その順に来てくれたらいい」

「ええ、わかったわ。雅さんはいつ入るの?」

「俺は最後だ。というか背中の中の傷もあるから湯には浸からない」

「そうなの? じゃあ私が体拭いてあげるわね」

「いらん。さつさと呼びに行け、燃料と水も無限じゃない」

手で追い払う動作をすると、悠里はくすりと笑って新館へと戻っていった。——顔が熱い。暗いからバレなかったか? いや、最後のアレは絶対に気付いてた素振りだな……また記憶が消える原因が……

いや、消えないか。今俺はとでも満足している。忘れたいと願っていない時は、忘れたいと思っている時より緩やかな物だ。

また1人になった瞬間。悠里ならどういいう言い方をするだろう? と初めに考えていた「飯風呂私」をシミュレートしてみる。

だが状況から考えていく途中で、やめてしまう。我ながら恥ずかしい限りだが、それを想像したら……きつとそれを望んでしまうに違いないと思つたからだ。

「ん、晴れたか……」

まだちらちらと雪は舞っているが、木々の上にぽつかりと雲が途切れている空間があつた。そこからは微かな光を瞬かせる星が不格好な額縁に入れられている。

まるで絵画だ。そんな風に考えて、すぐにアホらしいと鼻で笑う。でも、立ち昇る湯気を通して星が見れたら……感慨深いだろうな。

この辺にレジャー施設とかはないんだろうか。遊園地でも動物園でも水族館でもいい。……最後2つは悲惨な事になつてるだろうから、行けて遊園地か。

きつと感染者もわんさかといふに違いないが、こういう時こそ羽を伸ばせる場所、時間が必要だ。

このイベントもそれを兼ねてのものだが、いまいち迫力に欠けるな……遊園地、この辺にあるか聞いてみるか。

今後の候補を手帳に書き込むと、ブロックに座つて1番手が来るのを待つ。クツション代わりにと置いてあつたコートは、まだ微かに温もりが残っていた。

15. お風呂・前編

「で、順番どうすんだ？　早い所決めないと雅がキレるから、さっさと決めようぜ」
机を囲んだ一同は、それぞれが重苦しい表情のまま腕を組むなり唸るなり……

一名は読書に励んでいるが、ほぼ誰もが重大なその順番に際し悩んでいた。

久し振りの入浴。日頃から体を拭いたり髪を洗ったりはしていたが、使っていたのは雨水か川の水。

冷たい所為で泡立ちも悪く、特に洗剤も易々と使えない為は何日かごとに制限があった。そんな状態で風呂に入ればどうなるか？

軽く言えば、いい出汗が取れるに違いない。

「常識的に考えれば一番の功労者で尚且つお湯を沸かしてくれた雅が最初に入るべきだよな」

「そうね、でも彼は入らないらしいわよ」

「え、なんで？」

「傷があるからって。それに入ったとしても皆入りきる頃には湯冷めしちゃうわ」

「ああ、そっか」

だとすると、男が先か女が先か。二番目の功労者としては悠里かイツキ、次点で胡桃自身。

そう考える胡桃だが、些か男が入った後の湯船に浸かりたいか、と考えると……イツキには悪いけど、ちよつと気になる。

けどあたし達が浸かった残り湯を堪能されると……それも嫌だ。イツキならそんな事はしないとわかっているし、胸を張ってないと言い切れるけど。

けど！　なんか嫌だ。

「じゃあここは王道的にじゃんけんで！」

「いや待て由紀。ここはよく考えないと……」

「あの……私が来てからもう10分以上経ってるから……」

「でもよく考えないと！」

「じ、じゃあですね。こうしましょう！」

自分が渦中にある。そう悟っていたイツキは、意を決して今にも暴れ出しそんな胡桃に進言する。

「僕は入らなくていいです」

「却下あ!!」

「なんで!?!」

自ら身を引く。私の為に争わないで的なる事を言うには気が引けたが、イツキは暖かいお湯に浸かるチャンスと文字通りドブに捨てた勢いだつた。

なのに、渦中へと引きずり込んだ張本人とも言える胡桃がそれを弾いた。それはいけない、人間的にどうか、と。

「イツキはあたし達を守る為にいつも巡回や警戒、遠征？ にでてくれてるだろ？ だから入らないなんて言われたらあたし達が入りにくくなる。気持ち的に」

「ええ……」

何より残り湯を気にする人が言う台詞ではない。イツキは心から真に感じる矛盾を短い反応で示すと、悠里達を苦笑させた。

「胡桃？ 私達は学園生活部、部員は家族みたいなものでしょ？ 胡桃だって雅さんを兄貴みたいたとかイツキ君を弟みたいた——」

「あああああつ!! それは言うなつて！ そ、それに家族でも異性が入った後は気にするもんだろ?!」

「全然？ なんなら一緒に入ってもいいけど」

「ない！ それは絶対じゃない！」

「えー。胡桃ちゃんはイヤなの？ 私は弟がいたら一緒に風呂入ってるよ？ いないけど」

「私もです。勿論ある程度成長したら一緒には入りませんけど」

風呂の順番を決める話し合いはどこへやら。女子というものは目的を忘れて話し込む割合が高い。

それが世の井戸端会議という情報網の発達に貢献し、主婦の恐ろしさを際立てる。

そんな馬鹿みたいな話を、イツキは以前雅から聞いていた。女を舐めるな、奴らは怪物だ。

そこらの心霊スポットより身近で、破傷風より酷い有様を何もしなくても引き起こす。

……本当だ。現に、今彼女達は外で待つ雅さんの事も忘れて兄弟がいたらどうなるのか、みたいなガールズトークに発展している。

肩身が狭い思いをしながら、唯一あまり話の輪に入らずおどおどする悠里さんに目配せしてみる。

私だつてどうにかしたい。むしろどうにかしてくれ、というような……というか半分以上くらい涙目になった悠里さんはむしろ助けを求めてきた。無理です。

「まずだな、兄貴がいたとしても雅みたいな性格には絶対ならない！ つうかどんな経験したらあんな風になんだよ？ 文武両道、みたいなさ！」

「さあ、聞いてみたらどうですか。多分はぐらかされておしまいだと思いますけど」

「私もお兄ちゃんなら雅さんみたいな人がいいな！ あ、でも可哀相だから腕はあった方がよいけど……」

「そりやそうだろ……というかそれはタブーだ。でもだからこそ渋いというか……あ、いやなんでもない」

数分もしない内に話の趣旨が変わってきた。やっぱり、女子というのは恐ろしい生き物なんだな……とイツキは学習した。

それより、男がいる内に女子会みたいな話題を出さないでほしい。

そもそも何故残る唯一の男である僕の前でそんな顔を赤らめたり照れたりするのか？ わかっているけど悲しいし、野暮つてものだ。

かといってこの場を立ち去ろうとすればそれはそれでまた波風が立ちそうだ。だからと言ってここに残れば、それもそれで波が立つ。

結論からして、諦めるしかない。

全てを諦め瞬きと呼吸のみに精神を集中したイツキと、暴走した胡桃達をどう抑えようか困惑する悠里。

そしてあえて何も言わず適当に楽しむ美紀に、完全に勢いに飲まれ目的を忘れた由紀。

「……なにこれ」

そんな喧噪を窓の外から眺める雅の頭には微かに雪が積もっている。

遅い、遅すぎる。燃料と水も無限ではない。いつになったら最初の1人がくるのか？

そう思い立って言いに行こうか迷って5分。

ぱちんと薪が爆ぜた音で心を決めてずんずんとここまで来たが、この混沌とした現場を見て若干の苛立ちも忘れてしまっていた。

『おいゴルア!! 出てこいやオルア! タオル持つてんのか!? おう、石鹸は? よおし最初の1人こいやオルア、俺の背中に付いてこい』

と、若干キレた様子でからかってやろう。若干眉を寄せた状態のまま、小声で予行演習してたのに。

「おい」

コンコンと窓を叩くが、ヒートアップしている一団はそのような音には気付かなかつた。

イツキの視線はこっちに向いている、だから気付くはずなのに、うんともすんとも反応しないどころか目が死んでいる。

「おーい」

今度はもう少し強めに、4回程叩いてみる。すると美紀がこちらに気付き、目が合っ

た。

『いまかいぎちゆうです』

「いや、会議たつて時間かかり過ぎなんだよ。風呂冷めちまうぞ」

『くるみせんぱいにいってください』

「じゃあ胡桃にこつち来いって言ってくれ」

拙い読唇術を使つて美紀と意思疎通する。美紀は俺の言葉にこくりと僅かに頷くと、びつと俺の居る窓を指さす。

すると、一人興奮状態だった胡桃の顔がこちらを向き、目が合った。

「!?!」

いやなんでそこまで驚くし。つうか顔赤くね?

ずかずかと窓まで歩み寄つた胡桃は窓の鍵を開け、割れるんじゃないかと思うくらいの力で開く。

「なつ、な、なんだよ?!」

真つ赤な顔で獣が吠えるが如く凄まじれた。そのおかげで、俺が計画していた文章はすつぽりと抜け落ち、柄にもなく「いや、あの」と詰まる。

そして最終的に口に出たのが……

「はやくして?」

という情けない嘆願だった。

数分後、お風呂セットを携えた一番手が露天風呂『雅』へと訪れる。

「ごめん、お待たせ……」

「何してたんだ、えらい遅かったな」

「うん……ごめん」

ぼそつと謝罪した胡桃は、惜しげもなく服を脱ごうとし始めた。

「あつ待て！」

「え？」

「まず湯につかる前に体と髪を洗って貰う。臨時の衝立作つといたから、その向こうで適当にやってくれ」

「え、これ作つたのか？」

洗濯物を干す支柱に物干し竿をセットしてシーツをかけただけ。そんな簡単な物をいくつか設置できる位に暇だった、というだけだ。

半ば嫌味みたいなもので作つたが、思いの外役に立つとわかった。

いくら見る気もなければそつぽを向いているとは言え、振り向けば桃源郷の状態は実に勿体ない。

日本人特有の勿体ない精神を発動させない為にも、一苦労掛けてじやなきや拝めない状態を作り出したのだ。それに彼女達もいくらか気が休まるだろうしな。

建物の壁際にV字に設置したそのスペースであれば、もう覗けるのは空に浮かぶ星くらいなものだ。

風呂自体もそうしてやりたかったが、生憎資材も足らなければ引火すれば大惨事になる。

この風呂はバスタオル可なのでどうか許してほしい。

布一枚を隔てた空間。そこそこの距離があるというのに、この静かすぎる空の下では衣擦れの音1つ1つこの地獄耳が捉えてしまう。

ああ、チャツクの音、ホツクを外し、タイを外したか。

音だけでも制服の構造が手を取るようになってしまった。嫌だな、何故よりによつてこんな才能が突出してゐるんだ？

「なあ、雅」

「なんだ、胡桃」

小石で地面に数字を書いてみた。2、3、5、7、11、13、17、19。やがて手が届かなくなる所まで書いて、ようやく足音に気付き視線を上げる。

そこには橙色の光を浴びても尚、白いと言えるような肌の色をした足。綺麗な物だ、

だがよく見れば所々擦りむいた痕やマメの痕がある。流石元陸上部、と言えるな。

そこから上は、陸上部ならではの筋肉を付けた脚……うん、これならあの速さも納得だ。

そんな感想だけを頭で考えて、ようやく白いバスタオルが視界に入った事に安心して胡桃の顔まで見た。

「い、今足見なかったか？」

「そりゃなあ、もしタオルがなかったらヤバいだろう？ それより……体冷やすぞ、さつさと入れ」

「それより！」

「それより？」

体が冷える事より大切な話があるらしい。ハイキングシューズの靴底で素数達を消し去ると、いつもの真面目な雰囲気で胡桃の言葉を待つ。

もじもじ、ちらちら。可愛らしい仕草だな、だが奥底には恐れ……恐怖も混じっている。

「あの……とりあえず、見て欲しい」

「悪いが子供の体には興味無くてな」

「う、うっさい！ いいから見ろって！」

さつきよりも気迫のある凄みを受け、俺は若干引き気味で言葉に従った。

胡桃は右腕に当ててていた手をどかすと、そこにあるまだ新しい傷口を見せてくれる。

「……………なっ」

柄にもない。この俺が、面食らってしまふなんて。

この時が、こんなにも早く来てしまふなんて。そう絶望しかけて、俺はその違和感に気付いた。

その傷は、新しくもあり、古い。通常噛まれるなどして感染すれば、1日と持たずに成る”。

だから傷が治癒しかけている……………もとい止血済みの傷はあり得ない。

なのに、胡桃の傷は血が止まっていて——それも皮膚が治癒している。それはどういう事か？

感染していないのか？ 噛まれただけで、運が良かったのか？

「触ってみて」

いつの間にかすぐ目の前で見つめていた俺の手を取り、首へと触れさせてくれた。

……………冷たい。まるで雪の様な、でも脈は微かにある。完全に冷めきっているかと言えばそうでもなく、よく集中してみれば微かな温かさはあった。

「雅も、冷たいな……………ずっと外にいたからか？」

「いや。俺も似たようなものなんじゃないか？」

「……たまにさ、自分が自分じゃなくなる時って、ない？」

「それは、どういう？」

「いまいち芯を掴めない。そんな反応を見て、胡桃はふふつと笑った。

「……じゃあ大丈夫。雅は、大丈夫」

「待て、どういう意味だ？ 胡桃！」

「すぐさま手を放して離れて行ってしまおう胡桃に再度手を伸ばす。だが、それも躲されて風呂を挟んでせめぎ合う形になってしまった。

「あたし風呂入るから」

「あ、ああ……なら入りながらいい、今の意味を——わからないんだ、だから教えてくれ。お前は一体何を考えている」

もうもうと立ち昇る湯気の先に見える胡桃の笑顔は、酷く儂かった。やろうと思えば、このドラム缶を押してまた明日風呂を沸かせばいい。

皆には土下座してまた明日風呂を沸かせばいい。

そうしてやろうかと手を伸ばす。だが、その途端胡桃の顔は哀し気に歪む。これ以上近寄るな、そう言われている様で……俺は胡桃が引いた一本の線を越える気になれない。

「やめてよ、そういう顔。あたしなんかそう必死そうな顔すんのさ」

「なんかとは何だ。俺はお前の為なら必死こいてやる、いくらでも……仮に死ぬとして
も」

「駄目じゃん。雅がそうしようとした瞬間あたし怪我しに行くからな、そしたらコート
貰うって約束しただろ」

「そんなものくれてやる。コート一枚でお前が生き残れるのなら安いものだ。残りの腕
だろうが足だろうが、両目抉られてでも俺が護ってやる」

「……やめてよ、そういうの」

「いいや止めない、俺が死ぬまでこの体いくらでも使い潰してやる。その為に俺は――
」

「やめろって言うてんだよっ!!」

悲痛な叫びは、怒号として出そうとしたものだったらしかった。

「あたし! あたしもう殆ど感覚がないんだ……寒さも、痛みも、眠る度に悪夢も見て
!」

ぼろぼろと涙を流しながら、今まで溜め込んでいた物を吐き出していく。そんな姿
を、俺はただ無表情で見つめていた。

悲しそうにすればいい? それとも優しく微笑むのが正しいのか?

どちらも確証がない。だから俺は今見ている現実を、ありのまま受け入れる。

感情なんて、思考を乱すだけだ。怒りは効率性を失う原因になり、幸福感は慢心と油断を生む。

喪失感はい自棄になるし、じわじわと弱っていく自分への感想も……まあなるようになる、くらいしか思っていない。

「どんどん人間じゃなくなっていく……このままじゃきつと、奴らみたいになのになつたら……もうリーさん達やお前といられないっ！ そんなの……いやだよ」

やがて幼子のように泣き出した胡桃の前に、どうしたものかと髭剃りをサボってチクチクする顎をさする。

こういう風にあるままの感情を出されると弱い。殴り掛かってくるならともかく、頭を使って正解を導き出すには向いていないからだ。

「言いたい事はそれだけか」

「……な、に？」

「それで終わりか？ 溜め込んでたもの全部吐き出したか？ それなら結構だ、順を追って解いていこう。まあとりあえず風呂に入って体を温めるといい」

鳩が豆鉄砲食らったような顔で、胡桃は渋々風呂に入った。その前に俺は視線を火に移していたし、入る様子は全く見ていない。

当然だ、足場は作ったとはいえ入るにはそれなりに大きな動作が必要になる。その際に緩んでたタオルがはらりと落ちてみる、俺は死ぬ。

「感覚がない、というのは厳密にどういうものかわからんが、俺も心当たりがある。寒さ、痛み、悪夢。俺もある、お前だけじゃない」

「悪夢……は聞いてたけど、痛みも？」

「寒さは確かにあまり感じないな。痛みは元々鈍いのもあるからどうかかわからない。……一番は空腹感、食欲だ」

「食欲……」

「そうだ、俺は1日1食しか食べない。それしかいらぬし、必要がない。味も前よりか薄くしか感じないな、胡桃は？」

落ち葉をいくつか火に放り込む。胡桃は度々鼻をすすりながら、うーんと考えた。

「あたしも、あんまり」

「なら大丈夫じゃないか？俺も医者じゃないから言い切れないが、少なくとも俺とほぼ同じ状態にある。もしかしたら、成る時は一緒かもしれないな」

「それ、リーさん滅茶苦茶困ると思うんだけど……」

「確かにそうだな、戦闘員が一気に2人も死ぬとかなりヤバイ」

2人して冷ややかな笑いで誤魔化しながらも、また本筋に戻る。正直、今自分がどん

な状態なのかはさっぱりわからない。

もしかすれば、明日にでも意識を喪失して仲間を喰いに掛かるかもしれない。

逆に、今後死ぬまで若干人間止めてる状態のままかもしれない。

文字通り手探りだ。それを嫌い、しっかりと検査が受けられる場所を探すとすれば……それは件の組織、ランダルコーポレーションへと繋がる。

となれば、道は1つ。

「……まあ、なるようになるさ」

「適当だなあ」

涙を拭いながら、胡桃は苦笑した。俺の適当さ加減に呆れたのか、小さな笑いが後から零れてくる。

「それしかない。出来る限り皆と一緒にいられるように……星に願ってでもみるか？」

「流れ星でもあればするかな」

「俺は祈らないなあ、趣味じゃない。困った時の神頼み、だなんて言うし、祈るってのは諦めた奴がする事だと思うから」

「なにそれ、なんか恰好いいな」

「だろっ？」

2人して空を見上げてみる。胡桃の言う、人間から離れていく感覚。自分が人ではな

くなり、そこらをのそのそ歩くあいつらと同じになる……そう考えると、確かに怖い。解決策はあるか？ あの薬をまたキメリやいいのか？ 全く分からない。

それこそ、このウイルスを作った奴らか神くらいしか知らないだろう。

そんな状態で、俺達にできる事なんて……逃避するか諦めるか、俺の場合諦めてる訳だが。

「……星、綺麗だな。あ、あと月……とか？」

「ああ。……月？ 今新月で月は見えないぞ」

「あ、あーそうだな、うん。そうだった」

「大丈夫か？」

いきなり月が見えるとか言い始めたら本格的にヤバいと思ったぞ。

ともあれ、なんか落ち着いた状態にはなっただけど実はヤバい事をカミングアウトされたんだよな……

胡桃は、感染している。だが俺と同じ様な薬を接種し、奴らの様にはならない。

もし俺の前で嘔まれてたら薬があつたとしても取り乱してただろうな……ある意味、幸運だった。

どうにか危機は潜り抜けたと、大きく深呼吸をする。舌でも嘔み切られるかとヒヤヒヤしてたが……でも、俺は問題を先送りにしただけに過ぎない。

だからって、どうすればいい？ 頭もそれほどいい訳じゃない、ここまで生き残っていられたのもほぼ運だけと言える。

胡桃の心配はもつともだった。そしてそれは、気にしていなかった……いや、気にしない様にしていた俺にも押し掛かってくる。

「……はあ、きつつ。ははっ、参りましたと手を上げれば、許してくれるもんかね」「ん？ なんか言ったか？」

ふと漏れてしまった弱音は胡桃でも聞き取れたらしい。

「独り言だ。それより、湯加減はどうだ？」
適当に誤魔化して話題を逸らすと、胡桃は遥か彼方に見える星空を眺めながら体を伸ばす。

「んー！ 極楽極楽。風呂に入るのも久し振りだから、すっごい気持ちいい」

「そうか、なら意味はあったな」

「当然だろ？ なんかこう、この短期間に次々と色々あったけど……ようやく一区切り、って感じかな」

「そうだな……」

彼女達からしてみれば、まず隻腕の男を仲間に取り入れて後にリーダーの異変。

その後イツキの加入と、俺の昔馴染みに追っかけられると。

最後は完全に俺が引き込んだ厄介事だが、確かに色々あった。なんだか一生分のトラブルが一気に来た感じがする。

「これからは細々と、あんまり目立たない様にいかなきゃな」

「……だな。どこかに拠点でも設けようか？　いつまでも根なし草はまずくないか？」

「あー、それなんだけど」

「ん？」

風呂の中でくるり、と体の向きを変えた胡桃は、頭と両腕だけをこっちに見せて苦笑している。

「なんぞや？　その姿勢に意味はあるのか？　髪もひとつに束ね、妙に色っぽく見える姿に若干動揺しつつ。」

「人と話す時は目を見て話せ」と昔教わったままに胡桃の目を凝視していた。

「詳しい事はリーさんに聞いて貰うとして、実は——」

そこで俺は、初めて「避難先」を探している途中だと知った。

聞けば、彼女達のいた高校は火事で焼け落ち、拠点としての機能をほとんど失ってしまつたと言う。

その前にめぐねえ、彼女達の教師は2つの道を残した。1つは大学への道、もう1つは、ランドル。先日の事からランドルへの道は途絶えたと見て……大学か。

地図上でも度々見掛けたが、そこそこ規模のある施設らしい。周囲を比較的低いビル群や大通りで囲まれ、一見望み薄に感じるが。

「ふむ、なら問題はこれだな」

指で右腕をつつくと、胡桃は苦笑した。

「うん、そうなんだよな。あたしはぱつと見わかんないけど、雅はすぐわかるし……あたし自身、ずっと隠せるとは思えない」

感染しているとわかれば、そいつらを安全な場所に置く理由はない。それどころか日頃の鬱憤を『化物』に向けてくる可能性もある。

口よりも手を動かす方が得意な連中は意外と多い。男は無残に殺され、女は色んな使い道があるが感染していれば話は別だ。普通に死ねれば御の字だろう。

そうなる可能性があるとするれば、候補は2つ。俺と胡桃が部から離れ、残るメンバーを避難所に残すか。

「やっぱり、ダメかな」

「……ああ、厳しい。いくら人のままでいられるとは言え確証はない。それどころか……『その薬を持ってこい、さもなければこいつらを殺す』」

嫌味の籠った棒読みで言われそうなセリフを口に出す。

その瞬間胡桃の顔はむっとした様に強張ったが、そうなつて当然……と感じたのかす

ぐに諦めたような顔になる。

「だよなあ」

「まあ、そうなるな。そんな夢の様なモノ、欲しくない訳がない。それさえ接種すれば、少なくとも感染して死ぬ事はない……実際どうか知らんがな」

仮にそれを理解していたとしても、一抹の希望に縋ってしまいうだろう。いつ死ぬか分からない、こんな世の中じゃな。

「はあー、なんかのぼせてきた。そろそろ上がるかな」

「そうか。そういうや風呂の順番は？」

「ああ、あたし由紀美紀りーさんイツキの順」

「了解、由紀にさっさと来いって言つといてくれ」

「あいよ」

胡桃が立ち上がり水が滴る音が聞こえてくる。ぴちやぴちやと衝立のある方向へ足音が移動し、その内服を着る音もしてきた。

2、3、5、7、11、13、17、19、23、29、31、37、40。……ん？ 40つて素数か？ 偶数の素数は最初の2以外にないはずじゃ。

「ほんじゃ、またな」

肩をほんと叩かれて当てのない思考から覚める。完全に髪を降ろした胡桃はひらひ

らと手を振り、寝間着にジャンパーを羽織った状態で歩いて行った。

……驚いた。何故普段から髪を結っている女子は降ろすと途端に魅力的になるのだろうか？

それがあの若干男勝りな胡桃でさえも、その魔力は適用されるらしい。

「……ふむ、素晴らしいな」

某赤くて3倍速いキャラの真似をしながら、小枝を火に放り込んでみる。

湯加減はどうか？ 手を突っ込んでみると、さつきよりちよつとぬるい。いかな、もう少し温度を上げよう。

そう思い立って燃料を増量していると、バチンと大きく爆ぜた火の粉が手に掛かる。

「あつついー」

舌打ちをして火傷した個所を舐める。ヒリヒリと痛む所を見るに、これはちよつと長続きするタイプだ。

火傷の痛みだけは勘弁だ。溜息を吐いて乾燥した唇を舐める。

「あ」

そこで気付いてしまった。俺は今何をした？ 火傷したからってその個所を舐めた、

その個所とは手の甲であり、火傷の前湯に突っ込んだ場所である。

ヤバイ。俺は今不可抗力とは言えとてつもなく変態的な事をしでかしたぞ。しかも

その前に髪を降ろした胡桃可愛いなどか思ってたんだから、状況証拠は揃っている。

いいや違う、間違いないく現行犯だ。目撃者はいない、もみ消そうと思えば黙っているだけで水に流せる。

なんて事をしてしまったんだ、と罪悪感に苛まれる。残り湯を舐めるだと？ キモい、キモ過ぎる。俺にそんな趣味はないのに。

「ああ……終わった。どんな顔して胡桃に会えばいいんだ……？」

「笑えばいいと思うよ？」

「!？」

唐突に背後から声を掛けられ、俺は座っていたブロックから転げ落ちる。転ぶ先もしっかりと調整して火に突っ込むような失態は犯さず、しっかりと土の上だ。

「だ、大丈夫!？」

派手にすつ転んだ俺を心配した由紀は慌てて駆け寄ってくる。

差し出された手を掴みあまり当てにせず立ち上がると、由紀はコートに付いた土を払ってくれた。

「ごめんね？ 考え事してたのに……驚かせちゃった」

「い、いや構わんよ。着替えと、あと風呂に入る前に向こうで適当に体を拭いてくれ。適当に、というのは適切に、という意味だからな？」

「うん、わかったー」

風呂桶に一通りの道具を入れた由紀は衝立の向こうに潜り込んで行くと、胡桃の時と同じような衣擦れの音が聞こえてくる。

いかんいかん、素数を数えねば。地面に枝で数字を書いていこうと思った時、やましい音を打ち消す様に由紀の声が響く。

「ああつー」

「どうかしたか!?!」

その声に思わず突入しそうになる体をぐつと押さえ、由紀の返答を待つ。

「胡桃ちゃんゴム忘れてってる!」

「あ、ああ……なんだ、忘れ物か。帰りに持って行ってやれ」

「うん、そうするー!」

……へアゴムだろ? そんな安直な引っかけは通じんよ。そもそも「ゴムウ!」と驚いても由紀が理解する訳もないし、教える必要もない。

何でまたこんな事で動揺しているのか。アホらしい。恋する年頃の学生じゃあるまいし。

「あのね、みゃーくん」

「んー?」

温度を確かめながら燃料を足したり灰を掻き出したり。所々シワや汚れのある白壁を挟んだ俺達はちよつと大きめの声で会話する。

「私もつと皆の力になれないのかな？　いつつも留守番して、待つてばかりで、何もできなくて……」

「お前は今でも十分力になっている。俺も、いつも助かっているのは間違いない」

不安そうな声に、俺は少しだけ微笑んで返してやる。気休めじゃない、事実の言葉だ。実際に俺は由紀の無垢さに救われている。

返り血を浴びて身も心もどす黒くなった時。悠里は服を、由紀は心を洗ってくれる。

おかえりなさいと笑顔で迎えられる喜びがあるのだと、今更気付いたんだ。

「でも……みゃーくんや胡桃ちゃん、いつくんはいつも頑張つてて、りーさんはご飯と家計簿を頑張つて、みーくんは勉強して皆を助けてるのに」

「自分は何も出来てない？」

無言の肯定。するりとシーツが捲られた音と共に、由紀の小さな足音が近付いてくる。

「それは違う。人には気力という……まあ分かりやすく言えばスタミナがある。戦闘も料理も勉強も、ただ無為に生きるだけでもスタミナは減る。なくなれば生きる意味を失い、死ぬか死人同然となる」

すぐそこまで来て止まった足音は、黙って俺の話を聞いていた。俺は何故こうも偉そうにご高説を垂れ流しているのか？

情けなくなってくるが、由紀が自信を取り戻せるなら恥を掻くくらい造作もない。

「それを回復させるには……美味しい飯を食ったりだとか好きな人と居たり、友達と遊んだりゲームをしたり。所謂娯楽だとか趣味が必要だ」

「……みゃーくんなら、どうやって回復するの？」

「それが、俺は回復させる手段を持たない」

「え……？」

どういふことなのかわからない。そんな声色で疑問符を浮かべる由紀は俺の視界の隅でパチパチと爆ぜる火を見ている。

「俺は火が点くと燃え尽きえるまで突っ走るタイプでな、加減を知らない。その状態で、何度も燃え尽きてぶっ壊れた。そんな俺がどうして今の今まで生きているか？」

タオルを体に巻いている由紀が、胸元を押さえながら振り返る。見てしまうのは心苦しいが、目も合わさずに会話するのは難しい。

「偏ひなに、お前のおかげだ。いつもおかえりと笑ってくれるお前に癒されている。この状況で、お前がいなければ俺どころか悠里達も生きてはいない。これは確信できる」

きゅつと胸元を押さえていた手が握りしめられた。目元もいつもより少し下がり、心

底安心しているような面持ちだ。

そんな雰囲気にもと違う違和感を覚えていると、由紀は若干気味の悪い笑い方を
して照れ始める。ふへへ、なんて笑い方をするな、中身が入れ替わったのかと勘違いす
るだろ。

「そ、そう？ 私ちゃんと力になれてるのかな？」

「ああ、そうだ。家事も手伝ってるんだろ？ なら俺と胡桃、イツキは外の役割を持つと
すれば、お前、悠里、美紀は中の役割を受け持っている。見事なチームワークだ」

「そう、なのかな？」

「そうさ。——さあ、早く風呂に入れ。そんな恰好じゃ風邪ひくぞ」

コンコンとドラム缶を指先でつついて入浴を促す。由紀は大きく頷くと、俺とは反対
側にある足場から風呂に入った。

「熱くないか？」

「うん！ 丁度いいよ！」

「ならいい、気が済むまでそうしてろ。もつとも、あまり長風呂し過ぎると後のメンバ
ーが怒るだろうけどな」

「う……そうだよね、程々にしとかなきゃ」

「とは言え、せめて15分は入っていけ。久し振りの風呂だ、しっかりと温めなければ意味

がない」

由紀はしばらく浸かっていると、鼻歌を歌い始める。それが控えめなハミングに移り変わり、やがて可愛らしい歌声になっていく。

由紀は歌が上手い。それがわかったただけでも大収穫だ。緊迫した状況で、歌は感情を表に出す鍵となる。

勇ましい歌は勇気と希望を、悲しい歌は気持ちをしめて溜め込んでいたモノを涙として外へ出す。楽しい歌を仲間であげれば、信頼関係も築ける。

遙か昔から残るだけあって、その効果は凄まじい。今じゃ何をするにも歌や音楽は切っても切れない関係になっているんだからな。

「みゃーくん」

いつの間にか1曲歌い終えていた由紀は、ドラム缶の縁から身を乗り出して聞いてくる。軽いおかげで倒れる事もなく、念の為支えているが問題ないとわかり力を緩めるが、一応手は添えておく。

「なんだ」

「もし、私が……つらくて、本当に苦しくて。イヤになっちゃったら……どうしよう？」
「どうしよう、とは……」

上機嫌に歌っていた時とは大違いだった。感情の浮き沈みが激しいヤツだと思って

しまうが、それは違うとわかる。……まさか？

「私、どうしたらいいんだろう？ 笑顔しか取り柄がないのに、笑えなくなっちゃった
ら」

「……」

どうすればいいんだろうか。まず笑顔しか取り柄がない、という時点で間違っている。由紀は俺達には掛け替えのない存在だ。

それは笑顔があるからでもあるが、それがなくなったら用済みになるのか？

それは違う。由紀の声も、綺麗な目も、小さな体も、全部ひっくるめて愛されている。確かに笑顔のないヤツなんて、愛想がないし付き合いくいかもされない。でもそれだけで疎まれるか？ そういう奴もいるだろうが、そうじゃない奴もいる。

……悠里達は、笑わないからって追い出したりはしない。それは俺で証明済みなんだ。

「ねえ、みゃーくん……私もう……」

「大丈夫だ」

手にぼたぼたと暖かな雫が落ちたのを見計らって、俺は断言する。

「例えお前が笑わなくなろうと、1日20時間眠らなきゃ生きていけなくなろうと、1日5発人を殴らなきゃ発狂する状態になろうと、皆見捨てない」

「……みゃーくん」

微かに視線を上げると、そこには由紀の顔があった。前髪からぼたぼたと雫が落ち、その一粒がまた手に当たる。

「でも、5発も殴ったら流石に皆イヤになっちゃうと思うよ……?」

絞り出した様な微笑は実に儂く見える。今にも消えてしまいそうで、頬を伝う雫は風呂の湯なのか涙なのかはわからない。

でも、とりあえず優しく拭ってやった。

「いやいや、殴った後礼として撫でればいい。強く殴ったならその場所にキスでもしてやればむしろ喜ばれるに違いない」

「それは……変態さんだね」

「そうだな。でも人間は誰しも変態なんだよ」

「みゃーくんも?」

大方予想はしていたが、マシな回答を用意できていなかった疑問が飛んでくる。

「あー……そう、かな? 刃物の素晴らしさとか、ライフリングを見てると興奮したり……しなかったり?」

「あ! そっか、みゃーくんは匂いフェチだった」

「な、なに?」

ニヤリ。由紀は獲物を前に早くもしてやったりの顔になる。ヤバい、フォローの入れ方をミスった。

つうかさつきまであんだだけ本気で落ち込んだのに何故ここまで元気になってるんだ。

背筋に冷たい予感が走るのを感じるが、逃げられはしない。

俺は火防、この火を絶やさない様に今まで頑張ってきたのに、弄られたからと言って放棄する事は出来ないのだ。

「初めて会った時、みゃーくん『こんな甘ったるい場所にいられない』って言ってたでしょ?」

「……言つたな。今はもう慣れたよ、至近距離にこられない限りは」

正直今も若干甘つたるい匂いがする気もするが、湯気のおかげか弱まっている。

日頃から一緒にいるのもあつて慣れた感じがしないでもないが、それでも車内にいる時は今でも甘いと感じてしまう。

情けない話だが、これは男として仕方がない。そう割り切っていたらいつの間にか気にしなくなっていた。

「そういえば……みゃーくんは匂いしないね」

「そうなのか? 汗臭くないならそれでいいけどな」

ほぼ毎日走り回ってるんだ。汗臭いだとかこの歳で加齢臭がするだとか言われたらショックで記憶喪失になる自信があるね。

その点で言えば、胡桃は汗の臭いがしなかったな……当然か、あの体温では冷やす必要もない。むしろ動き続けなければ動きが鈍くなりそうだ。

「うーん、汗臭いとは思った事ないよ？ でもたまに、お父さんみたいな匂いはする」

「それは加齢臭……ではないよな？」

「ううん、違うよ？ 優しくて温かい匂いだよ」

父親の匂い、か。それはどういうものなんだろう？ そもそも、父親とはどういうものなのか。俺にはよくわかっていない。

一生わからなくてもいいし、わかりたくもない。第一前提として俺は……人を嫌っているんだ。そんな奴が親どころか、恋人も作れる訳がない。

前々からあつた思いを掘り起こしてみると、何故だかどこか引つ掛かりを感じる。どこがとは言わないが……まあ、いい。

「みゃーくん？」

「ん、ああ。何の話だったか、俺から加齢臭がするんだったか？」

「しないって！ もう、みゃーくん匂いに敏感なの？ やっぱり匂いフェチ？」

「……もうそれでいいです。人よりかは敏感な方だし」

釈明も面倒になって投げ出し、水も滴るなんとやら——なんて諺を思い出しながら由紀から視線を外した。

いくら子供っぽいとは言え、目に毒だ。それに、嫁入り前の女性を凝視するのは失礼に当たるからな。そういうものだ、そういう事にしておこう。

「むう……みゃーくんってたまに冷たい……私もつと仲良くなりたいのに」

これ以上仲良くなつてどうするというんだ。俺にとつて、お前はとうに友人として上限に達しているというのに。

口に出そうか迷つたが「迷うくらいならやめておけ」の教えの元、口を噤む。由紀はそれが面白くないのか、更に「むう」と唸った。

「下ばかりじゃなく上も見ろ。折角の星を見ないでどうするんだ」

下を向く奴が言つても説得力は皆無だぞ。自分にツツコミを入れながら、小枝を放り込む。

パチパチと爆ぜる音が心地いい。でもどこか寂しくもある。その後由紀が風呂を上げるまで……由紀はもう歌ってくれなかった。

16. お風呂・中編

由紀が戻ってから20分近くが経った。次の番は美紀……何か不都合があったのかはわからないが、入浴に遅れが生じているらしい。

まさか道中で襲撃でも受けたのか？ 新館からこの旧館まで大した距離はない。だがもし途中で迷い込んできた感染者に襲われていたら？ 考えたくもないが、叫ぶ間もないなら生存は絶望的だ。

「お待たせしました」

あらゆる可能性を思案していたが、どうやら無駄だったらしいと気付いた。振り返ってみれば、いつも通りの美紀が風呂桶に入浴道具一式を入れて立っている。

「遅かったな、花摘みにでも行ってたか」

「まあ、そんな所です。由紀先輩から聞きました、あそこで体を洗ってから入るんですね？」

「そうだ、体が冷えない様に手早く済ませるのを勧めます」

小さく「はい」と返答した美紀は、衝立の奥へと入っていく。いつも通りの様に見えるが、雰囲気はどこことなく違う気もする……なんだろう？ 若干浮足立っているような気

がする。

気にしても仕方がない、もしもの時はカバーしてやればいい。そう結論付けて、水温を確認する為に手をつ込んだ。

うん、丁度いいくらいだ。これなら美紀のお眼鏡にも適うだろう。濡れた手を払ってポケットに手をつ込み、その中にあるハンカチで残った水滴を拭う。悠里に持たされた物だがこんな所で役に立つとはな。ハンカチなんて止血にしか使わないと思つていた。

何となくポケットからそのハンカチを取り出してみる。触った感じがどこもなく上品な感覚で、まさかそれなりの値段をする代物なんじゃないかと不安になったのだ。

「……んー、なるほど」

ラノベなんかじゃ下着なんかが入れられていたりするものだが……流石悠里だ、そんな事はなかった。ピンクの生地には控えめな花の刺繍が入れており、とてつもなく女の子っぽいハンカチだ。性能より見た目を重視した物だな。俺は実用性のあるタオル生地ばかりだったから、こういう質感はなんとなく慣れない。

自然に匂いを嗅ぎそうになるのを寸前で堪えて、簡単に折り畳んで再びポケットの奥へ突っ込む。違う、俺は断じて匂いフェチなんかじゃない。ただ私物以外の物は匂いを嗅ぐ癖があるのだ。きつとそれは……有害な薬物なんか染み込んでいないか確認す

る為の本能だな。危ない薬品が染み込んでたりすると死ぬ可能性もあるけど。

「今からそっちに行きますけど、下を向いててくださいね」

「ん？ バスタオルしてるんだろ？」

「しますけど、お風呂にバスタオル巻いて入るなんて不潔じゃないですか、後に入る悠里さんとイツキさんが可哀相です」

「皆そうして入ってたから気にしなくていい……つていうのは違うか」

「……私は嫌なのでしません」

「まあ好きにすればいい。目を瞑つてろと言うのなら、ずっとそうしてるさ」

「当分視界は確保できない。そう見込んで簡易的な炉から灰を掻き出し、新たな燃料をセツトする。普通の薪とはだいぶ違うこれは、おがくずなんかを固めたものだ。暖炉や薪ストーブで使う事もあると知識上にはあるが、実物を見たのは初めてである。色々な種類の物があり品によって性能は変わるが……これは灰が出やすい。適度に灰を掻き出してやらないと効率が落ちてしまうのが俺がいる理由でもある。」

「じゃあ、そっち行きますからね？」

「どうぞ。下向いてるから」

「瞼を閉じると、真っ黒になった視界の中央に橙の光が透けて見えている。枝の爆ぜる音、微かに聞こえる炎の揺らぎ。このまま目を瞑つていれば座ったままでも眠つてしま

うだろう。それはなんとしても避けたいが、美紀の為だ。最悪類でもつねって耐えてやろう。

衝立から風呂まではダンボールが敷いてあったが、びしょびしょになって冷たかった為に撤去してある。その所為で美紀は靴を履いて風呂まで来ていた。

「……まだ下向いててくださいね」

ちやぼんと音を鳴らして、美紀は湯に浸かる。

「はい、もう目を開けてもいいですよ」

いつもより優しい声色で、美紀は目を開く事を許してくれた。どことなく違和感というか……いつもの毒がないのが物足りない感じがする。ゆっくりと目を開くと、最初に見えたのは優美に揺らぐ火だ。

そこから上を見ようなんて思わないし、怖いもの見たさで本当に怖い思いをする必要もない。火の揺らぎのおかげか、俺は冷静な判断を下していた。

「雅先輩。由紀先輩に探りを入れろって、言いました？」

美紀は何かを思案するかのように、含みのある問いを投げてくる。

「ああ。お前に何があったのかはわからないが、このままはいけないと判断した。癒し要素のある由紀に頼んだんだが……それも間違いだと思つてな。やつぱりやらなくていいと言つた頃には手遅れだった」

正直に答えて、ほんの少し間を置いて小さな声で「不快な思いをさせたかもしれないな、すまなかった」と付け足す。人に謝るのは慣れていないし、恥ずかしい。だが謝る時は謝らなければ人間関係というのは容易く崩れてしまう。それがどんなに、小さな事でも。大きな事なら尚更だ。

そんな俺の言葉に、美紀は微笑した。嘲笑うような感じではない、まるで我が子を優しく諭すかのようなものだった。

「いいんです、むしろちよつと嬉しかったかもしれない」
「かもしれない、とは？」

自分の事なのに、まるで他人事のようにその時の感情を述べた美紀。粗方予想はつくが、俺はあえて聞いてみる。

「……私、あの時」からあんまり感情が出てこなくなつて……まるでガラス越しに見えるかのような感じ方をします」

「ふむ、ガラス越しか」

面白い表現だと思った。正直な所、俺もそんな感覚だ。ただ俺が表現すると「薄壁一枚先の音を聞いている」、という感じになる。大方は一緒だ。人の内心を知ろうとすると、あまり、自分の感情に意識を向ける事ができなくなってしまう。

美紀も同じなのか、それとも根幹がどこか違うのか。感覚は一緒でも切っ掛けが違え

ばそれを取り払う手段も変わってくる。そのガラスを力づくで割るのか、地道に退かすのか、それともその壁が途切れる部分を探すのか。

俺の場合は……どうなんだろう？ 乗り越えた経験がない事に関しては迂闊に助言も出来ない。

「一つ、これに関して言える事がある。前も言ったかな？ 人の考えている事がわかるのは本当に読んでいるからじゃない。自分の被害妄想が偶然当たっているだけだ」

「……はい。そうだとしたら、これは……」

「まだわからない。俺とお前じゃ感じ方が違う。俺は感覚で感じて、お前は“聴く”。幻聴の類なのかはわからないが……その声を鵜呑みにするな。俺が何を考えているか、わかるか？」

「……いいえ。先輩は感情を表に出さない人ですから」

「つまりそういう事だ。人間は感情を身体面で表現する時がある。嘘を吐けば目が泳ぐ、怯えていれば肩身を狭くする、怒れば目がキツくなるし、殺気も出る」

「先輩が目を見て心を読むのは……」

「そういう事だろうな、特徴を知っているから察知できる。声も分かりやすい。抑揚の付け方、呼吸と発音の仕方、挙げればキリがない」

人の感情なんて、よく見ればすぐにわかってしまうものだ。一挙手一投足を見れば力

の入れ方からも機嫌が悪いかわかる。誰でもわかる事で言えば扉の開閉や物の取り方や置き方だな。

「……やっぱり、雅先輩はいつも私を助けてくれます」

「ん？ 何の事だ、助けない訳がないだろう。お前にも、色々世話になっている。死線も潜ってきた仲だからな」

「そうですね……」

感慨深げに呟いた美紀は、小さな溜息を吐いた。……そろそろ聞いてもいいだろうか？ 嫌ならそれでいい、今はとにかく小さな手掛かりでもいいから惜しい。

「美紀」

「はい？」

「……何があつたんだ？ もしよければ、教えてほしい。嫌ならそれでいいが……他の皆も心配する」

「……」

顔が見えないからと穏やかな声色で問い掛ける。もし許されるなら、美紀から話を聞けたなら……俺は全力で問題解決に励もう。

予定では明日の昼にはここを発つ。もうしばらくここに居たかったが、食料やその他諸々の備蓄が心許ないのだ。

「……………そうですね、雅先輩になら——話していいかもしれません。きっと私よりも……苦しい思いをしているでしょうから」

それがどういう意味を含んでいるのか。考えるだけ無駄だと判断した俺は、無言でその先を促した。

——俺が倒れてからの事。意識を失った俺は原因不明の高熱に侵されていたらしい。だがそれもごく短時間で、美紀が戻る頃には引いていた。

その症状を見て風邪だと判断した悠里は、車に薬を探しに行った。だが目的の薬は見つからず、探しに行く必要があった。そこで調達に名乗り出たのが美紀だった。

そしてとある家屋に目星をつけ、侵入。そこには無残な死体が1つと、かなり腐敗した感染者がいた。

「……………そんな、事が」

「はい、もう殆ど覚えてないですけど。小さい頃にしばらく預けられていた時期があったんです」

「殺したのか？ ——いや、これは違うな……でもそれ以外にいい言葉が見つからないが」

「いいんです、もう死んでいたんですから。それが動くか動かないかの差しかありませんから」

美紀は……肉親を撃った。それがどんな形であれ、精神的に無事な訳がない。無事な奴なんて根性が腐ってるか余程恨んでいたかのどちらかだ。どちらにせよ普通じゃない。

普通であつたが故に、美紀は心に深い傷を負った。今まで溜め込んでいた物も含めて破裂してしまつたんだ。それを癒す方法なんて……あるのか？ この普通じゃなくなつてしまつた世界で。

「これは全く関係ない質問になるが、その呼び方は？ 何故俺を『先輩』と呼ぶんだ」「ふふつ、簡単な事ですよ。人生の先輩っていうのもありますけど、私も同じ感じになつちやいましたから……」

被虐的な笑みが胸に刺さる。護れなかった、それどころか美紀がこうなつたのは俺が原因じゃないか。大見栄切つておきながら自分の所為で傷つけてしまうなんて本末転倒だ。

「すぎすぎと痛み始めた頭を押さえ、後悔してしまう。何故俺は倒れた？ 思い出せない、俺は普通に……このキャンプを自分なりに楽しんでた筈だ。少々邪魔も入つてしまつたが今も、こうして風呂を沸かしてガス抜きをしている。」

「すまない……俺の所為だ」

「そ、そんな事ないですつて！ 薬もいざれ必要になる時があつたでしょうし、それに

……」

「いや、俺の責任だ。もう後戻りはできない、それでも謝らせて欲しい。すまなかった」「ち、違います……私、そんな言葉が聞きたかつたんじゃないです……」

「……なら、何が聞きたかつたんだ？」

罪滅ぼしにもならないとわかつてはいる。だがあえて俺は聞いた。美紀が言つて欲しかった、期待していた言葉は何なのか？ 責任を取つて腹でも切るか、臍物を引つ張り出してクリスマス마스よろしく飾ればいいのか。自分で考えられる事はこうも惨い償いだけだ。

ひとつつ長い息を吸つて、美紀は意を決したように呟く。

「できるのなら……私に戦い方を教えてくれませんか？」

「——なに？」

呆けた返事をしてしまったが、それは何の償いにもならない行為だったからだ。戦い方を教える、つまり前線に出るといふ事。胡桃の様に返り血を浴びて常に死と隣り合わせの状況に身を置くといふ事だ。

「弱い自分が許せないんです。いつも守られてばかりで……胡桃先輩やイツキさん、勿論雅先輩にも申し訳ないと思つてるんです」

「それでいいんだ。胡桃は例外として、本来武器を握つて奴らを屠るのは男の仕事だと

俺は思う。そのうち胡桃も引退させるつもりだ」

「男とか女とか！ そんなの関係ないですよ……命は皆大切なんですから……」

「それもそうだ。だが美紀、お前は特に大切にされている。この意味が分かるか？ お前を想う人間が存在し、そいつはお前の為に戦っているようなものだ。そんな奴の隣にお前を立たせたら俺が怒られる」

「それは雅さんだつて同じです！ あなたを想う人も……いるんですよ」

「……一旦頭を冷やそう、このまま言い合つても解決しない。だがな、これだけは意地でも言つておく。どんなに俺を想う奴がいても俺は俺だ、好きにやらせて貰う。後々恨まれるような事になつても、俺は俺が正しいと判断した事だけをする」

例え自分が死んだとしても、自分が正しいと思う死に方であれば……それなら悔いはないしむしろ幸せだ。何故死んだと恨まれても、悲しまれても。

そうしなければ……そうしなきゃ、俺はこの感情を抑えきれない。どんなに望んだ死に方だろうときつと最期は後悔するに決まつてる。もつと一緒にいたかった、出来るのなら幸せな生活を送りたかつたなんて、現を抜かすんだ。

美紀の言う、俺を想う人。その中には恐らく悠里が入っている。それが現実だとしても……それ以上の人間がいるかどうかは——わかりたくない。こんな人間の屑を好いて何になるんだ。

「私……雅先輩の事好きですよ」

「はあ……」

美紀の唐突な告白に、深い溜息を吐いてしまう。たった今知りたくない、わかりたくないと思つたのに。現実というのはどこまでも残酷だ。よりによつて、イツキの想い人から受けてしまったんだから。

「美紀、悪いが……」

「知つてます。悠里先輩と付き合つてるんですよね？」

「い、いや付き合つてはない。仮にそう言われても俺は断る。……俺は誰かと親密な関係になる気はない」

真面目な話や食料事情の話ならともかく、こういう情についての話はどうも得意じゃない。誰が好きとか嫌いとかそういう状況でもないというのもあるが……俺の場合、心を許せるかそうでないか、それ以外の「敵」以外に他人を括れないからだ。

「確かに先輩はそういうのを受けるとは思えません」

「じゃあ止してくれ。俺の中で『傍に置きたい、護りたい』以上の位置はない。これ以上ともなれば……どうすればいいのかもわからん。崇拜にも近いんじゃないか？」

「うーん……一緒にいたいと思える相手が『好き』つて事だと思ふんですよ」

「なら全員だな。俺は全員と一緒にいたい、許される限り……俺は皆の笑顔を見ていた

い。これじゃ駄目なのか？ 必ずしも、誰かを選んでその1人だけにしなきゃいけないのか？」

「つまり、ハーレム希望ですか？」

突拍子もない返答に肩透かしを食らった様に項垂れる。違うそうじゃない、と言いたところだが上手い言い回しも見つからない。これだけじゃ「つまる所皆を愛したい欲張りさんだね？」と結論付けられたとしても、首も振れず頷けもしない微妙なラインだ……と判断してしまう。

そもそも俺は他人を愛しているのだろうか？ 保身の為、自分の精神を安定させる為にやっているだけで、そこに愛情なんてない。

本音を言えば今の今まで個人と添い遂げたい……なんて感情も抱いた事がないし。俺の場合……その愛情とやらは狂っている。そして、その感覚は今の所感じていないのだ。

「ハーレムは……論外だと思うんだ。色々な意味で」

「……もう、先輩って本当掴み所ないですね。今まで人を好きになった事ありますか？」
「あるにはあるし、失恋も経験している。だが俺が人を好きになると……駄目なんだ、色々」と

詳細な所までは思い出せないが、「愛してはいけない」という自分に課した覚えだけは

ある。もし、俺が誰かを好きになったのなら……恐らく、きっとその相手は不幸になる。それを防ぐ為にも、俺は感情を殺さなければならぬ。

「……どうかしました？」

「何でもない。……悪いが、俺はお前の想いには応えられない。仮にお前と恋仲になつたとしても、判断を誤つて誰かを死なせる事態になつたら必ず後悔する」

「そう、ですか……別にいいですけど」

「でも、そうだな。こんな俺を好きになつてくれて——」

「やめてください！」

その言葉は聞きたくないと思つてしまふ。確かに、こんなのはすぐ死ぬような奴が言う事だつた。柄でもないと思つながら、こつとも自然に笑えるようになったのだと改めて思ふ。

「せめて私が生きている間は……死なないでくださいね」

「無理な相談だなあ、善処はするが何度も言う通り死ぬのは俺が最初だ。そうじゃなきゃ納得も出来ない。それとお前を前線に出すのも却下、大却下だ。蹴り飛ばしてでも後ろに戻すからな」

「……はい」

「よろしい」

上からぼたぼたと滴ってくる水滴に見向きもせず、半ば眠る様に見続ける。あえて意識を遠のかせる事で現実から目を離すこのテクニク、維持するのも難しければ急な敵襲があつた時に対応する速度も若干落ちてしまう。

だが、相手が誰であれ水面で遊ぶ音や微かな呼吸音ですら今の俺には毒になる。今はともかく車内で睡眠を摂るとなれば……不味いな、何故俺は男として産まれてしまったんだろうか？

かといつて男でなければこの凶体も力もなかった。忍達と出会い親友の関係になる事もなかっただろう。……しかしキツイ。いつそ取っ払ってしまおうか。自力では不可能だが。

「……私、出ますね」

「ああ、湯冷めしない様にテキパキとな」

「そのくらい当然です」

一際大きな水音を立てて、美紀が風呂から出たとわかった。願わくばこのまま不祥事が怒らない事を祈る。もし転びでもして足をくじいたら……それはもう色々面倒な事態へと発展するからな。

「雅先輩も、風邪ひかないように気を付けてくださいね」

「善処しよう。まあ着込んでるおかげでそこまで寒くもないしな、大丈夫だろう」

衝立の奥へ行ったのを確認して、俺はやつと一息つく事が出来た。もし次回があるのなら、今度は胡桃に火の番を任せよう。ある程度予想はしていたがやはり男では無理がある。なら今度胡桃に火の調整の仕方でも教える為に焚火でもさせるかな。

傍らにある燃料を見てみると、予定より消費が早い。これは……急がなきゃ足りなくなるぞ。少なくとも2分、最後の1人はかなりぬるくなるんじゃないか？

となると、必然的に俺は入れない……か。元よりそのつもりだったし全く問題はないが……これは後の2人が申し訳ないとか言つて騒ぎそうだな。黙つておこう。この備蓄数を見れば勘が良い奴なら気付きそうだけどな。

「美紀、次の奴は速攻で来いって言つていてくれ」

「どうかしました？ もしかして体調が悪いとか……」

「あー……いや、そうじゃない。ただ、その……飽きた。飽きてきたからさつさと来いって言つてくれ、このままだとこのドラム缶を的にブローニングぶつ放すぞつてな」

「つ、伝えておきます……」

そそくさと戻つていく美紀を見送つて、そこら辺にあつた最後の小枝を放り込む。ぶつちやけこの程度何の足しにもならないが、なんとなくこうして火にくべる作業は好きだ。

将来は暖炉付きの家に住んでみようか？ ……なんて、叶いもしない夢を見るのもア

ホらしい。それでも、こうしていつか来るかもしれない日を夢見るのは……悪くないと思ってしまうた。

17. お風呂・後編

「寒かったんじゃない？ 体冷えちゃったでしょう？」

「別に……」

入浴中の悠里に間の抜けた返事をしながら、俺はひたすら地面に意味のない数字の羅列を書き殴っていた。

「でもかなりの間外にいるわよね？」

「寒さには慣れてるんだ、気にせずゆっくりと入ってくれ。イツキの時間も考えつつな」
缶詰が20個近くに乾パンの袋が6つ、缶詰のも合わせて13個。最後に確認した食料の備蓄数を書きながら全力で気を逸らす。こうなってしまったのには理由がある。それは少し前の事だが……あまり思い出したくはない。1つ言えるのは……今時の女子っていうのは怖いんだな、なんて教訓だけだ。

「じゃあイツキ君が上がったら雅さんの体を拭きましょうか、手伝うわ」
「1人で大丈夫だ」

「ダメよ、背中まで手が回らないでしょ？」

「柔らかいから届く」

「……もう、どうして素っ気ないのかしら」

「自覚がないのか、はたまた計算しての発言なのか……恐ろしい」

最後の一言は極力声を絞り、悠里には聞こえない様にしていた。普段独り言なんてめつたに言わないが、今はこうして外に出さないと胸の内にある焦りに押し潰されかねない。

全く、恐ろしいものだ。何度もそう思考しながら、この寒さの中でも一際煮え滾ってしまう頭を冷やそうと努力する。今こうしてここに座っていられるのは弛まぬ努力と決意あつてこそそのもので、甘い誘惑に勝った証拠でもある。……本当に、恐ろしい。

「ねえ、雅さん？」

「なんでしようか」

「少し相談、してもいいかしら？」

「……ん？」

先程とは違うシリアスな雰囲気を感じ取り、すぐさま思考を切り替える。現実逃避も数少ない記憶を遡つての食料の備蓄状況も全てゴミ箱に放棄して、どんな問題が突き付けられても取り乱さない様に心構えをしておく。

「イツキ君の……事なただけ」

「イツキがどうかしたか？　それかイツキが何かしたか？」
「ううん、特に何もしてないんだけど……ね」

何かを気にするように、いつの間にか声もいくらか小さくした悠里はぼつぼつと話し始める。自分の中でも確信が持てていないそれは結論としてではなく、判断材料を並べていくように不審点を引き摺りだしてくる。時折適切な言葉が見つからないのか、うーんとしばらく唸っていた事もあった。

それは、イツキを咎めるモノではない。俺から見ても普段と変わらない……会った時から変わらない様子のイツキは、俺がいなくなった瞬間から様子がおかしくなるらしい。

かなりの頻度で溜息やそわそわした様子を取り、声を掛けても上の空。いざ話してみても、稀に話を聞いていない時がある。

それだけ聞けば以前イツキがぼろつと漏らした『好きな相手』の事を思い浮かべてしまいが、悠里曰くあれは今ここに居ない相手が気になっていると言う。その証拠として、美紀の前でもその様子は変わらないと来た。

美紀を前にしても何か他の事に執着し、思索しているのだ。

「……なるほど、さっぱりわからん」

「私もわからなくて……聞いて良い事かもわからないからどうしようか迷ってるの

……」

「聞けばいいじゃないか。聞かれたくない事なら話を濁すだろう。流石にあいつもイエスマンじゃないさ」

「でも今まで言った事に歯向かったりした事あったかしら？」

「……うーん」

そう言われてみれば、あいつが誰かの言いつけを破った事があったか？ 言われた事どころか、自ら危険な役目を買って出る部分さえある。だがあいつがこの部に来た時の条件として命令を無視しない、という条件もあつた気がする。

「まあ、俺から聞いておこう。イツキの件は任せてくれ」

「でも……いつも雅さんに任せてばかりなのは……」

「こういう時対処する為にも俺がいるんだ。俺からその役目を取ったらただの殺戮人形に過ぎない」

「そんな事……!」

「自分でそう思っちゃうんだ、だから気を紛らわす為にもやらせてくれ。俺の生きる意味はもう悠里達に貢献する、それしかない」

「……わかったわ。でも雅さんは人形なんかじゃない、ちゃんと心を持ったヒトなんだから」

「どうかな……」

悠里にそんな事を言われても、俺の心とやらはピクリとも反応しない。感動も、誰かがいなくなつた事に対しても無反応な俺は……ただあるのは衝動だけで、それも本能み
たいなものだつた。

精神的に幼いのか、それとも達観し過ぎていいのか。恐らくそのどちらでもないのだ
ろう。ただ単に、俺は昔から心などなかつた。それが何故なのか、いつからそうなつて
いるのかは既に忘却の彼方となっている。

「あなたの『それ』も、その内治さなきやいけないわね……」
「……それ、とは？」

ぼそつと呟いた言葉に疑問を呈する。俺に何か悪い所があつただろうか？ 身体的
な事なら右肩にある銃創くらいなものだが、精神的な物となるともう心当たりが多過ぎ
て絞り込めない。

「なんて言つたらいいのかしら……記憶、とか」
「記憶……なるほど、そういう事か」

俺の記憶に関する事であれば、大体察しが付く。所々抜けている自覚はあるが、大抵
その原因は自分にとって都合の悪い事……枷にならないように、勝手に消えてしまう記
憶に関しての事だろう。

ただ現状で都合の悪い事を忘れると言うのはあまりにもリスクが高い。以前襲われた地点も、例として略奪された物資もわからなくなってしまうからだ。

1人の時ならそれだけだが、今こうしてグループで行動しているなら治すべき点ではある。ただ……

「俺は、まともでいられるのか……それが不安で仕方ない」

「……」

悠里の沈黙が抱いた懸念を更に加速させる。もし、俺の失態で誰かが傷ついていた。見る限り普通の生活をしている以上目立った傷はないとしても、見えない傷を負っている可能性もある。

例え自分ではどうにも出来ない状況だったとしても、必ず後悔するだろう。それが大きければまた……忘れてしまう。

「大丈夫……って言うのは無責任だけど。雅さんも……知りたいですよ？」

「勿論、自分の事なのにわからないっていうのは色々と気持ち悪い。でも……情けない話だが、薄々怖いと思っている。もし俺がそれを聞いて、迷惑を掛ける事態になっしまつたらと思うと……」

「そう、ね。……雅さんが良ければ、今夜話すわ」

「わかった」

「じゃあ、今夜……部屋で待っててね？」

「ああ」

約束を交わして、悠里は湯から上がっていった。割と入っている時間が短かったが……ちゃんと温まっているだろうか？　これが原因で風邪なんかひかれたら皆から責められそうだ。

——というより、なんかおかしくないか？　今の会話はまるで……

「……いやあ、それは……流石にないな」

はい、ありません。と見切りをつけて、小石と一緒に背後へ思考を投げやった。こういう時こそ忘却術を使うべきだ。これは自分に都合が悪い、間違いない。とは言え忘れるには一度眠る必要がある訳で、どのみち今日1日は覚えているハメになるな。面倒な事だ。

「それじゃあ、後でね？」

「ああ、湯冷めしないようにな」

戻っていく悠里が小さく手を振っていたので、俺も軽く返してやる。

よし、気持ちを切り替える時だ。次はラストのイツキ、先程悠里から請け負った件の前段階を実行しなくてはならない。……しかし、一度に美紀とイツキ2人分を抱え込むのは些かキツイのではなからうか？

今夜の事も含めれば、実質抱えているのは3人分。中でも俺自身の問題は文字通り他人事ではない。ダメージと状態異常によっちゃあ……もしかするとこのグループから離脱する可能性もある。

「となると、これが最後……か」

まだ確定はしていないにしろ、その可能性は高かった。何が待ち受けているのか、何処かへ放り投げてしまった記憶に1人肩を震わせながら、なんだか感慨深くなってる。

「こんな最後は……嫌だな」

独り言なんて、まるで意味のない事だ。そうわかっていながらもこうして口に出してしまうのは、誰かに聞いて貰いたいからだろう。よくやつたと褒められて、ありがとうと感謝されて、これからも頑張れと慰めて欲しい。そんな弱い考えがいつの間にか胸にあつた。

やっぱり俺は、人を引っ張っていくには力不足なんだ。出来るのなら誰かの下で、信頼できる人間の為に力を振るいたかった。頭で考えるのは苦手だ、だからこの状況はほんの少し気に入っている。頭で考えず、人道や決まりに囚われず、ただ闇雲に体一つで生き抜ける……今の世界を。

「すみません！ 遅れました！」

何がどう遅れたのか？ 全く負い目が見つからないイツキの社交辞令に、俺は静かに振り返る。

「ああ、さつさと風呂に入れ。外は冷える……風邪ひくぞ」

「はい！」

急ぎ足で衝立の向こうへと走っていったイツキの様子はどこもおかしく感じられない。隠しているのか、それとも最初から勘違いしているだけで、ただの気苦労だったのか。今の俺は後者を願う。そして次に、どう切り出せばいいかを。

「お待たせしました！」

「早くない？」

「はい！ ゆっくりしていると雅さんが風邪をひきますからね」

「……そうか、まあ入れ。少し込み入った話があるが……折角息抜きできる時にするのは野暮か？」

「全然です！」

終始元気のいいイツキは拙い敬礼をして風呂に浸かる。そこらしばらくして、まだ余韻もあるだろう時に俺はやつと意を決した。

「お前、何か悩んでないか」

少々強張った言い方をしてしまった所為で、イツキはビクツと体を震わせた。その様

子から見るに凶星だ、だがまるで悪事を働いた子供の様な反応に、何となく訝しく感じ
てしまう。

「まあ、この人数で匿名にしても意味がないだろうからストレートに言うが……悠里か
ら相談があった。最近のお前は少し様子がおかしい、と」

「さ、最近って言っても僕……ここにきたのが最近ですよ?」

「確かに。その期間の中でも最近と言うと……まあ数日か? 普通じゃあり得ない程

濃い関係をしてるんだ、短い付き合いでもわかるんだろう」

「悩みっていうか、完全に私事わたくしじしよですし……」

「表に出さなくとも多少影響は出る。むしろ表に出さないからこそ、滲み出る物に周り
は困惑する。俺としては、不安の種は出来る限り摘んでおきたい。……それが例え、ど
んなに無害な物でも」

こいつが入ってから記憶はあまりない。いつの間にかそこにおいて、いるのが当たり
前。だからどれだけ前から居たという期間はそれ程問題ではない。俺にとって重要な
のは時間ではなく、どれだけメンバーの心に浸透しているか、その影響力がどこまであ
るかだ。

最も、イツキの場合はそれにいくつか加算される要素がある。主に戦力的意味合いと
敵に回した時の脅威度だが。……色々教え込んだのが裏目に出なければいいんだけど

な。

「……わかり、ました」

「一応言っておくが、本当に嫌ならそれでいい。脅しみたいなき感じになつちまつたのは……まあ性分だ、悪いな」

「いえ、雅さんの仰る事はもつともです。でもこれは……本当に、皆さんには関係のない事なので……」

「こうして一緒にいる時点で無関係とは言えないな。少なくとも俺はどんな問題にも加勢する。家族の仇、過去の因縁、荒事なら大抵はいけるぞ。銃もあるしな」

「じゃあ、大丈夫ですかね？ 実は、ですね……」

初めて聞く弱々しい声に、俺は若干不吉な雰囲気を感じざるを得ない。もしかすれば、重大な事に首を突っ込んだかもしれないな。

「僕、妹がいるんです……」

「……ほう」

どう相槌を打つていいかわからず、興味無さげなモノになつてしまった。それは置いておくにしても、妹がいるのに何故イツキは今ここにいるんだ？ 既に死んでいる、というものなら過去形になるものだが、イツキは「いる」と言つた。つまりまだ存命している……それが、その可能性がある。

「でも、雅さん達が来る2ヶ月ほど前に4人組の人達が来て……安全な場所に移動しようって提案してきました。でもその時はまだ両親の帰りを待っている時で……とりあえず僕だけ残る事にしたんです」

「2ヶ月前……それでも大分時間が経ってるが」

「はい、僕も内心もうダメだなんてわかってました。でも妹はそれを受け入れられなくて……」

「なるほど……」

その後も話を聞く限り、イツキの妹……「神崎美波」の生存する確率が高いと見た。その妹を置いてきた理由、同じ兄としては最初信じられないという気持ちだったが、聞いていく内に段々と頷けるようになってくる。

神崎樹は、妹である美波を4人組に引き渡してから2週間後に教えられた場所を訪れた。そこは当初1人も避難していない小学校だったらしく、他の場所から移動してきた一団が避難所として使い始めた場所だった。

樹は門の向こう側で立ち番をする男に声を掛けた。

「神崎美波の兄です、妹は今どうしてますか？」

男は訝し気に樹を一瞥する。

「さあ、雑用でもやってんじゃねえの」

愛想のない顔で吐き捨て、あくびをして手に持っていた木の棒でコツンと地面を突き、音を鳴らす。まるで威嚇されているかのようなその対応に、樹は微かな異変を感じ取った。

「美波に会わせて貰う事って——」

そこまで言った所で、突如男は激昂する。

「つせえな!! こちとら暇じゃねえんだよ!! しばらくぞクソガキが!」

あまりの剣幕に一瞬たじろいでしまったのがいけなかったらしく、男は更に激しく樹に怒鳴る。最後の方は殆ど言葉にすらなっていないかのように、話の通じない相手と判断した樹は渋々出直す事にした。

翌日。樹は時間を変えてその場所を訪れた。今度は違う人間で、外見もちよつと大人しめだ。

「すみません。神崎美波の兄で神崎樹って言います、美波に会わせて貰う事はできませんか?」

出来る限り礼儀正しく言った樹に、男は無視を決め込んだ。数秒経っても眉一つ動かさない男に樹は困惑し、再度声を掛ける。

「あ、あの……」

「チツ……知らねえよそんなヤツ。女の名前なんかいちいち覚えてられっか」

人は見た目に寄らない、という教訓を得た日だった。

翌日、そのまた翌日と連日小学校を訪れるが妹に会う事は叶わなかった。それどころか対応は日々酷くなり、最後に行った日は石まで投げられる始末だった。そこで樹は感じていた異変を確信し、少ない食料と包丁、父が球場に行く時に必ず持つて行く双眼鏡を持ち出し陽が沈むと同時に家を出た。

人目を避ける様にフェンスが邪魔にならない小さな丘の上に伏せて、かき集めてきた枯葉を被った毛布の上に被せていく。映画で見た物を真似してみたが、思いの外隠蔽効果がありそうだと胸を躍らせ監視を始める。

そこは、到底避難所と呼べる場所ではなかった。

正門と裏門に立ち番が1人ずつ。1時間に一度2人組の巡回があるまではきっちり守られた場所だと安堵していた。だが夜が更けるにつれ、校舎からは悲鳴や泣き声が聞こえてくるようになる。

助けを求める声は数分もしない内に途絶える。どこから響く泣き声も、最後は諦めたかのようにすすり泣く物に変わっていく。そのどれもが女性の声で、ならば男の声はというと笑い声や何かを楽しむ声ばかりだった。

俺達の仲でも比較的幼い部類に入る樹は、その夜に闇を見た。この非常時に、縛る物がなくなった男達は好き勝手に貪り食っていたのだ。その様子を見て恐怖と共に吐き

気を催した樹はぐつと堪え、どうにか喉元まで出かかっていた吐瀉物を飲み込む。嫌な酸味と苦み、喉が焼ける不快感を水で流すのも堪え、必死で教室の窓を探した。どこかの窓に、妹が立っている……そんな光景が頭を過つたからだ。

必死に探した。時間が経つのも忘れ、ゆつくりと迫りくる睡魔も跳ね退け、何度も同じ窓を探す。無駄だとわかつている。自分一人で、包丁一本であの大人達に勝てるとは思えない。

それでも、今この場から立ち去つてしまえば永久にチャンスを逃してしまふ。そんな気がして、どくどくと破裂寸前の心臓を押さえながらやつとの思いで見つけ出した。

そこにはあられもない姿で窓に押し付けられている妹がいた。その光景を見た瞬間、樹は心臓が止まったのではないかと錯覚する。破けた服はもう殆ど本来の機能を失っている。それどころか、その姿は男達の興奮を高める材料となつてゐるらしい。

樹は憎悪した。この場に居る男達を一人残さず惨殺したい。この世で一番苦しい殺し方で、でも一瞬で命が途絶えるのもいいだろう。それが出来る得物はなんだろう？

その瞬間、樹の頭にはどこかで見た銃砲店が思い起こされる。正確な位置はわからない。最悪総当たりをすればいい話だ。銃さえあれば、いくら大人でも太刀打ちできる。そう結論付けて、樹は双眼鏡から目を離そうとする。

「……………」

思考に夢中になっていいる間に、美波は偶然にも樹を見つけていた。涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔で、必死に何かを叫んでいる。そしてその後ろに居た男も、樹の存在に気付いて仲間を呼び寄せているようだった。

このまま捕まってはいけない。確信した樹は毛布を撥ね退け、バッグを背負って走り出す。立ち番をする男に伝えようと窓を開けたらしく、背後からはそいつを追いという声……それと同時に、お兄ちゃん助けてと絶叫する妹の声も聞こえていた。

後日、樹はやつとの思いで銃を手に入れる。それは俺達が来る9日前。それからは何度か試射と分解の練習に注ぎ込み、準備を整えていた最中だった。

そして——俺達と出逢った。

「……………クソがっ!!!」

途中から居ても立ってもいられず、俺は当たりを右往左往していた。そして話を全て聞き終わつた今、最後の1本となる大事な左手を建物の壁に勢いよく叩きつけている。

「み、雅さん!」

「クソツ……何故言わなかった!? いや違う、何故気付けなかったんだ!」

何度か叩きつけている内に拳がひりひりと痛む。見れば赤く滲み、赤い筋となって指先へと滴り落ちていた。

「雅さんの所為じゃありません！　今まで何度か言おうとしましたけど……それどころじゃないって、思っちゃって」

「それも含めて俺のミスだ……」

「雅さんは知らなかったじゃないですか……！」

「知らなかったから悪くないなんて、そんな言い訳が通じる程甘くない……今すぐ取り返しに行くぞ、支度しろ」

火の始末もせずに、壁に立てかけてあつた斧を手取る。最悪俺一人でも行つてやる。車がなくなるのは痛い……ああ、そうだ。イツキの妹だけじゃない、他にも俺は大勢抱えている。それらを全部片付けるなんて実力、どこにあるつてんだ。

「クソ……だから嫌なんだッ!!」

渾身の蹴りは壁を容易く貫通してしまう。元々腐食していたのか、あまりにも手応えが少なかった。それか怒りでリミッターが外れてるのか？　どちらにしろ俺には関係ない。今更穴を空けたくらいで文句は言われない。

「雅さんっ！」

我を忘れてしていると判断されたのか、イツキは風呂から出てくると俺の肩を掴む。それも優しい物で、今も尚妹が蹂躪されているというのに気丈な振る舞いだった。

「他のメンバーには俺から説得する。心配するな、全員肉達磨にして奴らの餌にしてや

る」

「いいんです、雅さん。きつともう……多分ですけど、手遅れだと思います。それに、生きてるかもわからない人間の為に命を懸けるなんて……」

「そんなものは関係ない！ 生きていけば新入りとして迎える、死んでいるなら葬る、どちらにしろこのままじゃお前の妹は浮かばれない……お節介だろが、このままじゃ俺の気も収まらないんだ」

「どうしたの!？」

騒ぎを聞きつけて一同がこの場に集まる。丁度いい、話に行く手間が省けた。出来る限り優しくイツキの手を退けて、俺は悠里達に向き直る。相当怖い顔をしているんだろう、若干引き気味の一同の前に、感情のまま言葉を発した。

「これからイツキの妹を救出しに行く。異論は?」

「ま、待てよ雅! 救出って……どういう事だ?」

「イツキから聞け。俺はもう辛抱たまらん、今すぐにでも適当な奴の頭力チ割って脳髓引き摺りだしてやりたい気分だ。勿論お前らは対象外だ、安心しろ」

「イツキさん……これはどういう……」

「雅ってキレるところなるんだな……」

「みゃーくんどうしちゃったの? ちよつと怖いよ……」

込み上げてくる激情を抑え切れず、大人げないと思いながらも握っていた斧を壁に振り下ろす。ピカピカに磨かれた刃先はがっんと深く食い込み、並大抵の力では抜く事も敵わない。

「雅さん落ち着いて……!」

「そんな乱暴な雅先輩、らしくないですよ!」

すぐさま飛び込んでくる美紀と悠里に体をつしりと押さえ込まれ、身動きが取れなくなる。それでも力の差は歴然で、例え片腕でも男の腕力を前にしてはじりじりと押し返されていく。

そんな事態になりながらも、悠里達を気遣って大人しくすると言う選択が今の俺には取れなかった。

「イツキ、話してくれ。あいつがブチギレてるのも理由があるんだろう?」

「は、はい……」

「話してる場合か!! すぐに行かなきゃ生存率がどんどん下がってくんた! ただでさえ距離があるって言うのに……車の中でも口は開けるだろうが!」

「……とりあえず、車に荷物を積みましょう。話は移動しながら聞いわね? 美紀さんと由紀ちゃんは火の始末をお願いね!」

「でも悠里先輩一人じゃ雅先輩を……!」

「大丈夫だから！ 胡桃はイツキ君と車の準備をお願い！ 由紀ちゃん達も火を消したらずぐに積み込みを手伝って！」

悠里の名采配により、一同はすぐさま行動を始めた。それと同時に悠里の力は弱まり、最早ただ手を添えているだけになる。

「お願いだから落ち着いて、今ここで力を使ったらいざという時に動けないでしょう？」「……ああ、そうだな。離れてろ、斧を抜く」

一度悠里を遠くまで避難させた後、全力を持って斧を引き抜いた。かなりの力を使ったおかげで息も上がり、身体は言う事を聞かなくなってくる。目眩もしてくる辺り酸欠だろう。しばらく動かなければ収まる筈だ。

「悪い、少々我を忘れていた」

「雅さんがそこまで怒るなんて……余程の事なのね？ 準備ができ次第すぐに出発するわ。それまで傷を手当てしましょう」

どろどろと血が滴っている左手をハンカチで包んだ悠里はそのまま俺の右肩に手を回し、新館へと連れて行ってくれる。まだ暴れたりない感じはあるが……理性が働く程度には収まった。残りは奴らに全てぶつけてやればいい。

「絶対に血祭りに上げてやる……」

言えば怖がられる。そうわかっているのに、呪詛が口を突いて出た。むくむくと湧い

て出る憎悪は底が知れず、頭の中では悲鳴にも似た金属音の様な騒音が鳴り響いていた。

その音を紛らわせる様に、ハンカチ越しの悠里の手がきつくなる。見れば、いつにも増して母性的な笑みで「大丈夫、大丈夫だから」と言い聞かせてくれている。きつと、最初から励ましてくれていたんだろう。髪はまだ乾き切っておらず、所々水滴を纏っている。……なんでよりもよつて、こんな時に。息抜きの為に設けた場がお流れになったにも等しい。

とことん運がない。いや違う、それは絶対に違う。これも全部、俺が……

「雅さん!？」

気付けば、俺はがくりと膝を折っていた。風呂に入った覚えはない、水を掛けられた覚えもないのに……地面にはぼたぼたと水滴が落ちている。

「こんな、時に……」

猛烈な吐き気と強制的に遮断されていく視界。意識がどんどん切り離されていく嫌な感覚。……思い、出した。

「雅さん!」

悠里の声を頼りに、持っていた斧を放して手を伸ばす。その手を掴もうとする悠里の手を寸前で躲し、最後の足掻きで自らの手を引き寄せた。口に勢いよく何か当たる。

それが自分の手だと確信した瞬間、顎が外れるかと思う位に大きく口を開き、そして嘔み込んだ。

「……………つはあ、はあ……………よし」

激痛で意識が引き戻され、視界も回復してくる。それと同時に、口の中一杯に広がる鉄の味も。

「よし、よしー！」

記憶は保持していた。思い出したものをそのままに、俺は悠里の顔を見る。

「……………雅、さん？」

声はそのままで、その顔は大きく歪んでいた。いや……………歪みやない。亀裂……………？

違う、違う。まるでがむしやらに、間違えた字をぐちゃぐちゃに書き潰すような……………

「ゆう、り？」

「そう、そうよ！ 悠里ですー！」

「……………見えない」

「え……………」

「顔が……………見えないんだ。そこに、あるのに」

手を伸ばした途端、もう一つの異変に気が付いた。自らの手から溢れる鮮血が、本来綺麗な程に赤い筈の血液が……………黒く、どろどろとした物になっている。まるでヘド口の

ような……とても、綺麗とは言えない。

どんなに目を擦っても、それは変わらなかった。右目だけ、左目だけと見る目を変えても、しばらく目を閉じてみても、何も変わらない。それどころか対抗策を試す度に悪化している感覚すらある。

「なんで……こんな時に」

無理に耐えた結果が、堪えた結果がこれか？　なら俺は一生忘れたままでいろつていう事か？

「クソツ……」

泥の様な血を振り払い、俺は立ちあがった。せめてイツキの妹を救出するまでは……大丈夫だ、このままでも戦える。顔が見えないのなら心臓を撃てばいい、首を飛ばせないのなら、腹を裂けばいい話だ。

「何も、見えないの……？」

「いや、見える。ただ悠里の顔と……血が、泥みたいになってるだけで。戦闘に支障はない」

「……」

「でも思い出したよ。俺は悠里を護れなかった……本当に、すまない。このけじめははずれ……身を以て払う」

た。
地面に落ちたどす黒い斧を手に、新館へと歩く。悠里は、その後ろを静かに歩いてい

18. 奪還・前編

これは総力戦だ、我々の全戦力……持ちうる物全てを使つて、こいつの妹を救い出す。雅さんは言った。出発前の狂乱した姿とは全く違ふ、何かに駆り立てられているような……そんな眼差しで。

「雅さん、準備できました」

ボロ布で斧を磨いていた雅さんは、静かに腰を上げた。女性陣は車内に待機、僕と雅さんの2人で彼らが巢食う学校へと乗り込む。詳細な作戦としては、外の見張りを雅さんが始末し、窓から見える敵は僕が狙撃する。

粗方片付くか相手が防衛陣を形成した後、正面から突入して内部で合流する……というものだ。銃という圧倒的な武力を持つ僕達なら、なんとでもなる。そんな慢心にも近いこの作戦は他ならぬ雅さんが提案した。

「……出るぞ。少し待っていてくれ、最後にもう一度念押ししてくる」

背には愛用の斧を紐で括った物を背負い、腰には散弾銃。左脚のポーチには拳銃と完全武装した雅さんは車の中へと入っていく。一方僕は、この狙撃銃とリボルバーを2丁だけ。とても完全武装とは言えないけど、殆どの敵は雅さんが相手をして僕は搜索する

という役割を持つている。これも妥当なものだと、胸の内にあるわだかまりを無理矢理しまいこんだ。

中からは胡桃さんや悠里さんと口論する雅さん達の声。敵地へ突入するのは危険ではあつても、そうしなければ救出は出来ない。でもたった2人だけで何人もの大人を相手取るというのに反対されていた。

異論が出る度に雅さんは正論をぶつけた。女性を食い物にしている奴らの本拠地に、女を連れて行くのは意味がない。むしろ人質に取られればこつちが不利になる。それは誰もが正しいと判断したけれど、そんな場所だからこそ皆で力を合わせるべきだと胡桃さんは反論した。

皆は……恐れてるんだ。例えば救出に成功したとしても、雅さんが戻ってこなかったら。致命傷を負つても最期の時まで武器を手放さない人だと。実際の所どうなのかはわからないけれど、そんなイメージが浮かぶ。

扉が開いた。中から雅さんが出てくる……しかし、車内からは雅さんを引き留める手が伸びている。

「次はもう……帰ってこれないかもしれないのよ……？」

涙交じりの声にいたたまれなくなる。僕がつい言ってしまった所為で、皆を不幸にしました。僕があんな事を言わなければ……たった1人の妹の為に、多くの人を悲し

ませてしまつたんだ。

「大丈夫だ」

「何を根拠にそんな事言えるの？ ……あなたはいつも私達じゃ見えない物を見て、私達には到底考えられない事を考えて決断してる——でもなんで……なんで今回も大丈夫だつて言えるの？」

理由を求められても答えられるものじゃないんだろう。悠里さんの真摯な瞳から目を逸らした雅さんは、そのまま黙り込んでしまう。そのまま数秒が経つと、ゆっくりと掴まれた手を払い、微かに距離を取った。

「行つてくる。——イツキ、ついてこい」

彼は、何も答えなかった。素性の殆どを明かさず、過去も性格も自分からはあまり語ろうとしない。そこにいるようでそこにいない、物理的にはしっかりと目の前で立つていたとしても、確かにいるという確証が持てない。

僕は、そんな雅さんが少し怖い。その強さ、武器の扱い方、身のこなしから日常の仕事まで余す事なく懂れている。いつか僕も、あんな風に強くなりたい。でも彼の掴み所のなさは尊敬の裏に得体の知れない相手という恐怖が纏わりついている。

静かに歩く事を意識する雅さんだが、流石に重装備の所為で微かな音が発生している。それはほぼ無音となっているこの世界では耳に届きやすい。いつもステルスを心

掛ける雅さんにとって、この音は大きな枷になりそうだ。

正門が見えてきた頃。建物にはいくつかの灯りがあつた。正門の内側にもそれはあつて、光に照らされて見張りが1人いるのがわかる。

極力音を殺し、雅さんは見張りの死角になる場所へと潜り込む。壁一枚隔てた場所でもポケツトから何かを取り出すと、手首のスナップをきかせて壁の向こうへと投げ入れた。

「ん？」

コツツと音を出したそれは、雅さんが新しく取り出した物を見るにただの石ころだ。自然にあるもので、直接投げ入れたのを見られない限りそれが音源だとは思われない。

雅さんはまた石を数個投げると、塀を乗り越えようと手を伸ばす。けど片腕でしかも重装備の彼はとてもしゃないけど1人では登れない。それを理解したのか、雅さんは一瞬動きを止めた。

それを見て、僕はある事を思い付く。昔映画で見た事がある。1人が膝をついて、もう1人の足場になればいいじゃないか。僕はその映画に倣い、片膝をつけて両手を出した。

「雅さん」

ほほ音も出ていないような呼びかけに、雅さんはぱつとこちらに振り向く。そして僕

の体勢を見て、すぐに何をするのか理解していた。

雅さんは右足を僕の手に乗せると、ゆっくりと体重を掛ける。僕は全力でその重さに耐え、加えて体全体を使って雅さんを押し上げた。5秒もしない内にその重さは消えて、壁の向こう側でずしやつと着地の音が聞こえる。

流石に雅さんでも着地音は消せなかったみたいだ。

「うわっ!? だ、誰だおま——」

驚いた男の声は、直後に消え失せた。消える直前、微かに金属の擦れる音だけがしたけど……ナイフで仕留めたんだろうか？

「ここからは別行動だ。お前は外から狙撃、俺は中から隠れた敵の掃除をする。猶予は長くて15分……その間に出来る限り敵を撃て。その前に掃除が終わったら合図を出す」

「了解です」

手筈通りに僕は近くの丘へと向かう。あの場所は、以前僕が見張っていた場所。一度は逃げて、ただ傍観するしかなかった場所。でも今夜は違う。抗えるだけの力と、むしろ圧倒できる武器と頼れる人がいる。

今度こそ、僕は取り戻すんだ。

もう戻れない。嫌な事は忘れて、何事もなかったように過ごす日々。見たくもない現実から目を背け、心を許した相手だけを見て嫌な感情から目を逸らしていた日々には。過去にも現実を直視し、全てを受け入れようとした事が何度かあった。その結末は……考えるのも思ひ出すのも嫌な、壊れてしまった自分の姿と記憶。

今度こそは。何度目かわからない決意をして、視界の隅を覆う黒い靄を意識の外へと弾く。次に自分を見失えばどうなるかわからない。もう忍も尊さんも、手を差し伸べてくれる人はいない。これが最後の踏ん張り所だ。これで駄目なら、もう俺に生きる価値はない。次こそは、必ず乗り越える。

かつてこの場所で、多くの子供達で賑わっていただろう正面玄関を前にした直後、後方で銃声が轟いた。

「くっ……」

もう後戻りはできない。それが現実として俺に押し掛かってくる。この胸の痛みも、息苦しさも全部乗り越えなければならぬ。そんな事できるのか？　今まで散々失敗して、努力も人の善意もふいにしてきた俺が。

「できるとも。この俺が……できない訳がない」

精一杯の虚勢を張って、左手に握る黒い血の付いたナイフを見た。本来は鮮やかな深紅を持つ筈の血は、今の俺にしてみればただの黒い泥にしか見えない。これが、自分に

とつて最後のチャンスだとわかってしまう。

全力を出せば、何事も乗り切れる。今までそうだったように、俺が本気を出して出来なかつた事なんてない。だが……その本気は長く続かない。持って10日、それを超えれば反動が来てしまう。全てにおいて無気力になる、そんな物なら優しいと思えるが……

「忍……尊さん……」

名前を呼んでも、もう助けしてくれない。誰の手も借りない主義だからこそ、俺は2人の傍にただで幸せだった。手は貸しても借りはしない。貸した分は2人の時間を貰っていた。一緒に話して、一緒に居て、それだけで十分だった。

2射目。校内では異常を察知した男達が何があつたのかと騒ぎ出す。そんな中、目の前に3人の男が通りかかった。

「誰だ、お前……」

得体の知れない相手に恐れを抱いた声に、俺は伏せていた顔を上げる。いきなり目の前に片腕で血の付いたナイフを持った男がいたら、そりゃ誰だつてビビるだろう。一瞬幽霊の類かと思われても仕方ない。

誰だ、という問いに、俺は——果たして自分がどのような人間だったのかと自問してしまう。かつての俺は死んだも同然、幸せとは呼べなかつたものの、穏やかな日常は

既になく。代わりに波乱と腐臭に満ちた今の日常がある。

あの環境があつてこそ、俺は俺として存在していた。なら、今の俺は？ 前程優しくもなく、躊躇なく人を殺し、略奪暴行はお手の物。それどころか楽しんでる節すらもある。

もう、「雅」という名は相応しくない。気高く孤高を愛し、全てにおいて模範となる様な生き様を体現する事は不可能だ。とは言つても、新しい名前を付けてくれる相手はいない。だから、今は仮の名を……

「俺は、宵。……お前達を殺しに来た」

どこかで聞いた気がする名前を名乗っておいた。

イツキによる3射目。その銃声に体を震わせた男達に、その一瞬の隙を突いて駆け寄る。10m程の距離なら2秒と掛からずに辿り着ける。驚いて手で体を庇おうとする真ん中の男の腹に、勢いよくナイフを刺し込む。

そこからは一方的な物だった。続いてそれぞれ右と左の喉を切り裂き、床に倒れた所に左胸へと切っ先を突き立てる。悲鳴すら漏らさず、あつという間に制圧できてしまった。

「なにしてるんだ!?!」

だが、次から次へと新しい獲物がしやしやり出てくる。近くにあつた職員室から物音

を聞きつけて新たに2人が出てきた。また同じやり方で男達を殺し、至る所を黒く染め上げて行つた。

元々職員室だつた場所は倉庫となつており、食料や武器があつた。だが武器とやらも殆どが工具や包丁ばかりで、脅威になりそうな物は少ない。全員がこの程度の武器を所持しているのか、それとも役目のない武器達なのか。どちらにせよ、銃を凌ぐ武器なんてのはそうそうないし考えつかない。

頬に感じる温もりに気付き、ふと手の甲で拭つてみる。やはりそれも真つ黒の泥で、何の美麗さも魅力も感じられない。泥をコートで拭い、先へ進もうとした時、この足を掴む存在がいる事に気付く。

傷が浅かつたのか、虫の息になつた1人が俺の右足を掴んでいた。力は弱く、容易く振り解けるだろう。だがその目に籠もつた意思是明白で、こいつもまた何かを護ろうとする者だつた。

「なんだ、何故そんな目で見る」

男は答えない。いや、答えられないのだろう。こいつは確かに首と胸を損傷している。気道は無残にも切り裂かれ、心臓を外した切つ先は代わりに肺を貫いている。そんな状態になつても抗おうとする意志は、敵ながら天晴あつぱれと言えよう。

だが、男の目はまるで外道を見る様な眼差しだつた。今まで上手くいっていたのに、

お前の所為で台無しだと。俺が外道かどうかは置いておくとしても、そちらこそ正真正銘の外道と言えるんじゃないのか？ 俺達はただ、目には目と同じ手段で対抗しているに過ぎない。

「……死に損なつたな」

軽く足を持ち上げると、男の手はするりと落ちてしまった。それでもまだ息はある。止めを加えるか、それとも放置しておくか。放つておいてもこの状態なら長くは持たない。死に際に情報を漏らす事もないだろう。

楽に死なせてやるべきか考えたが、やめておこう。こいつに「楽」をする権利はない。精々ここで仲間の死体を眺めながら、絶望に浸つてもらおう。

時計を見れば、今までで5分も時間を無駄にしているとわかる。先を急ぐべきだ、先にイツキの妹を見つけてもいいが、それはあいつの役目であり、悲願だ。俺が出しゃばる必要はない。

また俺の足を掴もうとする手を蹴飛ばし、ゆつくりと歩く。今の俺は……断じて『雅』なんかじゃない。愚かで、ただの殺人鬼の……『宵』として。気の向くままに殺そう。俺が成し得なかつた願いを、したくても出来なかつた行動を、あいつに任せよう。

その後も、俺は齒向かつてくる奴らをただ殺して回つた。どいつもこいつも武器は小さくか弱い物ばかりで、強いて脅威だと感じたのはモップの柄の先にナイフを括りつけ

た簡素な槍くらいなものだった。そいつもまともな訓練は受けておらず、ろくに素振りもしていなかったのだろう……呆気ない程簡単に死んでしまった。

武器を持っただけで強くなる訳じゃない。そんな事、少し考えればすぐわかるものだろうに。どれだけこの住人が平和ボケしていたのかがわかる。

——なのに、何故だか俺は薄気味悪さを感じていた。女子供を攫い、ここで管理する以上ある程度の武力は必要だ。武器を持っただけの素人では脅威にはなり得ない。少しでも武術の心得があれば容易く反逆できる……ここで管理されている人間は、それに気付かなかつたのだろうか？

しかし、誰もが合気道や空手を習っている訳じゃない。それでも1人か2人、数人はいる筈……運良くそんな人間がいなかったのか？ それとも、反逆する必要がある——
「……あり得ない。イツキが嘘を吐いた？ まさか。あの瞳は嘘についているものじゃなかった……なら、誤解した、のか？」

「いたぞっ！ 侵入者だ！」

どうやら考える暇は与えられないようだ。既にこの校舎に入り込んだ者がいると伝達されているのか、武装した男達は列を作つて俺をこれ以上先へ行かせまいと壁を作る。

1人に切りかかれば、その隙に俺は一撃貫うだろう。それが掠り傷であれ致命傷であ

れ、貰った時点で俺の優位性は崩れる。

「動くなよ……? 大人しく捕まってくれ」

じりじりと距離を詰めてくる男達の瞳は、どれもが鬨気に満ち溢れていた。このまま無抵抗で捕縛されればただでは済まない。既に何人も殺してるんだ、ただ説教を受けて放り出されるだけなんて事はない。

……それなら、捕まる訳にはいかない。必ず帰ると約束してしまつた以上……俺は全力、全火力を以て此処を制圧する義務がある。

「そつちこそ、動くな」

ナイフを鞘に仕舞い、腰に下げた散弾銃を取り出す。一瞬これが何かわからぬのか神妙な目で見てくる男達に向け——安全装置を解除し引き金を引いた。

凄まじい反動と共に廊下を遮つていた男達の半分が崩れ落ちる。間髪入れずにもう半分へと照準し、また引き金を引く。二度目の発射と反動をいなしした後、銃口から煙る硝煙が途切れたのを合図に、ブレイクオープンさせて膝の内側で挟み、ポケットから予備の弾薬を取り出して装填する。

その間に倒れた男達を中心に黒い泥が広がる。死体諸共踏み越えて先に行くと、程近い教室かの扉が開いた。

「ああ……! そんな!」

それは此処に捕らわれていたであろう女性で、しかしその表情は悲壮に満ちている。俺を無視して倒れている1人に走り、抱き着いた。

「嘘でしょ……？」 相手は1人だから大丈夫だって……」

泥で汚れる事も気にせず、死体を自分の膝に引き寄せて……次の瞬間、殺した張本人である俺へと敵意を向ける。

何も言わないまま数秒が過ぎた。女性はただ俺に敵意と、僅かばかりの殺意を抱いている。何故自分を捕らえていた相手に対してそこまでできるのか、俺には到底理解できない。

そして頭の中に1つの結論が出た。「ストックホルム症候群」。状況は少しばかり違うが強盗事件なんかで犯人が人質を取った際、人質が犯人に対して好印象を抱くと言うものだ。その理由や因果には色んな出来事が関係するが……今ならそれが一番納得できる。

「……殺してやる」

死体の持つていたナイフを拾い上げて、女性は俺に正対する。数mの距離しかない今、懐に入り込まれば銃での対処は難しい。なら入り込まれる前に……攻撃の体勢に入る前に排除するのが無難だ。

「お前さえいなければ……皆幸せだったのに！」

「っー」

頭が痛くなった。同時に胸にも不快感を覚えて、動悸が激しくなる。

殺るなら今だ。突進されれば……今なら容易く殺される。だが此処に捕らえられて
いる神崎美波を、女性を助けに来たのに救助対象を殺すなんてのは本末転倒だ。

「殺してやる……殺してやる……殺す殺す殺す殺す殺す!!」

正気を失っている女は真つ直ぐ突つ込んでくる。狙いは俺の腹、手には散弾銃がある
が……これでは殺してしまう。かと言って手を放してナイフに持ち替えるのも……落
ちた銃が暴発する可能性もあるしナイフを抜くまでに間に合わない。

「雅さんッ!! 伏せてください!!」

「……待て、撃つな! こいつはっ!!」

正面玄関の方から現れたイツキは、M700を構えていた。俺を襲おうとする人間を
撃つつもりだろうが、後ろ姿では女だとわからないらしい。

まずい、あいつは撃つ……例え十分な射線が確保できていなかったとしても、一寸の
隙間を、一瞬の隙をその指で貫く——例え俺諸共撃ち抜く可能性があつたとしても、
少しでも成功する可能性があるのなら。

それなら素直に身を引くのが正解だろう。だが、イツキに敵である人間を撃ち殺させ
るのは良しとしても、女を殺させたくはない。

そんな思いがあつたのか、俺はいつの間にか女を庇っていた。腹部に痛みが走る。出来る限り逸らしたつもりでも、完全に回避するとなると射線が空いてしまう。だから手負いになる事を覚悟して……無駄だとわかつていてもイツキに背を向ける形で女性を抱いた。

屋外でもうるさいその銃声は、この場所では倍以上うるさく感じられた。思わず体が強張る……だが体のどこにも痛みや不快感はない。寸前で狙いを外したのか？

だが、しかし——

「大丈夫ですか!？」

駆け寄ってくるイツキの声。俺はいつの間にか抱いていた女性が急に重くなっている事に気が付く。——まさか。

床に下ろしつつ確認すると、女性の額にはぽっかりと穴が空いている。……腕を上げたな、イツキ。それが今では、とても恨めしく思う。

「何故撃つた……」

既に朽ちるしか能のない亡骸から手を放して、背後に立つイツキに振り返る。その瞬間俺が怒っている事に気付いたのか、イツキは身を震わせた。

「……すみません。でも仕方ないですよ！ 僕がこうしなきゃ雅さんは——」

「お前の手を借りずとも無力化できた!! なのにお前は——」よりにもよって、救出対

象を殺したんだ。わからなかったか？ 無理もない、後ろ姿では判別し辛かっただろう。傍から見れば俺は今まさに殺されかけているところだった、それもわかる。わかっている……それでも……お前に、女を殺させたくはなかった……」

右手があれば、今まさにイツキを殴り倒しているに違いない。だが今はもうない、辛うじて残る片腕も人相手にはオーバーキルの威力を持つ散弾銃だ。今の俺には、ただこの目できつく見据えるしかなかった。

「女の人だつていうのは……知つてました。雅さんが女性を殺すのはいけないって言うのも、わかります。でもそうしなきゃ雅さんが死んじゃうかもしれない……そうなるくらいなら、僕は殺します。どんなに責められようと殴られようと！ 僕は雅さんを守るって決めたんです！」

その真つ直ぐな瞳に、俺は怒りと感謝という矛盾した感情を覚える。……いや、矛盾などしていない。この怒りは俺のエゴだ。イツキに女を殺させたくない、出来るなら銃も何もかも取り上げて悠里達と一緒に平穩に生きて欲しいと思うのは、俺の理想であつて押し付けるものではない。

「……そうか、わかった。だが礼は言わん。次からは俺が許可するまで撃つな。――進むぞ」

「……はい」

散弾銃からナイフに持ち替えて先導する形で一步踏み出す。その瞬間ずきりと腹部に痛みを覚え、先程一撃貫つていた事を思い出した。

恐る恐るコートを見てみる。どうやらベルトを掠つていったらしく、生地の厚いコートも相まつて勢いはかなり削がれたらしい。

「!? 雅さん!」

「心配するな、掠り傷だ」

念の為めくつてみるが、出血も大したものではない。どう考えても掠っているどころかまともに刺されている訳だが……当たり所が良かったな、多めに見積もっても刃先は2cmも入っていない。これなら応急処置も要らないだろう。

「いたぞー!」

損害の確認をしている所に、俺達の目の前には新手が続々と現れる。今度は数が多い……1、2、3——ざっと数えて13人か。この全戦力なのではないかと思う程に、人数とそいつらの持つ武器は充実している。明らかに今までの敵とは違う……その中の3人は片手に拳銃を所持しているが……見るに持っているのはデザートイーグルとベレッタM92F。そして最後にサクラ。

「銃を……!」

「気を付けろ。こけおどしだろうがサクラだけは違うかもしれん。目を潰されない様に

しておけよ」

「了解ですー！」

「よし、発砲を許可する。——殲滅しろ」

持っていたナイフを一番近い敵に投擲して、レッグポーチから突入前に予めコツキングしておいたM1910を取り出す。セーフティを外し、運悪くナイフが胸に突き刺さっている奴を無視して脅威度が高い順に照準を付け、発砲していく。

敵は総崩れだった。銃と言う圧倒的な火力を前にして、成す術もなく倒れていく。悲鳴を上げる暇すらなく倒れていく姿には、認めたくないが……若干愉悦を感じる。

だがもし自分が今殲滅している相手と同じ様な境遇に陥った時、理不尽を呪いながら死んでいくに違いない。だとすれば、今この状況を楽しめばいつか自分もこうなる気がしてならない。

「……殲滅、完了しました」

全員が倒れたのを見て、イツキは戦闘終了の意を告げる。戦闘と言っているのかもわからない程に一方的だった……圧勝した、という点については運がいい。

「念の為銃を持った敵を調べる。誰か息があつたら言ってくれ」

「了解」

撃ち切った弾をリロードすると、構えながら慎重に死体を漁りに行く。誰も彼もが沈

黙する中、こいつら全員に通じる共通点を見出した。

——それは誰もが右腕に何かしらの『色』を身に着けている事だった。リボンの切れ端やバッジ、雑に塗装された腕章。それらは「白」「赤」「黄」「緑」と4色ある。

その色が何を意味するのは今の所わからないが、こうも意味ありげに身に着けているとなると……しかもほぼ全員だ。今まで殺してきた奴らにあつたかは確認していなかったが、恐らく身に着けているだろう。

「雅さん、こつちのベレッタはエアガンみたいです」

「やはりか。この国でそんな大層な銃が世に出回るとは思えない。米軍兵士から剥ぎ取ったともなれば話は別だが……そもそも軍が動いているかもわからないしな」

死体からデザートイーグルを拝借すると、重みですぐにわかる。この銃はこんなに軽くない、一番軽いものでも1.5kg以上はある。念の為マガジンを抜いてみると、中には案の定BB弾が入っていた。

「こつちのD・Eもオモチャだな。さて、最後は——」

サクラを握り締めたままの死体に近付いた時、違和感が生じた。全身の毛が逆立つような紛う事なき恐怖、ここは危険だ、死んでしまうと知らせてくれるいつもの感覚。

その元凶は——間違いなく眼前で倒れる「死体」だ。

「イツキ!!」

慌ててイツキを呼んだ。その瞬間、仰向けで倒れていた「死体」がむくつと勢いよく起き上がり銃を向ける。

「雅さんっ!!」

撃たれる前に撃つ。ある程度心の準備が出来ていたのもあって、スムーズに狙える。だが相手の方が一步速い、なんとか頭に照準を付けて引き金を引く。

銃弾は狙い通りに頭蓋を砕き、奴の体からは力が抜けた。——だが、最後の抵抗と言った所か。目の前で2度目の閃光が花の様に散った。

「ぐっ……」

情けない声が出たと、恥ながらも死を覚悟していた。誰かが死ぬ前に死ぬのなら、それもいい。でも俺が死ぬ事によって誰かが死ぬ元凶となってしまうのなら、決して死ねない。

……現実是非情だ。こんな行いをしてきた俺が言う義理もないが、何故こうも不幸が重なるんだらう。その不幸を呪えば、また不幸。時折来る幸運に喜べば、次の瞬間にはどん底だ。

「雅さん……っ?」

まだ鮮明に聞こえるイツキの声で我を取り戻す。どこも痛くない、どこも熱くない。またも生き残ってしまうだろうか? 死ななきや安いとは言うが、不便を背負って生

きるのも良くないと俺は思う。だからいつそ、死ぬ時は即死であればいいと、思う。「……生きてるな、どこに当たったんだ」

周囲を見渡すと、自分の背後には微かに抉られた壁面があった。やつぱり、サクラだけは本物だった。そうでもなきや撃ってこないだろうし、当たり前だろう。

次に自分の体を隅々まで検分する。脚も腕も、腹にも首にも当たってはいいない。こうしてまともに思考できているという事は間違つても頭には当たっていない。なら、どこなんだ？

何の気なしに右腕のあつた場所を見てみる。そこには無残にも穴の開いた袖があつた。なるほど、最近妙に運がいいと思つてはいたがどうやら本物らしい。

苦笑しながらその場を動けないイツキに右の袖を振つてやると、安堵したように文字通り胸を撫で下ろしていた。

「どうやらまだ死ねないらしい」

「当たり前ですよ、雅さんが死ぬ時が来るとしたら、僕なんてとつくに死んでます」
「どうか……」

1発減つた装弾数をリロードして、警戒を解かぬまま前に進む。ここまで殺せばもう数は多くない筈だ。いてもあと10人以下、少なければその半分もいないかもしれない。

そいつらがどこにいるか……防衛に出てこない以上余程の重役だろう。俺と同じくして、死ぬ訳にはいかない人間。このグループのリーダーやサブリーダー、もとい幹部の面々……防衛上有利になるのは最上階だが、階級に拘る人間なら校長室や放送室なんかの完璧な個室を求める。

このリーダーがどのような人間なのか、聞き出す相手もいなくなった今はしらみ潰しに探す他ない。捕縛されている人間に聞けば教えてくれる可能性もあるが……正直、さっきの一件で少し懲りている部分もある。

「とりあえず、どうしますか？」

ここから先の判断を仰ぐようとするイツキに、低く唸って考え中だと示す。ここは敵拠点で、相手は実銃を持つ程度には武装している。全部でいくつ所持しているのかは不明……なら見つけた敵は片っ端から無力化しなければ少々不安だ。

だとするなら、それならば——あらゆる可能性やリスクを考えれば考える程、ただでさえ圧迫されている思考はショート寸前にまでなってしまう。これ以上多くは考えられない。深くまで突き詰めようとしても、今の行いが道徳に反しているという事実や罪悪感ばかりが表に出てきてしまう。

前ならこんな事は考えずに済んだというのに……あの時無理矢理にでも耐えた弊害がここで発揮されたか。

「……この建物を全て探索する。敵意を持つ者は全員排除しろ——誰であろうと」
それは間違っている、と頭の中でなけなしの良心が否定した。ならどうすればいい？
もし敵が俺達に銃を向けたら大人しく殺されるところでもいいのか？ 話も通じない、目指す物も目的も価値観だって違う。双方が正しいと思う事を実行し、曲がりなりにも信念を貫いている。

相容れないのならば、こうして力でねじ伏せるしかない。少なくとも、俺はそれが手っ取り早く終わらせられる手段だと認識している。

「誰で……あろうと、ですか？」

「そうだ」

いつにも増して冷たい声が出ていた。空気よりも冷え切って、この場に漂う心地よい血と肉の匂いよりもおどろおどろしい——吹っ切れたようで、ぷらぷらとぶら下がっている様な感覚がする。

「じゃあ……あの人達も……敵、ですか？」

イツキは何かを示しているようだった。それが何であろうと、行く手を遮るのなら排除する他ない。恐る恐る後ろに振り向いてみると、そこには何人も女性達が武器を持って集結していた。

「……なんだ、これは」

「僕もわかりません。でも……仲良くしようって顔じゃありませんよね……？」

イツキの言う通り、俺達の後を追うように来た女性達は全員殺意に溢れている。俺達の前に倒れる死体を見て涙を流す者も、泣き崩れる者もいた。

「——まさか、いや……そんな事が」

ここにいる全員が「ストックホルム症候群」に陥っている。その可能性もない事はないだろう。だが、自分がどれだけ惨い仕打ちを受けてきたとしてもここまでやれるか？ 銃を持っているのは今まで散々ぶつ放してきたのもあつて重々承知だろう。自分達には銃を使ってこない……そんな馬鹿な考えを全員が持っている程呑気な見た目もしていない。

等間隔で置かれているランタンの光を受けた1人の女が、1歩を踏み出した。それに続くように、全員が1歩ずつ踏み出す。

「洗脳されてる……？」

イツキの一言で、戦闘の女の顔が更に険しくなった。ただでさえ鬼の形相と言う言葉が似合うと言うのに、これじゃ般若だ。余程今の言葉が気に入らなかつたらしい。

「……いや、これは、違う」

ほぼランタンの真横に来ていた女の瞳から、その精神は疲弊していないとわかる。つまり、これは本心からの行動。だがここまでする理由が——

「——イツキ、どうやら俺達は酷い誤解をしていたようだ」
「え？」

「ここはお前が言う『地獄』ではない。むしろこいつらにとっては『天国』だった。それを俺達は……無残にも壊していたらしい。物だけならともかく、人までも」

「……！　じゃあ、もしかして僕は？」

「もしかして、ではない。確実に——俺達は単なる賊に成り下がった」

つまり、俺は——今まで単に守ろうとしていた奴らを殺していた。自分の想う人の為、友人の為、この場所を守る為に立ち向かった奴らを……無残にも、ただ無慈悲に虐殺していただけだったのか。

「嘘だ……そんな……じゃあ僕が今まで殺してたのは……!?　僕がさつき撃つた女の人
は？」

「単なる正当防衛になる。仕掛けたのは俺達、こいつらは被害者だろう……俺が言った
ことが『真実』であるならば」

「真実以外のなんだつて言うんですか!?!　こんなの……ああ、僕はなんて事を……！」

今までの行いを嘆き、ついに銃を落としてしまったイツキはその場で膝から崩れ落ちた。その様子を、女達は黙って見ている。それ以上進んでくる事はなく、ただ涙を流し後悔する少年の姿を——嘲笑する事もなければ慰める事もない。ただ現実を受け止

めさせているかのようだった。

そして、それを見守る側に居る俺へと目を向ける。

「……俺は特別悔やむ事はないぞ。散々忘れ去つて、無かつた事にしてきたが……今更この程度で泣き崩れはしない。好きに罵ればいい、疫病神、殺人鬼、死神。並大抵の事なら言われ慣れてる。残るは実力行使だが——俺を襲つて五体満足で生き残れるとは思ふなよ?」

銃をポーチにしまうと、背中から斧を降ろして紐を持ち手に括る。鋭利に磨かれた刃はランタンの光を受け、妖しく煌めいているに違いない。今の俺にはただのどす黒い刃にしか見えないが。

「俺がどんなに間違つていようと、決して悔やまない。どれだけ蔑まれようが、ゴミを見る目で見られようが……その為に今の『俺』はいる」

いつもの構え方では分かり辛いと見て、少々大仰に斧を構える。見るからに物々しい雰囲気、対面する女達はその殆どが肩を震わせた——先頭に立つ1人を除いて。

「雅さん……もうやめましょう。僕達は間違つてたんです……だからもう、諦めて降参しましょう……」

「馬鹿を言うな。そうしてどうなるつて言うんだ、今まで殺した分の苦痛を与えられ果てに殺される。生きて帰るとあいつらに約束した以上、それは無理な相談だ。俺は必ず

お前と、その妹を連れて帰る。それこそが今の俺の目的であり、悲願だ」

「……イツキ——妹？　あなた、もしかして神崎樹？」

先頭に立つ女が初めて口を開く。ずばり名前を当てられたイツキは顔を上げると、リーダー格らしいその女にすぐさま詰め寄る。

「妹を……美波を知ってるんですか!？」

急に距離を詰められて若干引きながらも、女はしつかりと頷いた。

「3ヶ月くらい前に来た子よね？　その子なら知ってる……そう、あなたがあの子の兄だったのね」

「美波は今どうしてますか!？　何処にいるんですか!？」

「多分今は坂上さんの……此処の副長をしている人の部屋だと思う。あなたの事は知ってるわ、来たばかりの時に不幸な目にあつて……それをフォローする為に私がついてあげた時があつたから」

不幸な目、というのはイツキが見たあの光景だろう。あれを不幸という一言で片付けてしまうのは些か憤りを覚えるが……言葉を濁したのか。あれは此処の連中にとつても憎むべき事柄だったらしい。

「そう、そういう事だったのね。あなたは妹さんが無理矢理されている光景を見て、ここがまともな場所じゃないと思つた……」

「……はい、それまでに何度か此処に来てもしらわれてしまったのもあって……僕にも仲間が出来たから、取り戻しにきたんです」

「だが実際此処は至極まともな場所だった。それを俺達は蹂躪してしまった訳か」

「……今の様になったのはほんの1ヶ月前よ、それまではあなた達が想像していたのと同様だよ。でも今の所長と副長が革命を起こした、それが大体3ヶ月前……でも残党なんかはまだいたりして、急にシフトが変わったり制限が設けられたりして男達は皆ピリピリしていた。あなたの妹がああなつてしまったのも、残党の1人が暴走したのが原因なの」

「そう、なんですわね……じゃあやつぱり僕達は……」

「ええ、やつと落ち着いてきたのに滅茶苦茶にしたのよ。話し合えば解決する事だったのに一方的に殺してこつちの話は聞く耳も持たなかった」

怒りに震える女に、イツキは申し訳なさそうに顔を伏せた。だが、俺は反対に理不尽を感じている。事実としてこの場所がまともになつていたとしても、前々からこうだった訳ではない。話せば解決するというのなら、いくらか時間の猶予はあったのだ。

もつとも、初つ端から見張りを斬殺して鉛弾を撃ち込まれれば話す余裕もやる気も失せても仕方はないが。

「申し訳……ありません」

「所長ならきつとこう言う。 どう落とし前を付ける気だ？ 腕や足の一本失つても文句は言えんだろう？」——「どう？ 覚悟はある？」

ビクビクと震え始めたイツキを見ていられず、斧を逆手に持ち振り被れない事をアピールしながらイツキの元へと歩く。俺の方へ振り返ったイツキを小さな声で「下がれ」と命令しながらせると、俺はそのまま女を見下ろした。

「いくつか質問がある」

「はあ？ そんな義理があると思ってるの？ あんた何してきたかわかってないでしょ？」

「ああ？」

昔嫌いだった女の喋り方に酷く似ていて、思わずイラついてしまう。危ない、自制していなかったらこの後に映画でよく見る暴言が出てくる所だった。

「あんたさえないなきやあの子もこんな事しなくてよかつたのよ、どうせ力づくで取り返しに行くつてそそのかしたんでしょ」

「ああ、そうだ。イツキから話を聞けば誰だつてそうするだろう。まだ子供だと言うのに犯す奴らがいる場所に、土産持つて交渉しに行く奴がいるのか？ まだナイフを突きつけた方が話になると思うがな。——で、質問に答えるのか？」

斧で軽く床に傷をつけてやると、さつきまでの威勢は失われたようだった。何故最初

からそうしないのか……まあ言っても無駄だがな。

「男達は誰もが腕に何かしらの印を着けていた、その意味は？」

「ぱつと見てわからなかった？ 階級章。ここには5つの階級がある、白緑黄赤黒、そして黒に白いXが描かれた物。後に行くほど階級が高い」

「……そうか、ちなみにそれぞれの階級は？」

「白は新入りやまだ何の功績も修めていない人、緑と黄は一定の功績を修めた人、赤は班や課を管理する人、黒は赤を管理すると同時に近衛騎士のような人、そして最後が所長や副長、幹部の人」

やはり、階級章だったか。言い方が雑だったり一言多かったりするのは良しとしても、少々やり過ぎている感じもする。階級を設けるのはまともに管理するには必要だが、人間関係の悪化や階級が低い者への差別や小間使いにするなどの問題がある。

それを阻止するには確固たる信念とカリスマが必要だが……そういうのがあったとしても、水面下では必ずあるものだ。

「次にお前達はどう管理されている。見た所階級章は着けていないが」

「女性は家事なんかもあるけど、基本的に男に1人仕えるの。強制はされないけど、結婚………みたいなもの」

「ああそう………面倒だな此処は。俺ならすぐ出て行くな、今時流行らんとそんな設定」

「あつそう！ 社会不適合者の言う事なんて誰にも信用されないから。女1人守れないでどうするのよ、全く……」

今更社会なんて言われてもなあ……あつてないようなモノだし。自治体レベルならまだしも小規模な団体だと全く機能していかない事が多いんだよなあ。精々みんなのお約束レベルで黙認されていたりだとか、本来許されないような事でも人によってOKだったりだとか。

「雅さんは1人どころか——」

「口を開くな」

「はい、すいません……」

「なに？ まさか一夫多妻？ それこそ今時流行らないでしょ、どうせ力でねじ伏せてるんでしょうけど。あんたが死んだらどれだけの人が喜ぶんでしょうね、100人くらいいいそう」

「雅さんはそんな人じゃありません！ いつもは優しくして聖人のような——」

「首突つ込んでくんなって！ 話がダレるんだよ！」

「はあ……洗脳でもされたの？ 良かったらうちにこない？ 色々壊されちゃったけど、きつとこの人の所に居るよりいいよ」

「……」

今にも首を跳ね飛ばしたい所だが、まだ聞きたい事がある。こいつを黙らせてからでもいいが……他ののは気が弱そうでもともに会話ができなさそうだ。

まだ我慢しよう、我慢。終わったらこの性悪女の顔を1発ぶん殴ってやればいい。

「……最後まで、神崎美波は今どのような状況になっている」

「……はあ？」

「お前達が結婚の真似事をしてるんだ、心配しない訳がない。まさか、既に誰かに好きにされている……とかはないだろうな？」

「あの子は今坂上副長の所に——」

「つまり副長がイツキの妹を好きにしているの？」

「保護されてるの!! 子供と結婚できる訳ないでしょう!？」

食い気味で尋ねると、女はキレながらも答えてくれた。果たしてその保護とはどういった内容なのか? 辞書で引く通りの言葉ならまだしも、駅前雑居ビルにある店で買える本のような保護ではないといいのだが。

「なら案内しろ。これ以上の死人が出ない様に出てきた男達も説得してくれると有り難いんだがな」

「は、嫌だし」

「そうか、じゃあ1部屋1部屋探していくとしよう。——未亡人製造機とか言われて

も笑顔で頷くしかなくなるな、これは」

「はあ!?! わかった、わかったってば!?!」

斧を引き摺りながらその場を去ろうとしていると、女は一瞬で俺の右腕に縋りつこうとしてきた。だが空ぶつたのを見て驚いているらしく、その可愛らしい表情にこちらもつい小さく笑ってしまった。

間近までできてようやくやくわかったが、この女は俺と大して歳は変わらないらしい。それより少し下か? と思う程度で、先程までの気張った態度も歳の所為だと結論付ければまだ可愛らしいものだ。

「お前歳はいくつだ」

「19よ! 悪い!?!」

「いや別に? 名前は?」

「玖城——いえ、ここから先は名乗らない」

「まあいい、俺は——宵だ」

「この子は雅って呼んでたけど?」

「そうも呼ばれる。お前も完全に名乗らなかつたんだ、フェアだろう」

俺の態度が気に入らなかつたのかふんと鼻を鳴らして距離を取ると、反抗心を前面に出した目で俺を睨む。そんな様子がおかしくて、何となくからかいたくもなつてく

る。

「じゃあ、案内をお願いしようか。玖城さん？」

皮肉めいた笑顔を向けてやると、さぞ悔しそうに先導を始める。

……なんだか興が冷めてきたな。さっきまで散々殺しまわって、ここにいる奴ら全員を惨殺してやろうとしていたのに。無理もないか、ただの勘違いで、しかも意味のない虐殺だったんだから。

小さな溜息を吐くと、それはイツキの安堵した息と完全に合わさっていた。イツキもそれに気付いたのか、完全に戦意を喪失しやつれた顔で周りに気付かれない様に微笑んでいた。

19. 奪還・後編

「(ハ)(ハ)よ」

「……そうなんだ、そりやすごいな」

疲労困憊になっている雅さんは顔を伏せながら適当な相槌を打ち続けていた。無理もないかな、僕も少し疲れている。その原因は1階から3階のここまで、休む間もなく早口で所長の武勇伝だとか惚気話を聞かされたんだから、仕方ない。

「宵さん、着きましたよ」

「……ああ、そうか。それもすごいな」

「……………」

「これは重症だ。」

「着いたって!」

玖城さんが雅さんの肩を思いつきり叩くと、まるで寝起きの様にはつと顔を上げる。

「ん、なんだ!? ……着いた? ああ、やはり3階か。防衛上最上階の最端がいいと相場は決まっているからな」

「そ、そうですね」

一瞬寝ぼけていたかの様な反応をしたけど……もしかして雅さん、歩きながら寝てた？ そんな事あり得ないと普通は思うけど、相手が雅さんとなると……若干、あり得るかもしれないと思ってしまう。

「うむ、そうだ。となると……重役の私室はこの隣か反対側か」

「そうなんですかね……？」

「そうだったよ」

どうやら後ろに続いていった女性達の思考を読んだらしく、雅さんは大方の位置を予測してその先を見ている。その間に、玖城さんは心の準備を与える暇もなく音楽室の扉をノックしていた。

「玖城です、重要なお話が——」

言い切る前に扉が開かれる。そこには威厳のある顔をした老人がいて、腰には見覚えのあるリボルバーを差していた。

「入れ。武器はこやつらに預けろ、念の為ボディチェックも受けて貰う」

「は、はい……」

反論の隙もなく、すぐに奥から黒い腕章をした2人の男が出てきて僕達の前に立つ。雅さんの方を見ると、溜息を吐きながら全身からあらゆる武器を外していた。その量には相手もかなり驚いていて、次から次へと出てくるナイフや銃弾にドン引きしている。

僕も持つている武器を全て出してボディチェックを受けると、ようやく二人揃って部屋へと入る事が出来た。

「貴方方が今回の襲撃者さんですか、まだお若く見えますね……？ おいくつですか？」
入るや否や、すぐに声が掛けられる。紳士風の口調、穏やかな声。その在処の方を見ると、この避難所の長だという事がはつきりとわかる……雅さんと似たようなコートに、黒に白いXの印が付いた腕章。惚気話にも出てきたようにいたって普通の……むしろ好青年と思えるような風貌の男が立っていた。

「私は此処の所長を務めております『菊月』と申します。貴方方のお名前は？」

「私は宵、隣は神崎樹。本日は『お話』をする為に参った所存にございます……」

物怖じする様子もなく、雅さんはさらっと偽名を名乗ってしまう。ここまで真つ向に嘘を吐けば誰だつて疑わない。

「そうですか——では宵さん、樹さん。お疲れでしょう、まずは一杯いかがでしょう？
と言つてもインスタントですが」

壁際にある棚を指さす先にはよく見るインスタントコーヒーの瓶。しかし、雅さんは静かに首を振つて拒否する。何か薬でも入れられたら防げない、そういう考えなのかもしれない。

「おや、残念です。では早速『お話』と参りましょう。坂上以外は別室へ、これから大事

な話をしますので」

「菊月、大事な話というのなら一人抜けているのではないか？」

「いえ、どこにも抜けはありませんよ。坂上は寡黙で無駄口は叩きませんから。……あなたがいると少々こじれてしまいますので」

「菊月……」

「過ぎた事はもう巻き戻せません、ですから私は未来先の話をしたいのです。振り返る事しかできない方はこの場に相応しくない……そう言ってるんですが」

少しだけ語尾が荒げると、老人は咄嗟に反抗を止めてしまう。悔しそうな顔をしながらも、他の人間を連れて部屋を出て行った。

「……さあ、これで人払いは済みました。どうぞお掛け下さい、コーヒーがお気に召さないのであれば缶ジュースでもいかがでしょうか？」

「申し訳ありませんが遠慮しておきます」

「ははは、警戒心の高い方だ。それもそうですね、きつとペットボトルなら飲んでくださつたでしょう。コーヒーも缶も、毒を仕込むのは容易い事ですから」

親し気な空気を醸し出したまま席に着くと、僕達も続いて用意された席に座る。そして菊月さんがしばらく目を閉じた後……この場の雰囲気が一変する。雅さんが出す殺気にも似た何かを纏った菊月さんは、さつきよりも細目で改めて僕達を観察した。

會議に使うような簡素な長机に阻まれてはいるものの、距離はそう遠くない。その所為か、目の前でじつと僕達を見据える2人からはいかにもな威厳が溢れ出ていた。

「宵、と言ったか」

菊月さんが『宵』と名乗った雅さんを遠い目で見つめて、しかしつまらなさそうに呟く。

「……そうだが」

先程まではこの2人以外にも近衛の階級を持つ3人と玖城さん、そしてしわくちやの顔をした老人がいた。そこでは雅さんも敬語を使い礼儀正しくしていたのに、いざこうなると旧友を前にしたかのように敬意は消え失せている。それと同時に、菊月と名乗った男も先程までの真面目な態度はどこかへと行ってしまっていた。

「よくもまあ、俺の庭を荒らしてくれた。折角居心地よく造り替えたと言うのに……」

「やっぱりそつちが本性か？ 玖城と言ったか……あいつに案内される道中はさぞ寛大で英雄の様な人間だと思っていたが。俺には皮を被らないんだな」

「お前相手に猫被つてどうなる。というよりなあ……お前みたいな目をした奴はどんなに偽ろうと見透かされるんだよ、だから無意味な事はしない……無駄な努力だ」

「ははっ、いいじゃないか。俺も無駄と無意味、特に無価値が大嫌いなんだ」

「お、気が合うなあ？ 俺もだよ……」

2人して静かに笑いあう。それも数秒と立たない内にぴたりと止むと、お互いに敵を見る目が変わった。

「単刀直入に済ませる。神崎美波をこちらに引き渡せ」

「断る。ここまで人員が減った以上俺の目的にはかなり遠のいてしまった……どちらにせよ、1人でも多くの女がいなければ達成できない」

「目的つてのはなんだ。場合に寄つちや速攻お前の眼球抉り出して感染者の餌にしてやるからな」

「はっ！ 言うねえ……なら片目をくれてやるつもりで話そうか」

菊月は校長室から持ってきたような豪華な椅子に最大限背中を預けて目を細めた。

「俺が思うに、これから先状況は日に日に悪化していく。数少ない生存者は嫌でも他の生存者を集め、集団生活を営むしかなくなるだろう。数人のグループ単位ではない、数十人、やがて数百人にも膨れ上がる『コロニー』になる。ここまでは想像できるか？」

「ああ、容易い。民家や店を漁って得られる食料もいずれ無くなる。自給自足を確立できなければ生き残れない」

「そうだ。農業をするにも漁をするにも人材がいる。そうして必要な才能、技術を持った人間を集めていった結果集落のような形になる。だがな、生きていられればいいと言ふ訳ではない。俺達は『子』を残すべきだ、現代じゃ全く重要視されなくなつたが、生

物の根底には『種の繁栄』という本能がある。そうでなくとも、それだけ人間が集まれば自然とそうなるだろうよ……後世に有能な人材を残す為にも、『交配』させる必要がある。それが俺が革命を起こし今までの体制にした理由だ」

「ああわかった。要するに、お前の妹は交配させる為に使うから返せませんって事だな？」

「まあ早い話そうだな、そういう事だからお引き取り願おうか？」

「寝言は寝て言えよ下種が……その考えは間違っているとは言わない、だが相手が悪い。よりによって神崎樹の、しかもこの俺が同伴している時だ。返さないと言うのなら実行使で行かせて貰う。こちとらとつくにキレてんだ」

殺気を放ちながら立ち上がる雅さんに対し、菊月は余裕の笑みで「まあまあ落ち着けよ」なんてあしらっている。言ってる事は胸糞悪いけど、度胸はある人だ。片腕で完全武装していた相手に全く動じないかと思えば、激昂直前の相手を前にしても笑っているなんて……

「ああ、そうだ。そういえば丁度こっちは男が不足してな……君達2人なら、喜んで迎えようじゃないか。あ、もしかしてもう意中の女がいるか？ いいぞいいぞ、うちは一夫多妻オーケーだ、今日からそうしよう」

「ああ……とりあえず黙ってくれないか。眼球どころか脳髓まで引き摺りだしたくなっ

てきた……」

「ちよいと野蛮というか血の気が多いのが玉に瑕だが、その身体能力の高さは評価できる。いつか他のコロニーと戦争になった時優秀な兵を造れるな。ん、当然だが相応のポストを用意するぞ、『幹部』専用の階級を新しく作ろう。坂上、デザインを考えてくれな
いか」

「菊月、煽るのもいい加減にしないか。本当に引き摺りだされるぞ……それとあいつ、結構狂ってる」

ようやく口を開いた坂上は菊月の度の過ぎた行いに釘を刺す。だけど忠告を受けたにも関わらずまだへらへらと笑っていて……雅さんを狂つてると言うのなら、あの人も相当狂ってるんじゃないだろうか？

「もう一度だけ言う、神崎美波を返せ。拒否すると言うのなら——」

「拒否したら、なんだって言うんだ。どっちみちお前はもう帰れない……此処に入ってきたと言う事は、そういう事だ」

菊月も同じく立ち上がり、右手を上げる——その手には以前ハマっていたゲームに出てきたテーザーガンが……え、テーザー!?

「イツキ！ 離れろ!!」

すぐさま半歩後退しちやぶ台返しのように机を持ち上げる気だっただと思う。そ

の暇すら与えられず、菊月の持つテーザーガンから照準用のレーザーが照射された。

——狙いは脚。冬場で厚着した時には効果が無い事もあるのを見越してか、比較的生地の薄いズボンを狙ったんだ。それもレッグポーチを着けてない右脚……左手しかない雅さんじゃ防げない死角だ。

机が完全に持ち上がる前に、バシユンと火薬の弾ける音がして雅さんの脚に電極が突き刺さる。その瞬間、バチバチと電流の流れる音が室内に響いた。

「雅さんっ!!」

激痛に悶えて床に倒れてしまう雅さんに、菊月は電流を流し続ける。一体どれだけの時間流せるんだろう？ 構造上内蔵されたバッテリー分しか電流は流せない。それでも、かなりの時間バチバチと電気の通う音が聞こえて、電極からは青白い火花が見えている。

「樹君、降参した方がいいと思うんだけど——どうかな？ そうじゃないと君を守る騎士さんが死んじゃうよ?」

「テーザーで人は——」

「さあ、どうだか……電流を流し続ければ、あるいは首に電極を刺せばどうだろうか？ そうでなくとも俺が直接首を折ってもいい。判断は君に任せる」

バッテリーが切れたらしく、テーザーガンは大人しくなる。すると菊月がポケットか

ら予備のソケットを取り出し、使い切った物と交換して装填が完了してしまった。

「イツキ……………！ 馬鹿な真似は止せつ……………今すぐ隣の部屋まで銃を——がっ！」
「変な入れ知恵をしないでくれ」

もう一度ほぼ同じ場所に受けた雅さんは再び電流を流され、悶絶する。

「降参するか？ 少なくとも命は保証しよう、この男も一緒にな」

「……………は、い。降参、します」

「イツキい……………!!」

「もう見たくないんです!! 雅さんが苦しむ姿なんて……………それも僕の所為で！ それなら僕は……………大人しく降伏した方が皆の為なんです……………」

やっぱり、間違いだつたんだ。僕が相談した事も、美波をこいつらに引き渡したのも、変に力を持ってしまったのも……………何もかも、間違いだつた。

「正直だな、見込みありだ。この男はともかく君のポストは保証しよう……………喜べ、必ず幹部にしてやる」

「条件があります……………雅さんは自由に——」

「それは無理だ。こいつは底が知れない。本性がどういったものなのか、不明点が多すぎる。となれば、中で放し飼いにするのは当然として外に返す訳にもいかない」

僕は間違えた、失敗したんだ。僕が頼った所為で、雅さんを不幸にしてしまった。雅

さんが戻らなければ美紀さん達が……胡桃さんが……悠里さんが……皆悲しむのに。

「……駄目です。雅さんが自由にならないのなら、僕は舌を噛み切つても死にます」

「そうか、なら自由にしてくれ。そうなった場合この男も価値がなくなるからな」

もうどうする事もできないじゃないか。僕は………なんで今こうしているんだろう。なんでこんな場所に、雅さんを連れて………こんな場所に来てしまったんだ。

目の前が真っ暗になってしまふ。見る見るうちに視界の隅から影が迫つて来て、身体から力が勝手に抜けていく。

「僕は……」

もうどうする事も出来ない。僕の方じゃ………もう何もできないんだ。なら雅さんは？ あの人がいればなんとかなる、あの人さえ存在していればなんとかなつてしまふ。そういう風に思つていた。

でも実際は………雅さんもやつぱり人間で。とてつもなく強い人だと最初は思つていただけ、あの人達が教えてくれたのに……

一番弱いのは雅さんで、同時に一番強いのも雅さんで。その弱さを補う為に誰かが見ていなきやいけないんだつて、教えてくれた。なのに僕は見てあげられただろうか？

違う、僕がしてきたのは――

ただ、縋つていただけだったんだ。

雅達が出て行つて3時間。今だに戻つてこない2人に、悠里達は交代で仮眠を取りながら待つていた。

「……遅いな」

「ええ……」

必ず戻つてくる。それだけ告げて出て行つてしまった雅をもつと強く引き留めていれば——後悔だけが募るが、仮に引き留めたとしたらイツキの妹は戻つてこない。どちらとも捨てられない選択肢に彼女達は迷つていた。その結果、雅の強引な意見に振り切られてしまったのだ。

最初2時間ずつ眠るといふ決まりをしたものの、悠里と胡桃は既に1時間経つても残る2人を起こさない。この状況下で眠つていられる訳もなく、それなら2人をこのまま寝かせてあげようと言う善意と言う事にしておきながらひたすら祈る。

どうか、無事に帰つて来て欲しい。今すぐにでも扉が開いて、待たせたなとイツキの妹を背負つた雅が笑顔を見せてくれればいいのにと。

「やっぱり、あたしも行つてくる」

「……駄目よ」

悠里は一瞬だけ迷つた。胡桃が行けばどうにかなるかもしれない。でもそうして胡

桃すら戻ってこなかったら……これ以上誰かが欠ければ、学園生活部は終わってしまう。もし2人がこのまま帰ってこなかったとしても、また前と同じのまま。最悪その状態を維持しなければならない。

「でも帰りが遅過ぎるよ……もしかしたら、捕まってるかもしれない」

「あの2人が太刀打ちできない相手には胡桃が敵うの？ よく考えて、雅さんの事だからじつと機会を伺ってるのかもしれないわ」

「あの時の雅がそんな悠長な事はしれないと思う。リーさんこそよく考えろって……雅とイツキが、よりによってあの2人が、苦戦したとしてもここまで粘るのか？ 太刀打ちできないとわかったらすぐ戻って——」

「それこそあの雅さんなら戻ってなんかこないわ。例え可能性が低くても、あの人は絶対にやり遂げようとするもの……今までもそうだったでしょ？」

悠里と胡桃の問答はこうしてずっと平行線のままだった。助けに行こうにも、自分達には限られた武器しかない。その武器を使う強さも大の大人には到底抗えもしない。

もしも雅とイツキが死んでいたら。そう考えるだけで、言い様のない恐怖に打ち負かされそうになる。

「——あたし、行く」

「駄目よ胡桃……！ 私達には何もできない！ 何ができるっていうのよ……」

「何もできなくともここで待つてるだけなんていやだ。ムリだつて思つたらすぐに逃げるから」

「駄目……あなたまでいなくなつたら、私どうすればいいの……?」

「じゃああの2人がいなくなつてもどうにかなるのかよ。あたし達と2人あつてこそそのうちらだろ? リーさんだつて……雅がいなくなれば……」

「やめてっ!!」

悠里の大声に、眠つていた2人が飛び起きる。慌てて悠里達の方へと駆け付けると、そこには両手で顔を覆つた悠里と、バツが悪そうにそっぽを向く胡桃がいた。

「どうしたの?」

「ううん、なんでもないわ。起こしちゃつてごめんなさいね」

「大丈夫だよ、私もあんまり眠れなかつたし……」

由紀が悠里に寄り添う形で隣に座る。美紀もそれを倣い胡桃の隣に座るが、胡桃はその瞬間近くに立て掛けてあつたシャベルを手に扉に手を掛ける。

「……ごめん、リーさん。あたしも行くよ。放つておけないからさ」

「胡桃……」

最早止める気力もない悠里は、一抹の望みに賭けて胡桃を見上げる。だが、それが叶う事はなかつた。

「さて、いくつか質問させて貰ってもいいだろうか？ いや、質問する。お前達に仲間はないか？ 所有する物資、人数、性別年齢役割……そして関係を教えてほしい」

菊月は僕達を椅子に縛り付け、雅さんが使っていた古めかしい拳銃を手に尋問する。ただで雅さんはその質問に対して口を開かず、かと言って目にも顔にも感情を一切出していなかった。

先程と同じ音楽室で、菊月と坂上、そして席を外された老人のみがいる。その誰もがどこかに武器を持ち、そのいくつかは僕達が持っていた武器だった。

「……まあ最初だからな。だがいつまでもそうしていられると思うな？ 全て答えない限りこれは終わらない。それまで君達は、特に君は嫌な思いをする事になる」

雅さんに近付くと、銃口で頬や首筋を撫でていく。それすらも気にしていない様子を保つ雅さんの心は……僕には見えないだけで今、すごく怖がっているんだだろうか？

「脚を撃ち抜くか？ それとも残りの腕を切り刻んでみようか？ 爪を剥がすのもいいかもしれない。もつとも、うちにはそんな設備も器具もない、全て人力だ。失敗してしまふ可能性もある」

「……だからなんだって言うんだ。脚を撃ち抜けば失血死、腕を切り刻んだとしても俺にとつて大したものではない。爪なんか、腕一本分減ってるんだ」

「そうかそうか、ならもつと古典的にやろう」

菊月が持つていた銃を懐にしまうと、空いた手で拳を作り雅さんの頬を殴りつける。椅子ごと倒れそうになった所を髪を掴んで引き戻すと、満面の笑みで雅さんの顔を見た。

「どうだい？ これでも昔空手をやっててね」

「はっ、鈍ってるな。一度黒帯の突きを受けてみると良い……死ぬほど痛い。それに比べればこの程度、100発でも受けてやる」

何故わざわざ挑発するような事を言うのか、僕には理解できなかった。菊月は無抵抗の雅さんの顔や体を次々と殴る。それでも、雅さんはその度に笑っている。

「くそっ！ なんでっ！ 笑うんだっ！！ 何がおかしい！！ そんなに俺を嘲笑って……何が楽しいんだ！！」

語気を荒げながら、菊月は力の限り殴る。なのに無表情どころか嘲笑の表情を見せる雅さんに腹を立て、全力で殴り続けている所為か息も切れ始めている。

「……まるで子供だ、本来の目的も忘れたか。お前拷問の腕は全くないな。出来る事なら代わってやりたいよ」

「痛い思いをするのは嫌だろう!! 何故笑う!! 何故笑っていられるんだ!!」

「慣れてるんでな。で、お前は何が聞きたかったんだっけ？ 殴られたから忘れちまっ

たよ」

「菊月、少し落ち着け。俺が代わろう」

坂上が菊月の肩に手を置き、後ろに下がらせる。初めて至近距離で見た坂上の顔は、右の頬に火傷の痕があつた。

「宵。まず初めに君達はいつても何人で行動している」

「……相手が変わったら喋るとでも？」

「普通は喋らないな。だが、君は自分自身が痛めつけられる事に関しては採算に含んでいない。——なら、これはどうだ」

無表情のまま懐から飛び出しナイフを取り出すと、僕の方に向けて一瞬で刃を展開させる。その刃先は今までに何度も使われてきたのか、所々欠けており先端に行くほど淡い朱に染まっている。

「君達の仲間は何人いる。性別、年齢、それぞれの役割。嘘を言ったとしても俺には確かめる手段はない、が……もし嘘だと分かった瞬間、君の一番大切な物を壊そう」

「俺の一番大切な物？ 全く心当たりがないな」

「いいのか？ なら今すぐにも君の雇い主を殺すが」

刃を僕の首に近付けた時。雅さんは微かに表情を強張らせる。普通じゃ見抜けない微細な変化すらも坂上は見抜いたのか、一旦僕の首元から刃を外してくるくとナイフ

を回し始める。

「……俺達は、俺の他に5人いる」

「5人、中々の大所帯だ。それぞれ性別は」

「俺とイツキ以外は全員女だ」

「……ほう、年齢と役割を教えて貰おう」

素直に話し始めた雅さんに対し、菊月は悔しそうに顔を背ける。僕が人質に取られるこの状況で仕方ないとは言え……というより、そもそもこうなったのも僕が原因だ。

雅さんがこうして情報を吐いてしまうのも、無力な僕が悪い。ならいつそ死んでしまえば——そう思っても、それを実行できる度量は僕にはなかった。

「まだ未成年だ……高校を卒業したばかりで……俺とイツキと1人は戦闘を担当している。残りはごく一般的な家事雑用しかさせていない」

「なるほど、では『関係』についてはどうだ」

「……関係？」

「お前達の他に4人の女がいる。誰か特定の女と交際しているか、それとも半分ずつ分け合っているのか」

「断じてそんな不埒な関係にはなっていない……！俺はただあいつらを護ればそれでいい、それだけの為にこうして生きてるんだ」

固い意思を持って言い放った一言は、奥に居る老人を感心させる。雅さんの決意は前々から少しづつ見え始めてはいたけど、こうして直に聞くと本気なんだとわかってしまふ。

でも僕にはその意図がわからない。誰かを守りたいと考える事はわかる。でも何で守りたいのか？ そこまでして、頑なとも言える程に突き詰めていく彼は、僕から見れば異常でしかない。

誰かを守るという意思と、有言実行の姿勢はとても尊敬できる。でも一体何の為に……？　せめて好きな人がいるとかであれば納得できるのに、彼は何も求めなようとなない。

「報酬は貰っているのか」

「報酬？　そんなものは必要ない。俺はただ、誰かを護ればそれで十分だ」

「……変わっているな、君は。なら今回も『守る』為に大勢殺してきた、という事か」

「そうだ。イツキの妹が捕らわれている以上見過ごす事は出来ない。俺には関係ないと目を背ければ……いや、『妹』という存在だけで理由には十分だ」

大方聞き終わつたんだらう。坂上は菊月の方へと振り返り、これからの判断を仰ぐ。

「牢に入れておけ」

「……わかった。それと菊月、俺は個人的にこいつらに聞いておきたい事がある。追加

で尋問してもいいか」

「勝手にしろ。だがくれぐれも油断するなよ、特にそつちのヤバい方は何をしてくるかわからない。下手をすれば……喉を食い千切られるぞ」

「わかった」

坂上は持つていたナイフで椅子の脚と僕の足を繋ぎとめていた結束バンドを切り、自由にさせる。次に手も解放してくれるが、構えた刃先は今にも僕の喉を切り裂ける体勢だ。まだ拘束されたままの雅さんと目を合わせても、攻撃しろなんて目もしていなければ合図も出さない。ここは大人しくしておいた方が良いつて事なんだ。

「一時的に自由にはさせるが……抵抗してくれるな。君の友人が死ぬ事になる」
「……………いいだろう。今の所は従っておこう」

2人は意味深に目を合わせた後、坂上が雅さんの拘束を解く。やっと自由になった雅さんは縛られていた左腕を軽く解しながら、僕の隣までやってくる。

「一応これを渡しておく。少しでも怪しい動きを見せたら撃ち殺せ」

「……………わかった」

坂上は菊月から自動拳銃を手渡されると、それを僕達に向けて移動を促す。それに従いながら、僕達は部屋を出た。

「んで、なんだよ追加の尋問ってのは」

「それは部屋に着いてから話す」

「……あつそう」

雅さん、かなり機嫌が悪いな……無理もないけど、ここまで露骨に感情を出す姿は初めて見る。時折溜息を吐きながらも雅さんは坂上の言う通りに進み、牢に着くまで一切反撃の素振りは見せなかった。

「……すまなかつた」

薄暗い牢に着くや否や、坂上が頭を下げる。その姿に僕は驚き、雅さんはなんのこつちやと首を傾げた。

「神崎美波。彼女を護れなかつたのは俺の不手際だ。革命直後とは言え……むしろ直後だった所為で余裕が無く目が届かなかつた。許してくれ」

「どういう、事でするか？」

「君の妹がここに来た数日後、菊月は此処の支配者を殺した。男尊女卑の体制に納得がいかないという名目もあつたが、実際には先程聞いた通りあいつの野望の為だ。そこから菊月や革命後の体制に賛同する人間を選び分けたが、完全には選別できなかつた」

「じゃあ、やつぱり……僕達が殺してきたのは——」

「少なくとも悪人ではなかつた。だが君達が全て悪いとは言わない、元を辿れば……俺

がもつと上手くやれていればあいつらも死なずに済んだかもしれない……だとしても」

一旦言葉を区切り、坂上は僕達を見据えた。

「俺は君達を許さない。特に仲間達を無残に殺し、平気な顔をしている——お前は」

「……知らんな、他人の事情なんて」

「雅さん、それは……」

「顔も知らない奴らが死んだ。俺には全く関係がない」

「そうだろうな。仮に俺がお前の立場だとしたら……同じ事を考える。思ったより似ているようだ」

2人は無表情のまま視線を合わせる。どちらもどこを見ているかわからない、感情も理性も感じさせない雰囲気を持っていて……確かに2人は似ている。声こそ違えど、言う事も瓜二つだ。

「俺としては即刻お前の眉間に風穴を空けたい所だが、そうしてはお友達が悲しむからな。今回は見逃す。……神崎美波は2階の理科準備室だ。お前達の荷物も校舎の裏に置いておく、確保したらすぐに逃げろ」

「……意外な展開だな」

「元は俺が招いた事だ。あの子は菊月のお気に入りだから……今は俺が匿えているが、いずれ限界が来る。その前に逃がせるチャンスが来たのなら、これを逃すには惜し

い」

「そうか」

坂上はナイフを抜くと、部屋の最奥……小さな採光窓がある壁際まで行き床に傷をつける。

「月明かりが此処に達した頃には2時だ。襲撃もあつたから恐らく数名以外は眠るだろう」

「……その時に出来ばいいんだな」

「そうだ。その前に鍵を開けておく、それまでにしばらく眠ると良い——ああ、そうだ」

無音で出口まで歩いて行った坂上がふと振り返る。その目は、何か奇妙な感情を含んでいるようにも……先程と変わらず虚構にも見える。

「……『眼』には気を付けろよ」

「眼……お前、どういう」

「……忘れてくれ、少し怖がらせたかっただけだ。——飲まれるなよ」

意味深な言葉を発してすぐに、坂上は出て行ってしまった。その間に、雅さんは小さく「クソが」と呟いて悪態をつく。

眼とは、どういう意味なんだろう？　ただ単に眼球と言う意味だとしても、「飲まれ

「ある」という単語の関連性が見つかからない。でも雅さんは人の眼を見て思考を読む特技があるし……何かしら、僕には到底理解できない意味があるんだろう。

「しばらく様子見だな。……あいつら、帰りが遅いから突っ込んで来たりしないだろうか」

「く、胡桃さんならあり得るかも……」

「折角落ち着いたんだし掻き乱さないで欲しいものだが……そうはいかないか？」

「ど、どうでしょう？」

1分にも満たない雑談が終わり、雅さんは壁に寄り掛かって眼を閉じた。何かを考えているのかと思えば、しばらくするとこっくりこっくりと舟を漕ぎ始める。

「……イツキも寝ておけ」

「あ、はい……雅さんはまさか立ったまま……？」

「いや、俺は眠らない。少しくらい居眠りはするかもしれないが、完全に眠ってしまえば……恐らく俺は——まあいい、まだ大丈夫だ。寝てろ。上着貸してやるから」

「え、でも……僕だけ寝ちやうのもちよつと……」

「1人だけでも万全に近い状態にしておく必要がある。俺は眠れない、だとしたらお前だ。ちなみに俺は寒くないから安心しろ、この環境にも慣れてきたのかわかんが……あまり寒くないんだ」

「わ、わかりました……では有り難く使わせて頂きます」

一先ずお礼を言つて、投げられた上着に包まつて壁にもたれる。羽織つた瞬間冷たい感触がしてぞわつとしたけど、それだけ雅さんの体も冷えているのかもしれない。

……でも本当に寒くなさそうだし、大丈夫なのかな？ 雅さんの事だから痩せ我慢とかはしないだろうけど……もし風邪をひかせてしまつたら、僕が精一杯看病しよう。

そんな事を考えているあいだにも、いつの間にか睡魔はそこまできていた。身を任せようと思う前に容易く飲み込まれ、いつの間にか……深い眠りへと落ちていく。

その頃胡桃は——地獄を見ていた。

20. 撤退

「なに、これ——」

胡桃は目の前に広がる亡骸達を見て、戦慄と共に吐き気に催されていた。しかし吐く事はできず、口に手を当てては必死に耐えている。外も酷かったが、中は一層の地獄と化している。雅達を通った後がすぐにわかってしまう……その痕跡を辿りながら、度々立ち止まっては吐き気に耐えていた。

「イツキも……一緒だったんだよな」

イツキなら止めるだろう。胡桃は内心そう思っていた。だが現実には悲惨だ。死体のいくつかは大きな風穴が空き、中には女までもが額を貫かれている。後頭部からは見えはいけない物までみ出していたり、イツキですら雅と同じ様に一切の躊躇がなかったとわかってしまう。

それもそうだ。実の妹を犯され、何ヶ月かぶりにようやく奪還できる。そんな時に戦えないなんて言えない。仮に全て雅に任せられるとしても、それはイツキ自身が許せない事だ。

なら、イツキは仕方なくやったのか？　そうでもないのかもしれない、むしろ喜々と

して——復讐できると息巻いていたかもしれない。そこまで妄想が飛躍しそうになつた所で、胡桃は思考を放棄していた。

今は2人を探さなきゃいけない。人気のない校舎の中を、胡桃は血の匂いを頼りに奥へと進む。だが、その匂いと惨状は途中で途切れてしまった。

「……まさか？」

2人はここで力尽きた？ その場には大勢の男達が倒れている。なのに、死体がある場所以外に血痕はない。それなら捕まつたと考える方が正しい。だとしたらここは危険だ。胡桃は今、未だに制圧できていない敵地の真つただ中にいる事になる。

「あなた、誰？」

「!？」

背後からいきなり話し掛けられ、胡桃は慌てて振り返る。その様子に声をかけた方も驚き、お互いに1歩後ずさつて訝し気な視線を向けた。

「……お前こそ、誰だ。名前は？」

胡桃はシャベルを構えつつ、目の前に居る黒髪の少女に尋ねる。

「私は、美波」

「美波……！もしかして神崎美波か？ 兄がいて、兄の名前は樹か!？」

「うん。そうだけど……お兄ちゃんを知ってるの？」

まさかこんな所でイツキの妹に会えるとは。思わぬ収穫だと喜ぶ胡桃は、構えていたシャベルを下ろして少女に近付く。だが、警戒しているのか1歩踏み出すごとに2歩ずつ下がっていく。このままだといつか走って逃げられてしまうかもしれない。

「あたしは恵比寿沢胡桃。イツキと一緒にお前を助けに来たんだ」

「助けに……？ お兄ちゃんはどこにいるの？」

「……わからない。最初はイツキともう1人あたし達の副隊長みたいなヤツと行ったんだけど、もう長らく戻ってない。何か物騒な声とか音とか、聞こえなかったか？」

「いっぱい聞こえた。お兄ちゃんがよくやってたゲームの……そう、銃声みたいな音。それと他の人が『片腕の悪魔』が来たって」

「その片腕つてのがうちの副隊長だな。それにしても悪魔か……らしいっちゃらしい呼び方だけど、うーん……どちらかと言うと、鬼？ あ、その2人が今どこにいるかわかるか？」

少女は黙って首を振る。どうやら戦闘があったという事以外何も知らないらしい。樹が来ている事も今知ったとなると、あの2人は案外上手く逃げているのかもしれない。

「まあいいさ。とりあえず2人は後で探すとして、美波……あ、名前で呼んでいいかな？」

少女は黙って頷く。あまり喋らない方なんだろうか？ 表情もあまり変わらないし、なんだかアイツを相手にしてるみたいだと胡桃は感じた。

「じゃあ美波、あたしと逃げよう。あたし達の車まで行つて、後は2人を回収してどこか遠くに行こう。もうこんな所で辛い思いはさせない」

「行かない」

「え？」

「私はここにいます。確かに嫌な事もされたけど、今は坂上さんが守ってくれてる。だから行かない」

「その……坂上つてのは、誰だ？ 女か？」

「坂上さんはこの副隊長みたいな人。無口であまり笑わないけど、私を守るつて約束してくれました。私が……唯一なんでもしてあげたいと思う、男の人」

副隊長のポジションで、無口で無表情で守ると約束してくれた男の人？ どこかにとつともなく共通点の多いヤツが居た気がする、というかまんま雅じゃねえか！

この感じだと何を言つても1人じゃここを出ないだろうし、坂上つていう雅モドキも一緒に連れ出すしかない。

「え、えーと……じゃあその坂上つて男も一緒に行くとしたら、来るか？」

「うん、でも来ないと思う。前『俺の居場所は此処にしかない』つて言つてた。だから、

私はここに残る。お兄ちゃんに会ったらそう伝えてほしい」

「そ、そうなのか……いやいや！ このリーダーとか体制は本気でヤバいつて聞いているけど、そこん所は……どうなの？」

「もう前みたいに乱暴な人は殆どいない。それに、皆死んじやったから」

胡桃の背後に大勢横たわる死体に美波は微かに目を細める。その様子を見るに、大して大切だとは思わない相手達なのだろう。それでもここまで無残な死体を見て取り乱さないという精神には素直に感心していた。

「でもここまで減ったら、きつと菊月さんが本気を出す。きつと、私も……」

「菊月……？ 菊月つてのが、何をするんだよ」

「人を増やす。時間は掛かるけど、残った男の人を集めて私達と……」

「……まさか、無理矢理やるってんじゃないだろうな？」

「……」

無言のまま俯く少女を見て、胡桃は強い憤りを感じた。その菊月とかいう男と、坂上という男。美波を守ると約束した後者はともかく、菊月はかなりの曲者だ。出来るのなら今すぐ残ってるリーダーをぶちのめしてやりたい所ではあるけれど、あの2人がいない今勝率は低い。

そもそもその2人ですら、菊月と言う男に敗北した可能性だつてあるんだ。だとすれ

ば、あたし1人で勝てる可能性なんか絶対がない。

「あなた、逃げた方が良いよ。菊月に見つかったらきつと——」

「いや、逃げない」

下ろしていたシャベルを再び両手で握ると、胡桃は無理矢理闘志を燃え上がらせる。

「まず2人を見つける。そうすればこっちは3人、戦力は十分だ」

「3人じゃ勝てないよ。ここにはまだ生きてる人が10人はいるもの」

「大丈夫！ 『片腕の悪魔』は5人分、イツキは3人分の戦力がある！」

「……じゃああなたは？」

「ダークホースだからな……状況によっちゃ100人以上の戦力になるぞ？ それに

『悪魔』もダークホースだ」

「ダークホースが多いのね。『悪魔』さんは名前通り強いみたいだけど」

「そうさ、だから……一旦あたし達の所に避難してくれればいいんだけど」

美波はしばらく考えて、顔を上げる。

「必ず坂上さんを、連れてきてくれる？」

「……おう、必ず連れて行く。ちよつと半殺しになるかもしれないけどなっ」

胡桃は右手を指切りするように小指を立てて突き出す。すると、美波はゆっくりと

……自身の小指を絡めた。

「坂上さんは強いよ。あの人の剣は……きつとなんでもまっぴたつになっちゃうんだから」

「剣を使うのか……ま、まあとりあえず一旦戻ろう。流石にあたしも美波を連れただまじや戦えないからさ」

「……うん」

絡めたままの右手で、そのまま手全体を握る。そしてそのまま、静かに、それでも可能な限り早く歩き始めた。

坂上が去ってからかなりの時間が経った。時折窓から差し込む光を見ては、指定された時間が来るのを今か今かと待ち侘びている。

「……イツキ、そろそろ起きた方が良くない。イツキ?」

冷え切ってまともに動かなくなってしまった体を起こし、最早感覚のない手でイツキの肩を揺する。

「は、はい!? 時間ですか!?! あ、コートありがとうごさいました」

イツキはすぐに飛び起きると、すぐさま着ていたコートを脱ぎ、俺に手渡してくる。

「ああ。まだ時間じゃないが、寝起き早々に激しい動きをするのもキツイだろうと思つてな。寝ぼけてボーっとされるのも困る」

「なるほど、そういう事なら……雅さんは大丈夫ですか？」

「問題ない……と言いたい所だが、流石に冷えたらしい。悪いが体が温まるまで戦力にはならないだろうよ」

「え……そんなに？」

イツキが恐る恐る俺の手を取ると、びくつと体を震わせた。そこまで冷たかったんだろうか？ 体感ではそこまで寒いとは感じられないが……冷えすぎて感覚が麻痺でもしたかもしれない。

「だ、大丈夫なんですかこれ？ まるで死人みたいになってますけど……」

「死人……か」

「いえそういう意味じゃないですよ？ あくまで物の例えで……すみません、僕の為にコートを貸したから……ですよね」

「それもあるだろうが、何分俺は元から体温が低いんだ。冷え性なのも相まって手先は特に、な」

辛うじて手を握るが、感覚は愚かまともに手を握る握力もなかった。正直、自分でも驚いている。今までもまともに暖を取れない場所で夜を過ごす事はあった。コートを手に入れる前も、多少動き辛くとも動けたんだ。

それなのに、何故だか上手く動いてくれない。まるで身体の節々が石になったかのよ

うに、まるで……俺はもう、まともな人間ではないんじゃないかと思えてしまう。

「あ、そういうえば時間まであとどれくらいなんでしょうかね？」

「さあ、そんな長くはない。今まで大した騒ぎにもなっていない所を見ると、胡桃達も大人しく待つてくれているらしいな」

「だといいですけど……」

「先にお前の妹の方に行く。次に荷物だ。位置は2階の理科準備室……それなら、窓から飛び降りてそのまま逃げられる」

「いやあ……皆雅さんみたいに身体能力高いと思わないでくださいよ……少なくとも僕は無理ですよ？」

「ええ……？」

思わず「マジかよ？」なんて顔をしてしまった。それに対し、イツキは「いや無理ですから」と念押ししてくる。確かにハードルは高いとは思う、だが出来ない事はないだろう？

5 m程度なら受け身を取ればなんとかなる物だ。人間とは思いの外柔軟で、20 mの高さから落ちてでも擦り傷で済んだりする。その分1 c mの段差に躓いて死んだり、最悪何の段差もない場所で転んで死ぬヤツもいるが。

どちらにせよ、この状況をここまで生き残っている連中なら2階や3階から墮ちても

死にはしないだろう。

「……消火栓のホース使えば出来るよな？」

「ま、まあロープ代わりになるものがあればなんとか……なるんですかね？」

「ならなくても蹴落とすからな。迂回する余裕はない、いつまでも幸運は続かないもんだ」

「お、お手柔らかにお願いします……」

束の間の談笑で和んでいる中、どこかから足音が聞こえてくる。その音に2人して耳を澄ませ、無意識に扉がある壁に張り付いていた。

足音は俺達が居る部屋の前で止まると、微かに3回ノックされる。そして、ゆっくりと鍵の開く音がした。

「……時間は？」

「ぴつたり……です」

イツキは床に付けられた傷を見て、気味悪そうに呟く。そして、足音が再び聞こえるのと、どこかへと遠ざかっていった。

「坂上か。とりあえず俺が開ける、考えたくはないが……畏だったら即死だな」

ドアノブに手を掛けて、ゆっくりと回す。外の気配に集中するが、鉄の扉は殆どの感覚を遮断してしまう。今は己の勘だけが頼りだ。

過去の教訓に習い、俺は扉の横で内開き式の扉を開け放った。そしてノブよりも低い位置から半ば滑り出す様に廊下へと出る。

そして、俺は見た。恐らくこの状況で、一番見たくなかった……一番防ぎたかった光景を。

「……………！ クツが……………菊月イツ!!」

目前にあるいくつもの銃口よりも、彼女達の方へと気が向いてしまう。そして、何故こんな事になっているのか。その説明をすぐ近くに居た男に求めようとする。

「吠えるなよ喧しい……………俺は坂上の上司だぞ？ わからない事なんてない。隠し事があるところについては目を合わせなくなるんだ。まあ元から人の目なんて見ないけど、まあ感覚ってヤツだな」

「どうやって……………」

「ごめん、雅。あたしの……………所為だ」

「……………胡桃」

両手を拘束された胡桃が、項垂れたまま詫びてくる。そうか、静かだから大丈夫だと思つたら、コトは最悪の方向に行つてたのか。それならまだ騒がしくなつた方がマシだった。

「あたしが、一人で来たんだ。そしたら美波を見つけて……………連れて帰ろうとした」

「何故だ、待ってると言った筈だ！ 何故かわかるだろ!? こうなるからだ！ こうなったが最後、対抗手段が無くなるからだ!! わかってただろ……だから、待っている」と――」

「じゃあいつまで待てばよかつたのよっ!?」

感情に身を任せた叫びに、悠里が顔を伏せたまま応える。

「あなたはいつもそうだった……ここにいろ、全部俺に任せろ、全部一人でやろうとして……私達は何も頼りにされなくて……」

「違う！ 俺がそうするのは、お前達を危険な目に遭わせたくないからだ！」

「じゃあ何で私達と一緒に居るの!? どうせ私達を置いていくのなら、一人でいいじゃない！ わざわざ重荷を背負い込む必要なんてないでしょ!」

「違う……違うっ！ 俺はお前達を重荷だと思つた事はない！ いや、違う……いけなのか……? 自分が大切だと判断した人間を身を挺してでも護るのは、お前達にとつて重荷だったのか？」

何故、俺は今こんな気持ちになっているんだろう。今までの行いが間違いだった？

所々に綻びはあろうとも、全てが間違つていたとは思わない。だけどそれは自分が思い込んでいただけで……自分のエゴを、押し付けていただけだったのか？

「……そうよ、私には重荷だった。無償で守ってくれるなんて、最初は信じてなかった。

でも……本当にずっと、何の見返りもないのにずっといてくれるんだもの。何もしてあげられないから、余計に——」

それ以降を喋る前に、悠里は脇腹を銃口で小突かれる。……いや、違う？ 奥底で願っていた間違いだと言う思いは、俺の思い込みだ。そうに違いないと見切りを付けているのに、どこか諦めきれない。

あまりにも激昂していた所為か、俺は周辺確認を怠っていた事に気付く。今この場に居るのは恐らく此処の全戦力だ。武器も何もかもが男達や菊月と坂上が握っている。

……いや、そうでもない。俺達が持っていた自動拳銃と散弾銃がない？ 狙撃銃はこの場に合わないから阻害されるとしても、近接で最強威力である散弾銃と貴重な自動拳銃は鹵獲するのが普通だ。

それなのにないというのは、どうもおかしい。銃という強力なアドバンテージがあったとしても俺は諦めない、それは菊月本人が一度経験している。なら出来る限り火力を誇示しなければ、犬に噛まれてもおかしくはないんだ。

それに加え——奴ら、何人かは弾を装填していない。銃に覚えのない奴らなんだろう、よく見れば構えもなつてなかった。

「……もう、限界なの。あなたとはこれ以上一緒にいられない」

悠里は顔を伏せたまま涙を流し、別れの言葉を口にする。そこからは視線を合わせる

どころか、表情さえも伺えなかった。

「そうか……お前達も、そうなのか？」

胡桃や美紀、そして由紀に一人ずつアイコンタクトをしてみる。美紀は口を噛み締めたまま何も言わず、前髪で目は隠れている。胡桃も、微かに視線は逸らしているがその眼には悲壮な感情しか映っていない。

……なら、由紀は？

「うん……私も、ずっと……そう、思ってた」

涙声でそう言った由紀の目は、酷く真つ直ぐだった。まるであの時……俺に夜警の依頼をしてきた時の様に。

「……そうか、わかった」

微かに振り返ると、イツキが不安そうに俺達を見ている。それに対しイツキ以外に気付かれぬように、左手で人差し指と中指を交差させるハンドサインを出した。わかるかどうかはわからんが、賭けに出るしかない。

「終わったか？　　ったく長いんだよ……これでわかっただろ、お前はこいつらにとって『不要』だそうだ」

「……らしいな」

「ははっ、見事に心折れたって顔だな。じゃあちよつと面白い事してやろうか。坂上、銃

渡してやれ。精々悔やみながら楽に死なせてやろうじゃないか、勿論1発だけ入れておけよ」

「わかった」

坂上が持つていたサクラから弾を抜き、1発だけ込め直す。それを持つて俺へ近づいてくると、シリンダーを持つた状態で俺へと差し出した。

「……わかつてるな？」

「——勿論」

銃を受け取り、ハンマーを起こす。そしてその銃をこめかみへと持つて行く過程で、坂上の左胸へと突き付けた。

「全員動くな。誰かがびくりとでも動いてみる、こいつは死んで、ついでにその向こうに居るボスも死ぬぞ」

「お前……！ ハッターだ！ あの銃にそこまでの威力はない、撃ち殺せ！」

「いいのか、正直そこで吠えてる輩より俺の目の前に居る方がよっぽど有能だと思うが。それと、貫通しないと本当に思うか？ 俺はこの場の誰よりもこの銃については知ってるぞ……弾の抜ける位置も軌道も、全部だ。これが嘘だと思うか、菊月」

勿論ハッターだった。38口径じゃまともな威力は出ない、精々坂上を殺す程度だ。運が悪ければ抜ける可能性もあるが、そこから先は人を殺せる威力は保っていないだろ

う。余程の急所に当たらない限りは。

「こちとら日常的に銃撃つてんだよ、素人で勝てると思うなよ?」

低い声で、出来る限りの威嚇をする。それだけで何人かは怯んでくれたのか銃口が震え始めた。……これは、思いの外簡単に脱出できるな。

「……お前」

坂上が微かに声を発する。横目で見れば、吐息だけで本当に微かな声を発声し始めていた。

……お前は右をやれ。繰り返して言われてやつと聞き取れた文章に、俺は何のこつちやと首を捻りかける。

「時間だ」

坂上の言葉と同時に、ぱりんと廊下の窓が割れた。何かかと思えば、すぐさま赤い筒がいくつも投げ込まれる。

「なんだ……!?!」

その場にいるほぼ全員が突然の出来事に驚くが、唯一平常心を保つ男が居た。

「応援を頼んでおいた。ここには30本近くの発炎筒が投げ込まれる予定だ」

「多過ぎじゃないか?」

「なに、視界を塞ぐにはそれだけ必要だ」

坂上がポケットから新しい銃を取り出し、俺に差し出す。それは大分馴染んできたと思いはじめていたブローニングで、同時に替えのマガジンも2本、指の間に挟まれていた。「じ、準備がいいな……怖いぐらいだ」

「ふっ、そうだろう。全員伏せろ!! 人質はいい、何があろうと頭を上げるな!」

坂上が叫ぶ。その言葉に従ったのか、菊月以外の男達はすぐさま人質である悠里らも手放し、床に伏せる。ただ1人、菊月のみは今起こっている事に気付いているのか、気が動転しているのか……どちらでもいい事だが、立ったまま俺達2人に銃を向けていた。

「イツキ!」

「はいっ!」

イツキへと声を掛けると同時に、坂上から銃口を外して盾にしたまま菊月へと照準を定める。

「坂上! 謀ったなツ!」

「悠里達を連れて外へ行け! 俺は後で所定の場所で合流する!」

「了解っ!!」

頭を狙ったまま、躊躇わずに引き金を引く。その瞬間、坂上は腕を払って狙いを外させた。同時に悠里達も伏せていたのが幸いし、銃弾はガラスに蜘蛛の巣状のヒビを作っ

て外へと飛んで行つてしまふ。

「っ!? 何で——」

「悪いが、あいつは殺させない。曲がりなりに俺の上司であり、親友なんだ」

その間にも大量の発炎筒による煙で視界は悪くなっていく。その間に撤退を決め込んだのか、菊月は煙の中へと遁走していった。

「クソツ、折角の好機だったんだぞ!? お前も次はタダじゃ済まないってわかつてるだろ!」

「それでもだ。——俺は、あいつのおかげで誰かを護れる立場になれた。心配するな、あいつは逃がさない。せめて相討ちまでは持つて行く」

「駄目だツ!! げほっげほっ」

煙の中から、胡桃の声が聞こえてくる。

「美波はお前も一緒に行くつて条件でここから出る約束をしたんだ! お前が死んだら約束が——」

「……そうか、思いの外大切にされてるんだな。俺も」

「ならイツキ、こいつも纏めて連れて行け。菊月は俺が仕留める!」

後ろから飛び出してきたイツキが悠里達の拘束を解いている中、坂上を押し出して菊月を追おうとする。まだ動きは鈍いが、走るくらいはできる筈だ。本格的な肉弾戦にな

らなければ勝機はある。

「それは出来ないな——」

坂上に背を向けた瞬間、後頭部に衝撃が伝わった。何が起きたのか、それを理解したくともそれ以上の思考が来ず、すぐさま首に回された温かい感触が俺の呼吸を微かに阻む。

「さつきも言った通り、あいつは俺の親友とも言える相手だ。そいつを知り合ったばかりのお前に殺させるなど、許しはしない」

「雅さん!？」

「ふざ、けるなっ!! お前がいなきや、イツキの妹が……」

「……必ず戻る。だから待っている。車は校舎の前にある、追跡は容易だ」

もがけばもがく程、首に回された腕はきつく締まっていった。呼吸はできるのに、段々体の自由が利かなくなる。そこでやっと、首に通る血管を押さえられてる事に気が付いた。

「必ず戻るだなんて……信用できる……諷が」

「それをお前は今まで散々やってきたんだよ、だからもう少し、彼女達に気を使ってやれ。それが年長者から言える唯一の助言だ。行く側よりも待つ側の方が……辛いものなんだ」

ああ、クソ……なんで俺は、大事な所でいつもこうやって……倒れる結果になるんだ。最早声を発する余力すらなくなり、無意味に口を開け閉めするしかなくなってしまう。「……君は、話に聞いた通りの男だった。今度会ったら『忍』によりしく伝えておいてくれ……」

「ま、さか……?」

それきり、俺の身体は床に倒れ込んだ。目に映るのは、銃を持った男達を軒並み無力化していくイツキと胡桃の雄姿と、すぐさま駆け付けてくる悠里達。数秒して思考は正常に戻りつつあるが、長い間絞められていた所為か煙の影響か酸欠で思い通りに体は動かない。

「雅さん、掴まってください」

「イツキは警戒を……胡桃、悠里、すまないが肩を貸してくれ。車は校舎前にあると言っていた、とりあえずそこまで行く」

「了解!」

「おう!」

情けない姿を晒しながら、俺達は真つ直ぐ正面玄関へと向かう。ふらつく足取りでもほぼ走っているのと変わらない速度で移動できたのは、肩を貸してくれた2人のおかげだ。

途中何人かの女と遭遇したが、由紀がなんとか事情を説明すると蜘蛛の子を散らすかの如く方々へと走り去っていった。

「車が見えた！ もう少しだからあとちよつと踏ん張れよ！」

「誰に向かつて口利いてんだ……なんなら10kmでも走ってやる……イツキの妹、美波はどうした？」

「わからないわ……でもあの発炎筒を投げたのは……」

「ちつ、確認が面倒だな。報連相は大事だと教わらなかつたのか、アイツ」

「あなたもしてないでしょ？ いつも私達に黙ってたじゃない」

「リスクは承知の上だが、知らない方が良い事もあるっていうのをわかってくれ」

「もうっ！ 後でお説教するからね？」

「年下から説教か……俺も焼きが回ったかな」

無駄話をする間にも車への距離は縮まっていく。思えば、俺がまともに受け答えできるか確かめていたんだらう。イツキが扉を開けて中をクリアリングすると、すぐさま俺は指定席へと放り込まれる。

「一先ず撤退だ、武装と坂上、美波は後で回収する。誰か合流地点は漏らしたか？」

「いんや、誰も漏らしてない」

運転席に飛び込んできた胡桃がキーを回しエンジンを掛けると、すぐさまアクセルを

踏み込む。おかげでタイヤが空転して映画さながらの急発進になったが、一同は予期していたのか俺だけが車内の後方へと転がるハメになった。

「なら合流地点に行け、そこで——はっ!?!」

そこで、俺は2つの出来事に驚愕した。1つは、神崎美波が俺の隣で転がってきた男にドン引きしていた事。もう1つは、リアガラスから見える校舎の屋上で菊月が狙撃銃を構えていた事だ。

「スナイパー! 右! いや左に舵切れ!!」

「はあ!?! どっちだよ!?!」

「左! 転がらない程度に射線ずらせ!!」

美波の頭を胸に抱きつつ、少々強引に床へと伏せさせる。車が左へ曲がり、ドリフトした瞬間……2つの破裂音が外と、そしてかなり近い位置から聞こえた。

「うわうわうわっ」

「車体戻せ! そのまま突破!!」

「いや無理だつて言う事聞かない!」

「よしわかった軽くブレーキ踏んで速度下げえ! 安定したら突破!!」

「一気に言うなあっ!!」

そういいつつも胡桃は言った通りに速度を下げ、なんとか安定させた後校門へと突つ

切る。だがおかしい、どうもごころ異音がすると思えば振動も大きくて、果てには常に左側へと傾いている。

なるほどタイヤがパンクするところなるのか、なんて初めての感覚に胸を躍らせながらも、無免許でありながら卓越した運転で俺達は校門を抜けていった。

「雅！ パンクしてないか!？」

「してるぞー！ 頑張つて合流地点まで向かってくれ、ここからは安全運転でな！」

「パンクしてるのに安全運転はできないだろ!？」

「大丈夫だこの車は四駆だ！ 四駆なら大抵なんとかなる！」

「そっか！ 四駆か！」

そこで納得してしまう程心に余裕がないんだな。そんな分析をしつつ、揺れの激しい車内で美波が頭を打たない様にしつかりと体を支える。かなり窮屈だろうが、今は耐えて貰う他ない。

「あ、あの雅……さん？ 口から血が……」

「大丈夫だ！ この車は四駆だ！」

「え？ え？」

美波に何やら心配されるが、とりあえず四駆だと返答しておく。大抵どんな状況でも四駆ならなんとかなる、それは古今東西老若男女誰もが知る知識であり、全世界共通の

信頼設計なんだからな。

とりあえず子供相手でも「四駆はすごい、とりあえず四駆を選べば後悔はしない」と言っておけば納得する物だ。

「喋ると舌噛むぞ、今は歯食いしばって耐えろ」

「は、はい」

ついでにディーゼルエンジンはすごいとも教えてやれば信頼性も上がるな、よし今度からそうしようか。

15分ばかり揺られ、車はようやく合流地点へと到着した。誰かが弱音を吐く度、狂った様に車の駆動方式で励まし続けた結果、俺は4度舌を噛み激しい乗り物酔いに打ち負かされる事となった。

「大丈夫かよ雅」

「……まあ、本音を言えばまた後日出直したい気分だが……そうも言つてられない。ここは気張つて後でたつぷりと休めばいい、その為にも——あー……」

「確実に勝たなきゃいけません。ですよね、雅さん？」

完全にグロッキーモードに突入し喋るのも億劫になつている俺の代わりに、イツキが代弁してくれる。それに対し微妙に頷くと、イツキは両頬をぱちんと叩いて立ち上がる。

「確実に勝つにはしつかりとした編成をしなければなりません。だから、僕だけで行き
ます」

「はあ!? イツキ、今自分で確実に勝てる編成って——」

胡桃が全力で反論し、丸腰のまま車を出ようとするとイツキの前に立ち塞がる。

「胡桃の言う通りよ。それに何も持たずに1人で行くなんて、正気とは思えない。……
誰の為に誰を助けに来たのか、忘れたの?」

悠里の少々キツイ物言いにはイツキもたじろぐが、負けじと向かい合う。あの悠里相
手に……あいつも恐れ知らずだな。双方の格差や気持ちは置いておくとして、悠里の言
いは正しい。つい先日まで俺達の全火力だった武器が、今じゃほぼ全て向こうに渡っ
ている。

残る物は何も無い。もうかなりの付き合いになったあの斧も、今じゃ部屋の片隅で転
がっている事だろう。

「でも、今の雅さんは正直に言つて戦力外です! 睡眠時間も体力も……拷問だつてさ
れたんです! 悠里さんはそんな状態でも戦いに行かせるんですか!」

「それは……でも……危険すぎるのよ。もう何度も言つて、ずっと聞いて貰えなかつた
けど……できるのならこれ以上誰も危ない目に遭つて欲しくない……そう思うのは間
違っているの?」

「いえ、それは正しいです。でも駄目なんです。確かに僕は自分の事情で皆さんをここまで連れてきて……巻き込んでしまいました。妹も助けられて感謝してます。でもだからこそ！ これは自分で決着をつけなくちゃいけないと思ってるんです！」

「その思いはよくわかるわ……わかるけど、それとこれとは話が別よ」

「行かせてやれ、悠里」

傍から見ているだけの俺が口を出すのもどうかと思つたが、この先後悔をさせない為にも俺は立ち上がる。思いの外限界が近付いている身体に鞭を打ち、イツキの背に手を当てた。

「雅……まさか一人で行かせるのか？」

「それは俺も反対だ。だが、まあ……こいつの言う通り俺もそろそろでな、そんな俺を気にしながらやっても足を引つ張るだけだ。それなら、ここは1つ賭けてみるのも……違うか。不本意ながら、賭けるしかない」

「そろそろって……冗談だろ？ 単に疲れて動けないって意味だよな？」

「それもある。皆にはいつも心配させて悪かった。自分でも非合理的だとわかつていても、それでもどうしても行かなくちゃならないと思う時は山の様にあるんだ。それを知っているからこそイツキを行かせてやって欲しい。例え死ぬとしても、後から後悔するよりはいい」

「……雅さん、自分が無謀だつて自覚あつたんですね」

「まあな。俺は馬鹿で強情で貪欲なんだ。言つても聞かないし、止まりもしない。だが、お前はしっかりと周りを見て人の話を聞ける。最善の道を行け、お前は立ち止まらなかつた。しっかりと考えるタイプだ」

ゆつくりと背中を押してやると、やつと一步を踏み出す事が出来る。目前で道を塞いでいた悠里と胡桃も、気迫に圧されたのか後ろに一歩下がった。

「一つ聞いておきたい事がある。お前は何をしにここまで来た？」

背中越しにイツキへ問い掛けると、一瞬だけ体を震わせたイツキが足を止める。

「美波を……助ける為です」

「それはもう達成している。今ならまだ、失つた物もあるが掛け替えのない存在を取り戻した……いい話で終わるんだけどな」

「それじゃ美波との約束が——！」

胡桃が奥の方で縮こまっている美波を気にしつつ、口を挟む。それは周囲の声であり、俺が黙らせる権限はない。

「美波は坂上と一緒にいいと言つていた。正直俺も……いけ好かない奴だがいくつか聞きたい事も出来た。だからお前はもう一度行くのか？」

「そう、です。ついでに僕達の武器も回収できれば何も失つてません。弾はちよつと使

い過ぎましたけど」

「そうか、それが実現できるのなら最善の手だな。ただ、もし失敗すれば……武器はあいつら、坂上は生死不明、お前は死亡。ただ一人の家族すら失ったお前の妹は途方に暮れる。実際成功率はどの程度あると思ってる?」

「………わかりません。でもやるしかないじゃないですか。こうしなきゃ……僕が皆さんを巻き込んでしまった償いにならないんですから」

「そうか」

情けない事に、こうしている今も限界は刻一刻と近付いていた。下を見れば視界は歪み、雷でも落ちてきているのかと錯覚する程の明滅。極めつけに膝は笑って乗り物酔いのおかげで今にも吐きそうだ。

「正直な所、俺は成功率は高いと思っている。坂上はどうかかわからないが、お前なら菊月を仕留めて体中に武器括り付けて帰って来るんじゃないかと。美紀、その柵からアレ取って来てくれ」

「アレってなんですか……」

「俺の最終兵器だ」

「ああ……」

美紀は普段銃器が保管してある柵から、いつぞやの白鞆を取ってくる。

「これですわね？」

「そうだ、イツキに渡してやってくれ。……『必ず帰ってこい』と上目遣いでな？」

「なんで上目遣い……？」

「生存率が上がるからだ」

訝し気に眉を寄せた美紀は、両手で抱えた刀を持ったまま、イツキの前へと移動する。

一連の会話は当然イツキにも聞こえているし、若干おどおどしているのが面白い。

「……必ず帰ってこい」

「違うだろお!!」

思わずツツコミを入れてしまった美紀の行動に、イツキ共々ほぼ全員がぼかんとしていた。すぐさま美紀を呼んで少々奥まった場所に誘導すると、まるでどこかへカチコミに行く極道の様なシチュエーションを咎める。

「い、言われた通りにしましたよね？」

「違うんだよなあ……そういうのじゃなくて、もっとうららしく、まるでラスボスへと挑みに行く主人公に伝説の聖剣を渡す感じで。メインヒロイン的な感じで」

「そんな事言われても……私そういうの得意じゃないです」

「得意じゃなくてもやるんだよ。——イツキの事は嫌いじゃないだろう？」

「嫌いじゃないですけど……何か勘違いしてませんか？ 私はそんな好きとか……恋愛

感情とかは」

困惑する美紀の気持ちは分かる。別にイツキの事を好いてなかというと、ただの友人としての好意だろうと正直どうでもいい。問題はイツキが美紀を好いているかどうかだ。妹の為、それはほぼ達成された。現時点で再びあそこに戻る利点はほぼないに等しい。仮に武器や美波の約束の為にという名分はあろうと、目的としては薄い。そんな目的の為に命を懸けるのは馬鹿らしいとも言えるし、むしろ失敗しても美波が一人になる事以外はあまり問題がないと言える。

だとすればもし窮地に陥った時、最悪自分の妹を助け出せたという結果に満足してしまいかもしれない。そうならない為にも好いた女からの「帰ってこい」はよく効く。俺が散々生き残っているのも、毎回帰ってこいと皆に言われているからだと思う。

「言ってやれ。少しでも、コンマ1mmでもあいつに死んで欲しくないと思うのなら。これは俺からの頼みでもある」

「……わかりました」

「俺は少し外の風に当たってくる。このままだと車を汚しそ——うつぶ」

「だあーつ中で吐くなあつー！」

胡桃に急いで引つ張られて外に連れ出された所で、俺は盛大にリバースした。直前に何かしら食べてなくてよかった、食材を無駄にするのはこのご時世罪深いからな。

「大丈夫か？ 顔色めっちゃくちや悪いけど……」

「あー……そうだな、正直限界だつてのはさつきも言ったけど」

「その……限界つてのは体調的な面の話だよな？ さつき『それもある』つて——」

「ああ、それな……まあその話は追々しよう。今は色々立て込んでるのもある」

吐いた所為で口の中がピリピリする。どうせ口の中切つてそこに沁みてるんだろう。揺られてる途中口から血が出てるとも言われた気がするし。

「なあ、胡桃」

横で俺の背中をさすつてくれている胡桃に声を掛ける。すると少しだけ顔を覗かせて俺と目を合わせてきた。……つたく、可愛らしいな。

「もし、俺が成つたら……」

「やめろよそういうの」

「そろそろ考えなきやならないんだ。なんでかはわからないが、俺はもう長くない気がする。俺の予感は大体当たるんだ、特に自分の不幸は」

それは自分でも不思議な感覚だ。今より先が見える訳じゃない、夢で見る訳でもお告げがある訳でもない。ただ死ぬと——どうあがこうが変えられない因果の様な物があるだけわかる。

「……恐ろしい。こんな柄じゃないのはわかつてるが……やっぱり怖いんだな。こんな

感覚、久しくなかった」

「今までもあったのか」

「ああ。今までも何度か似たようなのはあった、でもこれは……絶対どうにもならない類いのものだ。俺は……死ぬのか？」

「……大丈夫だよ」

背中から、肩に手を回される。ふわりと爽やかな香りが鼻腔をくすぐって、とてつもなくむず痒い。そんな事を考えている内に、ぐつと力を入れて体が傾いた。

「胡桃？」

「大丈夫……あたしとイツキがいるんだから死なないって」

左腕やら頬やらに柔らかい感触が当たる。……割と、着痩せするタイプなんだな——
——つてのは前も考えたか。今なら思い出せる……そういえばあの時も胡桃にこうやって抱き締められていた。

なんだかんだ……誰に一番助けられているかと言えば胡桃なのかもしれない。勿論他には誰にも助けて貰ってないとは言わないが、ここぞという時は胡桃に慰められている気がする。

「そう、なのかな」

「おう、絶対そうだ。……ふふつ、そういう話し方の方がいいと思うぞ」

「……離せ」

ほんの少し暖かくなっていた感じが一気に冷めて体を起こそうとするが、胡桃は俺を抱く腕の力を強くする。流石に完全にホールドされている状態では成す術もなく、俺は少し力むだけでそれ以上の抵抗はしなかった。

「少しくらい甘えたってバチは当たらないと思うけど。それに頼ってもらえた方が、あたしもりーさんも安心するんだよ」

「年下に甘えるだなんて情けないだろ。それに、お前達を護るって大見栄切ったんだ、なのによつちゆう慰めて貰いにくる男なんて頼りないだろ」

「ははっ、それもそっか。でも、お前なら文句言われないう。だっていつも死ぬほど頑張ってる、死にそんな顔しながら守ってくれてるじゃんか」

「そう、か。なら……あと30秒、いや10秒くらいこうして——」

「30秒な、それかあたしが良いって言うまでこうする。じゃなきや……今にも死んじやいそくだ」

俺は今この状況で死ねたら本望なのかと思ってきたよ。でもまだだな、まだまだ死ぬ訳にはいかない。この感覚があるうが、どれだけ怖かろうが運命だろうが、全部纏めてぶち壊してやればいい。

「……み、雅さん!? 大丈夫ですか!?!」

「イツキ!？」

背後でイツキの驚いた声が聞こえてくる。その瞬間胡桃は驚くべき速度で俺を反対側の地面まで押し退けてくれやがった。完全に身を任せていたのもあつて地面に頭が激突して悶絶していると、車からイツキの声につられて全員出てきてしまう。

「雅さん!?! どうしたの!?!」

「いや、なんでもないっす」

赤子の様に甘えていたなんて言えない。イツキも俺が完全にぶっ倒れてると思つたらしく、白鞆を右手に持ったまま俺の顔を覗き込んでくる。

「やっぱり……体が限界でしたよね……」

「い、いや……確かにまあ辛いっっちゃ辛いですがそれ程でもないぞ」

「でも今胡桃さんに——」

「わー!!! あー!! イツキそれ以上は!!」

胡桃が必死に隠そうとする。有り難い、非常に有り難いがリアクションが大きすぎる。おかげで悠里やら由紀が尋常じゃない事態だと勘違いして慌て始めたぞ。

「だ、大丈夫!?! みゃーくん立てる? とりあえずベッドとかに——」

「だ、駄目よ由紀ちゃん! 動かしたら悪化するかもしれないわ! えっと、こういう時どうしたらいいんだろう……」

「そつとしておいてくれ。それより——」

痛む右側頭部を押さえながら、俺はなんとか体を起こす。イツキが持つ白鞆を見るに……美紀はしつかり役目を成し遂げてくれたんだらうか。

「死ぬなよ、これは命令だ」

「……はい！」

「よし、行つて来い。くれぐれも無理はするな、俺もマシになつたら追う」

「そ、そんな！ 雅さんは休んでください」

「大丈夫だ。俺が行く時は十分動けると判断した時だからな。それに回復が間に合うかどうかも分からない、だから増援は期待するな。これはあくまで、お前単独の攻撃だ」

「……わかりました。くれぐれも無茶しないでくださいね」

「言われるまでもない。……行け、もうすぐ夜明けだ」

イツキはしつかりと頷いて、歩き始める。……あいつの後ろ姿なんて見る時がくるとは思わなかつたな。俺もいつか、こうして見送る立場になる日が来るんだらうか。

確かに、辛い物がある。坂上の言う通り、俺は待つ側の気持ちも学ぶべきだ。こうして無事を祈る事しかできない不甲斐なさは……確かに、堪える。

「……悠里」

「なこ？」

俺と同じく、いつだって見送る側にいた悠里は……とてつもなく強いんだな。よく今まで俺を送り出してくれた。と言っても、いつも行くなどは言われてたか。

「今までもまなかつた。生きてるからいいものの、もし帰らなかつたら……そう考える」と

「……そうよ。いつつもいつつも黙って出てつたり無理矢理出てつたりしてたんだから、少しは反省して欲しいわ」

「ああ。……さて、誰か肩を貸してくれるか？ 言つた傍から申し訳ないが少し休んだら俺も出る」

「はあー……もう何回言つても聞かないからそろそろ愛想尽きてきたかも……」

「ええ、マジで？」

そつぽを向く悠里だが、しばらくするといつもの微笑みに戻る。

「嘘よ。運ぶの胡桃も手伝ってくれる？」

「はいよー」

……ヤバい、今の笑顔には少しばかりドキツとした。落とされてから上げるのに弱いのか？ だとしても心臓には悪いから勘弁願いたいな……いつ落ちるともかなわんし。

しかし、徒歩で行けば20分弱掛かるか。だとしたら休めるのは30分もない。……秘蔵のブーツを引っ張り出す他ないな。

両側から支えられながら、俺はようやくまた指定席へとありつけた。そこで悠里に前々から貯蔵していたとっておきを出して貰う……これなら、今の俺でも行けるかもしれない。

21. 決着

やつとの事で学校に着く頃には、もう空の端は白み始めていた。少し眠ったおかげでまだマシだけど、それでも微かに睡魔が思考を蝕もうとしてくる。それを両手で頬を叩いて追い出すと、雅さんから託された日本刀をしっかりと握ってこれからの戦いに闘志を燃やす。

「……イツキくん？」

正門の影から僕を呼ぶ声がした。若干警戒しながらも目を向けてみると、そこには菊月の元へ僕達を案内してくれた玖城さんとその他数人の女性達が居た。

「あ、玖城さん。ここ危ないんで逃げた方が良いでしょう」

「そうだけど、そう簡単に今まで居た場所を捨てる事なんてできないわよ」

色々な事があつたんだろう。惜しむような、憎むような……何とも言えない面持ちで校舎を眺めている。でも、これから僕達ができる事は正真正銘の殺し合いだ。菊月……さんも、あの様子だともう誰も信用しない。

今までずっと従ってくれていた坂上さんが裏切つたんだ。僕達には朗報でも、もう殆どの人が居なくなってしまうたあの人にとっては天涯孤独だと印を押されたにも等し

い。

「……それでも、今は逃げてください。流れ弾に当たって死んじやったりとかしたら、僕はきつと後悔しちゃうんで」

「優しいのね。妹さんも、お兄さんのそういう所に似たのかもしれない」

「や、やめてくださいよ……とりあえず今はここを離れてください、どこか木の影でもいいんで」

「……わかったわ」

なんとか言う事を聞いてくれた玖城さんは、女性達を先導してここを離れようとする。だけど、何かに気付いたように辺りを見回して、改めて僕の方へと詰め寄ってきた。

「あの男はどこにいるの？」

「あの男？ 雅さんの事ですか？」

「ああ、やつぱり本名は雅って言うのね。一緒に逃げたんじゃなかったの？」

何か怒っているようにも見えるけど、なんでだろう？

「ここに来る前にも色々無理してて……でも代わりにこの刀を預かりました」

「はあ、あんだけ偉そうな態度なのに随分軟弱なのね。私でも勝てそうな気がしてきたわ……」

「いやあ、無理だと思えますよ？ 多分素手でも……体格差もありますし」

「なんで大事な時に年下を1人で行かせられるのかねえ、しかも剣1本って。マシンガンでも持たせなさいよ……」

「マシンガン……物によつては僕持てませんけど、どれの事言ってますか?」

「マシンガンはマシンガンじゃないの? いっぱい撃てる奴でしょ?」

「あつ、もういいです。とにかくここは危ないんで離れてくださいね!」

話を無理矢理切り上げて玖城さんの肩を掴み、回れ右をさせる。ダメだ、銃の事を知らない人と銃の話をしたら僕は……耐えられない。

屋上や窓の1つ1つに人影がないか確認すると、出来る限り早い速度で校庭を駆け抜ける。

坂上さんはどこにいるんだろう? 別れ際に言つてた事が本当なら今頃……どちらかが死んでいるかどちらも死んでいるかしかない。どちらも銃は持つてるけど……決定的な切り札になる銃をどちらも持つていたら、後はもう運の問題なんじゃないのか?

正面玄関には誰一人として存在しない。あの時数人の生き残りがいたのは知ってる、でもそれが今どこにいるか、生きているのかも分からないんじゃないやどう対処したらいいかも分からない。

「分からない事だらけじゃないか……!」

これからどうしたらいいか、あまりにも情報が少なすぎる。そっか、さつき玖城さんに聞けばよかつたんだ。今更思い出しても意味はないけど、仮に聞いたとしても情報がなかつたかもしれないけど、聞かないよりマシだった。

それなら、まずは屋上に行つてみよう。いやそれより装備が置いてあるつて言つてた場所に行くべきか、まずはそこで装備を取り戻してそれから……いやでもその間に状況が動いて手遅れにでもなつたとしたら。

——違う。考えても罅が明かない。まずは屋上に行こう。僕には胡桃さんみたいに鋭い直感もないし、雅さんみたいに人の気配を追える訳でもない。とにかく遠くから状況を見て、そこからどうするか考える性格だ。

でも今回はそれが許されない。スコープもなければ時間もない、刀一本で駆け回らなくちゃいけないんだ。もし誰かに会つたら速攻捻じ伏せて情報を聞き出す……ちよつと手荒だけど、それが一番手っ取り早い。

そうと決まれば——とりあえず動かなきゃ。

「まず屋上、だよね」

できるだけ足音を消して、けどできるだけ早く移動する。無音とは言えないけど、そこそ静かに移動できていると思う。

階段から3階に行つて、更に上を目指す。でもそれより先の階段は無かつた。……そ

うだ、校舎によつては屋上への階段は1つしかなかつたりする。ならこのまま一周すれば！

廊下を駆ける。でも、悲しい事に突き当りの個所を曲がつた所で2人の男とばつたり出くわしてしまった。

「お前は……!?!」

「うわ……」

2人共それぞれの反応を示しつつ、僕が持っている刀に目をやる。一方、2人が持っているのはさつきと同じくサクラ、それと腰にあるナイフだけだ。

「止まれ!」

「くっ……」

銃を突きつけられる。終わった、これじゃ銃には勝てない……諦めかけた瞬間、2人が構える銃のシリンダーに目が行く。目が暗闇に慣れてきたのもあつて、そこに光る筈の弾頭がないのがわかつてしまった。

「それ……弾、入ってないですよね?」

「……本当に入つてないと思うか?」

そう答えられちゃ僕にも分からない。見える箇所にはなくとも、今撃てる状態にある場所には弾があるかもしれない。それを確かめる手段は——撃鉄が起きているかど

うかだだけだ。

「……わかりました」

刀をその場に置く。けど、柄の一部分が靴に辛うじて引つ掛かる部分に。

「そのまま動かすなよ」

2人は左右にバラけながら距離を詰めてきた。そして片方が刀に手を取る瞬間に撃鉄の位置を盗み見る。

……起きてない、のは片方だけだ。しかも弾がある可能性が高い方が僕を見張っている。どうすれば隙を作れるだろう？ 余所見をさせればなんとかなるかもしれないけど、こいつらがつい視線を外してしまう程に興味を惹く物……あつ。

「雅さん!? なんでもここに——」

彼らの背後、僕が正対する方向に向かって雅さんの名を叫ぶ。心底意外そうな演技をしたはいいけど、不自然になってしまったかもしれない。……でも、彼らには十分だつたみたいだ。

「!?」

僕を見張っていた方の男が慌てて銃を向ける。その瞬間、右足を蹴り上げて刀を拾い上げようとしていた男の顔面に柄ごとぶつけてやった。次に銃口を逸らしていたもう片方の右手首を掴み、自分に銃口が向かない様に鳩尾に肘を入れる。

幸いにも引き金に指を掛けておらず、銃の暴発は無かった。怯んでいる間に腰に差しあつたナイフを抜く――

「すみません殺します!」

一言謝つてから、そのまま切先を脇腹に深く突き刺した。そこから若干捻りながら引き抜くと、やつと力が抜けた右手から銃を奪い取る。

「動かないでください」

起き上がろうとしていたもう片方に銃を向けると、男はびたりと動きを止めた。僕には銃の重さで弾が入ってるかどうかかわかるような知識はない。でも入ってるかどうか、それを今此処で一番知っているのは間違いない目の前に居る男だけだ。

「手を頭の裏で組んで、少しでも動いたら撃ちます」

ごくり。生睡を飲む音が聞こえる。僕じゃない、脅されている立場にある相手のものだ。もしこの銃に弾が入っていなくてこの人が演技をしているだけだとしても、この体勢ならナイフを抜くにも時間が掛かる。

なんとか刀の端っこを踏んで自分の所まで引き寄せてくると、1歩2歩と後退してシンダーをスイングアウトさせる。すると案の定装填済みとなる部分に1発だけ弾が込められていた。

よし、1発でもあればかなり余裕ができる。僕はこれでやつと切り札を得られたん

だ。

「そいつ、には……手を……出すな」

横で転がっている男が僕の足首を掴んでくる。弱々しくて、少しの力で振り払えるのに……僕にはそんな事、到底できない。

「このままここから出て行くのなら手は出しません。でも邪魔するのであれば……僕も命の保証はできませんよ」

まるで雅さんみたいだ、と少し嬉しくなった。僕も強くなった、ほんの少しだけでも追い付けたんだ。ならもつと、もつと強くならなきゃいけない。誰よりも強くて、皆を守れて、皆から頼られるような人に。

「ぐっ……お前も、あの片腕野郎と一緒にだ。……人を殺して、面白がってる。殺人鬼と一緒にだ……」

「違うー！」

思わず叫んでいた。なんでかわからないけど、殺人鬼だと言われたら無性に腹が立つた。

違う、僕は殺人鬼なんかじゃない。だとしたら雅さんはどうなるんだ？ 僕より人を殺した数も多くて、でも守った数も多い。僕を殺人鬼と呼ぶことは、雅さんも殺人鬼と呼んでいるのと一緒だ。だから……それは間違いだ。

「僕は、自分が死にそうになったからあなたを刺しました。それはその片腕の人も同じです。放っておけば自分が殺されるから、その前に——」

「それは間違いだ……殺す事自体がおかしいんだよ……！ 何の権利があつて他人の命を奪えるんだ！ 片腕もお前も狂つてる！」

「……なら、僕はどうすればよかつたんですか」

「お前は——」

最後の力を振り絞る様に、男は顔を上げた。その瞬間、僕の背後で破裂音が響き、僕の目の前で答えを教えてくださいようとした男が床に顔面を叩きつける。

「ひっ——」

そして逃げようとした男も再度響いた銃声で胸部を撃ち抜かれ倒れる。……葉莖が転がる音に、僕はこの場を脱する対抗心すらも失つていた。

もしあの人でなければ……僕は死ぬ。でも僕以外の2人が真つ先に撃たれたと言う事は……きつとあの人だ。

「耳を貸すな、イツキ。敵の言い分なんか聞いて何の得になる」

「雅さん……」

半身で振り返つてみると、雅さんは銃をポケットにしまいながら歩いてきていた。薄闇の中、黒いコートを着るその人は……まるで死そのものを纏っているような感覚だ。

あれには勝てない。そうやって本能が生き残る事を諦めているような感じさえある。僕は味方だからいいけど、もし敵だったら……考えるだけでも寒気が走る。

「銃を持ちながら人を殺すのは間違ってるだなんて、詭弁もいい所だ。殺す権利も道德も、時と場合によっちゃ無視される代物だしな。そもそも他人に自分の理念を押し付けようとしてる時点で——」

「雅さんは、自分を殺人鬼だと思えますか？」

今まで何人殺して、何度疑問に思った事があつたんだろう。僕は殺人鬼だと言われて、雅さんも一緒だとこの人は言っていた。でも、間違いなく僕より殺している人から聞けば何かわかるかもしれない。僕は、自分が殺人鬼だとは思いたくなかった。

「俺は……ちが……いや」

何度か言葉を発しようとして、途中で止める。雅さんは何かを迷っている様に言い淀んでいた。

「……客観的に見ればそうだな、間違いなく俺は殺人鬼……しかもかなり冷酷で裁判なんて起こったら即死刑って言われるレベルなんだろう」

「誰かを守る為に……殺したとしても？」

「結果だけ見れば殺してるんだ、どうあつてもそれは覆らない。現に今2人殺したしな」
2発目で撃つた男の息がある事を確認すると、今度は銃をしまつて腰から鈍色に輝く

大型のナイフを抜く。そして躊躇せずに心臓の位置に合わせ、一気に突き刺した。

「確かに俺達は護る為に人を殺している。だからと言って正当化はされない、こいつの言った事は間違いではないし、むしろ正論だ。正論過ぎて虫唾が走る……」

「じゃあ僕達は、殺人鬼……なんですか」

「そうだ。俺達は血も涙もない殺人鬼で、人を傷つける事にほぼ抵抗がない異常者だ。……それがどうしたってんだ、そうでなきゃ今まで生きてこれる訳ないだろ」

まるで自分に言い聞かせているみたいだった。引き抜いたナイフから血が滴る度、その手は震えている気がする。雅さんは……本当は殺したくないのかもしれない。でも、今の僕がやったみたいに、放っておけば自分が死んでしまう状況で……仕方なくやっていただけだとしたら。

僕が勝手に抱いていた完璧な人という認識は、間違いだ。この人は、弱い。

「人は元々同族を殺す事に抵抗を感じる様に出来ているって聞いた事がある。真つ赤な嘘だと思ってたが、いざ初めて殺す時はあながち間違ってもないと感じた。でもまあ、人は慣れればどうにでもなる生き物でもあるからな。……俺はもう慣れた」

「諦めた、って事ですか」

「……そう、言えるのかな」

それは初めて聞くかもしれない声だった。口調も、声色も、何もかもが弱く聞こえる。

今では信じられない、なんとも優し気な声だ。こんな話し方をする人が人間を、あいつらを屠っている。その事実を僕は……見たくないと思う。

「イツキ？ どうしたんだ」

まるで夢だったかのように雅さんは本調子に戻っていた。でも、顔をよく見れば疲れているとわかる。目の下にあるクマや少しだけやつれた顔、それにさつきとどめを刺す時だっけいつもよりゆっくりとしていた。

「いえ、なんでもありません。それより雅さん」

「……なんだ？ 真面目な話か」

僕の顔を見て、雅さんも少しだけ気合いの入った顔になる。でも僕が言おうとしているのは、それを壊してしまう言葉だ。ここまでやってきている人に、ここまでやってきている人に言う事じゃないかもしれない。

でも、言おう。きつとこのままじゃこの人は倒れるに違いない。この一件が終わったら……あともうひと踏ん張り……そうやって無理矢理奮い立たせているんだ。

「はい……雅さんは帰ってください、僕は大丈夫ですから」

「何を今更……毒を喰らわば皿までと言うだろう。いやこれが毒とかじゃなくてだな？

一度踏み入った事だ、最後までやらなきゃ筋が通らない」

「僕から見ても分かりません。雅さんはもうとつくに限界を超えていますよね？ あの時、

倒れる寸前で踏み止まってから」

「そうか……お前から見れば、あれが限界に見えたか」

慣れた手つきでナイフを曲芸師の様に回す。余裕そうな表情もその仕草も、僕に弱っている事を悟らせない為のフェイクかもしれない。まだ行ける、まだ大丈夫だと自分に言い聞かせて、ついに限界も自覚できなくなってるのかも。

「今からでも遅くありません。それに……あなたが死んだら、悲しむ人がいっぱいいるんですから」

「俺の限界はこんなものじゃない、とつくの昔に超えてんだ。あの時——右腕を落とした時に俺は死んでいる筈だった。なのにまだ生きてるって事はもうほぼ不死身と言ってもいいくらいだ。銃で撃たれても奇跡的に軽傷で済み、何度心が折れようところやってまた立ち上がれる」

「でも代償はありますよ。気付かないだけで今も何かが零れているような……そんな気がするんです」

「ならこれが終わったら休もう。どこか安心できる場所を見つけて、2ヶ月くらいダラダラさせて貰うさ。だから今は……踏ん張り所だ、気合い入れろ。辛くなったら逃げるから」

そう言って逃げた事があつただろうか。そもそも逃げるなんて一回も言っていない気

がする。

やっぱりこの人は危ういんだ。誰かが付きつきりで監視でもしてないとすぐ無理をして……倒れてしまう。今はまだこうして話せる程度で済んでるけど、これ以上無茶をさせたら皆に怒られる。

「そう湿気た顔するな。俺なら大丈夫だ、だがタイムリミットはある。あと1時間、それ以上は流石に厳しい。それに、俺もあいつに聞きたい事が山ほどあるんだ」

「……わかりました」

「よろしい。お前が先導しろ、これも預けておく。残弾確認を怠るなよ」

ナイフを脇に挟んで、ポケットからM1910を出して僕に差し出した。唯一の銃も僕に渡して……大丈夫なのか。

「じゃあこれは雅さんが持つててください」

銃を受け取り、代わりにさつきまで男が持つていたサクラを手渡す。慎重にハンマーダウンさせ、シリンドーをオープンさせた雅さんは不敵に笑った。

「自決用か……悪くないな」

「違いますよ、雅さんならその1発で全部片付けちゃうんでしょ？」

「あまり過大評価してくれるな、ぶっちゃけ俺は弱いぞ。銃の腕なら忍が一番だ、俺は……いつも素敵に回ってたからな。帰ったら昔の話でもするか、俺がまだ仲間と……足

掻いてた頃の話を」

「じゃあ楽しみにしてます」

「ああ、そうしろ」

銃をしまつて、雅さんはまた大型のナイフを持つ。……様になつてゐるなあなんて思いながら、僕達はまた歩き始める。

そこから3階に上がるまで、誰一人として僕達の邪魔をする人間はいなかった。

「止まれ、何か変だ」

屋上へと続く階段を探す途中、急に雅さんが立ち止まったと思えば窓際へと寄る。僕もそれに続くと、ナイフを順手に持ち替えて音もなく歩き始めた。

「……どうしたんですか？」

「嫌な感じがする……この道はやめておいた方がいい」

「でもここ以外となると反対側まで回らなきゃいけませんよ」

「……そうか。空薬莖あるか？ 向こうに投げてみる」

幸い捕まった後でも上着のポケットには7.62mm弾の薬莖は残っていた。もう使えないと判断して残されただらう、それが今役立つなんて思いもよらなかつた。

出来る限りコンパクトな動きで投げた薬莖は僕達の10m程先で独特の金属音を響かせる。一体何があると言うのか。半ば疑問に思いつつ待っていると、奥に人影が見え

た。

「…………え」

それは人としては不格好な歩き方で、不自然な足音を立てながら近付いてくる。……あいつらだ、でもここにはあいつらはいなかったし、もし数体が侵入したとしてもこんな上階にいるとは思えない。

可能性として考えられるのは下の階で噛まれた後意識がある内にここに移動したか、以前から隔離されていたのが混乱に乗じて出てきてしまったかだ。

「待ってろ」

ナイフを逆手に持ち替え、雅さんが無音で近付いていく。あつという間に背後に着くと、まず膝裏に蹴りを入れてバランスを崩させナイフの峰を首に引っかけ、倒れた所ですかさず眼球ごと脳を貫いた。見事な早業だ。

「温い…………まだ『成って』から時間が経ってない。…………妙だな」

「噛まれてから来たんですかね」

「かもしれないな。でもここまで来るのに1体も出くわさなかったが…………いや、噛まれてない…………？」

死体を検分する雅さんは至る所に目を通していく。四肢や首元、どこにも外傷はない。それどころか返り血を浴びた痕跡すらない。なら後考えられるのは…………奴らの血

を飲んだ？ そんな事をするくらいならナイフで首を切った方が楽に死ぬるんじゃないのか？

「どういう事だ？ さっぱりわからんな」

「外傷がないのなら感染しようがありませんよね？」

「多分な。注射器か何かで血を入れられた可能性もあるが……どこにも痕がない。汚染された飯でも食べたか？」

「あ、多分それですよ。返り血を浴びた手で何か食べたんじゃないですか？」

「今の所そういうのが有力だな……機会があれば検証してみるか。一先ず先に進むぞ」

検証っていうのが少し引つ掛かるけど、1人で行ってしまふ雅さんの後を追って奥へと進む。また1人、また1人と感染者がぼつぼつと徘徊する中、それぞれが孤立していたのもあつてか無力化するのとは簡単だった。

そしてその度に簡単な身体検査を行う。外傷はあるか、血を浴びているか、体温はあるか。

「雅さん？ どうかしたんですか？」

「……………いや、なんでもない。先に進むぞ」

さつきよりも表情がキツくなっているみたいだ。さつきも言っていたけど、タイムリミットが近付いているのか……それか他の事なのかも。

それにもし何かあったとすれば教えてくれるだろう。なのに教えて貰えるどころか黙り込んでしまうという事は。

「誰も嘯まれていなかったんですか？」

「いや、最初の1人以外は嘯み傷があった。かなり新しい……体温も残っていた」

「じゃあ最初の1人が汚染された何かを食べたんですね」

「……………そう、だな。そうかもしれない、いつも悪い方に考えるのは俺の悪癖だな。それより時間がない、急ぐぞ」

「そうですね……………」

それから少し進むと、ようやく上に続く階段を見つめる。赤色のライトで足元を照らした雅さんは「ふむ」と何かを思索している。

「行つた足跡があつても帰つた足跡がない」

「え、じゃあまだ屋上にいるって事ですか？」

「ああ、2人分の足跡があるにはある……………が、階段を使わずに降りれば足跡は付かない」

それはつまり……………屋上から飛び降りたって……………いやいや、流石にそんな真似しないだろう。いやでも……………するかな。あの2人の関係は全く分からないけど、もし心中なんてしていたら……………なんて美波に説明すればいいんだろう。

「一番手は任せる。今の俺は全くもって役に立たない、弾も取っておきたいしな」

「わかりました」

出来る限り静かに階段を上がっていき、屋上への扉を前に一旦止まる。振り返るとナイフをいつでも抜ける様に構えている雅さんがいて、僕と目が合うと微かに頷いた。

ドアノブに手を掛けようとした所で、微かに声が聞こえてくる。距離があるのかよく聞き取れないけど、言い争っているような雰囲気じゃない。

「いるみたいです」

「そうか、ならこれ以上探す手間も省ける。行け」

一瞬どう出て行けばわからず戸惑ってしまう。一気に行つた方がいいのか、それとも普通に出て行けばいいのか。争っていないのなら普通に出て行つてもいいだろう。

ドアノブを捻り普通に開けると、ゆっくりと顔を覗かせる。屋上の一番奥には2人の人影があつて、お互いに銃を向け合っているらしかつた。

「どうだ？」

「銃で牽制し合ってます」

「……よくないな。とりあえず出たらお前は菊月を狙え、怪しい動きをしたら迷わず撃つていい」

「り、了解」

ノブを捻り切ると、タックルをするかの様に勢いよく飛び出す。その音に1人は銃を

こつちに構え、もう一人は動じない。とりあえず構えてきた方に照準を合わせて、ゆつくりと近付いていった。

「ほら、もたもたしてるからお客さんが来たぞ」

「クソツ……まさか戻つて来るとはな。折角助けてやったのに自分から死にに來たか」

どうやら僕に銃を向けているのは菊月で間違いないらしい。ゆつくりと距離を詰めながら、まともに狙える距離で一旦止まる。

「どちらも銃を捨ててください」

「だによ？ 坂上」

「余裕綽々としてるが、残り一発だろう？ さあ誰を撃つ」

「……はあ、余裕ないってのに。問答聞かれてられる程暇じゃないんだが」

銃を構えて後から來た雅さんだけど、その銃口は坂上さんに向いていた。銃を持っている以上警戒している……？ さつき助けてくれたからそんな心配はいらないと思うけど、雅さんなりに何か考えがあるのかもしれない。

「坂上、何故撃たない？ 自分で決着をつけるって言つてたよな？」

「……色々聞きたい事がある。それを聞くまでは手を出すな」

「じゃあ拷問でもすればいい。そいつの右手ぶち抜きや終わりだろう、手伝つてやろうか。情が湧いたなら俺が殺つてもいい」

「やめろ！ お前には関係のない話だ」

これじゃ話が進まない。朝が来るまで銃を向け合う状態が続いてもおかしくない。

「美波がお前を待つてる。お前が生きて帰ってこなきゃ死んでやるとよ」

「美波が……そこまでか」

そこまでは言っていないけど、少し揺れた様に思える。何を聞きたいのかはわからないけど、早く終わらせなきゃ雅さんの体力が……

「菊月。改めて聞く——なんでデマを流してまで避難所を壊した？ あそこまでやらずとも出ようと思えば！」

「分からないのか、する必要があっただろうに。……じゃあ答えてやろう、単に気に入らなかつただけだ。全員があいつの顔色を見て、利益を求めようとゴマすって、その所為であいつはまた調子に乗る。一度ぶつ壊さないといけなかつたんだよ」

「だからと言って死人を出す事までなかつただろう！」

「あつたさ、じゃなきゃあの偏屈な爺と独裁者はいつまでも他の人間を食い物にした。まあここに1人独裁者気質な奴が1人いるけどな」

菊月は僕達を見る。それに雅さんは皮肉っぽく鼻で笑って返した。

「俺が独裁者？ 大当たりだな。自分の好きな様にやって何が悪い。俺は自分を曲げない、いつでも俺が正しいと判断した事をするまでだ」

「……そうやってると、いつか背中を刺されても文句言えねえなあ」

「構わない。むしろ殺せるものなら殺してみろってんだ、俺を殺せるのは俺に最も近い人間だけだ」

最も近い人間……か。勿論距離の話じゃない。今雅さんに一番近い人は誰なんだろう？ 悠里さんか、胡桃さん、もしかしたら僕かもしれない。でもそれを口に出す事は絶対にないだろう。この人は正直だけど素直じゃない。

「聞きたい事は聞けたか、坂上」

「……いや、最後に1つだけある。菊月、お前は……玖城をどう思ってたんだ」

玖城さん……？ そういえば、案内された時もずっと菊月の話をしてきた。好きなんだってわかったけど……なんで最後の1つが玖城さんなんだろう。好きな

「どうも思わないさ。あいつは——単に人員を増やす器でしかない」

「……そうか」

最期の答えは、僕でも嘘が詰まっていたように感じた。坂上さんは容赦なく引き金を引き、乾いた音が周囲の木々に吸い込まれていく。そしてどきりと、この世からまた1つ命が消えた。

「思いの外呆気なく終わったな、俺としては拍子抜けだ」

今まで散々な目に遭ってきた雅さんにとってははかなり淡白な終わり方だったらしい。

でも、結果はともかくとして問題はその途中にあるんじゃないかと思う。来る前に悠里さん達ともいざこざがあったし——それにかなりシヨツクな事も言われていた。

「帰るぞ、俺が倒れたらおぶつてくれよ。眠くて仕方ないんだ」

気が抜けたのか、あくびをしながら引き返そうとする雅さんの顔色はかなり悪い。後から続く坂上さんは深いため息を吐きつつ、「気が向いたらな」なんて返している。この2人、似た者同士なだけあって気が合うのかもしれない。

それから、結局雅さんは学校を出た所で力尽きた。気が向いたらなんて言っていた坂上さんが率先して雅さんを背負い、帰るべき場所へと歩いていく。車に着いた時は雅さんが死んだとみんなが誤解して慌てふためいたけど、坂上さんの対応でなんとかその場は落ち着いた。

1つ気に食わないのは美波が僕達を見るなり真つ先に坂上さんに飛びついた事だ。兄である僕よりどこの馬の骨とも知らぬ男に抱き着くというのはいかにがなものだろう？ 雅さんが起きていたら大笑いしているかもしれない。

僕達は……僕はやつと取り戻せたんだ。あの時できなかつた事を、皆にはかなり迷惑を掛けたけど成し遂げられた。これでもう、心残りはないと……思ってしまう。

もしかしたら……僕はもう——十分に生きたのかもしれない。

2 2 . 少女

「ん——んん？」

穏やかな陽気の中、俺は柔らかな感触の上で目を覚ます。こうしてゆったりとした目覚めはいつぶりだろうか、誰かに邪魔をされる事もなく、自然に目を覚ます瞬間はこの上なく幸福だと感じられる瞬間だと俺は思う。

体を起こして辺りを見回す。俺はふかふかの布団で寝ていて、四畳半の室内ではガスストーブが時折じりじりと音を立てていた。

「……死んだか？」

そう思ってしまう程度部屋は綺麗で、思わず声に出してしまう。だが違う、いつも通りの感覚だ。頭の上に輪っかがある訳でもなく、膝から先が半透明なんて事もない。つまり、俺は生きている。

頭の上に疑問符を浮かべていると、唐突に部屋の扉が開かれた。缶詰とペットボトルを持った悠里だ。

「やっ」と起きた！ 痛い所はない？ 気持ち悪いとか変な感じがするとか——」

持っていた缶詰とペットボトルをすぐ脇に置いて、俺の手を取る。その慌て様に俺ま

で焦ってしまおうが、ここは1つはつきりとさせておかななくてはならない。あの時の事を。

「大丈夫だ。……それより、ここは？」

「ちよつと山に近い所の公民館よ、坂上さんが案内してくれたの。ここなら安心して眠れるだろうって。そんな事よりまずはこれを飲んで？」

ぐいつと押し付けられた水を口に含むと、わずかに血の味がした。口の中を切ったのか……倒れ方がまずかつたかな。

「すごい熱出してたのよ？ 今は引いたみたいだけど、しばらくは安静にしててね」

「できればな。で、皆は？」

「周辺の探索に出てるわ。大丈夫、ちゃんと安全は確保してあるから」

「ならないが——」

思ったより喉が渴いていると知った俺は、渡された水を喉を鳴らして飲み干している。半分程まで減った所で、扉の向こうからがたと煩い物音が聞こえてきた。感染者か？ 身構えた直後、扉が大きな音を立てて開かれる。

「りーさん！」

物音の原因は胡桃だった。息を切らし、血の付いたスコップを片手に俺と悠里を交互に見た胡桃は「すぐに来てくれ！」と叫ぶ。その並々ならぬ様子に、俺も悠里も慌てて

胡桃の先導で外へと出た。

「さむっ」

当然だ。外は以前より一層冷え込み、空からは真つ白な結晶がちらちらと舞い降りてきている。初雪……車のタイヤはスタッドレスだったかな。

子供達の遊び場でもあったんだろう。小さな公園も兼ねているらしく、鉄棒に滑り台、ジャングルジムなんかが敷地内に点在している。そして正門らしき場所から、3人の人影が歩いてくるのが見えた。

「……………りーさん！ 雅さん！」

美紀が駆け寄ってくる。

「住宅地を歩いてたらあの子を見つけて……………すごく寒そうにしてるんです！ しばらくここので……………」

「ああ、勿論だ。中に入れろ、イツキ達はどうした」

「神崎兄妹と坂上は別方向に行ってる、もうそろそろ戻って来るとは思うけど」

胡桃が現状を報告してくれる。それならまずはあの子の……………というより、美紀や由紀よりも小さな……………

「小学生くらいか……………？ 1人で歩いてたのか」

「はい、他に誰もいませんでした。あの子に聞いても1人だと言ってたのでとりあえず

保護したんです」

「わかった。悠里、毛布と何か食べ物を用意しろ。胡桃、疲れてるか？」

「いや、まだまだいける」

「よし」

建物に引き返そうとした時、いつぞやの如く腕を引つ張られる。

「雅さん！　しばらくは安静にして言つたじゃない！」

「できれば、とも言つたぞ。とりあえず耳貸せ」

逆に引つ張り返して耳打ちする状態に入る。

「いいか、あの時から子供一人でここまで生き残れるとは思えない。必ず誰かが保護してたはずだ、出来るのなら早い内に見つけてまた返してやりたい。……わかるだろ、それにはスピードが肝心だ。今なら発見地点から絞り込める」

「で、でも……雅さんは熱を出してたのよ!?　まるで胡桃の……あの時みたいに……」

「今は大丈夫だ。……クソツ、悪い、また突つ走るハメになるが許せよ。流石に子供じゃ状況が違い過ぎる」

「2人とも今は喧嘩してる場合じゃ——」

耳打ちのつもりが、いつの間にかかなりの声で言い合っていた。それを聞いていたのか、美紀が止めに入ってくる。

「いないの……」

か細い声だった。一言でその場が静まり返り、発言者である少女に視線が集まる。

「お母さんはもういないの。食べる物がなくなつて、探しに来たらお姉ちゃん達に会つたの」

事情を説明する少女の瞳は、曇りのない綺麗なものだった。ただ……生気が抜け、まるで人形のような印象を受ける。よく見れば瞳の色は蒼く、肌の色も白い事から純粹な日本人ではない事もわかった。

そしてどこか危うげな……触れてはいけない何かがある事もある。

「ねえ、お名前は？」

由紀が少女に名前を聞く。

「玖城、結楽」

その名前に、俺はずきりと痛んだ頭を押さえる。

「……雅さん？」

心配そうに悠里が袖を引っ張る。それを制して、なんとか言葉を頭の中で考えて皆に伝えた。

「全員中に戻れ。悠里、毛布と食べ物を持ってくれ。由紀と美紀はその子のフォローだ、後の事はイツキ達が戻ってから話す」

号令と共に、一同は建物の中へと歩き始めた。すれ違う時、不思議そうに俺を見上げていた少女と目が合つて――

「……ああ、そうか」

俺は、一番奥に秘めていた記憶を取り戻す。自然と涙が溢れ、視界は霞み、手は震えてくる。――出会わなければよかった。心からそう思った。そうじゃなければ、俺は……ようやく克服できたと思つていたのに……またこれだ。

「雅? どうしたんだ?」

俺が動かない事を不審に思つたのか、胡桃が回り込んでくる。情けない顔を見られた、そんな気すら起きない。

「どうしたんだよ……!?!? なんで泣いてるんだ!?!」

「思い出したんだよ」

「何を――」

「俺には妹がいた。そう、"いた"んだ」

それはもう何年も前の話だ。なのに俺は……まあ理由は分かる。耐えきれなかったんだろう。なんせ、目の前で死んだんだからな。4年前のクリスマスイヴ、あの交差点で。

――膝から崩れ落ちる。踏ん張るとか、手を噛み千切つても耐えるとか、そんな

手段すら取る暇もなく。雪が舞い降る灰色の空を見て、あの時の光景が鮮明に思い出される。

——妹は活発で、素直な子だった。兄としても誇らしく、兄妹仲も上々。むしろ仲が良すぎると両親に釘を刺される事もあった。

「今日はクリスマスだね」

リビングのソファで、もこもこの部屋着姿の奏樂は嬉しそうに俺の右腕にしがみついてくる。

「イヴ、ね。クリスマスは明日だよ」

「プレゼントとか、ないんですかね？」

「何が欲しいの？ できれば諭吉以内でお願いしたいんだけど」

うーんと考え込む奏樂はいつも通り愛らしくて。仮に予算以上のものが欲しいと言われても買ってあげるつもりでいた。

「そうだ！ お揃いのブレスレットとかどうかかな！」

「そんなのでいいの？」

「いいのいいの、お揃いである事に意味があるんだよ」

「そう、じゃあ買いに行くか！」

思い立ったが吉日。俺達はすぐさま出掛ける準備をして街へ繰り出した。寒風は肩を寄せ合つて耐え、電車とバスを乗り継いでもう少しで目的地のモールに着く、その交差点。

片側3車線のそこそこ大きなその交差点で信号待ちをしている間、奏楽は今か今かと信号が青に変わるのを待っている。そして、青になった瞬間——

「いっつ、お兄ちゃん！」

「ああ……待てっ！ 奏楽！」

一瞬の出来事だった。待ち切れず駆けだしてしまった奏楽と、信号の変わり目でギリギリ交差点に進入してきたトラックの衝突。ブレーキは間に合わず、ほぼそのままの速度でぶつかった。

握っていた手を引つ張るの間にも間に合わず、衝撃で吹き飛んで行つた奏楽を見て……俺は数秒の間呆然と立ち尽くしていた。

「——奏楽あ！」

正氣に戻つてすぐさま駆け寄る。酷い有様だった。これが妹なのかと認識できない程にぐちゃぐちゃになった身体、時折軽く痙攣する指。数秒で辺り一面にまで広がった血だまりの中で、俺はただ妹の手を取つて確信する。……即死だ。そうでなきゃ、今でも壮絶な痛みに苦しんでいるに違いない。

「奏楽……?」

呼びかけに答える事はない。それを良かったと思えてしまう自分を恨んだ。良くなかない、でも苦しむよりは……そう思つて。

——葬儀には沢山の人 came。奏楽の友人、学校の担任、部活の顧問まで。ありとあらゆる人達が奏楽の死を悲しんだ。それは俺も一緒に、でも悲し過ぎたのか、涙が出てこなかった。

……それを見て、誰かが言った。奏楽は殺されたんじゃないかと。両親はそれを真に受けて、お前が殺したんだと俺を恨んだ。そして俺自身も、あの時しっかりと手を握つて、引つ張つてやれば死ななかつたと後悔した。

それからだ、俺の記憶が消え始めたのは。俺の人格が、歪み始めたのは。

「——雅!? おい! 雅!! ……っ!」

頬を打つ音が辺りに木霊する。その衝撃は俺を正気に戻すのに一役買つてくれて、俺は霞んだ視界で胡桃の尋常じやない顔を見る。

「くる、み……すまない……しばらく一人に——」

「できる訳ないだろッ! なんて顔してるんだよ! この世の終わりみたいなの……そんな顔、見たくないよ……」

「……悪い」

「ほら、中に戻ろうぜ？」

肩を支えられながら、俺達も建物の中へと入っていく。公民館独特の広い室内では毛布を羽織つて乾パンを齧る結菜と、つまみ食いしようとする由紀を叱る美紀の姿。その後ろを通り抜けて、俺は元の部屋へと戻った。

「何があつたんだよ、あたしで良ければ……聞かせてくれないか」

布団で横になった俺に、胡桃が優しく問いかけてくる。

「いや、これは俺の問題だ……」

「ふざけんな、あたしが信用ならないってなら話は別だけど、一人で抱え込もうとするなよ」

「信用ならない訳じゃない。ただ……いや、いいか」

今更そこまで気を使う必要はないと、改めて思う。そういえば俺と胡桃は“約束”もした仲だ、これくらいの情報共有はしておいても問題ないだろう。

「ただ口外しないで欲しい、悠里に……嫌な思いをさせるかもしれない」

「……わかった」

俺は全てを話し始めた。奏楽の死、両親からの迫害、それから俺がおかしくなつていった事。全てを。胡桃は途中から涙を流しつつも聞いてくれた、優しい奴だと改めて

感じる。

「そっか……」

「そういう事だ。ありがとうな、あの時俺を殴ってくれて。そうでなきや、俺はまた……前の状態に戻ってたかもしれない」

「いや……むしろごめん、もつと他に方法があったかもしれない。でも、そうだな……ちよつと、あたしの我儘だけど……させてくれ」

何をされるのかと一瞬体が強張ったが、布団から起こされると優しく抱き締められる。こんな事、前もあつたな。思えば、俺が本当にピンチになった時は胡桃に助けられている。

そのまま数分が経つと、胡桃は俺を解放した。

「ま、まあまた何かあつたら言ってくれよ……いつでも相談に乗ってやるから……」

「ああ、ありがとう」

「う、うん……じ、じゃああたしりーさんの手伝いでもしてこようかなー」

顔を赤くして部屋を出て行ってしまふ胡桃を見送り、俺は頬に残った柔らかな感触を確かめる。……やっぱり、着痩せするタイプだな。

なんとなく最初に抱き締められた時の事を思い出す。確かあの時は、俺が半狂乱状態になっていた。そんな俺を正気に戻す為、シヨック療法とでも言うのだろうか。だが確

かに、俺は胡桃に抱き締められて平静を取り戻したんだ。

そう考えれば、俺と胡桃は切っても切れない間柄になっていくかもしれない。もしもあいつがこの先迷う事があるとしたら、その時は全力でフォローしてやろう。

布団で一人物思いに耽っていると、扉がノックされる。俺はそれに答えると、ゆつくりと扉が開いて由紀とその後ろにくつつく様になっている。結楽の姿があった。

「みゃーくん、今いい？」

「ああ、何か用か」

「結楽ちゃんね、この中で一番偉い人に挨拶したいって言って……」

「それで悠里が見当たらないと……？」

「ううん、結楽ちゃんがみゃーくんがそうじゃないかって言ってるの」

なるほど、先程指示を出していたのを見ていたか。とはいえ、この学園生活部の部長は悠里であり、俺はただの途中参加した一般人に過ぎない。時折指示もするが、それは年長者であるが故だ。

「悪いが俺じゃない。一番偉いのは悠里だ、茶髪で髪の毛長いお姉さんがいただろう？」

出来るだけ優しい声で言うと、少女は首を振った。

「ううん、多分この中で一番えらいのはお兄さんだと思うの。だって、みんなお兄さんの話ばかりしてるもの」

お兄さん。その一言で思い出したばかりの記憶がまた呼び起こされる。軽い頭痛に眉を寄せながらも、なんとか耐えた。

「いや、違う。あくまでリーダーは悠里だ」

「みゃーくん、あのね！ 多分さっきの事……心配してるんだと思う……」
「さっつき……」

そりやまあ、見られてない訳ないか。少なくとも由紀とこの子はさっきの俺の異常を見ていた。それが気掛かりで何かしらの理由を付けて会いに来たって事か？ だとしたらよく頭の回る子だ。見た目じゃ小学4年程度にしか見えないのに。

「そうなのか？」

試しに聞いてみると、少女は小さく頷いた。

「それなら心配はいらない……と思う。少し、昔の事を思い出したただけだ」

「でもみゃーくん、辛そうな顔してるよ？」

「……だろうな。流石にこれは俺でもキツイ。だが、こんな時にへばってられないんだよ」

由紀は不安そうな顔で俺を見ている。そんな由紀に肩を抱かれた少女も、揃って同じ様な顔だ。いつか、君みたいな妹がいたと。それから――

「――っ、悪いがしばらく一人で考えさせてくれ」

言えなかった。何故だかはわからない。前よりも死が近くにあるこの世界で伝えてしまえば、由紀達まで妹と同じ結末になってしまふかもしれない、そういう風を感じてしまったのか。どちらにせよ、これは俺の問題だ、前みたいに忍や尊さんは近くに居ない。これは俺だけで……どうにかしなきゃならない問題だ。

ぱたりと扉が閉められる。相変わらずじりじりと音を鳴らすストープの上にはやかんがあり、もくもくと湯気が立ち上っていた。

俺は再び布団の中に閉じこもると、目頭を押さえる。——思い出してしまふ。あの瞬間を、あの光景を、生温かな血の池に突っ伏していた自分と、既に人としては見れなくなってしまったものを。

思い出す度、どくどくと体中に衝動が走るのがわかる。憎い、殺したい、救えなかった自分を。忘れていた自分が憎たらしい。

黒い感情に支配されナイフに手が伸びそうになる度、悠里や皆の事を思い出してなんとか思い留まる。まだ死ぬない。じゃあ俺はどうやって……償えばいいんだ。同じ問答を幾度となく繰り返す。何度も、何度も繰り返し返して……自分の心までじりじりと擦り減っている様に感じた。

いつの間にか寝入ってしまったっていらしい。時間を無駄にしたという感覚と寝過ぎたのか軽い頭痛に苛まれる中、コートやバッグなどいつもの装備を身に着けて部屋を出

る。

「よう、寝坊助」

「坂上……」

「おはようございます、雅さん」

まず目が合ったのは部屋を出てすぐの所に座っていた坂上と、イツキの妹である美波だった。腕時計を見ると時刻は午後12時を回つてすぐ。最初に起きた時は時間など気にしていなかったが、坂上の反応を見るにそれなりの間寝ていたんだろう。

「探索は終わったのか、状況は？」

「それなりの物資が残されたままだった。だが使える物は少ない、殆どが腐つてたからな。ここより降りた場所にスーパーが一軒ある、調達が必要だな」

「なるほど……」

見れば、悠里と美紀、イツキ以外のメンバーは揃っているようだった。それぞれに一瞥しながら、空いている場所に座る。そういえば武器が見当たらない。

「武器なら今イツキがメンテナンス中だ」

「ならいい。悠里と美紀は？」

「悠里さんと美紀さんは車で昼食の準備をしています」

美波が残る2人の行方も教えてくれた所で、今は待機が一番だとわかった。

どこからか拾ってきたのか楽しそうにオセロで遊ぶ由紀と少女を見て、またずきりと頭痛がする。それを察したのか、胡桃の死線がこちらを向いた。

「なあ雅、大丈夫か？」

「問題ない」

正直な所、問題は大有りだった。頭痛の度に眉を寄せていては怒っているとは勘違いされてもおかしくない。かと言って無表情で通そうとしても、突発的にくるこの頭痛は耐え難いものがある。それもこれも……あの子の動作や笑顔1つ1つごとに、だ。

「……イツキの様子を見てくる」

「あ、あたしも行く！」

「なんだ、何か用でもあるなら俺は外すが」

「ち、違うって！ いいから行くぞ！」

胡桃に軽く怒鳴られて、これ以上何か言うのは避けた。胡桃なりに心配してくれているのだろう。

玄関でブーツを履いて、違和感に気付く。靴紐が異常に緩んでいた李、生地感覚が違ったり……そもそも、前はこんなに綺麗じゃなかった。

「……誰だ俺の靴洗ったの」

「ああ、リーさんだな。流石に汚過ぎるからって昨日の夜から夜なべして洗ってたんだ

ぞ、あとそのコートも」

「……そんなに臭かったのか」

「臭いというより……ほら、汚い物身に着けてほしくないだろ」

「そういうえば、昨日も俺だけ風呂に入れていない。もしかして……実は今結構臭かったり……?」

「なあ、俺臭いか?」

「え!?! ま、まあほら……このご時世水も貴重だからなあ」

「臭いんだな……」

「いつそ川でも見つけたら飛び込んでこようか。石鹼とかは持ち合わせてないが、誰かのを借りれば……誰から借りればいいんだ?」

「川って、どこにあったっけ」

「いや早まるなよ!?!」

肩をがっしりと掴まれて揺さぶられる。やめる今頭痛が酷いんだ。

「違う、洗ってこようって思っただけだ。ただ問題は石鹼を誰から借りるかで悩んでる」
「せ、石鹼? シャンプーとボディソープならあたしの貸すけど……」

「このご時世そんな物を……まあそれ以外に使い道もないしな。借りれるなら貸してくれ、使った分後で返せるものじゃないけどな」

「別にいいけどさ……」

とりあえず全身洗うまでは誰にも近付かないでおこう。笑顔で接してくれていても実は臭いと思われるのと知った今、まともに話せる気がしない。

一大事ありながらも、なんとかブーツの紐の調整が終わり外に出る。敷地内には車があり、パンクしたタイヤは取り外されジャッキで角度の修正がされていた。すぐ左から音がしたと思えば、イツキは建物のすぐ傍でスコップや俺の斧を磨いている。

「雅さん！ 起きたんですね！」

「ああ、世話掛けたな……って」

ただ磨いているだけではなかった。見ればすぐ近くには井戸水を汲み上げる為のポンプもある。相変わらず俺の斧は微かに赤黒いままだが、イツキから見ればピカピカに磨き上げられているんだろう。

「胡桃、とりあえずシャンプーだけ貸してくれ」

「相当気にしてるんだな……待ってるよ、今取って来るから」

車の方に歩いて行った胡桃を見送り、今度は銃の整備に入ったイツキの様子を眺めてみる。

「あの……どうかしたんですか？」

「いや、特に何も無い。やる事が無くて暇なんだ」

「あー、そうですね……雅さんいつも動き回ってましたから」

「ところでイツキ」

「どうしました？」

「俺臭いか？」

「……………いえそんな事ないですよ」

なんだその間は。よし決めた、胡桃には悪いがボディソープも貸してもらおう。そう決心し車の入り口で待っている胡桃を呼び、事の旨を伝えると快諾してくれた。

そしてイツキが武器の整備をする横で服を脱ごうとした所で「お昼の後でいいんじゃないですか……？」と突っ込まれたものの、俺は断固拒否させて貰った所胡桃に止められた。曰く、「片手じゃ届かない所もありそうだから」らしい。

それに対し俺の腕の柔らかさを熱弁している所で、昼食の時間となり一旦お開きとなった。こうして俺の洗濯の機会は失われたのである。

23. 拠点

昼食後。玄関先で冷たい井戸水を被り体を洗っていると玄関の引き戸が開かれる。生憎俺は頭を洗っている途中で、誰が来たよりかも泡が目に入る方が嫌でとりあえずひたすらに泡立てて汚れを落とそうとしていた。

「……誰だ」

近付いてくる微かな足音。恐る恐るといった感じで今の所誰の音かは判別できない。だが、その手は優しく俺の背中——銃創がある場所へと添えられた。一応防水用の絆創膏を貼っているおかげで沁みる事はないが……

「流石に無言はやめてくれないか、肝が冷える」

「ごめんなさい、声を掛けようとしたんだけど背中を見たらなんだか……」

聞き慣れた声、悠里だ。

「何しに来た。手伝いはいららないぞ」

若干冷たく当たってしまったのは自分に余裕がないからだろうか。こうして目を閉じている間、嫌な記憶が続々と想起される。奏楽の事だけじゃない、その後も、そのまた後も、脈略のない……忘れていた記憶が次々と突き付けられる。今まで全てを忘れての

うのうと生きていた自分を戒めるかのように。

「お願い、手伝わせて？ それに、皆で話してた事も伝えておきたくて」

「はあ……それならそうと早く言え」

こうして2人きりになるのはそうそうない機会だ。ついでにこの際溜め込んでいる鬱憤も不安も、全部吐き出させてしまおう。

3回目にもなる洗髪を終えて、久し振りにさらさらの髪に戻る。今まであまり気にする余裕はなかったが……髪もかなり伸びたな。後ろ髪は服の襟まで届いてるし、前髪も両目を覆ってしまっている。まあ昔はこのくらい普通だったし特別うざったく思う訳でもないが。

「それで、話してた事ってなんだ？」

濡らしたタオルにボディソープを付けて軽く泡立てる。悠里にはもう1枚を渡して背中を任せた。ちなみに下半身は公民館にあった奇抜な柄をした短パンを履いている。

悠里は優しく左肩を擦りながら、しばらくの沈黙の後ようやく口を開いた。

「結染ちゃんのお家、結構大きいらしくて……扉で囲まれてるそうだしとりあえずそこにしばらく避難しないかって」

「……で、その子の了承は取れたのか」

「うん。というより結染ちゃん提案なの。皆でこれからどこに行くか相談してたら私のお家に来ない？ ってね」

「それは願ったり叶ったりだな」

周囲が囲まれているならバリケードを敷設する手間も省ける。この人数なら本気を出せば整備など一日で終わらしてしまおうだろう。

「それと……」

「なんだ？」

「昨日から胡桃の様子が少し変で……妙にそわそわしてるの」

次は胡桃か……美紀の問題もまだ片付いていないっていうのに、厄介事は次から次へとやってくる。だが、胡桃の件は無視できない。あいつは感染者だ、いくらワクチンを打ったとは言え絶対に発症しないとは言えない。

それは俺も同じ事で……いくら嘔まれてすぐに縛って血流を止めたとしても、微量のウイルスが漏れてもおかしくはない。それに切り落としたのは5分程経った後——
その後にワクチンを見つけて接種したが……

俺が考えていると、悠里は心配になったのか俺の顔を覗き込んでくる。

「ん？ ああ、大丈夫だ。出来る限り優先的に進める」

「いえ、あの……大丈夫？ すぐ体が冷たくなってるわ……」

「まあ、冷水浴びてるからな」

話している間にも手早く体を洗い、残るはこの短パンの下……なんだが。

「悠里、悪いが中で待つててくれるか。背中も終わつたんだらう？」

「終わつただけど……どうしたの？」

「これから下も脱ぐんだが」

「あつ、そ、そうよね！ ごめんなさい！ じゃあ私中で待つてるからー！」

耳まで真つ赤になつた悠里は手に泡が付いたまま光の速さで建物に突つ込んで行く。扉を開け切る前に体を滑り込まそうとしたのか、途中でどこかをぶつけたらしく「あいた!」とか叫んでるし。全く初心な奴よ、この程度で動転してたらポロポロの服を着たあいつら相手からどう身を守るのか。

手早く、誰かが来ない内にくまなく洗い、冷たいとかを無視して冷水を被る。そして全身に泡が残つてないか、どこにもヌメリがないかを確認してささつと水気を拭き取り服を着て……

「……なるほど、あの匂いの正体はこれか」

自分から甘い匂いにする事に違和感を覚えながらも、胡桃から借りた一式を持つて戻つた。だが胡桃や美紀、悠里達の前に出た瞬間髪が乾ききつていないなどと言われ、3人掛かりでストープの前に座らされ頭をゴシゴシと擦られる事になる。

「……デカいな」

「ええ……すごく大きいわね」

「こんな大きいの初めて見ました……」

「……確かにそう言いたくなる気持ちもわかるが、やめてくれないか」

胡桃、悠里、美紀の三者三様の反応に呆れながらも、俺も同じ感想を抱く。俺の髪が乾いた後、俺達は全員で少女の家に来ていた。移動するなら早い方がいいという坂上の助言により、とりあえず全員で一気に行く状況になってしまったのは悔やまれる。時間は掛かろうと、まずは先遣隊を送り周辺の状況を偵察するのが無難だ。

とは言え、道中数体の感染者と遭遇したが難なく辿り着けたのも事実。今回は運が良かった。

「立派な門だな、これなら今まで食い止められたのも頷ける」

坂上が重厚な門を叩くと、微かに軋みながら門が開く。

「確かに、これならバリケードも最低限で問題ない。イツキ、銃を抜け。俺と坂上は敷地内の見回り、お前は悠里達を先導だ。クリアリングをしつかりな」

「了解です！」

「くれぐれも汚し過ぎるなよ」

門をくぐり、一番最後に入った胡桃が門を掛ける。門も立派なら鍵も立派な物で、ト
ラックでも突っ込んでこない限りは破られそうにもない。

「わからないな。何故過剰に棲み分けするのか」

「……何の話だ」

建物の中に入っていく皆を見送る坂上は、2人きりになったのを見計らってか苦言を
呈する。

「全員で行けばそれだけ目も増える、戦えずとも見張りにはなるぞ。だということにお前
は戦闘班だけでまず先遣隊を派遣しようと言った」

ああ、ここに来る前の会議の事か。

「当たり前だろう。未知の場所に行くのに準備もせず猪突猛進して全滅なんてしたらど
うするんだ？ 男だけの一団ならともかく、俺達の男女比は目に見えて女性有利だ。仮
に戦闘が出来る胡桃ですらも単純な力関係なら男に負ける」

「先遣隊が戻ってくるまでに襲撃されて全滅する可能性も考慮に入れろ。それに、今回
はここまでの道を知っているのはあの子供1人だけ、子供を護ると言う意味でも見張り
の目は多いに越した事はない」

「確かに一理ある。あんたが元のグループにいた時はそれが普通だったんだろうな」

少しばかり険悪になってきた、このまま立ち話する気にもなれず、俺は敷地内を左回

りに歩き始める。

この中で一番の年長者は最早俺ではなく、昨日今日に入って来たこの坂上だ。だからと言ってリーダー権が悠里からこいつに変わる事はある得ない。今回ばかりは坂上の言い分に悠里とその他の女性が賛同したからではあるが……

「効率的なのはいい事だ、それだけ無駄も減る。だがな、いい加減その自己犠牲精神と周りの気持ちを考えない行動はやめた方がいい。お前が寝ている間にあいつらはぺらぺらと喋ってくれたが、新しい話を聞く度に頭を抱えそうになった。効率主義も考え物だな」

「……耳が痛いね。生憎俺は不器用だ。いかに悠里達を護るか、一切の危険を感じさせずに生かすか。こんな世界でも……どれだけ奴らの心配をせずに済むかしか考えてない」

「その結果がこれだ。お前は常に壊れかけで、ふとした事で過去に囚われその度に奮起する。今までにどれだけ自分の命を危険に曝してきたかわかるか? 『いつてらっしやい』、としか言えない身にもなれ」

「……坂上の言い分は間違っちゃいない。俺は悠里達に謝っても足りない程心配させた。じゃあどうすればよかつたんだ? 悠里に、美紀に、重い物を持つにも苦勞する由紀に武器の使い方を教えさせて前線に送り込めども?」

イツキと圧倒的な火力が手に入ってからは大分マシになったが、それでもこの混沌とした世界を生き抜くのは辛い。弾も無限じゃない、俺の体力も無限じゃないどころか人より劣る。無理に無理を重ねて、ここまで生きてきた。

「っ！ じゃあどうすればよかつたって言うんだ……？」

怒鳴りそうになるが、なんとか堪えて聞く。そこまで言うからはさぞ素晴らしい考えをお持ちなんだろう。俺なんかじゃ考えもつかない、その手があつたかと感心せざるを得ない手段が。

「さあな……俺にはわからない」

「ふざけてるのか」

坂上はポケットから煙草を取り出すと、ジツポライターで火をつけ深く吸う。その顔は遠目から見れば無表情だが、近くで見て、こうやって話しているとどうも哀愁が漂っていた。

「いいや、大真面目だ。個人の能力、精神力、性格。そのどれを見ても今以上にいい結果はそうそう出せなかつただろう。勿論、全問正解と言ってやれるものでもない。今まで誰も欠ける事なく生きてこられたのは間違いなくお前と、そんなお前を支えてきた仲間のおかげだ」

改めて煙草を口に咥え、大きく吹かす。副流煙が鼻をついて少し咳き込むと、坂上は

申し訳なきように微かに距離を取った。

「お前は人を導ける程器用じゃないし、力もない。それは自分が一番わかつてるんじゃないか？」

「……わかつてる、元々俺は——誰一人として、自分すら守れない」

「そういえば忍も『あいつはどれだけ最悪な状況でも諦めず、常に最善の道を取る為に使える物なんでも使う奴だ』って言ってたな。お前は自分すらモノとして見た訳だ」

「……何かおかしな所でも？」

「いや、むしろ称賛されるべき精神だろうな。……だが惜しい、もしお前にとって心から信頼できる人間が居ればまだマシンになってたのかもしれない」

信頼できる人間……そんなもの、とつくの昔に離別している。一度の再会は叶ったとしても俺達も大分移動した、また会えるとは思えない。

「お前が求める人間は思いの外近くにいるかもな」

坂上がニヤつきながら煙を明後日の方向に吹かす。あまりにも不自然で、俺はある種の期待を込めて煙の方へと視線を送る。だが、その先にあるのは無機質な灰色の壁。そこに忍が立っている訳もなく若干落胆してしまう。

「……何もないじゃないか」

「的確に俺達の事を追ってきたらそれはそれで怖いだろ。でもこうも言ってたな、『地図

を見ればあいつがどういふルートを通るかわかる』と」

「だからと言って此処がわかる訳——」

「そうだな、わからないに決まってる。だが……手掛かりや何らかのアクションは取ってるんじゃないか。俺達も道中感染者を屠ってきたが、死体の処理はしてない。精々物陰に隠すか道端に寄せるか。それだけでも道標にはなるだろう。……無線機とかは使ってなかったのか？」

無線機……使ってたな。普段使い用と、緊急時のチャンネルなんかも決めていた。

バッグを下ろして中から無線機を取り出す。バッテリー節約の為、滅多に使っていなかったが……とりあえず電源を入れて普段使っていたチャンネルに合わせてみる。

だが勿論都合よく誰かの声を拾ってくれる事はなく、微かなノイズすらも拾わない。次に緊急用のチャンネルに合わせてみると——

『———こ……ら、………第3………どう中………り返す、………第3警戒………せいにてこう………』

「!？」

大分酷くノイズが混じり上手くは聞き取れなかったが、頭の中で音声を何度も反復させて理解しようとする。

こちら第3警戒………態勢か？ 第3警戒態勢で………行動中………？ 第3警戒態勢

は昔俺がノリと勢いだけで決めた符号の1つだ。大まかに分けて5つあるその中の3つめは……

「意味は分かるか？」

「第3態勢は確か……『隠密行動を維持しつつ索敵』だったか……警戒を挟むとなると……厄介なのに絡まれてるな」

「感染者じゃないのか？」

「感染者を相手にする時は第4と第5だったんだ。第3以降は……主に人間になる」

端的に解釈すれば、恐らく追われているんだろう。何かしらハマをしたか、もしくは裏切られたかで……いや、単純に第3勢力に絡まれている可能性もある。

『……ちら、ウエスタ。…3警……勢……中、アテナ……告ぐ。…つさと迎えに……!!!』

「……ああ、忍だなこれ」

大それた符号で呼び合うのはミリオタの常だ。どこから通信しているのかはわからないが、山奥でも届く範囲となると……本当に近い所にいるな。

「(ちらアテナ。今どこにいる?)」

『………?!? ……せーぞ馬鹿………ひどく………とも………えない』

「それはこつちも同じだ。簡潔に、今の場所を言ってくれ。現在地はどこだ？」

『……パーだ。ドラ………トアとへいせ………た………いる』

「ノイズが酷い。だがある程度わかった。迎えに行くから待つてろ」

『対……ん……い………いよな』

最後に聞き取りづらくとも下らない事だとわかる言葉を告げて以降、無線機にはノイズすらも入らなくなった。

「……最後何て言ったんだ」

「聞かなくてもいい。まあ無意味な事は言わないだろうから頭の隅に置いておこうか」

流石に坂上も察したのか、最後のひと口を吸うと携帯灰皿に吸い殻を突っ込んで無言になってしまう。

……何故こんな時に下ネタを言うのか？ そんな事は分かり切っている。これもヒントだからだ。とりあえずまた音声を通して反復させて聞き取ると、ドラッグストアの併設されたスーパー、その対面にいるらしい。

「とりあえず見回りをして悠里達に経緯を話す。それから……」

「また1人で行く気か？」

「……いや、今回は2人で行く。俺と胡桃だ」

「ほう、なんでまた神崎や俺じゃないんだ？」

「まあこれは最悪の状況なんだが……客を連れてきた時用だな。銃を扱える人員を配置

しておけば安心感も違う」

本当の所は他にも理由は……わざわざ言うまでもない。余計な情報を与えれば場を混乱させてしまう。それより今は手っ取り早く見回りを終わらせて悠里達に報告しなければならぬ。

「ざつざつと終わらせよう」

「フツ……そうだな」

斧を持ち直し早足で、それでも入念に建物の影や塀を確認していく。塀にも穴はなく、ヒビ一つとして見当たらない。血飛沫もなく、敷地内には俺たち以外の足跡もなかった。

……ここなら当分安住できるかもしれない、そんな風に安心してしまふ自分がいる。だがその安心が油断を生むのは百も承知だ。いついかなる時も警戒を解かず、最悪の状況を予測し続けなければ……いざという時にどうすればいいかわからなくて誰かを死なせるハメになってしまえば、俺は一生後悔する。

敷地を一周して、イツキ達が入っていった玄関に向かうと、中からは楽しそうな談笑が聞こえてくる。どうやら中も問題なかったらしい。

「お、戻って来たな」

靴を脱いで声のする方に行くと、皆明るい表情で出迎えてくれる。こんな顔を見たの

は初めてかもしれないな。

「外は問題ない、それはそうとして……皆に相談がある」

明るい空気が一瞬でどろどろとした重苦しい空気に変わったのがわかった。それが顔を見合わせ、聞いていいものかもわからずおろおろしている様子だ。

横に居た坂上が落ち着かせるために「大丈夫だ、とりあえず座ってくれ」と一言告げると、それぞれ高そうなソファに腰を落ち着かせる。俺も坂上に促されるまま、皆の正面にあつたスツールに腰掛けた。

「無線機に連絡が入った。……忍がこの近くにいる」

「雅、結論から入るのはいいが言葉が足りないぞ。それだと追っ手が来ていると思われなくても仕方ない」

「……そうか、それもそうだな。かいつまんで話すよだな？　忍が昔俺達で使っていたチャンネルでコンタクトを取ってきた。何かに追われているみたいでこの近辺にいるから迎えに来て欲しい、と」

自分で言ってみると、情報不足なのが痛いほどわかる。これじゃ一度は逃がしてくれただ忍が気が変わってもう一度追ってきていると解釈されても仕方ない。

「それって……どうなんだ？」

案の定、胡桃が首を傾げて悠里やイツキの方を見る。2人もこれだけではなんとも判

断できず、同じく首を傾げるのみだ。3秒も経たない内に、悠里がゆっくり立ち上がって俺の方に近付いてくる。

「雅さんはどうしたいの?」

まさか俺に判断を委ねると? 俺にそんな度胸はない。もし悪い方向に転べば……

ここにいる全員を危険に曝す。

「……多数決で決める。勿論俺以外の全員で」

「それはそうだけど、まず雅さんがどうしたいか聞かなくちゃ。だって今まで一緒に居た仲間なんでしょう?」

それはそう……なんだが……こればかりは流石に……俺が口に出して情に訴えかけるなんて真似はしたくない。内心どうするかなんてもう決まっている。今まで生き抜いてきた親友が助けを求めているなら断る要素なんてどこにもない。

だがもし、俺を騙して捕縛しようとしているなら——

「……俺は行きたいと思ってる。ただ、騙されたと分かった瞬間……殺すしかない」
「こ、殺すって……? 本気?」

「勿論本気だ。もつとも、既に無線機で応答してしまっている以上範囲は絞られている。……俺達がこの先も安全に生きていくのなら、忍だけじゃない——関係するものを全部殺して回る……と言いたい所だけだな。それを成し遂げる労力を考えればいつそ俺

が出向いた方がいいのかもしれない」

悠里だけじゃない。胡桃や美紀までもがほぼ同時に息を呑んだ。

「そんな……」

「考えてもみろ。俺達……いや、俺は追われる身だ。死ぬ事を前提にしても、俺一人で全員が助かるのなら……」

「ダメッ!!」

悲壮な静寂が当たりを充滿する中、悠里が叫ぶ。

「そんなの……ダメ……」

今にも泣き出しそうな声色で顔を覆う悠里だが、俺の頭の中には気の利いた言葉なんか一切出てこなかった。一発で説得できる言葉も、あるにはあるだろうが……それはこの一団と共にすると決めた時のポリシーに反する。だからこそ——俺はただ無言で泣きじやくる悠里を眺める他なかった。

「で、でもまだ騙されてるって決まった訳じゃないんだよな!」

咄嗟に胡桃が助け舟を出してくれる。とりあえずこの空気を変える為にも乗っかってみるか。

「ああ、確率としては五分五分だがあいつはあまり人を騙す性格じゃない。もし人質を取られたとしても、まず逃げるか死ぬかを選ぶ奴だ」

「ならまだ騙されてる可能性も低いな!!」

「……今はまあ、会ってみるまでは分からないとしか言えない。だがもし本当なら、忍が仲間になれば、俺達にとってプラスにかなり得ない状況だ」

「本当に……大丈夫なの?」

悠里が涙声で俺の胸に縋る。子供の様に、まるで俺以外頼る存在がいないように……額を力強く押さえ付けて、絶対に放さないという意思があるような気がする。

「……嘘は言いたくないから正直に言う、五分五分だ。でもきつと……いや、絶対に一度は帰ってくる。いつも、ごめんな? だけど、俺はこういうやり方しかできない」

「交換条件……」

「……はい?」

「帰って来たら、なんでも言う事2つ聞いて貰うから」

「……なんだそれは? なんでも? 言う事を2つ? ……いや、いやいやいや……いや、逆に何を言われるんだ?」

頭の中であらゆるシミュレートが始まるが、殆どを理性が弾いていく。悠里が……今までの言動や思考から言いそうな2つの事……いやわからない。仮にわかったとすればそれはそれで深い関係だ。だが1つ言えるとすれば、俺達は一緒に行動し始めてそう長くはない。その中で2つの命令があるとすれば?」

……いや全くわからない。夜遅くまで起きている事の禁止？ それともあれか、きちんと3食食べる事か？ わからない、わからない……

「……ちなみに内容は」

「教えない。でも帰って来たらしつかり聞いて貰うから」

どうしたらいいかわからず、つい坂上の方へと視線を送る。だが帰って来るのは「受け入れる」という思念の混じった無言の頷き。胡桃や美紀、果てに由紀までも目配せするがそのどれもが仕方ないという感じの頷きだった。というか胡桃に至ってはなんか頬を赤らめていたが……いやその今にも泣きそうな顔はなんだ？

「わ、わかった。俺に出来る範囲内の事であれば……」

「……約束だからね」

最後に小指で指切りげんまんをして、俺と悠里は離れる。それ以降、どれだけ採決を取っても迎えに行く、という賛成票が満場一致となった。

24. 合流

出発の時は会議から僅か10分後だった。いくら断つても門まで送ると言い張り、俺が折れるまでに6秒。その理由はいつもと違ふ、ただならぬ雰囲気は漂っていたのもあった。

「それじゃ、行ってくる」

「うん、いつてらっしゃい」

必ず帰つてこい。言葉には出さずとも、皆の面持ちから言わんとしている事は痛い程伝わってきた。胡桃に目配せをすると、静かに頷いてくる。俺もそれに応える様に、しっかりと頷いて見せた。

俺が門を開けようと斧を背負う前に胡桃が片手で重厚な門を難なく抜いてしまう。これには驚いたが、流石に今まで修羅場を潜ってきたのもあつて色々鍛えられているんだらう。それをイツキに手渡すと、予想より大分重かつたのかふらついてしまつてい

る。

「雅」

2人で堀の外へ出て門を閉めようとした時、坂上が俺を呼んだ。

「……わかっているとと思うが、忍は今追われている身かもしれない。こつちが大胆な動きをすれば相手も勘づくだろう、まあお前なら心配ないだろうが……慎重にな」

「ああ、勿論だ。十分……」

胸の奥から溢れる感情に気付いてしまう。これがなんなのか、幾重にも折り重なり絡み合ったそれは、一言で言い表すならば……確信？ いや、これは……喜んでいいのか。「いや？ ……この状況、俺にとつて千載一遇の好機とも言える」

「へっ、今まで以上に悪い顔してるぜ、雅」

胡桃からの軽口に対して、俺は勝手に浮かんでくる笑顔を向けた。それはもう、昔忍にも言われた事がある——俺が確信した時。それはそれは誰にも負けずとも劣らない下種な笑みを浮かべるらしいからな。

「フツ、なら安心だ。この家にもまだ保存食は残っているらしい。もつとも、調理しなければ食べられないものばかりではあるが……それは彼女たちが何とかしてくれるだろう、今夜は是非とも『祝勝会』を挙げるとしようか」

そりやあいい。出来る事なら肉がたらふく喰いたい所だったんだ。

「それじゃ……雅さん」

悠里はゆっくりと近付いてくる。何をするのか？ そんな思考の内の一瞬で距離を詰めて俺の懐に入り込んできた。その光景に、胡桃や美紀、果てには由紀までもがそれ

ぞれ驚きの表情を見せている。

「……待つてるから。必ず帰って来て」

「あ、ああ……大丈夫だ、どんな事があるうとも必ず帰る。……だから、待つていてくれ」
イツキは微笑みながらその光景を見ていた。坂上はと言えば、隣にひっ付いていた美波の目を塞いでいる。いやおかしいだろ、一番大事な最年少の子がフリーだぞ。確かに今は意味が分からないかもしれないが将来の事を考えればだな……

「い、いつまでくっ付いてんだ！ 行くぞっ！」

いつ離れさせればいいのかもわからず硬直していると、気を利かした胡桃が俺の首根っこを掴んで無理矢理引き摺ってくる。ありがたい、ありがたいが少々乱暴すぎないか？
とうかさっきの門といい、あの細腕からどうやってここまでの力を出してるんだ。
ずるずると門の外まで連行されながら、なんとか扉に斧を引つ掛けて半開きの状態にまで閉めていく。

「胡桃、そろそろ放してくれないか……？」

「うっさいー！」

怒ってらっしやる？ どうやら気遣いで離脱させてくれた訳じゃないらしい。ぐ
いっと一瞬強めに引つ張られると、今度は脇腹に腕を通して半分担がれた状態になる。

「………案外軽いんだな、雅って」

「そりやまあ、腕一本ないし食事も制限してるからな」

「それって、あたし達に食料回す為か？」

「……それもあるが、単に消化不良で吐くからだ。無駄にするなら食べない方がいい。というか俺はこれでも50kg軽く超えてるんだが、軽いか？」

「まあ、片腕つてのを加味しても……軽いんじゃないかな」

胡桃の物差しで見れば軽いのか、それとも本当に俺が軽いのか。どちらもというのもあるだろうが胡桃的には思う所があるのかもしれない。それを示唆するかの如く、胡桃の声はどこか感慨深げというか、切なさが混じっている気がした。

「いつ降ろしてくれる？」

割と真面目に2回目を聞いてみると、今度はすんなりと放してくれる。斧も使つてようやく立ち上がる俺を見て、胡桃は若干悲しげな顔をした。

「なあ、いけるのか？ ここんとこずっと無理して、休む暇もなかったのに」

「いけるかいけないかの問題じゃない。いくしかないんだよ。それに、忍と合流すれば俺以上の戦力になる……死なれたら大損だ」

「戦力になるから、騙されてるかもしれないのに迎えに行くのか？」

——わかって聞いてるな。さっき話した時も俺はしっかりと個人的な感情も込みだと匂わせたのに。改めて俺に言わせる意味があるんだろうか。

「……戦力になる、それ以外にも思う所はあるさ」

「昔の仲間だったから？」

「……………そうだな。やっぱり親友は放っておけないんだよ、何度も救われた恩もあるし、何より俺自身として見捨てたくはない。お前や悠里達と同じくらい大切なんだ」

「そつか。——なら急ごうぜ、お前の恩人ならあたし達の恩人でもある。そこかしこで煙草吸われたら嫌だけど……………」

「あいつは坂上程へビーじゃない、日に2本も吸えば多い方だ。まあストレスが溜まれば本数も多くなるだろうけどな。とはいえ、まあ……………胡桃にそう言つて貰えて嬉しいよ」

羞恥心を堪えながらもなんとか面と向かつて感謝の意を述べると、胡桃も若干照れながら笑つてくれた。……………そして、どちらからともなく歩き出す。最初はいつもの歩幅で、だが数歩分進む度にいつの間にか俺達は小走りになっていた——

一方。とある一軒家では追つ手から身を隠す為、2階の部屋の隅で背を低くする2人がいた。双方とも食料と水の備蓄は底を尽く直前だったが、奇跡とも思える瞬間にかつての仲間と通信が繋がりに安堵したものの……………

「やべえな、いよいよ近くまで来てる……………」

「うーん、こりやミヤちゃんが来たたら一戦交える破目になるかなあ？」

「かもしれないっすね。あいつもそんなヤワじゃないとは言え片腕だし……いざとなつたら俺も援護に行きますわ」

「その時は俺も出ましようか？」

「いや、尊さんは戦闘慣れしてないと思うんで待機で。あいつらかなり殺気立つてるし……そもそも戦闘法教えちゃったの俺だし、自意識過剰かもしれないですけどかなり強いっすから、あいつら」

小声で会議をする中、忍がカーテンの隙間から外の様子を伺う。件の追っ手は確認できずとも追跡方法を教えたのも忍自身なのもあり中々侮れない。何度も証拠隠滅や攪乱を仕掛けてもここまで追ってこられている現状を考えて、足跡が途絶えたこの辺りでしらみ潰しに探されたらもう後がないとわかっていた。

雅と連絡を取り、すぐに行くと言われたものの既に30分が経過しようとしている。仲間の説得が長引いているのか、それともあの電波状況からかなり距離があるのか。あらゆる思考を巡らせるが、今は待つしかない、という結論に何度も至っていた。

「ミヤの奴なにやってんだ……」

「まあまあ、見つかるのは時間の問題とは言えミヤちゃんはかなりの慎重派ですから。もしかすればもう傍に居て索敵してるのかもしれないし」

「そういう話ならばぶん殴ってやる……索敵は3分で終わらせるよ……」

「でもそれでこの前『成人』2体くらい見逃してませんか?」

「あれは……隠れてるのが悪い」

「隠れてる敵を見つけるのが索敵なんだよなあ……まあ俺も人の事言えませんが」

忍と尊は傍から見てもいい関係だった。戦闘をこなす忍に、雑務や拠点の管理をこなす尊。かつては雅も戦闘と研究の役割を担っていたが、その行為には2人も頭を悩ませる事は多かった。

というよりも、雅はこの状況になつてから輝いた人間とも言える。常日頃から目を凝らし、微かな影の揺らぎや物音にも敏感に反応する癖を持つ雅にとつては今こそが最も「生きがい」を感じる瞬間なのかもしれない、そう思ってしまう程に。

「……何分経つた?」

「まだ1分ちよつと」

「……………遅いな」

「気長に待ちましようよ、ミヤちゃんならどうせすつ飛んでくるでしょうから」

忍はここまでの逃亡生活で精神肉体共にで限界を迎えようとしている。睡眠時間を削り見張りに付き、眠っている間も家鳴り1つで飛び起きてしまう。熟睡できた事は抜け出してから一度もなかった。尊も同じ様な状況ではあるが、どちらかと言えば忍の心

配をして踏ん張っている。2人揃って、この環境にはもう2日も耐えきれそうにない。

再び忍が窓から様子を伺う。しばらく覗いていると、スーパールの奥にある雑木林で何かが動いたような気がした。その瞬間凄まじい寒気と血の気が引く感覚を覚えながらも必死に目で追おうとする。だが、それ以降何の動きもなく……諦めようとした瞬間、そこそこの太さがある木から何かが覗いた。

「! きた……!」

「マジすか!」

「大マジつす、ガチ中のガチつす。よく見なきゃ分からないぐらいですけど顔の半分だけ覗かせてる……! てかよく見ればその奥に前のシャベル持った子もいる!」

「え、2人だけ? 忍さんが会った時は銃を持った男の子もいたんですよね?」

「潜伏させてるのか、それとも連れてきてないのか……どっちかはわかりませんが、とりあえず来た事には来しました。ワンチャン車の防御につかせるのかもしんないけど」
2人は歓喜を抑えきれず、静かに拳を合わせる。その微かな動きがカーテンの隙間からでも確認できたのか、雅と忍の目が合う。

「うわ目合った」

「うわって……」

「100はありますよ? この距離で見つけてくるとかおかしくないですか?」

「ミヤちゃん殺気感じたとか言つてそつち見ずに成人の頭潰すんだからおかしくないの
では？」

「それもそうだわ……………つていつの間にかいなくなつてるし」

「ははっ、次の瞬間後ろにいたりして」

まさか、と忍が笑う。尊も冗談半分で言つたのもあり、2人して軽口を叩きつつまた
潜伏の状態に入る。だがその頃にはもう雅はすぐ傍まで忍び寄つていた。

——嬉しい誤算が起きている。忍は明らかに誰かと話しているような感じがして
いた。しつかりとその目を確認した訳ではないが、もしかすれば忍だけでなく尊さんも
……………そう思うと、自然と速度も上がってしまう。連れてきたのが胡桃で本当に良かった。
流石元陸上部と言うべきか少々息は上がっているが殆ど離れずに付いて来てくれ
ている。

「お、おい……………！ 流石に急ぎ過ぎなんじゃ……………！」

胡桃の忠告は聞こえてはいるが頭で理解しようとしなかった。それよりもあの2人
と会えると言う喜びの方が強い。

「みやびっ……………!!」

——その忠告を素直に聞いておけばよかつたんだ。

——気が付けば、俺は壁に磔はりつけにされていた。認識する前に本能で躲したものの、完全に回避する事敵わず右肩に金属の棒が突き刺さっている。動脈は逸れたのか？どこまで深く……いや貫通しているのか？

あらゆる予測が脳内を飛び回る。鈍い痛み……最早熱にも感じられる感覚も無視して、目の前の光景を受け入れられずにいた。

「まさかこんな所で鉢会うとは思わなかった……」

自信のない声で、槍を持った青年が呟く。最早過呼吸と言ってしまう程に息が上がり……初めて人を刺したんだろう、目も泳いで手も震えている。

「雅っ！」

「騒ぐな……！ 次はこいつの首を刺すぞ！」

槍は貫通、俺の背にはブロック塀があるが……これは運よく肉抜きされた場所にも嵌っているのかもしれない。改めて傷口を見ても、刃というものはないらしい。ただ刺突に特化させた、直径2cm程のパイプの先端を斜めに切り落としたもの。

胡桃の声で俺も冷静さを取り戻してきた、とにかく……相手が委縮している今が色々聞けるチャンスだ。

「手が震えてるぞ、ルーキー。人を刺したのは初めてか？ 肩の力抜けよ」

「ル、ルーキーだと!? お、俺はこの部隊に入って3ヶ月のベテランだぞ!!」
3ヶ月か……ルーキーどころかヒヨコ同然じゃないか。

「ベテランねえ……感染者を殺した事は? この槍で何匹殺った」

「お、俺は警備ばかりで戦果はないけど……で、でもこれで戦果1だ!」

「そりやめでたい、この槍はお前が作ったのか? 随分出来が良いようだが」

「そうさ! この槍も、防具も全部自作だ!」

「……そうか、安心した」

握っていた斧をわざと落とす。胡桃も青年も、俺が抵抗を諦めたのかと勘違いしている様子だ。……んな訳あるかっての。

「雅!」

忍の声だ。すぐ近くまで来ていたのが幸いだ、もつとも、俺が焦らなければ先に排除できていたが。当然ながら、青年の視線は忍の方に流れる。

距離は120cm程、この距離なら問題なく当てれる。狙うまでもない、一瞬でも怯ませてやれば勝ちも確定だ。

「だいたいしょうぶ——」

青年の目が忍をとらえた瞬間、腰から感染者用のナイフを抜き手首のスナップを利かせて投げる。回転が掛かる距離でもなく、その切っ先は狙い通り標的の腹へと吸い込ま

れた。

「あっ!？」

驚きの声も当然だ、ぱつと見3cmは刺さったな。すぐ抜けたが、この一瞬を待つてたんだ。

「甘いんだよ」

肩に刺さっている槍を掴んで体ごと上に逸らすと、面白いくらいに手離させる事に成功する。そしてそのまま一歩踏み込み、渾身の横蹴りを鳩尾に入れてやった。

声にならない声で微かに吹き飛ぶ青年を見て、胡桃がスコップを構えて間に入る。忍は突然の事に呆気にと取られているのか、立ち尽くしたままだ。

「沈黙は金つて言葉知ってるか。この槍で感染者を屠つてたら俺は死んでたな、流石に肩は縛る事も切り落とす事も出来ない」

「ぐ……なんで……? 隊長に教えられた通りにやったのに……」

「あとそのナイフは今まで何十体と感染者の血を吸っている。勿論綺麗にはしてるつもりだが……感染したかもしれないなあ」

「えっ……」

相手の顔が一瞬で青ざめた。忍も流石に若い人間を手に掛ける事態には参るのか、目を逸らしている。

「だがまあワクチンがある。もし俺達の仲間になるって言うなら分けてやってもいいが」

「なる！なる、なります!!」

「おい雅、流石にこれ以上人数が増えれば……それにこいつは追ってきてる奴だぞ?!
いつの間にか抜け出されて居場所を伝えられたら……」

胡桃の心配はごもつともだ。だが今はこれでしか「釣れない」。見られた以上、危害を加えた以上、例え俺の不注意で起こった事でも……いや、だからこそけじめはしっかりとしなきゃな。

「忍、尊さんいるのか?」

「ああ、今待機させてる」

「なら撤収だ。あー、あとこれ、邪魔だから抜いてくれ」

「……大丈夫なのか?」

「俺こういうお洒落なのは似合わねえんだよ」

「はっ、ちげえねえ」

忍は黙って俺の正面に立つと、難なく槍を抜いてくれる。……この刺されるのと抜かれる時、最悪だ。切られるのはともかくとして刺されるのは傷も重くなりやすい。今回は運が良かった、この怪我も授業料だと思えば納得が付く。……とはいえ、俺の怪我つ

て大体右側に集中してないか？

「胡桃、そいつの手と口を塞げ」

「……わかった」

「悪いが安全地帯に着くまでは拘束させて貰う。途中で仲間を呼ばれても厄介なんだから」

忍が尊さん呼びに、胡桃が倒れていた青年を捕縛している間に俺は扉に付いた血を出来る限り拭き取る。傷の出血は……まあまあだな……血痕を残すのを避ける為にも一応止血したいが、時間も人手も足りない。っていうかバッグが……また穴空いたよ。

「ミヤちゃん！」

そうこうしている内に忍が尊さんを連れて戻ってくる。俺が負傷したと聞いたのか血相を変えて駆け寄って来るが、俺が平気な顔をしてるのを見ていくらか安心したらしい。

「久し振り。お互い生きてて何よりっすね、俺死にかけましたけど。つうかこれ破傷風になつたら死にますけど」

「そうならない様に早く手当しよう」

「そんな時間もないんですよ、今は。次の追っ手が来る前に移動して……とりあえず手当は歩きながらでもいいっすか」

「えっ、いやそれは難しいんじゃない……」

「胡桃、手当頼む。忍は警戒しながらそいつの連行、怪しい動きしたら肋骨3本くらいまでは許す。尊さんは周辺警戒に専念してください」

それぞれに指示を出して、また歩き始める。歩くと言うより行きと同じ早足だが、とりあえず林の方まで行けば一先ずは安心だ。

道中新たな追っ手に見つかる事もなく、かつ移動中に消毒と包帯を巻く程度は完了した。こいつも肋骨3本という言葉が効いたのか、本気で仲間になるつもりなのか終始大人しかった。

そしてあと100mという所で足を止める。

「胡桃、忍。尊さんを連れて先に戻れ」

「雅はどうするんだ？」

「こいつの……試験をする」

胡桃は察したのか、1秒と経たぬ内に無表情になった。驚いているのか？ それとも当然の事だと無理矢理納得したか？ 後でなんと言われようと、俺はこいつを拠点まで連れて行く気は毛頭ない。途中までの道も知られた以上、逃がす気もない。これからするのは……少し前のテロリストと何ら変わらない行為だ。

「……わかった」

「ミヤちゃん、まさか——」

「そう、アレですよアレ」

青年に悟らせないよう、いつもより高いトーンで告げる。隠語という訳じゃないが、2人は大体察していた様だった。そしてきつきから一言も発さない忍も、俺が仲間になるかどうかを持ちかけた瞬間からわかっている。

「ミヤ、試験見てもいいか」

「……邪魔しないならな」

先に戻る2人が見えなくなるまで待つと、道から離れた林の中まで連れ込み切り株に座らせる。

「……それじゃあ試験を始める。まずいくつか質問をしよう、全て正確に答えれば感染の心配はない。——お前達の規模は？」

何故そんな事を聞かれているのかわからない様子だった。だが、余程生存本能が強いんだろう。しばらく考えた後、すらすらと情報を喋ってくれる。

「——規模は30人、残りの食料は4日分、搜索は明日で打ち切り。これに間違いはないな？」

「は、はいありません！ ほ、他に質問は——」

「そうだな、好きな人はいるか？ 家族は？」

「す、好きな人……？ い、います。家族も……兄が、います」
「そうか……これじゃやり辛いな。」

「……じゃあこれが最後だ、お前の名前は？」

「町田——」

ある程度安心していたんだろう。半ば笑顔で、自分の名前を言ってくれる。もしかしたら、そう思つて一応聞いてみたが、俺達の関係者ではなさそうだ。肩に担いでいた斧を瞬時に振り上げ……た所で、忍に手を掴まれた。

「待てミヤ」

「……なんだ」

「逃がしてやろう」

「……そのリスクは分かっているのか」

こいつは初めて俺の意図を知ったらしい。すぐに全身が震え始め、涙目になって小声で命乞いを始めている。

「殺すには若過ぎると思わないか？ こんな奴まで殺したら俺達は……」

「大丈夫だ、殺すのは俺達じゃない。俺個人だから」

「いや、だから」

「いいか、シノ。俺達は迎えに来る直前に安全地帯を得た。早々手放す事は出来ないん

だ、車も使えなくなってる」

これは逃がすならとても重要な情報を与えてしまっている。だがそれでいい、もう殺すしかない、そこまで持つていければ——

「ミヤが手を汚す必要ないんじゃないか？ ほつといても勝手に死ぬかもしれない」

「かもしれない、じゃ駄目なんだよ。確実に死んで貰わなきゃ困る。……手を汚したくないからと言って逃がして、後にそれが原因で誰かが死ねば？ 誰が責任を取るんだ？

仮にシノが責任を取ったとして、生き返らない」

「……確かに、そうだ。でも流石に殺すのは……」

「気持ち分かる、だがこんな時に良心の呵責を起こすな。こいつに見つかったのも俺の責任だ、だから俺が始末する。やり辛いのは俺も同じだよ、シノ」

「……先に戻ってる」

耐えかねたか。まあ、いいだろう。シノの言わんとする事も十分わかる。よりによって俺を見つけて刺してきたのがこいつだった、その相手には好きな人がいて、家族もいた。実に不幸な出来事だ。ここで逃がしてやってその恩を感じてこの辺りにはいなかった、と言う可能性もない事もないだろうが……そんなちっぽけな可能性に賭けるなんて馬鹿らしい。

「そんな……嘘、だったんですか？ 全部答えたら感染の心配はないって！」

「そうだ、お前は成る前に死ぬ。最初から生かしてやるといった覚えはないが？ それ以前に、自分可愛さに鞍替えすると言ってペラペラと内部情報を渡す奴は信用できない。つまりお前は試験に“落ちた”んだ」

「そ、そんな……話が……違うつすよ……俺を、仲間にしてくれるって……」
「確かに言つたな。……あれは嘘だ」

絶望の余り逃げる気力もないんだろう。振り下ろした斧の切っ先は、容易く町田と名乗った男の頭に深々と突き刺さった。

……楽に殺してやるには銃が一番だ。だが、周りに誰が居るかもわからない今銃声を響かせるのは頂けない。だからこそ、容赦なく、一瞬で死ねるように刃の方を使った。間違いなく即死だ、痛みを感じたかどうかはわからないが、それも一瞬だっただろう。

「……今更だ、何後悔してるんだ」

胸の奥でどよめく感覚を押し殺そうと、自分に言い聞かせる。

「今まで何人殺してきた、10人か？ 20人か？ 最低でも30は超してる。今更一人増えた所で何ざわついてんだ」

斧を引き抜く。ぬちゃりという音に、嫌でも分かる感触。どす黒い血に染まった刃を見て、今まで感じた事のないモノが込み上げてきた。

胃液が逆流する。起きてから何も食べていなかったのが幸いだった。2度、3度と胃

が空っぽになるまで吐いた後、唐突な空腹感に襲われる。

「腹、減ったな」

目の前にある肉塊を、脳髓を舐め回す様に見てしまう。視線が……そこに集中して外せない。ひとしきり吐いたんだ、腹も減る。起きてから何も食べてない、昨日もほぼ食べない。——

「っ!？」

ぼーっとしてきた所で我に返った。右肩の傷を押さえ、痛みを確認する。大丈夫、俺は俺だ。何故よりによって人肉見て飯の事を思い浮かべる？ それは俺でもわかる程異常だ。なんでこんな思考に至った？ ——なんて……本当は、わかってるんだけどなあ。

近くの木である程度血と脳髓を拭うと、返り血を浴びていないか確認する。大丈夫、これなら悠里達に悟られはしない。斧に残った血は……とりあえず死体の服で拭いて……見た目は整った。

「……戻ろう」

独り言が多い。斧を近くの木に立て掛けて一発気付けをすると、いつもの感覚に戻る。大丈夫だ、まだ大丈夫。行きと同じ歩調で、道を戻っていく。これ以降拠点に戻るまで、身体に異変は起こらなかった。

25. 不穩

どこからか包丁の音が聞こえていた。微睡みの中、懐かしい記憶がふわりと舞う。味噌汁の香り、具は確かわかめと大根にほうれん草。器用に同時進行で目玉焼きも作りながら、いつの間にかソファで二度寝を決め込んでいた俺を背中越しに起こしてきたんだ。

「……お兄——お兄さん！」

俺を兄と呼ぶ声。左肩を優しく叩かれて、薄く目を開けた。

「もう、朝です……悠里、さんが、起こしてきて……っ」

たどたどしい言葉に、俺はつい笑ってしまふ。まったく、朝からこんな茶番を繰り広げるとは……一体誰だ？ ゆっくりと上体を起こすと、すぐに肌を刺すレベルに冷たい空気が体を冷やそうとしてくる。思わず身震いしてしまふが……確かに、朝だ。カーテン越しに見る窓は微かな光のみを通してているが、そこそこの明るさらしい。

「誰だ、美波か？」

声の主は薄暗さのおかげで顔は見えない。大あくびをしながら昨日悠里が枕元に置

いてくれていたコートを取ろうと手を伸ばすが、いつもの感触はそこにはなかった。

「あ、コートなら、私が……」

「カーテン開けてくれるか」

このままじゃ殆ど見えない。この家は面積も大きいのが、驚くのはその間取りだった。小さなホテルだと言われても違和感を全く感じないどころか、元々どういう意図で造られたものなのかすら予想できない。大方別荘か、変わり種でシェアハウスだろうと思ってるが。そうだとしてもこんな辺鄙な場所にあるのもな。

全身の倦怠感に小さく唸っていると、丁寧にカーテンが開けられシックな内装が露わになる。それと同時に、俺を起こしに来た声の主も——

「……お前は」

久城結楽。この家の所有者にして、ここ最近で一番新しく、それでいて最年少のメンバー。……いや、まだメンバーにはなっていないか。とはいえこの家に一時とはいえ上がり込んだ身分だ、悠里達も恐らくこの子を見捨てはしない。

「あと、これ……コート、です」

少女は恐る恐る灰色のコートを差し出す。その目は——まず目を合わせてくれない。余程俺が怖いのか、まあ無理もないが。

「ああ」

コートを掴むと軽く翻してからさっと左腕を通し、右側が落ちる前に通した左手で掴み直す。後はお粗末な右腕を袖に入れて、襟を正せばいつもの格好だ。とはいえ下に着ているのはタートルネック一枚、まだこれでは寒いが……寝起きで着替える気力なんか
ない。

「お前は？ 寒くないのか」

「え……だ、大丈夫……」

昨日と様子が違うな。まあいいか。この子の面倒は女性陣に任せよう。怖がられて
いるのに無理に世話を焼いても意味はない。

「行くぞ」

俺の荷物一式が置いてある棚からレッグポーチを引っ張り出してみると、少女は俺の
様子を伺いつつ扉を開けて出て行った。そのまま足音は階段の方へ。そしてとたとた
と降りてリビングの方へと……下からは「起きた？」という悠里の声に、忍の「あいつ
寝起きクソ悪いんだよなあ、人殺しそうな目で見られなかった？」という声。俺って寝
起きだと目付き悪いのか。だからあの子は俺と目を合わそうとしなかったのかもしれない。

レッグポーチを装着して部屋を出ようとした瞬間、いつもの嗅ぎ慣れた匂いに気付
く。コートかと思えば、違う……この部屋に漂って……あつ……

「……えっ」

この部屋にはベッドが2つある。元から客間らしく、まるでリゾート地のホテルの様な配置で……俺はそのベッドの入口側に寝ていた。そしてもう片方を使っていたのは誰か？ 忍でも尊さんでもイツキでも、ましてや坂上でもない。勿論あの少女というものもない。冬用に白のもこもこしたあの寝間着、もといパジャマは……間違いなく悠里の物だ。

綺麗に畳まれて更にはベッドメイキングまでされている所を見るに……最早隠す気すら見られない。

「んー……まあ、いいか」

ここまで堂々とする以上問い詰める気すら起きない俺は、もう完全に諦めの境地に入りながら部屋を出た。

「雅さん、おはよう」

「ミヤの割には寝起きいいじゃん」

2人はテーブルを囲うソファに対面する形で座っていた。キッチンの方では尊さんと美紀が雑談しながら朝食の準備をしている。悠里はノートと睨めっこ、忍は銃を磨いている。そして俺を起こしにきた少女は、目の前で黒光りする銃に怯えながら悠里の腕にぴったりとくっついていた。

「シノ、子供の前であまり銃を出すな」

「んあ？ まあ、確かにそうか……つつても磨く以外にすることねえしな。それはそうとミヤ、体調はどうだ？」

「少しだるい以外は問題ない」

シノは「あーね」なんて相槌を打ちながら銃をホルスターにしまうと代わりにバッグから小さな箱を取り出す。表と裏、それぞれ確認した後放り投げて来た。

「ビタミン剤。期限ギリだけど」

「あーねえ」

「2人って……似てるのよね」

唐突な似ているという発言。何の話だ？ 俺と忍は悠里に目を向けた。

「あ、ごめんなさい。考えてた事が出ちゃって……」

「そんな似てるか？」

忍が俺をじつと見ながら首を傾げる。俺も似ているとは思えない。顔も声も、性格すらも。辛うじて掠る所はいくつかあったとしても、それは生きている上で誰かしらと合致するであろうありがちな部分のみ。

ずっと立っているのも面倒で、俺は忍の隣に座る。ほら、座り方も違う。俺はかっただるそうにやや浅く座り、右足を組む。一方忍はザ・ノーマルな座り方。

「なんとというか……雰囲気かしら？ 面持ちというか、気を持ちようというか」

「似ててもおかしくない。こいつとは長い付き合いだからな」

「ペットは飼い主に似るって言うし、それじゃねえかな」

ニヤニヤと、忍お得意のいじり癖が俺を襲う。ここで無視すれば無言は肯定と見なされる。だが反論するとなんだかんだで俺が不利になる。こういう場合、どれだけ自分の体力が奪われないようにスルーするかが重要だ。

「……」

「ミヤ？ なんで急に黙んだよ」

「俺さ、まだ疲れてんだよね。クソだるいんだよね」

精一杯の疲れたアピール。もう言葉すら適当になってきた。語彙力というか、気の利いた言葉を考えるのも面倒くさい。

「さっきのキメときや大丈夫だろ」

「仮にキメて体は万全になってもメンタルが……なんか10時間ぐらい甘やかされない
とMP回復しねえわ」

「なるほど、添い寝を希望と……若狭さんお願いします」

「んな事言っつてねえ」

急に呼ばれた悠里は呆気にとられた表情で目をぱちくりさせている。まあ当然の反

応だ。

俺達の会話はよく周囲に飛び火する。常に何も考えず思つた事を口に出しているおかげで、周りの人間も少なからずダメージを受ける面倒なシステムだ。勿論普段からこうと言う事はない、今はまあ……お互い気が抜けているからだろう。

「それで？ 今後の方針は？」

そして唐突に真面目な話になるのもご愛嬌。さつきよりも幾分低くなつた声に、キツチンにいる尊さんが聞き耳を立てているのがわかる。

「当分ここで一服しようかと思う。お互い移動ばかりで疲れてるだろうし。追つ手の事は……ああ、追つ手を考えれば早急に移動が必要か。とはいえ聞き出せた情報では食糧はあと4日分しかないと言つていた。搜索も今日で打ち切りだと」

「相手の気が変わらなきやそうだろうな。少ないとはいえ4日分、道中で補充するとなればあと1日踏ん張れるだろ」

「まあ、それを抜きにしても構成員も1人行方不明、となれば普通ならそいつが担当していた区画を重点的に探せばいい」

忍は浅く頷くと、バッグから地図を取り出す。そこにはメモも一緒に挟まっており、敵を目撃した時刻や場所が記されていた。その紙を手渡してくると、何かの答えを待つように俺の顔色を窺っている。

地図とメモに記されている情報を照らし合わせてみる。最初こそまばらだが、ここに来るまで3度発見されている。発見地点と逃げた方向から大まかな進路まで算出したのか、時間が経つにつれてかなりの頻度になっていった。

そして最後に発見されたのは俺達と合流する少し前、ならあの1人だけのヤツは先遣か？ とは言っても、あまりにも精確過ぎる。敵方に忍をよく知るヤツでもいるか、相頭が切れるか……勘が良いか。

仮に全て仕組まれた現象だとすると……嫌な言葉が過る。

「囧……？」

「え、囧？ わりい、その発想はなかった。で、なんで囧だと思った？」

「今までの目撃情報はどれも最低2人組を徹底している、なのにあいつは1人だった。はぐれたか、自信過剰で離脱したか……もしくは損害覚悟の餌か」

「餌、か……やっべえ、かもしれねえな」

どうやら心当たりがあるらしい。忍は目頭を押さえながら完全にソファに身を預けてしまう。

「やべえのか」

「クツソやべえな、これ追って来てるヤツらのリーダー格わかつちやったわ」

あー嫌な予感する。そういう事するのは性格悪い証拠だ。俺とどっこいどっこの

レベルだなこれは。

「いやあ、女なんですけどね？　黒髪で背が低くて胸のデカイ……。ミヤのタイプだろうなアレ」

ちらつと悠里を見た忍は、周りに見えない様に指さして小声で「あれに近い」とか言ってくる。いや俺は別に見た目にタイプとかはそうそうないんだが。

だが俺も釣られて悠里をチラ見すると、頭の中で黒髪にして少し身長を縮めてみる。

「どう？」

「……悪かないけど、性格は？」

「壊滅的」

「チエンジで」

「2人共なにか失礼な事考えてないかしら？」

若干キレ気味の悠里に2人して全力で首を振ると、にっこりと笑ってくる。余計怖い、性格悪いより全然いいけども。

「それと雅さん、私は良いけどあまり他の女性をいやらしい目で見ちゃダメよ？」

「自分は良いのかよ……愛されてんな」

「見ないから。まず歳の差考えろよ、あと犯罪だから」

「ミヤいつも言ってたじゃんか、国としての機能がなくなった時点で法律は飾りって」

お前は一体どっちの味方だ。最早俺を困らせる事に全力を尽くしてないか？

「で！ その女どんだけ性格悪いんだよ」

「一言で言い表すなら戦闘狂。最初は結構臆病な性格だったんだけど、その甲斐あって俺のお目付け役になって……いくらか話す内にとあるヤツに憧れた結果豹変した」

「なんだそのはた迷惑なヤツは」

忍が訝し気に睨んでくる。悠里もそれを見て、何かを察したらしい。……えっ、もしかして俺か？ 俺に憧れた結果戦闘狂になったとかどういう事だ？

「……どういう話を？」

「所謂武勇伝ってやつだな。俺と尊さん、どうやってここまで来たかを話す下りでどうしてもお前の話が出てきちゃうだろ？ 要所要所ピックアップしていったんだが、それがかなり強烈だったらしい。一番驚いてたのは1人で感染者30体以上と人間6人を壊滅させた話だったな」

あれかあ……あれはもう、運が良かったとしか言えないものなんだがな。

「雅さんって……本当に何者なの？」

以前からよく言われている言葉を悠里が改めて口にする。

「なに、色々と変態で常識も通じない上に信念だけは通すアホですよ」

こいつ殺してやろうかマジで。思っていた事が顔に出たのか、悠里の隣に座る少女は

ビクツと震えた。そしてまるで母親に縋るかの様に、さつきよりもきつく腕にしがみつ

く。
当然悠里もそれに気付き、「どうしたの?」と言いなながら作業を中断して少女の頭を撫でる。あれは将来いい親になるかもしれないな。もつとも、こんな世界じゃ将来なんて考えている暇はないが。

「相手があの女だとすれば、雅と同じく小細工は通用しねえだろうな。捻くれてるのもあつて誘導系の罠より単純に威力を持たせた物の方が掛かりやすい」

「要するに自分を相手にしろと?」

「そういう事になるな」

忍はニヤつきながら頷いた。

「誘導系に掛からないつてのは、俺なら反対の行動をするつて事だ。誘導の反対に誘導すればいい。それが、もつといい〃餌〃を用意するか……」

「なるほど……勝利の鍵はそこか!」

「……念の為聞こうか、『どんないい手を思い付いたんだ?』」

わざとらしく聞くと、待つてましたと言わんばかりに忍が話を聞いていた悠里も含めて一瞥し始める。ああ、これはわかつたぞ。そいつに効く最高の餌は——

「あいつにとつての最高の餌。……つまり雅、お前だ」

「知ってた」

予想するまでもなく、直感でわかる。クソデカ溜息を吐きながらなんてこったと洋画風にジェスチャーをしてみると、忍もそれに応えてあえて指さして「モテ男め」と言うようなジェスチャーで返す。

だが、先程忍が一瞥した中で唯一表情を曇らせている人物が1人。

「……正直、これ以上雅さんに危ない事はしてほしくないの」

その言葉に忍も同じく「曇らせる」。悠里の言葉も、その顔も。心配そうに見上げる少女の顔も。それら全てが嘘ではないと物語っている。

忍は突き詰めてしまえば俺と同じく効率主義者だ。どれだけ自分達の被害を少なく、それでいて相手の被害を大きくできるか。そこは本意ではない、あらゆる事も楽しむ方向に持っていく天才だ。だが考え方を別の方向に向ければ、それまた別の天才にもなり得る。

その点、俺は一点特化。真に効率を求め、自分が楽しいと思えるのもその効率を高めた時。そして俺が快感を感じるのは……一方向的に敵を蹂躪した時。誰かを痛めつけるのも怒らせるのも、得意分野であり生甲斐にもなる。正に歪んだ人格だ。

「今はいつ誰が乗り込んでくるか分からない状況で、こんな事を言うのはおかしいかもしれないけど……出来るなら誰にも怪我をしてほしくない」

「……変わらないな、悠里は」

「ごめんなさい。こんな時に何を言ってるんだって言いたいでしょうけど」

「いや。……そのままでもいい。お前はそのままで」

互いに微笑むと、忍はこれ以上口を挟む気も失せたのか席を立つ。そして俺の背後から一言、耳打ちしてきた。

「大事にしろよ」

うるせえな。こちとら会った時から……大事にしてきたつもりだ、結果は伴ってないがな。

「……なんて言ったの?」

内容が気になる悠里が思わず聞いてくる。

「いい奥さんになるなって言つといたんだ」

悠里、赤面。まさか口に出してその続きを言ってくるとは。俺は思わず笑ってしまうが、何故ここで笑えてしまったのか、わからない。何故真つ赤になる悠里を見て……

生まれてきてから何度出したかわからない溜息。幸せが逃げるとよく言うが、俺の都合これでいいのかもしれない。だって、ここまで充実した時間は……俺には到底処理できないから。

「朝ぐはん、できましたよ」

美紀の報告で悠里から総員起こしの号令が掛かる。俺は少女と共に駆り出されそれぞれ部屋へと向かった。

——冬の朝は冷える。それぞれが凍えながら眠り、中にはまともに眠れなかった人間もいる。それでも私達は冷えて霜の張り付いた缶詰と、何の温かみもない水を飲んで一日の始まりを体感した。

私達は、俗に言う懲罰部隊だ。日々の素行不良から配属された人、重大なミスを犯した人、単にやる気のない人、そして私の様な“罪を擦り付けられた人間”。私の名前は『飛鳥』、ぱつとしない、喋らない、地味、空気が読めない、単純にうざい。親にも捨てられた、この世に産まれるべきではなかった……そんな存在。

隊員の疲労は極限まで溜まってる。昨日は2人倒れた。一昨日は1人死んだ。死ぬ人は弱い人だ。そんな中、片腕になっても1人で生き続けた人がいる。

「ああ、会いたいなあ」

胸の奥で燃え盛る感情。これは一体なんだろう、あの人なら教えてくれるのかな。忍さんの言っていた、全てを見透かす眼と頭脳を持つあの人なら。

後ろで煩い声が聞こえる。なに？ また死んだの？ いいよ、頭を潰してそこら辺に捨てていて。私は素っ気なく指示を出す。この人達は言われなきや何もできない。年

下で、それも女だつて馬鹿にするけど、自分じやなんにもできない弱い人達だ。

でもあの人なら。あの人なら……あの人なら、きつと。私を上手く使つてくれる”に違いない。

めらめらと燃える感情は、いつの間にか熱い何かが変わつていた。血が滾る、身震いする、体の奥がきゆうつとずる。あの人なら、私のどうしようもない感情も全部どうにかしてくれる。もうすぐ会えるとわかつてから私はもう限界だ……

お母さん、やつと見つけたよ。私の神様を。

26. 飛鳥

比翼の鳥。と言う言葉がある。

2羽の鳥がいて、だがそれぞれ1枚しか翼を持たず、単体では飛べない。しかし2羽は力を合わせればそれぞれの翼を使って空を飛べる。有り体に言えば、『1人じゃ半人前でも2人いればそれぞれ補えて1人前』的な意味だ。……良い話だな、だが無意味だ。もしその片方を失えばどうなるか？ そんな事、わかりきっている。

「悠里っ!!」

「雅さんっ!!」

相手はまともな武器も持たない。その殆どは包丁や工具が主武装で、俺達なら、ましてや銃を使えば造作もない相手だった。それが慢心を生んだ。

「退けえ!!」

金属バットと木刀で武装した男2人に詰め寄る。左手にはたった1本の劍鉞。これでいい、これさえあれば十分だ。——なのに、俺は前蹴り1発腹に受けただけで怯み、直後に振り抜かれた木刀の横薙ぎでこめかみを打たれる。

どこまでも吹っ飛ぶ感覚。実際には数十cmも飛んでない。それどころか持ち前の胆力で、踏み止まってすらいた。その所為で敵のリーチの範囲内で……

「雅避けるッ！」

忍の声にはつとして圧の感じる方向に目を向ける。バットの突き、本来振り抜かれるものではあるが材質からして威力はお墨付き。それをもろに顎に喰らって遂に倒れてしまう。

——いつかの日も、俺はこうして顎に喰らっていたな。思考できる時には目はまともに見えていない。霞んで、悠里と少女の叫び声が……

「っ!？」

嫌な夢を見た。記憶にもしっかりと鮮明に残っている。痛みまでもがまだ続いているのに気づき、自然と頭を押さえていた。

「どうしたの……!？」

悠里は驚いた様子で俺の顔を覗き込む。その距離はいつもより近く、思わず目を逸らした。

「……悪夢を見た」

「そう……今まで頑張ってたから、寝ている間も考えちゃうのね」

「そう、つすねえ」

現在、俺は罰ゲーム……じゃなくて、以前約束した『なんでも2つ言う事を聞く』という状況にある。その1つめが、こうして悠里に膝枕されるといふものだ。何だそんな事かと思えば、後から追加で『最低3時間』と言われた。それはもう2つ聞いている事になるんじゃないかと問いただしてみれば、「ん〜？」と笑顔で躲され、底知らぬ恐怖を感じたので素直に飲んである。

「というか寝てたのか俺。あれだけ「いや年下に膝枕されるとか屈辱なのでは？」とか言って忍と尊さんに強がっていたのに。」

「どれくらい寝てたんだ」

「えーっと、10分くらいかしら」

「嘘だろ？」

あれだけ濃密な夢で10分？ ナイトテーブルに置いてある時計を見ると、10分どころか厳密に数えれば7分40秒。悪夢を見たとはいえ、これで膝枕の連続時間は20分ちよつとか、3時間って長いな。つうか10分で寝たのか、人生でも稀に見る寝ときの良さだ。

「雅さんって結構子供っぽい所あるわよね？」

「……例えば？」

「そうねえ、頭撫でたらすぐ寝ちやう所とか。面白くてほっぺたつついてみたりしたのよっ。」

「悪夢の原因それなのでは？ おもつくそ顔面に喰らった夢見たんだが」

「あつ……」

悠里のわきわきしていた手が止まる。本当に申し訳ない事したなって顔だな、調子に乗られても困るし当分それでいろ。

「それはそうと、俺が膝枕するってのはどうだ？ 日々世話になつてる訳だし」

「ダメ。お世話になつてるのはこっちだもの。それに寝ちやうくらいまだ疲れが残ってるんでしょ？ 今度はそつとしておくから、もう少し寝ててもいいのよ？」

「いや眠気完ツ全に覚めました」

「そ、そう……それよりいつもより話し方がおかしくない……う？」

しまった。つい素が。ギャグ方面に走ると途端にこれだ。いつも通り、クールに行かねば。

「いやまあ、慣れない事されてるとな……」

ほんの少しだけ見える悠里の目を見て、改めて悠里のつて大き——いや暇だし現状の再確認と行こう。現在の必須行動はこの膝枕3時間耐久、場所は寝室、それも悠里のベッドの上。何故俺の方ではないのかと疑問に思うが、まあそりや男の臭いつてのは結

構キツいとも聞くし。

おかげで滅茶苦茶甘ったる……いのはいいとして、忍には敷地内から外地の偵察を行って貰っている。尊さんには悠里がやる予定だった食糧やそのほかの在庫状況の確認、美紀と胡桃は未完了だった部屋の掃除、由紀と美波にはあの子の遊び相手、イツキや坂上には武器の整備。

完璧だ、これぞ円滑なサバイバルライフ。これぞ我が生きる糧。何の支障もなく円滑に事が進めば進むほど俺の士気は最高潮に達し指揮能力も上がるというものよ。完璧過ぎないか？ 天才か俺は、いや天才か。最高かな俺。この景色も乙なものだが。

「あの……そんなにみられると恥ずかしいんだけど……」

「え、見てた？」

「すっごい目が合うわね」

「いや逆にどこ見ろと？」

「えっ、いえ別にどこ見てもいいけど……」

「じゃあ目でいいですか」

「……あ、はい」

はいガン見。眼球をここで固定して、瞬きをしながら視界を切り捨てて思考に集中しよう。

——とは言え皆に働いて貰っている中俺と悠里はこうして休んでいる、というのもおかしな話だ。悠里はともかく、俺は……いや休んでもいいか許可も取ってるし。そうだとしてみこうして一緒に休んでいるのはおかしな話……でもないか、自室2人共ここだし。……あれ？

まあそれはそうとしてこうして膝枕をして貰って悠里に負担を強いるというのはいかなものだろうか？ ……でもこれ悠里の命令の1つめか、じゃあ問題ないか。

脳内であらゆる疑問にヘルメットを被った猫が「ヨシ！」と指さし確認していく。それと同時に俺の思考材料も減っていき、やっと気付いた。

俺、嵌められてない？ ことごとく逃げ場を失っている気がする、と。

「また難しい事考えてない？」

「……いや、まあ」

「今くらい何も考えなくてもいいのに」

「まあ、確かに？ でも無心つてのもそれまた難しい話だな。常に何か考えるのが癖なんだ。せめて何を考えたらいいかお題でも出してくれ」

まあ、いいか。こうなってるのも俺の日頃の行いってやつだ。言葉や意識の穴を突いて何度も逃れてきたんだ、念入りに逃げ道を潰されていてもおかしくない。むしろよくここまでやったと褒めてやるべきかもしれない。

それに、俺自身何度もこれが終わったら休もうなんて思ってたんだ。ようやく休める機会ができたと思えばこれもまた。

「そうねえ、じゃあ恋バナでもしましょうか」

「随分乙女だな、というかそれ話題じゃないか」

「乙女だもの。1人で考えるより、話してた方が気が紛れるでしょ？」

「まあな」

膝枕されてる状況で恋バナって、中々にシユールな画だ。こんな事、一生に一回と経験できないぞ。

「雅さんの好きな女性のタイプってどういうの？」

「……どんなだろう、わからん。少なくとも料理はできて欲しいな」

「見た目は？」

「特に拘らない。中身重視だな」

「……性格は？」

「気が合うならどんなでも」

悠里は膨れた。無論わざとやってる訳じゃない、俺自身そういう所はよくわかっていないのだ。だが忍曰く、俺の好みはとりあえず髪が長くてしつかりして若千子供っぽい性格が好ましい。……それを思い出して、俺は真っ先に奏樂が思い浮かぶ。

「悠里の好みは？」

「そうね……やっぱり頼れる人かしら」

「そうか」

それ以降、俺は何も聞かない。聞いた所でどうにもならない、聞けば聞く程俺とは外れた人物像になるとわかつているからだ。

「それだけ……？」

だから狸寝入りを決め込む。目を閉じていれば眠れるかもしれないしな。そんな子供染みた作戦に、悠里は見事に引つ掛かる。まるで母親の様に……すっかり伸びて目を覆い隠していた前髪を優しく退けた。

普段は視界が通るようにある程度別けていたものの、目が合っていないとはいえ顔を見られてるかもしれないと思うと少し気恥ずかしい。

頬を撫でる手がくすぐったくて、思わず片目だけ開けて不満を見せる。そんな俺を見て、悠里は幸せそうに微笑んだ。

「2人共幸せそう……ところでそれ、誰ですか？」

温かな雰囲気から一転、全身を凄まじい悪寒が駆け巡った。一瞬で心臓が跳ね上がり、身体が臨戦態勢に入る。悠里がその声の主に気付くよりも前に、俺は転げ落ちる様にベッドから離れる。勿論自分のベッドに置いてあったナイフは既に握っているどこ

ろか、口も使つて鞘から抜き放つていた。

「ああ、そんなに驚かなくても……」

ガスツと天井にナイフが突き立てられる。人一人が出入りできる穴を作ろうとして
いるんだらう、かなり強引に、天板がくり抜かれていく。

「悠里、下に——」

はつとした。あの悪夢の光景が脳裏を過ると同時に、この敷地の内外に無数の敵がい
る事に気付く。なんの証拠もない、ただそう“感じる”だけ。今まで敵の殺気を感じ
取った事は何度かあるが、ここまでの感覚は初めてだった。

言いかけたとはいえ、悠里は俺の意図を汲み取つて慌てて部屋を出ようとする。

「待てっ！ やつぱりここに残れ。……入り込まれた以上、下手に動かない方がいい」

「そ、そうなの……？ でも……」

「ここまで回りくどく侵入してきたんだ、事と次第に依れば穩便に済ませられるんだら
う？」

「流石雅様、全部お見通しですねえ」

……さま？ 初対面なのによくわからない敬称をつけられ変に引つ掛かるが、綺麗に

四角に切り抜かれた天板が外され真つ黒の服を着た女が足から降りてくる、が。

「あつ」

「……あらっ？」

「……………」

鳩尾辺りまで出てきた所で止まってしまふ。俺達の前には無様にも穴が小さすぎて引つ掛かつてしまった侵入者の足があり、ナイフの切っ先でついついてみようとすると思里があり得ないレベルの力で手を掴んで止めてくる。

「いやこれ今しかないって……………！ 殺るなら今だつて……………！」

「ダメよ……………！ 可哀想でしょ……………？ それにほら、よく見て。この子すごく小さいのよ？」

「いや確かに足はちっさいけど」

上を見上げるとまだ引つ掛かってもがいている少女。どうやらコートのボタンか何かが引つ掛かっているらしい。改めてその全身像ならぬ半身像を見分していると、いきなり悠里が俺の目を塞いでくる。

「え、何!?!」

「この子スカートなの!」

「この寒い中で?!」

「えっそつちですか!?!」

俺の反応が予想と違ったのか、思わず侵入者がツツコミをいれてくる。なんだこのネ

タキヤラ、この状況で目を塞いでくる悠里と言い……まともなのは俺だけか!?

そして一度足やら何やらが天井に吸い込まれて消えると、改めてナイフが突き立てられ足りなかった分の範囲が切り取られる。勿論切り抜いた天板は回収。僅かに粉が落ちたのみである。こいつ解体業者か何かか?

二度目のチャレンジで、侵入者は勢いよく飛び降りて来た。が、途中でガツとどこかぶつけた音がした。着地までは堪えていたようだが、結構痛かったのか胸元を抱くように押さえている。ついでに若干泣いてる気がしないでもない。

「だ、大丈夫?」

もう悠里は持ち前の母性を発揮し侵入者の肩を抱き始める始末。これじゃもう客同然だよ。

「大丈夫です、ほんとに。大丈夫なんで……」

「なんだコイツ」

ほんともうなんだこいつ。何、その程度の技量でカチコミにきたの? 悠里いなきやお前今頃死んでるぞ。もう5回くらい殺せる機会あったのに。……まあ罪悪感半分ないだろうが。

ようやく顔まで拝めてからわかる。こいつは朝に忍の言っていた『性格超残念少女』に違いない。性格どころか頭まで残念な仕様になっているのは置いておくとして、忍の

言った通りかなりの低身長だ。俺の顎までもない。だというのに……
「何食つたらそんなになるんだ」

「はら」

悠里に叱られつつも、コートの上からでもわかつてしまうその膨らみには首を傾げざるを得ない。由紀が見たら泣きそう。押さえてるのにあれか、やべえな。悠里とそう変わらない感じだが、身長差から随分大きく見えてくる……つてそこは分析しないでいい。いや必要か、胸があるつて事はそこに刃物も隠せる。

女スパイの胸元にデリンジャーがあつてもおかしくないのと同じで、何が隠されていてもおかしくない。心配そうにしている悠里を引き離そうと肩に触れる。

「そいつが忍の言っていたリーダー格で間違いない。迂闊に近寄るな」

「でもこんな小さな子なのに……悪い事をするようには思えないわ」

「……頼むから、今は離れて——」

無理矢理引き剥がそうと、抱き寄せるような形で距離を取らせた時。少女の眼が俺達を捉えた。

「っ!？」

神速の居合い。そう思えてしまう程に、何の躊躇いもなく夜戦様に黒く塗装されたナイフが俺の首元を通り過ぎる。

慌てて悠里ごと後ろに飛び退くが、やはり自分だけではない為に行動が遅れた。尻もちをついた悠里が小さな悲鳴を上げ、俺は首元にある微かな痛みにはつとずる。

「……浅いな」

辛うじて切っ先が掠った程度。だがその位置はしつかりと動脈を捉え、もう少し踏み込まれていたら確実に死んでいた。豹変した少女に悠里も恐怖を覚えたのか、俺の傷を見てから後ずさりしてしまっている。

「私以外の女に触れるなんて……それどころか……」

さっきのネタキャラっぷりはどこへいったのか。言葉の節々から明確な憎悪が見えている。さっきの眼も……まるで底の見えない井戸だ。どれだけ奥を覗き込んでも何も見えなかった。

「ふふ、でもいいんです。おかげで貴方の血が……」

切っ先に微かに付着している俺の血を、あろう事かペろりと舐め取ってしまう。——こいつ、性格が悪いってレベルじゃない。そもそも感性が、人格が破綻してやがる。

俺も悠里も、まるで成す術のない怪物を相手にしたようにその場で固まってしまふ。どうするのが正解なのか決めかねているというより、単純な恐怖に飲まれている。……恐怖？俺が、こんな子供相手に怖がっている？

「……目的は？」

戦闘の基本は情報収集。ここは基本に則って堅実に攻めていくしかない。

恍惚とした表情で余韻を味わっている少女は、話し掛けられた事が余程嬉しかったのかまるで好物を前にした犬の様に明るくなる。

「私は飛鳥つて言います。本当は脱走者の追跡なんですけどねえ、でもそんなの……もうどうでもよくなっちゃった」

体中に走る危険信号は目の前にいる子供がとてつもなくヤバいと何度も教えてくる。手、足、果てには視線の動かし方。彼女の一挙手一投足全てに得体の知れない要素が十二分に含まれている。

「ずう……つと見てたんですよ？ 忍さんのお話を聞いて、忍さんが逃げて、あのスパーで合流した皆さんも」

「……あの1人だけの男は？」

「あー、あれは……貴方の反応が見たくて、いちばんよかったのいかせました」

こいつはヤバい。この子供1人で俺達は壊滅する。どれだけ強固な城に、強力な武器を揃えようと……いつの間にか後ろに立っけてもおかしくない。———そうか、これは。

「お前。俺を———」

「ふふふ……気付いてくれたんですねえ。……私は強くなりたくて、近くに在った強い

人を真似したんです。実際には会った事がなくても、忍さんが教えてくれました。貴方の事を聞いた時、すっごく嬉しそうに話してくれたんですよ？ 強くて、脆くて。でも堅い意思を持った人の話」

「脆いのに真似たのか」

俺なら不完全な存在は許せない。自分なりにアレンジを加えようとするか、そもそも真似なんてしないだろう。

「はあい。だって私が好きになった人ですよ？ 身も心も、その人になりたくて仕方ないのは……自然じゃないですか」

それは「好き」とは呼ばない。こうして大元になった俺が違和感を感じる時点で、ただの猿真似に過ぎないのは明白だ。人として生まれて来た時点で、遺伝子と同じ様に人格もまた固有の物になる。例え双子に同じ光景、同じ生活をさせたとしても……どこかで相違点があるのと同じで。

「なんですか、その目は。なんで私をそんな目で見るの」

「確かに……会った事もないのによくそこまで近付けたもんだ。だが、お前が聞いた俺は過去の俺だ。今と昔じゃ半分も……いや3分の1以上違う。——お前は俺にはなれない」

性別も身長も住んでいた場所も違う。こんな世界になつてからは周りに居た人間も

違う。例えどれだけ上手くコピーしようが、俺が今まで積んで来た経験までは真似られない。さっきの居合い抜き、ここまでできた方法、それらは過去に俺がやってきた事だ。

しかしこいつは天井で引つ掛かったし、一撃で俺を仕留められなかった。そこが俺との違い、真似ただけじゃ所詮下位互換程度にしかなれない。

「……なんで、そんな事言うんですか」

次第に声が小さくなっていく。ぶつぶつと独り言を呟くその節々には「こんなに好きなのに」とか「ずっと待ってたのに」だ。勝手に真似て、勝手に期待して、勝手に裏切られたと思っている。……憐れだな。

「……そんなの、私が目指した人じゃない」

ほら出た。こういうの特有の結論。痛いほどわかる、本当に耳が痛い。だって……昔の俺はこうだったんだからな。

「殺してやる……」

「いいぞ、来い。女だからと言って容赦はしない。片腕もぎ取られようが鼻を折られようが後悔するなよ」

ああ、また彼女の……飛鳥の眼が変わった。どす黒い……へどろの様で、いつまでも纏わりついてくる嫌な眼だ。瞳孔の奥に光なんてない、それは俺も同じだが……こいつの眼は本物である俺より本物らしい眼をしている。

一瞬にして目が見開かれた。それは突進の合図、走り方も、ナイフの構えも同じ。違う所は片方の腕があるかないかだけ。

「がうっ!!」

まるで獣だ。白と黒の刃が室内に火花を散らす。甲高い金属音以外には飛鳥の唸りと息遣い以外何も無い。そこもまた俺とお前の違う所だ。

剣戟はほぼ互角のまま。20、30とナイフが打ち付けられる。しかし凄いい、こいつの動きは本当によくできている。古い鏡を見る気分だ。

「ふふ、ふふふ……やっぱり一緒だ! ほら一緒ですよ!? ほら、右、右、次は左で、フェイント入れて下から……」

「よく読めるもんだ」

俺達は一切防御なんてしていない。たまたま攻撃するところが同じで、角度も、持ち方も全てが同じ。だから必ず互いのナイフが弾かれる。なるほど、確かに一緒かもしれない。

「ぜんぶいっしょ……私たちは、おなじなんですっ!」

「そういう所だぞ」

全部同じなんてある訳ないだろ。その証明の為に、一息で距離を詰める。ナイフすらまともに振れない、本当に触れる程の距離。身長差もあって、彼女の違う意味で見開

かれた目を俺が見下ろす。

そしてナイフを逆手に持ったまま、振りかぶってすらいないアツパーが顎に直撃する。勿論刃は自分の方に向けてある、こういうのを単に殺してちや面白くないからな。

「あぐつ……!?!」

「ほら」

目の前に来た額に全力の頭突きを入れて、更に前髪を掴み横腹に膝蹴り。重心がブレた所に足払い。完全に体勢が崩れた少女の髪を掴んだまま足も使って床に叩き付ける。

衝撃で苦しそうに肺の空気を外に出した瞬間、更に腹にストンプ。横腹を蹴って転がして悠里との距離を稼ぐ、と俺なら転がりながらなんとか立つと思っただけで、一步踏み込んでの後ろ蹴り。予想通り起き上がろうとした少女の側頭部に命中する。

「雅さんっ!! やり過ぎよ!!」

「加減すればこいつの為にならん。それに最初に言っただけだ、容赦はしないと」

とはいえこれだけ打ち込んだんだ、勝負あっただろう。落ちていた鞘を拾いナイフをしまおうと、ぴくりとも動かなくなった少女の様子を見る。……死んでないよな? いやでも結構手応えあったし本気ではないにしても急所に入れまくったしな……どつか折れててもおかしくないどころか内臓逝つてもおかしくない気がしてきた。

首元を触ってみると、変わらず脈がある。戦闘後故に滅茶苦茶早いな。……むしろど

んどん早くなってる？

「寝てりや可愛い顔してんのに、なんであそこまで狂ったのか」

どくん、と少女の脈が跳ねた。こいつ——

「があっ!!」

文字通り飛び起きた飛鳥の手には変わらぬナイフが握られている。その狙いは確実に俺の首、今度は間違いないく殺しにきている。……が、甘い。

俺がナイフを持つていない素手の状態ならば、むしろ関節技が使えて無力化には丁度いい。手首を掴んでやると無理矢理リストロックに持ち込む。筋力が弱い分、この技は効きやすい。

狙い通りにナイフが手から離れたと思ったら、そのまま突っ込んできてラリアットをしてくる。体重がない分威力は皆無だが、真の狙いはその後だったらしい。

「貴方は絞め技ってご存知ですか？」

ラリアットで首に手を回すと、即座に背後に回り膝裏に蹴りを入れられて体勢を崩される。膝立ちの状態になってしまったがまだ肘打ちで脱出できる。息が続く内に左腕を動かそうとすると、飛鳥は俺に背負われる形で密着してきた。脚もすっかり脇下に回し、可動域を奪ってくる。

こうなるともう脱出方法は限られる。さつき落とさせたナイフを使うか、どちらかに

倒れ込むか、顔面があるであろう位置に向けて殴るか。無力化する、という目標もあり最初のは無しだ。

「あ、その人近付かないで。少しでも動いたら首折るよ」

となれば、一番確実でやりやすい選択肢を選ぼう。膝立ちから上手い事立ち上がり――

「うわっ!？」

そのまま前方向に倒れ込む。深くお辞儀をする様に、飛鳥の頭が俺より高い位置にあるのを利用して――

ごすんっ。鈍い音が立て続けに2つ響く。俺の頭には凄まじい衝撃が加わり、文字通り星が見えた気がする。首を絞めてた方も、これの半分は痛い思いをしてるだろう。流石に2人分の体重を片方に集中すれば頭が弾けるかとも思ってた。最初に自分の頭で衝撃を吸収したが……威力が弱かったか？ 滅茶苦茶痛いし。

そんな不安も、首に回されていた腕がだらりと垂れ下がったのを見て払拭される。ゆっくりと背中から退かすと、額から血を流している。

「やり過ぎたか……?」

今度は完全に気絶している。脈はあるが、脳震盪で済んでいないかもしれない。

「でもこうしなきゃ殺されてたわ……仕方ないわよ」

悠里が俺の額をハンカチで拭う。そっちにもべつとりと血が付いていて、見た目だけでは俺の方が重傷だ。

そして流石に暴れ過ぎたのか階段を駆け上る音。次の瞬間には勢いよく扉が開き血相を変えた忍と胡桃がこの惨状を見て目を白黒させている。

「誰その子!？」

「やっぱ飛鳥かあ」

2人共言葉は軽く思えるが既に臨戦態勢に入っている。双方目が血走り、忍に至っては黒い方のナイフを部屋の隅に蹴って俺のポーチから結束バンドを取り出し拘束の準備に入っていた。

「足だけ縛れ。シノ、監視はどうした？」

「クツソ寒いんで休憩中だった恵比寿沢達とお茶してた」

こいつツツ……まさか忍を突破して来たのかと心配した俺が馬鹿みたいだ……まあ無事なだけマシか。

見るからにイラツとした俺を見て、忍は申し訳なさそうに俺を見る。

「すまん、俺が見張ってればこいつが入ってくる事もなかったんだよな……」

「いや、いい。お前じゃこいつには勝てなかった」

「うそ、俺の信用なさすぎ……?」

「違うって。こいつ滅茶苦茶強かったんだって」

「でも勝ってんじゃない」

見るからに辛勝の状態だろ。あと一歩及ばなきや確実に首取られてた自信あるってのに……ああそれより現状確認しなきや。

「くるみ——」

「坂上とイツキ以外は食糧庫に避難してる。イツキは玄関、坂上はリビングの窓を警戒中だぞ。あたし達の武器も部屋の外に置いてある」

「……パーフェクトだ胡桃」

「へへっ」

「感謝の極みって言えよ」

「えっ、なんだそれ」

これがジェネレーションギャップって奴かあ、悲しいなあ。いやでも、あれもそこそこマイナーな部類に入る作品だし仕方ない気もする。

「あの……皆？」

顔だけガチで軽口が出てくるこの豪胆さに、悠里が困惑している。俺と忍がこれなのはともかくとして、胡桃までもがこうなっているのはヤバい。こうなってはもう一端の兵士と言っても過言ではない。

戦闘中はこの世の終わりに直面していたかのような顔をしていた悠里。この場の雰囲気飲まれて落ち着きを取り戻したのか、いつの間にか窓際で外の様子を伺っていたらしい。

「……男の人が2人きてるわ」

「ん？ 人質の交渉か？」

確認の為に悠里を少し下がらせて片目だけ窓から覗かせる。窓の外、正面の門を乗り越えてきたんだろう。金属バットと木刀を持った男2人が余裕綽々といった面持ちで近付いてきている。

「あいつらは……」

顔までは覚えていないが、あの得物……夢に出て来た奴らと同じだ。

「知ってるの？」

「いや知らん。だが油断はできない」

立ち振る舞いからもわかる。ただの凡人とは思えない。今まで生きてきた以上どうもこいつも普通じゃないのは当たり前だが、夢でボコボコにされたからここまで警戒している、という訳でもない。あれは……そこで伸びてるヤツよりはマシだろうが忍の戦力と同等、もしくは少し劣るレベルだ。

「シノ、これから一戦交えるかもしれない」

「いいけどさ、ミヤは大丈夫なのかよ。肩の怪我に加えて消耗してんだろ？ 一先ず俺だけで様子見るってのは——」

「無理だ。数的優位を取られてる上に速攻掛けてくるタイプにしか見えない。それに戦力の逐次投入は愚策だろ？」

忍は少し考えると、「まあな」と言つて廊下に出て武器を取ってくる。相も変わらず武器は俺が補強と改造を施した木刀。改良した3本の中で一番出来のいい真打ちの様な扱ひでもある。

それが未だに使われてると思うと……感慨深いな。今度新しく作つてみるのも悪くない。

「そーいやミヤのは折れたんだっけ」

「俺は扱ひが雑だからな」

ボヤきながらもコートやらポーチやらいつもの装備を装着する。そして斧を手に取ろうとした時……

「まあ待てよ、今回斧は置いてった方がいいと思うけどな」

「ん？ まあ対人だしな、威力より手数がある方が有利ではあるが」

「ミヤは元からナイフ向きだろ？」

いきなりなんだ？ 持っているナイフも殆どが長くても刃渡り20cm程度で戦闘

にはあまり使えない。最近手に入れたばかりの剣鉈も、やはり元が鉈というのもあって重さも運用方法も違う。

「こんなのがあるんだけどよ」

取り出す時、ちやり……と金属音を出しながらいくつかの黒い布製の束を出してくる。受け取つてみると思ったより重量があり、それが1つや2つではないとわかる。

巻物の様に束ねられた3つをベッドの上に広げてみる。……それらはいくつもの持ち手が付いている様に見えるが。

「ほう」

その中の1本を抜いてみると、思わず声が出てしまった。重量も重心も考えられた、諸刃のナイフ。刃渡りはかなり、というか超長めの25cm程で、投げれば上手く回転してくれるとわかる。

「5本で1束、俺も持つてはいるけど使いこなせなくてなあ。使つてみたけど耐久性も切れ味も保証するぜ？」

「いいじゃないか。投げナイフは威力の面で劣るが痛みを怖がる奴にはよく効く、それが15本ともなれば投げずともかなり怖いな」

「ミヤなら1本で必殺だろ？」

流石にそれは買いかぶりだ。……でもこれがあれば、もしかすれば勝利への切っ掛け

にはなるかもしれない。

「……1本プラスチックアルファなら、行ける」

「じゃあもう必殺だな！ よっしや行こうぜ。あ、ついでにこれもやるよ」

「まだあるのか」

忍はまた違う大きさの袋を渡してくる。歩きながらも中を覗いてみると、10枚綴りのオーソドックスな手裏剣。

「いいねえ……ノーコンだけど数撃ちや当たるとも言うしな」

それに手裏剣は過去に投げた事がある。搦め手が使える程の技量はないが、単なる牽制かはったりにはなるだろう。

投げナイフに手裏剣、それぞれを身体中に括り付けていく。ただでさえポーチやライトなんかが付いてると言うのに、こここまでくると人間武器庫なんて言われてもおかしくはない。右腕に付けていたL字型のライトをバッグのベルトに付け替え、空いた場所に1束のナイフを付けてみる。というかこれ重い、間違いでも脚なんかに巻いたらいつものスピードは出ない。

「……なんか降ろしたらどうだ？」

「これでも最低限必要な物しか付けてないんだけどな」

「最低限……？　つか装備重量どんだけあるんだよそれ」

「重くても15kgくらいじゃないか？」

忍は呆れている。一昔前なら俺は本当に最低限の装備が主流だった。それは最低でも2人で行動する事が基本で、尚且つ拠点があつて食事や睡眠はそこに戻ればいいという環境だったからだ。

しかし1人になつてからはそうもいかない。時期も時期でほぼ漁り尽されている地域もあり、常に移動しなければならぬ。戦闘も自分の苦手な所は誰かに任せるなんて当然できず、嫌でも万能にならなければいけなかつた。

雑貨や消耗品に医療品、リーチと威力のある長物に閉所用のナイフ。本当の最低限はこの程度になつてくるが……確かに持ち過ぎかもしれない。でも重いとは言え今はこの重さに慣れている。スピードもスタミナも従来と変わらないぐらいだ。

「ん？ さつきノーコンつて……じゃあナイフも無理つて事か？」

「ナイフは別にいけるが。というか棒状ならいける」

「なんだその限定解放スキル、ピーキー過ぎんだろ」

そんなの今更言う事じゃないだろ。俺をパラメーターで表せばかなり尖つた性能になるのは分かり切つている。苦手な分野も火力や勢いで乗り切つてるようなもんだ。低コストで高火力だけHPが低い、加えて特定の状況になると火力が上がつたり即死したり……客観的に言えば博打過ぎて使いたくない。

「そんじや、待たせるのもアレだし……行きますかミヤさん？」

「だな。久し振りの共闘だ」

「かつこいいとこ見せましょ」

どちらからともなく拳を突き出し、フィストバンプをする。そんな俺達を見て、胡桃と悠里はくすりと笑った。

「つしゃ！ じゃあ今回はあたしも……」

「気合い入れてるとこ悪いが、今回胡桃はお留守番だ」

「はあ!？」

胡桃はずかずかと俺の目の前まで詰め寄ってくると、顎先で「なんでだよ!？」と抗議してくる。

「お前人殺せんの?」

「こ……殺す、のか?」

「当たり前だ。場所が知られてるのに生かして帰せるか。もう既に少数が報告に戻ってるかもしれないが、数を減らしておくという面でも……皆殺しにしないなら」

俺達の中で生身の人間を殺した事があるのは知る限りでも3人。俺と、イツキと、忍。ああ、前悠里がナイフで滅多刺しにしてたか……でもあの1回限りで、実際に止めを刺したのは俺だからノーカンだな。

そして本当の意味で殺したのは俺と忍だけ。イツキは銃だからノーカンだ、指さえ引いて狙いが正確なら一瞬でケリが着く。だがナイフや鈍器で殺すのは、銃とは比べものにならない。肉の感触、相手の呼吸が止まる瞬間、何より死んだ後の表情、全部降りかかってくる。

「シノは？ 殺せるのか？」

忍は何も言わず、明後日の方向にある虚を見る。……つまりこの中で割り切れてるのは俺だけかもしれない。精神状態が悪化すれば内乱の切っ掛けにもなる。嫌がる事を強要すれば人望も落ちてしまう。

せめて、「あれは仕方なかった」と思えばマシだが、平和な世界を知っていた分抵抗も大きい。

「……殺せる」

その言葉を発したのは、他でもない悠里だった。全員の眼が悠里に集まる。肩を抱き、怯えながらもなんとか振り絞った言葉だとわかる。

「もう……見てるだけなんていや……」

「さっきのか。あれは俺も加減してたから負けかけたんだ。それに誰が殺せると言っても、俺は忍とイツキ以外に人殺しをさせる気はない。そういうのは自分か、自分より弱い奴が今にも死にそうな時だけでいい」

「でも——」

「客を待たせてるんでな、今回胡桃は留守番、これは決定だ。行くぞシノ」

無理矢理話を終わらせて足早に部屋を出る。忍も少し遅れて出てくると、急いで俺の隣に並んできた。

「いいのかよ、あんな強引で。つうか変わんねえな、一度決めたらてこでも動かねえの」
「じゃあ女に人を殺せて命令しろと？ 俺はそこまで落ちぶれてねえよ」

「初めて殺した時……ミヤは何にも気にしてなかったよな。狂ってると思っただぜ、でも実際は違った」

「……昔の話だ」

「2人目には笑ってた」

「なんだ？ 喧嘩売ってんのか？」

流石の俺でもイラついて睨むと、忍の瞳は憐れみが浮かんでいた。なんだその瞳は。
「殺したくねえなら他の道もあると思うけどな」

「ねえよ。他人を信用できる程聖人じゃねえからな、面倒事を避けるならいつそいなくなってくれた方がマシだ。無秩序状態の今、生きてる人間ってだけで面倒な臭いがブンブンする。有益な情報だけ貰ってなっがい休暇くれてやった方がいいだろ」

俺は変わらない。それがわかったのか忍は憐れみのこもった瞳を伏せる。

「はあく……つたく神はいねえのか」

「休暇取ってベガス行つてんだろ」

「担保はこの世界か？」

「ボロ負けしてんだろうよ、じゃなきやこうはならない」

「ハッ、笑えるぜ……」

全く笑つてないが。

冗談を言い合っている内に、俺達は扉の前に立つ。大きくて、立派な観音開きの扉……これがあの世への扉になるか、栄光への扉になるか。

「どっちだろうな」

「ああ？ 何の……あー、いや。アレだな、そういうのは自分で掴み取るもんだぜ、ミヤさんよ」

「取りこぼしそうだ。なんせ片腕だからな」

「いんやちやんと両腕あるぜ？ ——俺がお前の右腕になるつつつたろ」

「……そうだったっけ？ シノが言うなら多分そうなんだろうけど」

「多分じゃなくてそうなんだっつの、これだから孤高気取つてる中二病は……」

軽く膝裏に蹴りを入れてやると扉に手を掛ける。これにて余興は終了、そしてこの扉は……少なくとも俺達が敵への地獄の扉になる。

「ぶちかまそうぜ、ミヤ！」

「まあやるなら本気でやろうか？ そっちの方が……」

「楽しいだろうからな」

頷き合おうと、2人一緒に扉を開く。

「撃て」

そして号令は唐突に——

27. 疑惑

私は、なんの変哲もない普通の家で生まれた。少なくとも私はそう思っていた。両親は共働きで、帰ってくるのはいつも夜遅く。酷い時には次の日の昼に帰ってくる事もあった。

お腹がすいて、食パンをかじって、でもそれは朝に食べるパンで怒られたりもした。でも仕方ない、私はまだ料理なんてできない。誰も教えてくれなかったんだから仕方ない。

小さい頃からほとんど1人だった。友達はみんな私を笑う……勉強も、運動もいつも最下位だった私に友達なんてできない。それをお母さんに相談した時、私が悪いとだけ言つてまた出掛けて行つた。

だから皆死んでしまったこの世界を、私はとても気に入っていた。血だらけの道を隠れながら進んで、家に帰つた時。お母さんは知らない男の人といた。私は……どこまでも馬鹿な私は、生きていくべきではなかった……と。どこからともなく声がして。

私がいちからお母さんは自由になれないと。何もかも私のせいで上手くいかない

て、「疫病神」だとやつとわかった。

だから、私は「かわいそうなひと」を助けてあげた。私は疫病神で……新しい場所に迎え入れられても何もできなくて……小間使いやストレスの捌け口としての存在価値しかなかった。どれだけ生きているかもわからなくなった頃、2人の男が新しく迎え入れられた。

その人達は苗字を名乗らなかった。それどころか、忍と尊という名前すら偽名だと明かす。周りは面白がって、いくらか私から新人2人に興味が移っていく。助かった、と思った。でも同時に、私が受けて来た仕打ちをあの人達に押し付けているとも思った。やっぱり疫病神だ……それ以降私は忍さんの小間使いとして割り当てられた。

「お前、名前は？」

忍さんは少しだけ眉を寄せて、埃だらけの服を着る私に名前を聞いてくる。

「……忘れた。私なんかの名前は誰も覚えてない、だから皆「ヤク」って呼んでる」「ヤク? ……疫病神のヤクか。あいつら……ッ!」

忍さんを見るからに怒った顔で自室……もう使われなくなった倉庫を出て行く。その時は気にしなかったけど、後から聞いた話じゃ私を疫病神と呼んでいた連中を片っ端からシメていたらしかった。中には主力部隊に割り当てられている実力者もいるのに、ほぼ無傷で完封したとか……

「もうヤクなんて名前は捨てちまえ。お前は今から『飛鳥』だ!」

そうして私は「飛鳥」になった。それから、忍さんは実力を買われて主力部隊に入り、小間使いの私も同行する事が多くなった。忙しくない時はいつも「雅」と名乗って来た仲間の話をしてくれていた。私の名前も、その人の言葉から取ったらしい。

「あいつは子供ができたなら飛鳥って付けたいつつてたからな。今じゃもう叶わねえから、俺が代わりにやってやらねえと」

「……死んじゃったんですか?」

「ああ、右腕噛まれてな。ダメ元で切り落としたんだけどさ……ここにくるまでは一緒だったけど、容体が急変してぽっくり逝っちまった」

「そう、ですか」

「お前は昔のあいつに似てるんだよなあ……雰囲気っていうか、纏ってる空気つつうかオーラが。でもあいつは、雅はそこから挽回してクソ強くなったんだぜ? もう人間やめてんじやねえかってぐらい」

雅……忍さんの話すその人は私と同じように疫病神と呼ばれていたらしい。最初こそ復讐鬼になって人の不幸を望んでいたけど、次第に考え直して人の為になろうとした。武器を持って獣のように、本を持って学者のように、美味しいご飯の前には犬のようにもなる面白い人。

私は憧れた。新しい話を聞く度に、胸の奥が温かくなった。私はもう死んでいる男性に恋をしてしまったんだろう。雅と言う人間の半生は波乱万丈で、そのせいで何度も壊れて精神は歪んでいく。その度に自分を作り直して、新しい人間として生きる。

なんて報われない人なんだと思った。どれだけ頑張つて、誰かの為に生きていても、いつも最後は裏切られて……今まで好きで助けていた人に不幸の種を撒く。その人達は皆死んでしまつて、いつも一人になる。

忍さんと尊さんはそんな雅さんをずっと見て、支えてきた。いなくなつてみればようやく解放されたと喜ぶどころか、心にぽっかりと大きな穴ができてしまつたらしい。そんな忍さんの為にも、私は雅さんを真似た。

また最初から聞き直して、言動に思考に戦い方まで。どれだけ忠実に再現しようとしても、やっぱりどこか違う。忍さんは体格と性別を挙げた、そしてなりきらなくていいとも。

それでも私は研究を続ける。しばらくして、私はやつと2人をして本物と同等と言われるぐらいにまで達した。そしてその瞬間を待つていたんじゃないかと思うぐらいのタイミングで噂が飛び込んだ。

—— 隻腕の男。黒髪で前髪が長く、目は殆ど隠れていて、両手用の斧を片腕で振り回して無双する亡霊の様な男。足音はせず、目で見てもふらりとどこかに消えてし

まう。

忍さんは噂を聞いた瞬間、きつと雅だと確信していた。生きていた頃に目撃していた数少ない人達も、同じく雅だと思っていた。

そしてランダルコーポレーションと名乗る人達が接触してくる。

「囁まれても転化しない人間を知っていたら教えてほしいと言ってきた……俺は一人しか思い当たらない。雅さえいれば、この世界が救えるかもしれない」

避難所は浮足立った。すぐに捜索隊が編成されて、出発直前になった時、誰かが聞いた。その人間に何をするのかと。

「……………ほんところの世界はあいつに優しくねえよな。今まで散々な仕打ちを受けさせておいて、今度はモルモットだ。本当に——クソ喰らえ」

捜索隊の隊長は、これまでの実績や経験から忍さんが選ばれた。そこには今の懲罰部隊にいる人達の殆どが混じっていた、私も含めて。

私は、その部隊の副隊長。主に後方支援を担当していてその時雅さんとは接触しなかったけど、行動パターンの分析は忍さんと議論してほぼ確立できていた。そのおかげで雅さんの逃げる先もわかった。だからこうして、私は——

「飛鳥ちゃん！ 飛鳥ちゃんっ!!」

汚い色をした声が私を起こす。目を開けた瞬間、急に吐き気がしてお気入りのコー

トを汚してしまった。

「起きた！——つてうわああありーさんゴミ箱ゴミ箱!!」

すぐに差し出されたゴミ箱に残りを全部吐き出す。おでこに何かがある気がして探ってみると絆創膏みたいな物が貼ってあった。ああそっか、私負けたんだ。

喉がじりじりと焼けている。初めて見るツインテールの人にお水を貰って、口の中のすっぱさを無理矢理流し込む。ゴミ箱の中には溶けかけの変な薬と、茶色の変な汁。……これのせいで吐いたんだとわかった。今まであんまり体調がよくなかったのも、全部これのせいだ。

「飛鳥ちゃん、よく聞いて!」

さつき雅様とイチャイチャしていた女が私の肩をがっしりと掴んでくる。距離が近いのがいやで振り払おうとしても、ものすごく強い力で私じやどうにもできない。

「さつき雅さんと互角に戦ってたあなたなら……2人を助けられるわよね!」

「……互角なんかじゃない。雅様は……やつぱり強かった。打ち合う度にどんどん目が虚ろになっていって、全部見透かされてた……」

「でも私より強いでしょ!? 2人を……雅さんと忍さんを助けてっ!!」

こんな顔した人、いままで見た事ない。気絶してる間に何故か足だけ縛られてるのは意味が分からないけど、なんとか窓際まで行って外を覗いてみる。

「え……?」

押されてる……? 金属バットに木刀を持った仲間の2人が、弓矢の援護を受けながらだけどじりじりと2人を追い詰めている。素人目で見たら雅様は寸での所で躲して、忍さんは適度に距離を取って、むしろ全部見透かしてるようだけど。

矢はともかく、あの2人が木刀の一撃を躲す? 雅様だけならまだいいけど、同じ武器どころか強化されている忍さんまでもが回避に徹するのは……受けたらただじゃすまない程力が、技量があるってこと?

もしこのまま放っておけば……最悪の結末が待ってる。先に忍さんが倒されて、数的不利を前にして崩れ落ちる雅様の姿が視える。

「……紐切ってください」

「助けて……くれるの?」

「そうですよ? じゃないと雅様が……私の王子様が死んじゃいますから」

2人は一瞬間そんな顔をするけど、構わず私の足に巻かれたバンドを切ってくれる。

「私のナイフは?」

「待ってる、今持ってくる」

ツインテの方が私のナイフを拾ってきてくれた。刃先にまだ少し赤い染みが残っているのを見て、無意識に舐めた。

「なにしてんの……?」

「あのナイフ、雅さんの血が付いたのよ。さつきも舐めてたけど……」

「うわぁ……」

ほんの少しの鉄の味。それにほのかに甘く感じる……のは多分気のせいだと思う。でも、こんな少しだけの血なのに……私の身体は大喜びして鈍かった頭もどんどん澄み渡っていく。ああ……ダメかも、すつごく疼いてきた……でも今は我慢しなきゃ。

「じゃあいきますね」

「……お、おう」

早歩きで部屋を出てみたけど、どっちが出口かわからない。屋根裏から来たのもあって内部構造とかは……やっぱりわかんない。

「部屋出て左の階段降りたら玄関だから」

「あ、どうも」

言われた通りに歩いてみると、広々とした階段を見つけた。降りてみると、外からでも見えていた豪華な玄関の扉が見えてくる。

「みやびさま……いまいきますから」

準備は整った。頭の中はからっぽで、もうなにもかんがえられなかった。

——ヤバい。非常にヤバい。見くびっていた訳ではないが、こいつら……というかこっちの射撃担当は何やってるんだ……う？ まさか潜入してきたのは飛鳥だけじゃなくて、イツキと坂上は水面下で行動不能になってるんじゃないだろうな？

「ミヤ、もう一回仕掛けるぞ……！」

「そう何度も同じ手は通用しない。初回の時点で弓の照準も精確だった、次は当てられるぞ」

「チツ……それもそうか。つまり俺達は……」

「詰んでるな」

あの2人は最初の場所からあまり動こうとはしない。基本的に防衛型だが、射程に入っている限りは高火力かつ精確な一撃がくる。それを打開するのに一番手っ取り早いのは射程外からのアウトレンジになるんだが、肝心の射撃班が動かない。……それとも動けないのか？

敵2人があの場所から動かない理由。門を正面としてV字型の敵射線。それだけでも確認できているのは4人だ、事前に尋問していた情報が合っているかどうかは別として確認できる敵数が少なすぎる。

それに弓を所持している人数が2人だけというのも……しつかりと見た訳ではないが、弓は恐らく自作だ、2本作れるならそれ以上あってもおかしくない。俺なら部隊の

半数、いや3分の1は射撃班にする。その確証になるかはわからないが、放たれる矢も手製だ。しかも援護射撃にも躊躇がない。つまり残弾はたんまりあるか、出し切つても殺したいという事だ。

こちらの射撃班は動けず、敵の射撃班は2名だけしか見えない。相手の前衛は動かない、もしくは動けない？ この状況になるまでに何があつた？

「考え事か？ 舐められたもんだな」

「そつちこそ、うちの相棒が考え事してても攻めてこないんだな？」

「行くまでもないからな」

行くまでもない、か。虚勢でもなんでもない、自信のある言葉だ。……もう一度、もう一度考え直せ。

相手2人は動かないか動けない。敵の射撃班は確認できる限り2人だがもつといる可能性の方が高い。相手が攻める側なのに懐に入ったきり攻めてこないどころかこれ以上攻める必要がない。

——1つずつ考えるな、全てを同時に……頭の中でマップを広げる。もう少し、もう少しで答えが見えてくる筈だ。

「——わかった」

「お？ 終わったかミヤ。で、解析結果は？」

「この勝負、このままじゃ10割負ける」

「はあ!? ……つて『このままじゃ』だろ? じゃあやり方を変えたら勝率いくらだ?」

「3割いかないな、25%つてとこだ」

忍が頭を抱える。少しの間うんうん唸って、吹っ切れたのか笑顔で俺の右脇腹を小突いてきた。

「なーに、四捨五入したら30%だろ?」

「それをまた四捨五入すればゼロになるが」

「そう、つすねえ……じゃあやめるわ四捨五入。でも25あるんだろ? ソシヤゲの最

高レアの確立よりよっぽどあるぜ」

「これが慣れつてやつか……現代人は超低確率を攻め過ぎてるな」

「なあに、任せとけつて。運だけなら誰にも負けねえ自信あるぜ? で、なにすりやいい?」

俺達の会話を敵2人は余裕綽々といった感じで眺めている。油断というのは余裕がある所に生まれるものだ、その隙に入り込むには鋭利で細い切っ先が要る。俺と忍、特に忍はそれには合わない。こいつは大剣で叩つ切るような性格だからな。

ここは適材適所、俺達もあいつらと同じ戦法を取って応戦するしかない。

「屋上に行け。恐らく敵が陣取ってるか、弓で釘付けにされてるだろう。イツキサえ自

由になれば俺達は勝てる、なんなら射撃位置の変更も視野に入れてくれ。ある程度何か壊れてもいい」

小声で耳打ちすると、忍は頷く。

「わかった、じゃあしばらくの間時間稼ぎ頼むぜ」

「ああ。だが、別に倒してしまっても構わんのだろう?」

「お? やれんのか? いいぜ、俺の努力無駄にしてみせろよ」

最後に俺の肩を叩いて、全力で建物に戻っていく

「ほう、一人で俺達に勝てるのか?」

「さあ、あいつはともかく俺は運が最悪だからな。だが……不運つてのは時に実力でカバーできるもんだ」

ちらつと屋上の方を見てみる。屋上自体行った事はないからわからないが、あの前衛2人の位置……あそこを撃つには上半身の殆どを晒さなきゃならない。

「うわっ」

後ろで忍の悲鳴が聞こえる。何事かと少しだけ振り返ると、玄関の扉の向こうにはコートを脱いだ飛鳥が立っていた。

「お前何で——」

「じゃまです」

飛鳥は忍の肩を軽く押して、それでできた僅かな隙間をすりりと通ってくる。今回はその無駄にデカイ胸が引つ掛かる事もなく、えらくスムーズだ。コート脱いだからか？

「何故ここに？」

「いまはいいでしょ」

あー、スイツチ入ってらっしやる。でも甘い感じだな、まだ足りてない。というかこいつのスイツチってどうやって入るものなのか。

感覚的に数十秒程考える。そして飛鳥が持っているナイフを見て確信した。——

こいつ、超ド級の変態だ。しかしそれが使えるものならば使わなきゃ損だ、あまりやりたくはないが……

「飛鳥」

ナイフを口に咥えて、手の甲に軽く突き立てる。勿論血が出るし、軽くとは言え切れ味がいいのもあつて勢いもそこそこだ。とはいえ数分もすれば止まるだろう。

そんな様子を見た飛鳥は、あの時と同じく目をキラキラと輝かせる。そんなに血が好きか、俺も好きな方だが……どう好きかは絶対に違うだろうよ。

「前払いだ」

「いいんですか……!?!」

「頼むから我は忘れないでくれよ」

飛鳥は差し出された手を、まるで壊れ物に触れるかの様に両手で優しく包む。そして零れそうになった血にすぐさま口を付けた。

……うわー、すつごい夢中で吸ってる。いやそれだけ吸えば出る分の血もなくなつて止まるだろうが……すつごい舌這つてんなあ。気持ち悪いというか、見た目小さい女の子に血を吸わせてるつてヤバイ。背德的というか、これ最早犯罪だ。

「ふはっ……はああ……」

堪能しました。そう言いたげな蕩けた顔を俺に向けてくる。底の見えない井戸の瞳は少しだけ人間らしさを取り戻して、正に生きていると実感してますつて瞳をしている。

「……もういいか？」

「もうちよつと……」

いやもうでないつて、あーあこれほつといたら吸い尽くされるんじゃないかなろうか。こいつは吸血鬼か何かか？

最後の一口。吸い尽くされようやく自由になった手を見ると、傷口は血が滲むどころか綺麗に舐め取られて肉本来の色が見えている。若干引くわ。

「もういいよなっ……」

「はあ……」

おい腹をさするな。しかもなんか震え始めてるし若干どころかドン引きだぞ。

「なにやっつてんだお前ら」

何やっつてんでしようね俺ら。でもこれ必要な事なんですよ、この超絶ド変態娘を制御するには畜生と同じく餌付けが有効なんです。その手っ取り早い餌が血液なだけで。

しかし自分達のリーダーが目の前で敵側についているというのに、こいつらぴくりとも反応しない。まるでそれが当たり前の様に……違うな、わかっていたという訳でもなさそうだ。

「にしても生きてたか、お前もしぶといヤツだなあ？　“ヤク”」

ぴくり。飛鳥がヤクと呼ばれ顔を伏せる。おいおい、折角その気にさせたのに氣力を削がれるなよ。

「ヤクう？　飛鳥じゃねえのか」

「そいつの飛鳥って名前は忍が付けた名前だ。なんでも、昔一緒だった仲間が娘に付ける気だったらしいが？　その仲間ってのはお前の事か、隻腕」

……：……：そういえばそんな事言ったつけ。あれは酔った勢いでお互いテンションが狂ってた時の与太話だったんだが。そうか、つまり飛鳥は……：……：忍め、中々粋な事しやがる。

「疫病神。長つたらしいからもつぱらヤクって呼んでたのによ、忍がキレてからは一文

字増えやがった。まあ裏じゃ忍も含めてヤクって呼ばれてたけどな」

「——今なんつった？」

「あ？」

聞き捨てならない言葉だった。びくびくと震え、腕を抱えてしまっている飛鳥を見て……もつとイラついてくる。怒り？ いやいや、そんな生温いもんじゃない。

「疫病神、つったな？ この子を……忍をッ!!」

持っていたナイフを一瞬にして投げる。本来なら回転させて投げる手法を取るが、つい無回転で投げてしまった。そこそこの速度で相手から見れば点が向かってくるようなものだと言うのに、木刀を軽く振ってナイフを弾かれてしまう。

「なんだ、キレてんのか」

「キレてる……？ んな生易しい感情じゃない。——だがまあ最ッ高にキレてるよ。

おい飛鳥ッ!!」

俺の声に、隣でただの少女と化していた飛鳥が一際大きく震えた。恐る恐る顔を上げて、俺の顔を窺ってくる。目が合った瞬間、その瞳は恐怖に染まった。

「お前それでいいのか？ 何の為にそこまで強くなった、どうして俺を真似た？ 強くなりたかったんじゃないのか？」

「わたし、は……」

「強くなつて見返してやる。疫病神つて呼んだ事を後悔させてやる。地べたに頭擦りつけて、泣いて謝るまで許さない……いや謝つたつて許さない、生まれてきた事すら後悔させてやる。……そうは思わなかったのか」

「そ、そんなこと……思つてない！」

「じゃ俺とは違うな。どうせこうだ、自分が大嫌いだったから自分を捨てる為に誰かに成りきろうとした”。違うか？」

飛鳥は再び顔を伏せる。唇を噛み、一筋の血を滴らせて。

「ほらみろ、俺とお前じゃ根本的に目指した地点が違う。かくいう俺も最近まで忘れてたが、始まりはただの復讐だった。……お前が俺に負けたのも、お前と俺の考え方の違いからくる誤差だ。それとお前が“女”だったのもある」

俺が懐に飛び込んだあの瞬間、飛鳥は完全に狼狽していた。俺の血を飲んであそこまで蕩けていたのを見るに、早い話ときめいていたのかもしれない。単純なナイフの技量では片腕の俺が劣る。その差を埋めたのは、他でもない性別……こいつの言う「好き」という感情だ。

「血を飲んでも俺には近付けないぞ。もし近付きたいのであれば……疫病神と言われた瞬間、お前は怒るべきだった。自分を否定した奴は全員殺す、お前が聞いた頃の俺はそう考えてただけだな」

「そんな……雅様は……そんな汚れた人じゃ……」

「残念ながら元は自分勝手な感情だったんだ。……妹を失くして、自分の価値も意味も全部潰された。『疫病神』と言われ続けて、耐え切れなかった俺はそれまでの自分を崖下に突き落としてみたんだ。それが今更完全に這い上がってきてやがる。もう吐き気すら感じない——目の前にある全部が憎くて仕方ない」

なのに悠里に膝枕されて、俺は少しばかりの安息に浸っていた。奏楽に似ても似つかないあの少女すら、過去を思い出させるからと視界から外すだけ。——ああもう、頭の中がぐちゃぐちゃだ。何を考えればいいのか、何をすればいいのか整理する余裕すらない。

ただ鉛筆で誤字をぐちゃぐちゃに隠すかの様に思考も言葉も記憶も掻き乱される。考えちゃいけないのか？ まさかまだ何か忘れてる事があるんじゃないのか？ なんでもここまで考えさせてくれないんだ？ 一体誰が邪魔してるって言うんだ。

「ほー、そのクソガキ以上に効くじゃねえか。——だからお前は疫病神なんだよ、さっさと死んだ方が仲間の為なんじゃねえの？」

「……っせえな」

——殺せ、今すぐ飛び込んで首にナイフを突き立てて抉ってその返り血を浴びよう。そうしたら絶対気持ちいい。

「つるやい……」

ノイズはやがて言葉になる。文字でもなく、声でもなく。自分が思った事の様に勝手に浮かんでくる。この殺し方のイメージ通りにやれば……きつと殺せる、確実に殺せる。少し力を抜けば、次の瞬間にはイメージが現実になる。

でもそれは駄目だと、何かが止める。でも最初の計画でも皆殺しが前提だった。殺してはいけないなんて決まりはない、むしろ殺すべきなんだ。でも、それでも駄目だとなにかが動くのを止めていた。

これはなんだ？ 理性とでも言うのか？ 今まで散々殺してきたのに、何を今更止める必要がある。生きていようと死んでいようと、これまで俺はお構いなしに障害を排除してきた。この手はもう汚れている。一体何がいけないと言うんだ？

「雅さんっー」

飛び出す為に重心を移動させようとした時、飛鳥が右側から突っ込んでくる。倒れた時の衝撃で我を取り戻し、ぐつぐつと煮え滾っていた殺意をどうにか抑え込みながらも動かない飛鳥を見る。

「飛鳥……？」

「は、はい……生きてます……よね？」

「生きてるな」

「え？ あつ、掠り傷で済みました」

飛鳥が押さえたのは右の横腹。大きな胸のすぐ下には服が裂かれて赤い血が滲み始めています。よし、軽傷だ。本当に掠っただけらしいな。

だが少し痛そうに眉をしかめる飛鳥を見て、俺の胸の奥が痛む。

「……動けるか」

「はい、全然大丈夫です」

「ごめんな」

傷口から溢れた血を、親指で拭う。それも少し痛かったみたいだが、次に俺がした事の方が衝撃的だったらしく目を見開いていた。

「飛鳥。お前、俺の物になれ」

口の中には血の味が広がっている。久しく……いやつい最近も味わったが、この感覚は久し振りだ。今俺の中では太く、決して折れない鉄柱の様な信念が通っている。あの時、学園生活部について行くと決めた日の様な、決意の感覚だ。

——俺は護ると誓ったんだ。ただ憎くて殺す、そんな在り方じゃ何も護れない。正義の味方なんて俺には似合わない……だからせめて手の届く範囲の奴らは護る。その為にも、護りたいと思った相手は近くに置いておかなくちやな。

「へえあつ!？」

飛鳥は自分の血を舐められた事と最悪プロポーズにしか聞こえない言葉に狼狽している。ほらそういう所だ、だからお前は駄目なんだ。

「極意を教えてやる。お前はもう疫病神じゃない、誰かの為にあるとする限り疫病神にはならないんだ。人の為に泣いて、人の為に笑え。自分なんか要らないと思うくらいなら人の為に使い潰せ。……そっちの方が綺麗だろ？ だから俺は“雅”なんだ」

遠い昔に言い聞かせた言葉を、今また一言一句変わらず声に出す。要らない人間なんていない、そんな綺麗事を言うつもりはない。必要な人間がいて、不要な人間も必ずいる。現に俺も不要な人間の一人だ。

だからこの言葉で縛った。本当に誰かの役に立てたなら、もう不要とは言えない。必要とまでは行かなくともどちらかと言えば要る人間になれる。

だから俺は汚くとも人の為に動く。だから俺は恨まれようと人の為に動く。とんだエゴイストだ、人の為と言っても結局は自分の考えで動く。まだ機械の方が人の為になるだろうに。

だから、それでも——正しくなくとも俺は自分が間違っていないと証明する為にこの言葉を使う。

「俺は飛べなかつたよ、だからせめて自分の子供には飛び立ってほしいと願って“飛鳥”と名付ける。そう考えたのかもしれない。お前はどうか？」

「……私も、飛べないです。だって、翼がないんですもの」

「俺を目指してそこまで強くなつたなら、辛うじて片方の翼はある。——比翼の鳥、つて知ってるか」

「どうやら知っているらしい。俺の途中で途切れた右腕を見て、はつとしている。」

「ついてこれるか？」

「……はいっ！」

飛鳥の瞳から生気が溢れ始める。どうやら気持ちは固まつたらしい。

「遠慮はしない、全力で行くぞ。お前の戦い方は古い。見て覚えるんだな」

新しいナイフを抜いて、飛鳥に手渡す。今思い付いた戦法が使える保証はない。仮に使った所で飛鳥が対応できる保証もない。どれもこれもぶつつけ本番、俺の思い通りに事が進めば10分と経たずに全員殺せる。

……最高だ、これから人を殺すというのにここまで満ち足りた気分になるとは思わなかった。さつきまでの疲労も、鈍った頭も全部リセットされている。

「はいよ、疫病神」

それはもう効かない。俺も飛鳥も、軽く鼻で笑って同じ姿勢を取る。まるで鏡合わせの様に、他の誰にも真似できない事をしてやろう。

「挟撃する。お前は右だ」

「はい」

突つ込む前の重心移動。その動きも全く同じだ。そして合図もなく、目を見開いて駆けだした。

飛鳥はもう吠えなかった。ただ静かに、弓の援護射撃も最低限の動きで躲して目標をじつと捉えている。敵が2人以上いる場合、俺はあえてどちらかに隙を見せる動きをする。というか俺が1人である以上1人にしか攻撃できない。

勿論攻撃中は隙だらけだ、だが目で捉えているか、ほんの直前まで見てさえいればどうするか予測する事は出来る。そしてどう躲すかも――

「ぐっ……」

俺の突きを躲したバット持ちの男が、背後から来た飛鳥の突きを太腿に受ける。しっかりと深くまで突き刺し、捻じる手間も加えて最高効率の一撃になった。更に駄目押し、躲されたナイフを逆手に持ち替えて左の脇腹に突き刺す。これで1人あがりだ。

「お前ら……ッ!」

仲間が瞬殺され、木刀持ちが若干狼狽えた。その隙も逃さず後ろ蹴りで新たな隙を作ろうとするが、男も前蹴りをしようとして特撮の様に双方の足が交叉した。それも立派な隙だ、即座に膝で相手の足を絡め取って地面に引きずり落とす。

そこに飛鳥の突き。首を狙った一撃だが、相手が一枚上手なものもあつて木刀で防がれ

る。4 c m程突き刺さった切っ先はそう簡単に抜けない。抜こうとしてしまった飛鳥の顔面に男の渾身の左ストレートが入った。

「はあつ、いったあ……」

怯みながらも武器を放さないのは評価できるが、そのおかげでナイフは抜けたがフリーになった木刀が高く構えられようとしている。上段からの打ち降ろしだ、頭に当たれば砕くのも陥没させるのは造作もない。

咄嗟に距離を詰め、ヤケクソ気味で突きを入れる。ドラマで見えるお手本の様な突進は、容易く躲かれてしまった。

「気を抜くな」

乙女の顔面を殴ってしまいには木刀を打ち込もうとするのかと言いたくなるが、俺さつきアツパーいれて頭突きまで入れたしな。というかほぼリンチだったから文句を言える立場じゃない。

怯んだ飛鳥の胸にリアットするような形で敵から更に距離を取ったのはいいものの、相手は完全に体勢を立て直している。

「あいつと近距離で殴り合うのは得策とは言えないな……使いたくはなかったが」

レグポーチから銃を取り出す。今まで使わなかったのはいくつか理由があるが、一番は銃声で第3勢力に悟られるかもしれないという不安からだ。しかしこれ以上

被害を増やすのもよろしくない。ここはちよちよいと片付けて、新手がきたらこいつらの弓を使って排除すればいい。

「銃……!!? おい弓隊なにしている!! 距離があるうちにさっさと殺せ!! 包囲してる奴らも全員かき集めろ!!」

「そいつは無理な話だな」

先程まで敵の射撃班が顔を覗かせていた場所から、最早聞き慣れた声と共に忍が顔を覗かせる。

「!? し、忍……!!?」

「久し振りだな、元気だったか?」

「まさか……この短時間で……?」

忍が扉を乗り越えてくると、その後にも続々と包囲していたらしい大人数が続いてくる。総勢13人……聞いていた数より少なくなっている。

「こいつらは降伏し俺達の側に回るそうだ。皆殺しにする必要はもうないぜ」

「信じられるのか」

「さあ、実際どうなのかはわからねえけどな。こいつらは皆顔馴染みだ。つうか前お前と会った時のメンバーだしな」

……なに? つまり忍と尊さんを追っていた奴らは殆どが逃がす為に協力していた

のか？　じゃあ、俺が殺したあの若いのは……

「良い報せと悪い報せがある。その2人と残りはまた派閥が違う、完全に上からの指示に絶対の連中だ」

「その残りつてのは？」

「外で拘束した。——それで悪い報せだけど」

今が良い報せだったのかよ。まあ拘束してあるなら確かに良い報せと言えるか。

「少し騒ぎ過ぎたらしい。大人数でこいつらが移動したのも合わさって、いくらか感染者が集まって来てる」

「それこそ良い報せじゃないか。都合の悪い人間を楽に消せる」

忍の人望に集まった奴らがざわつき始める。俺の話を聞いていたかはわからないが、少なくとも評価は今のでガタ落ちだろう。まあ問題ない、この程度で反旗を翻すような奴はこの先黙っていられるような奴じゃないからな。

「まあたお前の悪い癖が出たな。もう少し人に優しくできねえのかよ？」

「しなくていいだろ。赤の他人にまで分けてやれるほど俺の優しさは多くねえよ」

「はあ……まあいいや。それで？　お前はどうか？　この人数差でもまだやるか？　そ

こで余命数分の奴と同じ運命を辿る事になるけど」

忍は素手の状態で木刀持ちの男に歩み寄っていく。なんて無警戒なんだ、それともそ

ういう所にここまで多くの人間がついてくるのか？ 俺じゃ考えられない、あり得ないやり方なのに、俺よりも多くの人間を従えている。

別に競つてる訳じゃないが……こういうのを見せつけられると劣等感を感じさせられるな。

「俺は……降参だ、流石にこの人数に太刀打ちできるとは思わない」

木刀を持った男は傲慢の武器も地面に投げ捨て、両手を挙げる。

「いいだろう。——こいつの対応は俺に任せて貰つてもいいんだろ？」

「さあな、最終決定は悠里だ。だが、そいつは知り過ぎた。それも含めて、今後話し合えばいい」

忍はしばらく考えた後、「OK」とだけ言つて周りの取り巻きに拘束を命じる。ああやつて一瞥するだけで指示をこなせる人間になりたいと一瞬思ったが、周りの人間を見てその考え方は浅はかだと理解する。

誰かを思い通りに使役する。そういう「在り方」に疑問が生じるのも確かだが、それ以前に俺はあそこまでのカリスマ性は持ち合わせていない。やろうと思つても、あそこまでの信頼を勝ち取るのは俺には無理だろう。

しかし、何故屋上に行つたはずの忍が正面から出てきたのか。当然無理な話ではないが、どんな経緯でこうなったのかが気に掛かる。

「とりあえずミヤちゃんもは休んでろよ、飛鳥もな。ついでに部長に報告しといてくれ。あとこいつら中に入れても問題ないよな？」

「駄目だ」

「……一応聞くけど、理由は？」

「俺はそいつらの事を知らない、悠里や胡桃もそうだ。見ず知らずの男が大人数来たら流石に怖がる。あと流石に場所が足りない」

「……ま、妥当か。つう訳でわりい、しばらく外で待機だわ。勿論焚火くらいはいいんだよな？」

「ああ、ただし薪は敷地外から集める必要があるからな」

それも忍はしぶしづ領くと、俺と飛鳥は屋敷の中へと戻る。扉を閉じて、鍵もしつかりと掛けた。窓を割られれば意味はなくなるが、物騒な音を立てなければ入ってこれない以上アドバンテージにはなる。それより……いくつか根回しが必要になったな。

「……はあ、面倒な事になったなあ」

「す、すみません……」

申し訳なさそうに俯く飛鳥の頭を雑に撫でると、嬉しそうにほんの少しだけ寄り掛かってくる。だがそこまで構ってやる時間はない。靴を脱いでさつき飛鳥が天井に大穴を開けた部屋に戻ると、出た時と同じく悠里と胡桃が訝し気な面持ちをしながら話し

込んでいた。

「なあ、雅……」

おかえりの挨拶もないままいきなり本題に入ったらしい。まあ俺も悠長に雑談して気分じゃないし、むしろ有り難い。

「——お前の仲間、本当に信用できるのか？」

そして、今まさに俺が抱えている疑念をストレートにぶつけてくる。

いつもならきつぱりと怪しいから追放するか処刑すると言う所だが、相手が忍なだけにほんの少し考えてしまう。正直、戦っていた時とその後……そろそろと引き連れてきた時の忍には違いがある。それはどんなに平和ボケをしていようと違和感を感じる変わり様だった。

屋上に行ったはずなのに、塀の外から現れたのも。つい数時間前まで死ぬ気で逃げたのにあっさりと許してしまうのも。ちょっとやそつとの情報ではそうはならない。きつと何かしら重大な事があったはずだ。

そして、あいつなら俺に休めと言った時に話があるとしても言うだろう。それが無いという事は、俺に関する何かを吹き込まれて寝返ったか、そもそも——味方にはなっていないか。

あれも違うこれも違うと、ありとあらゆる予測が頭の中を飛び交う。そのどれもが、

可能性が高いとも言えない程の小数点以下だ。まず情報が足りない。

「昔の仲間を疑うのは辛いだろうけどさ……」

だが、現時点で言える事は――

「――忍と尊さんは、信用できるとは言えない」

きつぱりと、自分の中で出た結論を告げた。

28. 前兆

「——信用できるとは言えない」

俺の言葉は3人にとって、余程驚くべきものだったんだろう。全員が狐に摘まれたか化かされたか、はたまた供えようとしていた油揚げをトンビに強奪されたような顔をしている。

「……え、聞いというてなんだけど。一応仲間、だったんだよな？」

「仲間だな」

「3人で生き残ってたんですよね……？」

「そうだな」

「そんな簡単に……疑っちゃってもいいの？」

「え、逆に疑わねえの……？」

胡桃、飛鳥、悠里の順に聞いてきたかと思えば、なんてこつたと各々頭を抱えたり腕を組んだり栗の様な口をしていたり。

「とりあえず、1階の尊さん以外を集めてくれ。イツキと坂上は俺が呼ぶ。それと胡桃、

大きめの皿と紐を調達してほしい」

「何に使うんだそんなもの……」

「鳴子トラップだが？」

「罨好きだよな……」

「真のハンターはまず足元を警戒するように、罨つてのは効率とコスパに優れた無人兵器だからな」

胡桃はニヤリと笑った俺に呆れると、残りを呼ぶ為に悠里を連れて部屋を出ようとする。だが――

「その子は……大丈夫なの？　一応忍さん達と追つて来てたのよね？」

「なんだ、解放したのは悠里達じゃないのか？」

「それは……2人が危なかったから……」

今更疑われた飛鳥はまるで干からびたミミズでも見るかの様な目で悠里を捉える。怖すぎるだろ、そのなんの感情も籠つてない目。全く興味はないけど邪魔なら殺そつかな、とか考えていそうなもんだが……案外ああいう目をしている奴はそんな思考すらせず殺すんだ。無意識に飛んできた羽虫を払い除けるかの如く。

弓や双剣は使わないがとりあえずスタミナライチュウあるし食べとこうみたいなレベルでさつとやってしまいうに違いない。そして後続の弓使いに諫められるまでがテン

プレだ。

「まあ大丈夫だ、こいつは今や俺のだからな」

その瞬間、場の空気がただ一人を除いて凍り付く。

「……今、なんて？」

俺も口に出してから全身が凍る、というより石化した。呼吸も忘れ、首を回そうとすればバキツと音を立ててもげるのでは？ そんな錯覚すら覚える程の恐怖心。生まれて初めて体感した、人の感情が爆発を通り越して静寂となり果てた一瞬を……俺は絶対に忘れないだろう。それか、これが最期の記憶になる可能性だってある。いや多分そうなる。

「その子が——雅〃の〃、何？」

「……………え」

今度は悠里と胡桃がミミズ俺を見る。石化しているのは向こうも同じらしい、いつもより幾分ぎこちない様子で、ほんの少しよくできた人工音声並みの声で。

一方飛鳥は背景に花でも舞ってそうだ。両手で顔を隠してキヤーハズカシーしている。そして俺は死ぬ。

「いやあ、ねえ？ ……飛鳥に血を飲まれて、俺も成り行きで飛鳥の血を飲んじゃってえ……………それってまあもしかすれば互いの組織を取り込んだわけだからほぼ同一個体つ

て事になるのでは？」

「いやそうはならんやろ」

苦し紛れのよくわからない文句にお決まりでド正論の突っ込みが飛んでくる。ガチガチに固まったどころか、最早時空が停滞して身動きが取れないのではと超次元的な発想に至りつつあったこの場の空気はものの見事に打ち砕かれた。

「なつとるやろがい！」

「いやなつてねえよ？」

最初の突っ込みは先程俺がプチ村八分状態にしようとした尊さん。飛鳥はテンプレで返すが、すかさず俺が燃料を投下してこの――196度の部屋を積極的に温暖化させようとしている。

が、悠里と胡桃の目からは変わらずハイライトが消えたままのミミズ目だ。それどころかあの2人だけ氷河期に取り残されている、アイスウーマンにでもなっているのか。「シノさんが戻ってこないけど……なにかあったのかな？」

いつも通りの微笑みを張り付けて、尊さんは少しだけ首を傾げながら聞いてくる。だがその瞳に映る感情は穏やかではなかった。

「襲撃を掛けてきた敵の中に知り合いがいたらしくて。降伏したそうなので対応を任せたいです」

「ふむ、じゃあなんで鍵を閉めてるのかな？」

「……………？ おかしいですか？ 降伏したとは言え、拘束はしてないので。気が変わってシノが無力化された時なだれ込まれたら面倒でしょ？」

一理ある。尊さんもそう考えているのか全面的には反対しない。ただ少し不満がある……………というよりも、俺を信じ切れていないといった所か。

まあ俺も隠し事は日常茶飯事だったし当たり前か。でもその瞳は違う。ほんの少し思う所がありますって感じじゃない。薄くではあるものの、敵意すら感じる。

「それで……………なんで飛鳥ちゃんがここに？」

「襲撃してきた奴らのリーダーですけど、こいつは今の所気が変わる可能性はゼロなのでね」

「……………まあ、そうかもしれないけどね。でもね、ミヤちゃん。その子が屋内にいるなら他の人もいれなきゃフェアじゃないんじゃない？」

「仮に入れた所で定員オーバーです。それに、このご時世美人を前にして抑えが利く男がどれだけいるでしょうね？ 少なくともお近づきになろうと面倒事は起こす気がしませんけど」

うん、納得いつてないようだ。尊さんの言い分もわかるがそこまでして面倒を見てやる義理もない。例え忍の知り合いだろうと、恩人だろうと、俺には関係あっても悠里達

は無関係だ。

全く関係のない誰かが不快になる可能性がある限り、赤の他人を近付ける気はない。……そもそも、あいつらは本来全員死ぬはずだった。ついでに一度でも寝返った人間を容易く信じる訳がない。どれだけ綺麗事や道徳を並べようと、そんなものは俺には全く響かない。

——相手の意見を一部肯定はすれど、まず自分が間違っているとは全く思わないからだ。

「じゃあ仲間になった人達はこれからどこで寝るのかな？」

「仲間じゃないですけど」

「……んー？」

「尊さん、今の俺達の食糧事情……知ってます？」

「人数がいればそれだけ物資も集めやすいんじゃない？」

確かにそうだろう。大人数で行動すれば荷物も多く運べるが、逆に無駄に見つかりやすく消費も増える。利が10あったとしても、害は15あるレベルだ。流石にそんな事、尊さんなら一瞬で考え付きそうなものだが。

「回りくどい事しないで本心を言え、誰かの指金か、単に可哀想だと思つてやつてるなら言う相手間違つてんぞ」

こういうビジネストークみたいな会話は、俺には似合わなかった。すぐさま遠慮がちな表情からいつものゴミを見下す顔に戻すと、本心にあつた感情を何に包むでもなくぶつける。

「……俺は単にミヤちゃんの鼻肩が気に入らないだけだよ、大切にしたいのはわかるけどね。だからと言って他の人をないがしろにするのは間違ってる」

「なるほど?」

「ち、ちよつと……2人共落ち着いてください!」

一気に険悪なムードになってきたと思えば、悠里が慌てて俺と尊さんの間に入る。だが2人共、という割には俺に向いて立ち塞がってるな。どちらかと言えば尊さんの意見に賛同なのか?

「お2人の言う事はどっちも正しいと思います……でも今は争ってる時じゃ……」

「そうですかあ? 私は雅さんが正しいと思いますけど」

制止を無視して飛鳥がナパームを投下していく。尊さんも流石に癩に障ったのか、いつもよりも敵しい目付きで一瞥した。しかしその程度で怖がるなら元からしゃしゃり出てくる筈もなく、挑発するように鼻で笑って俺の横で前髪を弄り始める。うん、これはウザい。

「まあ、ここで2人で決めたとって意味がないんすよ。お互いに譲らないなら第3者を交

えた方がいいでしょう?」

「じゃあこの人間の中でミヤちゃんの息が掛かってないのは誰かいるのかな?」

「息が掛かる……どういう意味ですか」

険悪を通り越して1秒毎にスリッパダメージを負う様な空気。俺の返答に尊さんは答えず、続くであろう言葉を待っている様にも見える。

流石の悠里もこの雰囲気には付いてこれないのか、俺達2人を交互に見つつ口を出すかどうか決めかねている。

「……お互い冷静になれないみたいですね。ここは一度頭を冷やすべきでは?」

周囲の反応も鑑みて、一時休戦を提案する。

「冷静っていうのは、君の考えに付いてくる人の事を言うのかな? だとしたら間違ってると思うけど」

それも一蹴され、尊さんも割と本気なのか簡単には引き下がらない。

確かにこの寒さの中外で野宿するのは命の危険すらあるだろう、尊さんの要望は寝返った人員が凍えない事……とは言ってもこの家や敷地は元々あの子の物だ。俺の判断で今までのメンバーに余計な心配も掛けたくない。

何の口スも考えないのなら……ここで忍と尊さん達を切り捨てるのも視野に入る。今まで生き延びてきた人達を簡単に見捨てる、そんな見方も出来てしまう。

もしかすれば次は自分だと考えた悠里達が離れていく可能性すらある。これは絶対に避けたい、今の俺は『学園生活部』というグループに所属する1人の男なんだから。

「……とりあえず出てつてください。外の人員に関しては1階でのみ活動範囲を許します。絶対に汚すな、壊すな、騒ぐなどだけ伝えといてください。それ以外は追って決めます」

「……わかった。それが君の最大限の譲歩みたいだしね」

尊さんは若干苛立ちを見せた足取りで部屋を出ていく。

「はあー」

大きな溜息を吐いてベッドに寝転ぶ俺に、飛鳥が隣に添い寝するかのように擦り付いてきた。無視してみれば悠里と胡桃から視線が飛んでくるし、今後の課題は山積みだ。

「……少し休む。1人にさせてくれないか。あと今までのメンバーは基本的に2階にいる様にして、俺が起きるまでイツキと坂上で見張りをしろって言っついてくれ」

それぞれ領くなり返事をするなりをすると、横に居た飛鳥も空気を読んで部屋から出ていく。

天井に空いた穴からは隙間風が吹き込み、同時に周辺から様々な音が流れ込んでくる。もし尊さんの行動が全て計算されたものなら——

もしそうなら、俺達は終わりだ。

今後の事や今までの経緯を考えている内にどんどん眠くなってくる。知らぬ間に睡魔に足を掬われ、着の身着のままに泥の様に眠っていた。

S t r a n g e W o r l d

1. けんせつ・計画

平穩は容易く崩れ去る。それは世の理であり、折角仲良くなつた友人をいきなり殴れば簡単に実現できる現象だ。

そんな風に壊れてしまった世界に、俺達は取り残されている。

慈「大丈夫？ まだ痛む？」

雅「問題ありません。そもそも2階から降りた程度で負傷する自分も自分なんですから、あまり心配しないでくれませんか」

慈「2階でも十分な高さなのよ？ 運が悪ければ死んじやう事だつてあるんだから……今回は軽い捻挫と打撲で済んだから良かったけれど、今後飛び降りたりとかはしないでね？」

雅「……飛び降りた方が早いのに」

慈「ダメですよ、ちゃんと階段を使つてください」

人差し指を立てて大人っぽくしかつてくる佐倉先生に、俺は半ば嬉しい気持ちもあつた。なんせこのご時世に無茶をして叱つてくれる相手と言うのは非常に貴重で、それも

包容力のある大人の女性も貴重であるからだ。

忍「無駄つすよ先生、そいつ言っても聞かないんで」

慈「ならわかるまで言い続けます、ダメですからね？」

忍「ムリですつて根つからの効率厨つすから。高所恐怖症だから俺も飛び降りるとは
思いませんでしたけど」

雅「だつてさあ、早いんだぜ？ 怖いとか言つてられねえよいつでも安全だとは限ら
ないんだから。降りてる間に襲われてて玄関から出たら全滅してましたとか冗談じゃ
ないだろ？」

忍「お前ゲームじゃないんだからもうちよつと気使えよ。ゲームならいいけどリアル
でやつたら先生の言う通り最悪死ぬんだから。お前死んだら事後処理めんどいから」

雅「死ぬのとはかく事後処理の方が面倒なのか……」

慈「ふふつ、やっぱり仲が良いのね。それじゃあ私は若狭さん達の様子を見てくるか
ら2人はゆっくりしててね？」

忍「あ、俺も行きますよ。人手は多いに越した事ないですし。あ、お前は足手纏いだ
から留守番な、来たら殺す」

事後処理が面倒だとか言っておきながら死刑宣告を告げた忍は、佐倉先生と一緒に部
屋を出て行ってしまふ。そうして1人部屋に取り残された俺はただ窓の外に見える青

空を眺めるしかなかった。

物思いに耽る。俺達がこうして巡々丘高校にいる事は奇跡に近い。それは偶然がいくつも重なり合った結果で、こうして仲間として迎え入れて貰えているのもその一つだ。

あの日、俺が興味を抑えきれず予定を繰り上げてこの高校近くに観光に来た事。そして近くにこの学校があり、逃げ込むのに成功した事。逃げ込んだ先で女しくないこの場所で、貴重な男手だと歓迎された事。

常識的に考えて、全てがほぼあり得ない確率だっただろう。勿論最後の奇跡は此処にいた子達が全員親切だったのもある、だがそれも踏まえて……俺達は幸運だ。

あれから3日が経ち外の探索と簡易バリケードの敷設、食料や雑貨品の収集の達成率は5割を超えた。物資に関しては学校に備蓄がある事、学校と言う施設であるが故の豊富さに助けられたと言える。

警備のシフトも問題ない。蟻一匹通さない自信があるとは到底言えないが、絶対防衛線である3階まで到達するには例え人間であろうと至難の業と言えるだろう。

敷地内にいる奴らの掃討は未だ手を付けられていないが……元はと言えば同じ学び舎の生徒を手を掛けるのは気後れするらしく、賛成意見は多くない。しかし放置するに

も危険が伴う事は誰もがわかつている。あいつらがどういいう行動に出るか……それを目の前で見ているからだ。

雅「電力、水、食料に医薬品、全てが万全で何の心配もいらぬ。……まさに楽園だ」
後はバリケードが敷き終わればここは要塞と化す。掃討も終われば付近の生存者を集めても問題はないだろう。衣食住、今の所全く問題がない。絶好のスタートと言って差し支えないだろう。

だが、もしどれかが欠落したら……もし誰かが死にでもして、イレギュラーな事態が発生したとすれば……全てにおいて安泰とする俺達にはかなりの痛手になる。

ならどうすればそれを防げるか。どんなに盤石な要塞を作ろうと、要因となる出来事は必ずしも外からやって来るとは限らない。もっとも恐ろしいのは内側……仲間同士の対立や疫病だ。

今の所対立はないが、この先意識の違いから来る派閥やほんの少しの苛立ちで仲違いが発生する可能性は大にある。しかも、その原因が俺になる可能性も。

雅「……はあ、呑気に休んでる場合じゃないな」

動かさなくても足は少し痛んでいる。その状態で歩けばどうなるかなんて馬鹿でもわかる。ただ激しい動きさえしなければ悪化はしないだろう。この幸運を無駄にはしない。そう意気込んで、重たい腰を上げる。

怪我の所為で少しだけ弱っていたらしい。俺はそこまで頑丈な人間ではない、人一倍気を使わなければ容易く壊れてしまうだろう。だがまあ、少なくとも忍と尊さんがいる内は——いつもより頑張れるかもしれない。

いつも誰かしらがいる生徒会室。今は俺と、俺が使っている木刀しか存在していない。俺以外の人員は殆どがバリケードの製作に取り掛かっているが……1人だけ、何も出来ていないヤツがいる。

丈槍由紀……と言ったか。若狭や恵比寿沢と同じ3年らしいがその見た目からは想像もしなかった。ぱつと見でも間違いないく1年か、体験入学中の中学生だと思つたくらいだ。

その幼い風貌通り、精神面でも脆い。この状況で気丈に振る舞えと言う方が無理があるのは分かつている。若狭と恵比寿沢はその辺が強いが、辛うじて保っているだけか。どちらにしろまだフォローが利く。まああつちは尊さんや忍が上手くやってくれるだろう。

その分俺は丈槍の方に行こう。同じ弱い者同士、傷の舐め合いでもすれば少しはこの鬱屈な気分も晴れるかもしれない。

雅「善は急げ急がば回れとも言うが、俺はこつちの方が向いてるよなあ。やつぱり王道を征く……叩けば直るですかねえ」

机に立てかけてあつた木刀を手に取ると、ゆつくりと構えを取る。誰かに見られれば独り言も相まって恥ずかしい事この上ないが、こうでもしないと気合が入らないんだから仕方ない。

胸の中で何かが燃えている感覚を確かめると、そつと構えを解いてその感情を押し込める。いざ部屋を抜け出そうと一步踏み出した時、唐突に扉が開かれた。

悠里「雅、さん？ 足は大丈夫なんですか？」

雅「……若狭か」

まだ警戒心も消えていない若狭は、右手を胸に当てて不安の色を示している。ほぼ常に俺の顔を伺っている辺り、余程信用ならないんだらう。

雅「まだ歩けるから俺でもやれる事をやろうと思つてな。とりあえず、丈槍を探しに行こうと思つてた所だ」

悠里「由紀ちゃんを……？」

雅「ああ。放つておくのは簡単だが、それで手遅れにでもなつたらコトだ。今の内になにか糸口を探したい」

悠里「確かに……そうですね。今は良くても、その内もう誰も寄せ付けなくなつちゃうかもしれないし……」

雅「ああいうのは深く考えさせると破滅する。……それは避けたいんだ、皆の士気も

下がるしな」

鉢合わせた状態のままではいるのもなんだし、一步横に移動して道を開けてやる。すると、若狭は他の事を考えている所為か無警戒で俺の横を通り抜けて行った。

悠里「だったらちよつと待つて貰えませんか？　これから昼食におにぎりを作ろうと思つてるので」

雅「なるほど、手土産があれば口実にもなつて丁度いいな」

悠里「そういう事です。すぐに2人分作りますから、待つててくださいね」

雅「2人？　ああ、恵比寿沢にも渡すのか。大丈夫かな……この部屋以外で忍と会うともれなく死ぬんだが」

手早く炊飯器からサラシラップに白飯を移す若狭はくすりと笑つた。どういう意図が込められたのかはわからないが、少なくとも悪い物じゃなさそうだ。

悠里「あなたと由紀ちゃんのですよ？　一緒に同じご飯を食べれば少しは打ち解けられるでしょう？」

雅「俺達はまだ自前の食料があるから要らないと言つた筈だが」

悠里「じゃあその食料とこのご飯、どっちが日持ちしますか？」

……なるほど、足の早い物から消費するのはサバイバルの鉄則だ。だが俺達は後から入つてきた無関係な人間で、この校舎に備蓄されていた食料を食べる権利はない。そう

3人で判断し、今までご相伴にあずかる事は避けていた。

それを許されるという事は3日目にして相応の信頼を得られた、という意味なのだろうか？ 単に効率を重視した結果とも取れる選択だが、実際の所俺にはどうかかわらない。

雅「……俺達のだな。と言つてもほぼ全部カロリーメイトとウイダーだが」

悠里「栄養偏っちゃいますし、今日から一緒に食べましょう？ その方が会議で時間を取られる必要もないし、親睦も深められますから」

雅「まあ、俺は構わないが……一応尊さんとシノにも聞いておいてくれ、俺の一存で決められる物じゃない。というか全員で食事を摂ったら誰が警備するんだ」

悠里「バリケードがどうかかなれば大丈夫なんですよね？ 見回りも一日に数回で済むと思うんです」

雅「まあ、な。それでも修繕や後片付けでしばらくは忙しい。物資の保管場所と……あと罠の設置も考えなきゃいけない」

考える事に加え、やらなければならぬ事も山積みだった。周辺の探索は土地勘のある生徒達のおかげでいくらか楽だろう。だが安全な移動手段にいざと言う時の武器、それに早い内に非常用の発電機も入手しておきたい。

カセットコンロのガスもトイレトペーパーや服を洗う為の洗剤も、生きていればそ

の内必要になる物が多いのだ。コンロは釜戸、洗剤は石鹼で代用できるもののガスも洗剤も持つていければ武器の材料にもなる。

ガスボンベで即席爆弾を、洗剤を混ぜて毒ガスを作る程の事態になるのは御免だが、あるのとないのとは訳が違うのだ。

雅「余裕はない……少しでも早く盤石な状態にしなければ手遅れになる」

悠里「でも頑張り過ぎは身体に毒ですよ」

雅「そう、だな。いや、それでも早い所どうにかしなきゃいけない。今はまだ落ち着いてるが……その内他の生存者がここにくる事もあるだろう。それがどのような輩であれ、俺達はあらゆる対策をしなきゃいけない」

悠里「……生存者」

雅「こんな事になってちや余裕をなくして血迷う奴もいる。略奪、強盗、疑心暗鬼からの殺人。候補を上げれば切りがない。かくいう俺達もここに来るまでにコンビニからかつぱらつてきたんだ」

悠里「人間同士で争うのは……嫌ですね。……できましたよ、由紀ちゃんに食べさせてあげてください」

雅「わかった、しばらくしたら戻ってくるが……その前に忍が帰って来たら——」

悠里「大丈夫ですよ、ちゃんと説明しておきますから」

雅「頼んだ」

若狭からおにぎりの入ったランチバッグを受け取ると、そのまま生徒会室を出る。あいつがどこにいるのかはわからないが、恐らく屋上だろう。俺なら空や遠くの景色を見て落ち着こうと考えるからな。

ただ可愛らしいバッグと薄汚れた木刀を持った男というのは……かなり好奇心に見えるな。

階段は手摺と木刀で上手く上がり、屋上に出る。扉を開けてまず目に入るのが屋上菜園と貯水槽、そこで特徴的な帽子をかぶった丈槍が座って水面を眺めていた。

雅「……重症だな」

気晴らしに空を見る気力すらないか。思ったより深刻らしい。

出来る限り敵意を見せない様に、それでいて拒絶されない様に近づくまでは足音を消す。5mまで近付いたところで、何気ない感じで足音を立てて存在を知らせた。

雅「よう、何見てるんだ？」

足音と同時に驚いてこつちを見る丈槍。気さくに話しかけてみたが、ひよつとして上手く喋れてなかっただろうか？俺は人と話すのは苦手だし、声にも抑揚がないとよく言われる。不自然にならない程度に声も高めにしてみたが、どうだろうか？

由紀「……足、大丈夫なの？」

雅「知ってたのか、湿布貼ってもらったから多分大丈夫だ。それより飯食わないか？
若狭からおにぎり預かってきたんだが」

由紀「いらぬ。あんまり食欲……ないから」

また水面の方へと視線を戻した丈槍は虚空を眺める。その目はどこにも焦点が合っていない、水面ならまだしもどこも見ていなかったか……ますます重症だ。もう現実を見る事も放棄したのか。

雅「食わないとやってられんぞ。ほら、たくあんもあるぞ？ ……あれ、俺の方2枚なのに丈槍の方は3枚入ってる……」

程良い大きさのおにぎりが3つまとめられたラップにはマジックで俺と丈槍の名前が記入されていた。たくあんの数が……たくあん好きなんだけどな。まあ丈槍はあまり食べないからこういう所で差別化するのはいいか。俺の方はおにぎり若干大き目だし。

由紀「私の分もあげるよ」

雅「いやいらぬ。……で、食欲がない理由わかってるのか？」

由紀「わかんないよそんなの……」

雅「まあそうだな……とりあえず顔上げろ、試しに空を見てみる。太陽は見るなよ？」

由紀「そんな気分じゃない……」

ついに自分の膝で顔を隠してしまった丈槍は、何かを思い出したのか微かに嗚咽が聞こえてくる。……痛々しい、この3日間ずっとこうしてるのか。確かにこの状況は子供には……それも女の子には辛いものだろう。共食いに血と臓物の臭い、日に日に悪化して行く周りの風景。

人の気配がなくなり、代わりに人の形をした化物がうろついているとなれば不安だらけだ。それは俺達の足元、校庭や1階の日常で……この校舎の2階から上は血生臭いもののこの状況からすれば非日常になる。

雅「ここも随分安全になった。もう3階に危険はないし、今日中に2階のバリケードも完成する。こうやって徐々に安全圏を確立していけば、いつかこの街全部を前の状態に戻す事も可能だろう。勿論一筋縄じゃいかないが」

由紀「そしたら皆戻ってくるの？」

雅「それは無理だな。ああなったが最後、言葉も通じなければ痛みすら感じてない。それどころか……あいつらは心臓すら動いてない。ゾンビのお手本みたいな奴らだ」

由紀「……そんなの、やだよ」

雅「摂理は変えられない。俺達はちっぽけなもんだ……神は人間が造ったが、この世の摂理は何が造ったのか。何であろうと、それに抗う術はない」

例えこの元凶が人間が造り出したものなら、人は神を超えたのかもしれない。そんな空想の産物を実現しちまう奴は地獄に落ちればいいと思う。人の為になるのならまだしも、人に害をなす物を作るのは……作るだけならまだいい、そこから新しい可能性も生まれる。

だが、こうなったら最後……誰も責任を取れないんだ。

雅「迷った時は空を見る。そこから何かに似た形の雲を見つけるといい。……そんな事を考えていれば悩みなんて忘れる」

自分も空を見上げながら、試しに武器に似た形の雲を探す。でもそんなピンポイントな形の雲は見渡す限りどこにもない。一種の現実逃避に近い物だが、今向き合っている事から一旦離れる事も大切だ。近すぎちゃ何も見えない、距離を置いてこそ、見なきやいけない物も見えてくる。

雅「上を見ろ、丈槍。自分の足元ではなく、せめて仲間の足元を見て危険を教えてやれ。そこに石がある、穴がある、教えてやればそいつも躓かない。お前にも……出来る事はある筈だ」

由紀「……」

俯いていた丈槍が顔を上げる。ただそれだけの動作に俺は胸が躍った。そうだ、頑張れ。前を見なくとも……少し下でもいい。誰かの為に動いて、自信を付けろ。

お前の可能性は無限で、俺なんかよりきつと……

由紀「見つけた……ねえあれ、鯖缶にそっくりだね！」

丈槍が指さした雲は、まるで車に轆かれたかのように歪んだ雲だった。

雅「……はつ。俺には歪んだペミカンにしか見えねえや。——さ、折角若狭が握ってくれたんだ、食べないか？」

由紀「うん」

差し出したおにぎりを包みごと受け取り、丈槍は中からおにぎりを取り出して頬張った。

一方俺は……そんな丈槍の姿を見て昔の記憶が突然思い起こされる。

雅「くっ……」

それが何だったのか。無意識に思い出すのを拒んで、その内容は断片的……ある少女が微笑みながら誰かの手を引いている光景しか思い出せない。

由紀「どうしたの？ もしかして頭も打ってた!？」

雅「いや……足だけだ。ちよつと頭痛がな……そんな事より飯だ飯！ ……ふむ、程良く塩が効いてて美味しいな……若狭は料理が得意なのかもしれないな」

自分もおにぎりを頬張り、束の間の休息を取る。丈槍はなんとか快方に向かっている、後は本人の気力と、同性である若狭達の仕事だ。俺が出来る事はもうない、後は精々

見守るぐらいだ。

そうだ、次の会議には丈槍も参加させよう。現実を見つめ直すにはまだ早いが、それ以外にも得る事はある。もし気が沈むようであれば、その時は誰かが付き添って退席させれば問題ない。

気を使う相手が増えるのは厄介な部分だが、こいつが復帰してくればかなり楽になる。それに、若狭達にも良い影響を与えてくれるだろう。

雅「たくあん要るか？　つうかそれで足りるのか？　足らなかつたら俺のやるぞ、どうせ今日はもう動けないからな」

丈槍「じゃあ交換つこしよ！　私と雅さんのおにぎりとたくあん、交換ね！」

雅「おう」

たくあんに交換する意味があるのか？　そう思ったが、小さいおにぎりと同時に大きな目のたくあんが自分の包みに入る。なるほど、これなら確かに交換する意味もあつた物だ。正直意味も利益も求めてなかつたが、こういうのは嬉しいな。

丈槍との食事は思いの外退屈しなかつた。あいつの笑顔は人を癒す力がある、あれを使えば、もし此処に他の誰かが来ても馴染みやすいだろう。

それはいつの事なのか、俺にはわからない。ただ、いざとなれば戦力として大いに期待できる。勿論“敵”の掃討的な戦力ではなく、コミュニケーション的な戦力だ。それを活か

す時は来るのか、その時になってやっぱり無理だと挫けてしまうかもしれない。

それでも、俺はこいつの魅力は確かな物だと確信する。もし自分が挫けた時があれば……そうでなくとも誰かが助けを求める状況になれば……こいつはきつと、想像以上の戦果を挙げてくれると。

3日目―同時刻―巡々丘高校2階―

忍「ふいー……流石に疲れたな」

バリケード施工の半分を終えた所で、忍は余った資材である机に腰掛けた。朝から動かし続けている体は悲鳴を上げ、崩れ落ちるとは行かないまでも今日はよく眠れる……そんな確信がある。

胡桃「急ピッチでやってるのにまだ2つ……なあ、なんでそちのリーダーは近い順からやろうとしなかったんだ？ 順番にやってく方が早いんじゃないのか？」

忍「1階のバリケード、あれ入口に近い所からやったる。慣れてない所為で色々水準に至らない所もあつてさあ、今回はそこが破られたとしてそこから近い場所を優先的に組んでるんだよ」

胡桃「へー、でもこんな短期間で破られたり入って来たりするもんなのか？」

忍「あいつはいつも最悪の状況に備えてんだよ。口は悪いし愛想もないけど、そういう所は信用できるヤツだ」

胡桃「ふーん。信頼してるんだな」

ペットボトルに入った水をひと口飲み、またも深い溜息を吐く。胡桃の言う事はもつともだった。端から順にやっていけば資材の搬入も楽になる。正直守る箇所をどちらかに絞っておけば防衛もしやすいしキルゾーンとしての役割も持てる。

そこまで頭が回らなかつたのか、それとも他に意図があつたのか。全員の動きや体力をテストしているのか。様々な憶測や可能性が頭に浮かび上がるが、忍はただ目の前の事に集中していた。

胡桃「あ、もう昼なんだな」

忍「どうりで腹減つたと思つたぜ。おーい、尊さーん、せんせーい！ ちよつと休みませんかー？」

奥で作業している尊と慈に声を掛けると、2人は少し話してから忍と胡桃の元へやってくる。

尊「あと1つだし、このままやつちやつた方がよくない？」

忍「まあそうですね、下に防衛陣もあるし余裕はあると思うんですよ。休み休みやらないと怪我する可能性もあるし」

尊「んー……一理あるけど」

忍「飛ばしまくってたら持ちませんよ。ねえ、先生？」

慈「そうね、でも雅さんは早く安定させたいみたいよ？　その為にこうやって一日中動いてるんだから。昨日も遅くまで何か考えてみたい」

忍「はあー……まあ仕方ないか。バリケードさえ設置しちやえば後は楽だろうし。でも疲れたなあ……」

連日の多忙で疲弊している忍を見て、一同も疲れを思い出したのかそれぞれ息を吐く。

忍の言う通り、雅が出した予定表にはびつしりと分単位で書き連ねていて、体力的にも精神的にも余裕はなかった。それをどうにか仲間内で励まし、議論し合い、折り合いを付けてきたのだ。

その予定表も4日目までで、そこから先のスケジュールはまだ構想段階にある。各々が訴える不便さや欲求もそこに含まれており、むしろ今まではそれを無視した過酷なものだった。

悠里「あ、皆集まってるわね？　質素だけどおにぎり作ってきたの、ちよつと休憩にしない？」

階段から降りてきた悠里がランチバッグを手に手摺を乗り越えてくる。その言葉に、

忍はやつと休憩を得られると目を輝かせた。

忍「よっしゃ！　じゃあ飯にするか！　尊さん、俺も飯取ってきますわ」

尊「ほいよ」

悠里「あ、待って！」

悠里が入れ替わりで上に行こうとする忍を呼び留める。

悠里「あなた達の分もあるの。さつき雅さんとも話したんだけど、これからは一緒にご飯を食べない？」

忍「え？　いやでも、後から来た俺らがここの食料を貰うのは……」

悠里「そんな事ないわ。あなた達もここの為に働いてくれてるでしょ？　むしろ悪いくらいだから……もう一緒に生きる仲間なんだからご飯も一緒にじゃないと！」

忍「……いいんですか？　尊さんはどうです？」

どうしたらいいかわからず、忍は最年長である尊に聞く。尊はいつもの笑顔で頷き、悠里の前へと出た。

尊「ミヤちゃんにはもう言ってるんですよ？」

悠里「え、ええ……『俺は構わない』って……」

尊「それならOKです。……ミヤちゃんも角が取れてきたかな？　この調子ならそろそろ……」

忍「そうっすね……まあ頃合いですかね。こんな早い内に話す事になるとは思いませんでしたけど」

忍と尊は穏やかな表情とは裏腹に危うさを感じ取っていた。それは雅が、どのような人間であるかを知っているからだ。

胡桃「話す事って……まさか隠し事か？ やばい事じゃないだろうな？」

胡桃は思わず不信感を露わにする。この3日間、たった3日であれど寝食を共にしてきた相手が自分達に隠していた話があるとなれば無理はなかった。

忍と尊は初日から悠里達とコミュニケーションを欠かさず、それなりの信頼を勝ち得ていたからだ。だが雅は違う。いついかなる時も表情を変えず、眉を寄せる事はあっても笑う事は一切なかった。

それはこの地獄に放り込まれてしまった人間なら仕方のない事だと、元からこの学校にいたメンバーは判断していた。むしろ冗談を言つて笑い、誰かを気遣える程余裕がある2人が強いのだと。

忍「……飯食いながらもいいか？ あんまりいい話じゃないから夜でもいいけど」

悠里「食べながらいいわ。……ね、胡桃も先生も大丈夫でしょ？」

悠里はあくまで友好的な姿勢を崩さず、一同は3階の教室へと移動を開始した。

閑話「異世界といえば？」

忍「異世界と言ったらまずどこを思い浮かべる？　行きたいとかじゃなくてぱつと思
い付いた物で」

雅「SIREN」

尊「んー……デジモン？」

忍「デジモンなつい……SIRENってなんだっけ」

雅「掠り傷1つで死んで、その飯と水食つても死んで、しかも絶対に死なないゾン
ビモドキがうじゃうじゃしてて銃とか普通に使ってくるホラゲー」

忍「うわあ……」

尊「絶対生き残れないヤツや」

雅「いいか？　これは夢かな、異世界かなと思ったら絶対に何も口に入れるなよ？

ヨモツヘグイは「ご法度だ、古事記にもそう書いてある」

2. ぶらつく・報告

—3日目—正午過ぎ—生徒会室—

「誰もいない?」

昼食を終えて、丈槍と一緒に生徒会室に戻ってきた。扉を開けても1人もいないどころか、俺が出て行ってからほぼ何も変わっていない。空気の流れも、空間ごと止まっていたかのようにさえ感じた。

「あれ、どこ行っちゃったのかな」

丈槍が俺の後ろから部屋を見回している。驚かす為に隠れている、っていうのじゃないさそうさ。

部屋に入り辺りをくまなく観察してどれ程人が居なかったのかを推測してみる。机の表面、しゃもじとスプーンが浸けてある桶、匂いに至るまで痕跡を探ってみるが流石に普段から使っている部屋だと分かり辛い。

「……炊飯器の中はほぼ空だ、飯を届けに行ったか。そのまま向こうで一緒に食べてるのかもな」

「すごいね、探偵みたい」

「この程度じゃ推理にもならない。まあ待つてようか、トランプでジジ抜きもするか？」
この部屋に元々あつたらしいトランプを柵から持つてくると、丈槍は笑顔で頷く。お互い席に着いて箱から出したカードからジョーカーを抜き、念入りにシャッフルする。そして丈槍に1枚引かせて、それを箱の中に入れた。

「さあ、やろうか。運はいい方か？」

「うーん……あんまりよくないかも」

「じゃあ選べ、最初の1枚はどちらに配る？」

丈槍は腕を組んで考え込んだ。ひとしきり悩んだ後、右手で俺を指さす。

「……よろしい」

拙い動作でカードを配っていく。トランプのゲームはあまりやらない、というかやる相手がいない。昔はいたが、いつも神経衰弱しかしらない所為で負け続киだった。

以来、俺は神経衰弱はしていない。1枚をめくるごとに、1つのペアを勝ち取ることに嫌な記憶も思い出すに違いないからだ。

配り終えた手札からペアを抜き取っていく。2人だけでやってる以上最初の数は多いが、この段階で大方間引かれる。やがて互いに10枚程度になった頃、俺達は目を光らせて本気の勝負を始めた。

—3日目—同時刻—空き教室—

雅と由紀がゲームを始めた頃、同じ階の教室で忍達は食事を摂っていた。この部屋は倉庫として使う候補の1つであり、清掃が行き届いていて居心地も悪くない。ただあえて欠点を述べるとするのなら、階段から少し遠いという事くらいだ。

食べ始めてからそう時間は立っていない。だというのに会話はなく、もう長い時間皆でこの部屋に引き籠っている。そんな風に感じた忍はようやく口を開いた。

「……あいつは、昔妹を亡くしてます。でもその事を覚えていない、妹がいた事すらあやふやで今となつちや完全に忘れてるんです」

低く重い声色。思いの外重要な話だと勘付いた悠里達は一様に食事の手を止める。そして忍が次の言葉を発するのを待つように、誰一人として口を挟まない。

「でも、それを思い出す時がある。疫病神、役立たず……それだけは絶対に言わないで欲しい。それを言ったが最後あいつは全部思い出して手を付けられなくなる……」

「そんな事絶対に言わないわ。だってあんなに頑張つて……寝る間も惜しんでるのに」
佐倉慈は会った時から雅を不思議な人間だと認識していた。職業柄色んな人間と接し、色んな相談を受けたりした。その中でも雅は突飛であり、悪く言えば怪しい雰囲気纏っている。

瞳には生氣がなく、表情もほぼないのも合わさって人形の様な印象を受ける。しかし何か決意染みた固い物が潜んでいる。そんな印象の通りになったと半ば薄ら寒さも感じていた。

「それが本人に向けて言わなくてもアウトなんすよ、例えば俺がサボりまくって胡桃が俺に無能って言ったとする。その言葉を聞いてもあいつはぶつ壊れる直前まで行くです」

「……なるほど、つまりネガティブな言葉は一切いっちゃいけないって事か」

「まあ早い話そうなんだけど、流石にそこまで制限しちやってもな。っていうか言わなくてもほつとくとぶつ壊れるし」

「は!？」

「あいつよく一人で突っ走るタイプなんだよ。どうにかしようと思中になり過ぎていつの間にか限界も越えてて、気付いたら体が動かなくなってるって前聞いた事がある」

「なんだよそれ……じゃあそれも止めなくちやいけないのか。ていうか不器用すぎないか?」

「そう……あいつは正真正銘の不器用だ、だから誰かがフォローしてやらないといけない。それをしてこなかった結果が、今のミヤだ……」

忍が何かを思い出すかの様に虚空を見つめる。その表情からどのような事態になる

か、悠里達は大体予想できた。

「……わかりました。私も教師です、今となればあなた達3人もこの生徒の様なものですから」

「最初はとんでもないヤツ引き入れちまったとも思ってたけど……あいつもあたし達を生かす為に必死になってるんだよな……なら、その分は返さないとな！ な、りーさん！」
意気込む2人をよそに、悠里は腕を組んで考えていた。胡桃の言う通り、とんでもない人間を校内に入れてしまった事を悔やんでいるのかと忍と尊は不安に思う。

が、悠里の考えている内容はその真逆だった。

「……ねえ、今の雅さんって……正に突っ走ってる状態なんじゃ……？」

その一言に、全員が固まる。

「いや多分まだ……本気じゃないとは思う。人数もいるし進捗も予定通りだし……それに本気を出してる間は常に構えてるような体勢になって目付きもキツくなるし……」

「ミヤちゃんいつも持つてるよね、木刀。いつも見てたアレは素手の時の状態なんじゃないかな？」

「あ、そういう寝る時も木刀持つてる！ いやでもただ持つてるだけじゃ……あ、そうだ。ちよつとあいつの所行つて一発殴つてくる！」

「おい待てなんで殴る必要があんだよ!？」

食べ掛けのおにぎりを脇に置いて駆けだそうとする忍の腕を胡桃が掴む。

「本気の間は反応速度が異常なんだよ！ だからカウンターか回避されたら本気だ！」

「確認方法が過激すぎるだろ！ なんか他にないのかよ!？」

「……………ない！」

「聞くとかないのか!？」

「あいつの本気は無意識みたいなもんで自覚は多分ない！」

「じゃあ解除方法は!？」

「ああ…………一応あるわ」

「えっ、あるの？ じゃあいいじゃん、さっさと解除すれば大丈夫だろ」

あつさりと終わった問答に当人達以外が苦笑する。今までの寸劇はなんだったのか、そこまで焦る必要があるのかと思わず突っ込みたくなる程だ。

「…………お前じゃ無理だな」

「は?」

忍が胡桃を見て諦めの眼差しを向ける。そこから悠里、慈と視線を移していき…………慈を見た所で指を鳴らした。

「先生ならイケる」

「へ? 私…………?」

「要するに安心させてやりやいいんですよ、自分が本気を出すまでもないとわかればあいつは勝手に元に戻ります。そうさせる為には……結論から言つてバブみです」

「……悠里さん、バブみつてなに？」

「すみません、私にもよくわかりません……」

「なんかすつごい下らないつて事だけはわかるぞ、間違いない」

「シノさん……今すつごい勢いでミヤちゃんの株が下がつてるよ。せめてわかりやすく、真面目に言わないと……」

尊によるフォロワーが入るものの、忍は「下らないけどこれが一番早い」と最短距離を行こうとする。尊は思い出した。雅も忍も、これと決めたら突つ走るタイプであつたと。

だがここは雅の威信の為にも自分が弁解しなくてはならない。そう思い立ち手を挙げるが……

「いえ、ここは俺に。わざわざ尊さんの手を煩わせる訳には行きませんから」

「そ、それは有り難いけど今回は——」

「大丈夫です、任せてください。——つまる所バブみつてのは母性、自分より上の相手が大丈夫だと言えば大丈夫！ 特にあいつは女性には簡単に逆らえないから佐倉先生は適任なんです！」

「今時の子つて色んな言葉を作るのね……でも私母親つて言える程歳は——」

「大丈夫つす！ 先生には母性が溢れてるんで！」

「それは……褒め言葉なのかな？」

笑顔の奥に潜む得体の知れない感情に、忍は無言で狼狽えてしまう。女性に年齢の話はご法度というのは古くから受け継がれてきた常識であり、男なら誰であろうと逃れられないタブーだ。そのタブーに忍は触れてしまった。

「……はい、一応、褒めてます……母親というより姉、ですよ？ ははっ……いやマジですいませんでした許してくださいい何でもしますから」

「ん？ 今何でもって」

「尊さん今はマジで笑えないつす……」

深く頭を下げたまま固まる忍を見て、慈は考える。この中で一番年齢が高いのは残念ながら自分だ。教師でもあり、ここにいる全員の心の支えとなれるのなら……確かに母親や姉の様な存在が必要かもしれないと。

「もういいですよ、忍さん。私も決めました……いつまでもただの教師でいる訳にはいかないんですね……」

「……え!?!」

「忍は思いもよらぬ回答が帰ってきた事に驚く。忍が言った事は俗物的な意味も含め

た冗談のようなもので、到底通つてしまうような内容ではなかった。

だがそれが慈の内心に変化をもたらし、新しい思想を生み出したのは事実だ。

「決めました。部活をやりましょう!」

「部活? こんな時に部活なんてやってる場合じゃ……」

ガッツポーズをしながら立ち上がった慈に、悠里が異論を唱える。

「いいえ、本当の部活じゃないわ。部活という体でグループを作つてそれぞれの役割を作ろうと思うの。ただ生き残る為だけにやったら、すぐく殺伐として気が滅入っちゃうでしょ?」

「はい先生! 大隊とかいう呼び名もいいと思います!」

「おつ、それいいな! すつごいかっこいい!」

ミリタリー系を愛する忍が出した呼称名に、胡桃が賛同する。しかし慈は黙つて首を振り「殺伐とするのはダメ」と一蹴されてしまった。

「……2人は放つておくとして、部活名はどうするんですか?」

「うーん、いくつか候補はあるんだけど私は顧問だから。悠里さん、あなたに部長をお願いしていい?」

「え……私なんかより相応しい人がいるんじゃないですか? 尊さんとか忍さんとか雅さんとか」

「尊さんはともかく雅は本気出し始めるから駄目だ、俺も人を引つ張ってくなんてできない」

「私も人を引つ張るのは苦手なんで……ミヤちゃんは言わずもがなだよ、短期間なら馬車馬の如く働かせてもいいけど。でも外に出るならミヤちゃんを筆頭に組んだ方が良いかもね、心配性だから誰かが怪我して帰ってくるとうすごい悲しむんだよ」

男3人をリーダーに据える事ができないと知り、悠里は思い悩んでしまう。そんな姿を見て、慈は悠里の肩に優しく触れた。その2人を見て忍と尊も言葉を失ってしまった。

人を率いるというのはとてつもない覚悟と信念、そして重い責任が背に掛かる。会社とは違い、安直な考えで臨めば人が死ぬこの状況下ではその重荷に耐えられる人間は早々いない。

誰もが死を恐れ、最悪の状況を考えてしまう。もし自分の指示で誰かが死んだら——判断が遅れた所為で自分だけ生き残ってしまったら、と。

「……これはこの場で決める事じゃないみたいだね。佐倉先生も皆も、一度生徒会室に戻ろうか」

尊は意気消沈してしまったこの場をリセットする為に提案する。その案に全員が頷いた。

—3日目—生徒会室—

「なん……だど？」

「雅さん運ないの？」

「いや、まあ……うん」

ポロ負けだった。ジジ抜き、ババ抜き、ポーカー3回勝負とやってるのに……全負けだど？ 嘘だ、俺は比較的運は良い方なのに……まさかこの女、俺の運を吸ってるのか？

「そつか……でも元気出して！ 運なんかなくなつて良い事あるよ！」

「いいか丈槍、この世は全て運だ。アイスの当たりも景品の抽選もそう！ 果てには出会いすら運なんだよ！ だから俺は友達が少ない！」

「でも私達には会えたよ？」

「まあ、そうだな、これで一生分使い果たした気もするけど」

運の総量は決まっている。そう信じて止まない俺は毎年の正月で必ず大吉を引き、くじ引きでも一等を取る。そしてその先、運に恵まれる事はない。俺が思うに、運は1年でリセットされるのだ。そして俺は、その運を3ヶ月と経たない内に使い果たす。

ある時はある、これでもかと言うくらいに幸福が訪れる。だがそれ以降、俺は全くと言つていい程運には恵まれない。そう……運とは極端なものなんだよ。俺の場合は特

に。

「でもゲームなんかで運を使っちゃうと勿体ないから、きつとエコモードだったんだよ！ だから雅さんもそんなに落ち込まないで？ 私も雅さん達と会えてすごい嬉しかったから」

何故俺は年下の女の子に慰められているのだろう。惨めな気持ちと同時に、その優しさに目が潤みそうさ。

「丈槍、お前モテるだろ？」

「えっ!? あ、あんまり……?」

「そうかあ、ここの男共は眼球腐ってんなあ……やはり人生経験の浅い奴には人を見る目がないか……クソ共が」

「た、たまにすごい事言うよね……」

不味い、ドン引かれた。やっぱ俺は人を相手にするのは……それより俺の人格に問題ありだな。気を付けなきや悪影響が出てきそうさ。

「悪いな、口癖だ。というより俺の性格はひん曲がってるから反面教師として参考にしてくれ、反面教師ってわかるか？」

「うん、その人の反対の事が正しいんだよね？」

「概ね合ってる。が、結局は自分の正しいと思った事だけを取り入れる。どういう場面

であれ、最終的には自分が納得できなきや意味がない。よく考えて、間違つてると判断したら速攻無視していい。……それを妥協すればいつか後悔するからな」

「……後悔してるの？」

苦笑から捨てられた子犬を見る様な目に早変わりした丈槍は、真つ直ぐ俺の目を見つめてくる。……あー、そういう純粋な瞳は嫌いだ。でも同時に守つてやりたいとも思う。

もしこいつがこの先も毒されず、このままでいられるなら……出来るならそうしてやりたい。

「さあな……誰だつて後悔の1つくらいあるもんだろ。俺はいちいち覚えちゃいないが」

「でも雅さん、悲しそうだよ？」

「そうか？」

偶然近くにあつた鏡を見てみる。だが表情はいつも通りで、どこにも感情が籠つていない。そこでなんとなく自分の目を手で隠してみる。

「どう感じる？」

「……見ざる？」

「猿じゃねえ、てか割と博識だな……」

「うん！ 子供の頃家族旅行で行ったんだー」

「子供の頃、ねえ。今でも子供みたいな見た目してんのに？」

「あー、ひどーい。雅さんそういう事言うんだー」

俺でも他愛のない雑談で盛り上がれるとは思わなかった。やっぱりこういう状況になつてこそ俺は光るのかもしれない。鬱屈とした平和な日常より殺伐とした死と隣り合わせな非日常が過ごしやすいと思うのは……まだ中二病が抜けていないのか？

でもまあ、昼食前とは別人の様に笑う丈槍を見るとどうでもよくなつてくる。

「あ、誰か来た」

「ん？」

丈槍が人の気配を感知した直後、俺の耳にも遠くから歩いてくる微かな足音が聞こえてくる。まさかこいつ……俺より耳が良いのか？ それかほぼ毎日爆音で音楽を聞いてて難聴にでもなったのかもしれない。どことなく急いでいる様に感じる足音がこの部屋の前まで来ると、即座に扉が開け放たれる。

「雅さんー！」

「はい!？」

……足音の主は佐倉先生だった。だがその顔はどことなく焦っていて、しかし迷っている風にも見える。というより……何か恥ずかしがっている気もする。

先生は俺の目の前まで来ると机に立てかけてある木刀と、俺の目を見て——床に膝をつき、俺の手を握った。

「忍さんからあなたの事を聞いて……無理してないですか？」

「無理!? 無理ってなんですか!? てかなんで手握る必要が——」

「1人でなんでもやろうとしないでくださいね? 皆で力を合わせてやればきつと解決できますから」

「そ、そうですね。まあでもほら、ね、バリケードの制作も順調ですし今日中に終われば後は消化試合っていうか」

不意打ちで接触を図られるとついテンパってしまう。しかもそれが異性ともなれば話は別だ、女性に対しての免疫がない俺にとって例え指先が触れただけでも引かれてないだろうかと不安になる。

あたふたしながらふと入口の方に目が行く。そこには忍がいて、満面の笑みでサムズアップしていた。元凶はお前か後で覚えてろよ。

「……あれ? もしかして雅さん……今本気出してます?」

「ほ、本気? いや出しますよ気抜いたら死ぬのに出さない訳ないじゃないですか……今ので吹き飛びましたけど」

「じゃあ良かったです!」

何が良いんだ!? 忍は一体何を吹き込んだんだ、先生すつごく仕事した的な笑顔で安心してるんですけど。改めて忍の方を睨むと、今度は尊さんも一緒に頷きながらこつちを覗いている。

「なんのつもりだこれは?」

ダメ元で聞いてみると、ぞろぞろと残りのメンバーを引き連れて部屋に入ってきた。まさか今の全部聞かれてた……? ヤバい、恥ずかしくて死にそうだ。いつも凜々しい対応を心掛けていたつもりだが、これでイメーজは大きく変わってしまった。これじゃ……これからどう仕事を頼めばいいんだ。

「ミヤちゃん……良かったなあ!」

「何がだよ! 全然良くねえからな!? ……もう、台無しになっちゃったじゃねえか。あとちゃん付けで呼ぶな」

「いやー、いつも氷の様に冷たい雅さんがこんな普通の話し方するなんて思ってたなかったなー」

恵比寿沢までもが棒読みで煽ってくる。クソが、今度一番キツイ仕事押し付けてやろうか。軽く睨んでやると、すぐさま若狭の後ろに引っ込んでしまう。

「シノ、どういう事だ」

咎める様に聞くと、シノが真剣な面持ちで前に出てくる。……なんだ、そんな顔する

程真面目な事だったのか？

「良かれと思つて。實際良かつたる？」

「何が」

「まあ冗談は置いといて。お前が本気出すとぶつ倒れるつて言つたら結構大事になつちまつてなあ、それをどうにかする為にもまず先生に助力を願つたつて感じだ」

はあ、そんなどうでもいい事にこんな大騒ぎしたのか。つたくこいつは……たまにノリだけで生きてるんじゃないかと思えてくる。だが皆が俺を心配してこうなつたのも事実、かくいう俺自身も佐倉先生の温もりに触れていくらか癒されたのも事実。どうであれ、シノは手段こそ歪だが俺がどうかならない様にしてくれた訳だ。

「……まあいい。それより昼飯は食つたんだな？ なら持ち場に戻れ。食休みは10分なら許可する」

かなり棘のある言い方だが、発破を掛けるには丁度いい。人付き合いは2人に任せ、俺は憎まれ役に回つた方が効率的だと考えている。いかなる状況であれど、ヘイトを稼ぐ存在がいるのといないのでは大違いだ。勿論稼ぎ過ぎても問題になるが……

「ミヤちゃんは どうするんだ？」

「俺はこつちで事務作業だ。……そうだ、若狭、1つ頼み事をしてもいいか」

若狭は小首を傾げて何ですか？ と聞き返してくる。

「新品のノートを5冊程調達して欲しい。2階より下に行く時は忍に付き添ってもらおうか、大まかな位置を教えれば取って来てくれるだろう。勿論時間がある時で構わないし急ぎでもない。早ければそれに越した事はないが……」

「何に使うんです?」

「物資の出入記録と今後外に出た際の記録。その他諸々……早い話家計簿だな、頼んだぞ。それと丈槍、無理する必要はないがお前もバリケード組に参加しろ、後ろで応援してるだけでもいい」

「う、うん」

「では解散!」

号令と共に俺以外がぞろぞろと生徒会室から出て行く。それを見送って、手早く机の上に散らばるトランプ類を片付けると戸棚の下に隠しておいた小さなノートを開いた。

表紙にも何も書かれていない手帳サイズの中身には、自分でも読みにくいと感ずる程ずらつと文字が敷き詰められている。

「……このまま行けば、来週には」

—3日目—昼食から2時間後—巡々丘高校2階

「終わったあ……」

胡桃と尊、そして慈達はやつとの事で敷設が終わったバリケードに寄り掛かりへたり込んでいた。悠里と忍は30分程前にノートを取りに階下へ向かい、大方の作業が終わっていたとは言えワイヤーを張るのに時間を取られてしまった。

しかも突貫工事で敷設した1階のバリケードとは違い、今回は異常な程までの念の入れ方。最初の1つは雅が指示しながら作っていたが、残りを造るには最初の1つよりもかなりの時間を要した。

「にしてもあいつも人使い荒いよなあ、自分は部屋で黙々となんか書いてるだけでさ」

「仕方ないわよ、足怪我しちゃってるんだから。それに湿布を貼っただけでも、本当は骨にヒビが入ってもおかしくない腫れ方してたのよ？」

「飛び降りたのはミヤちゃんなんで自己責任なんですけどねえ」

「みんなー、お水取って来たよ！」

由紀が笑顔で3階から持ってきた水を全員に差し出す。3人はそれに感謝しつつ受け取ると、1本丸々飲み干す勢いで喉を鳴らし始めた。

「うーん、やっぱ1回ガツンと言わなくちゃいけないかもなあ。リーさんだって、忍さん連れてるとは言え危ない場所に行かなくちゃいけないなくなっただし」

「えー、でもみゃーくんも頑張ってるよ？」

「み、みゃーくん?」

「うん! みゃびくんだから、みゃーくん!」

胡桃は唐突に決められた雅の愛称に呆気にとられる。

「ま、まあいいけど。でもさ由紀、私達も昨日から動きっぱなしなんだぜ? その間あいつは何してたと思う?」

「う、わかんない……けど」

「生徒会室に籠って地図と睨めっこ、あとカロリーメイト齧りながらノートと睨めっこ、それと窓から石投げて遊んでたり……」

胡桃だけでなく他の面々から見ても、雅に対しての不満は溜まる一方だった。それを半ば黙認しているのは元からの仲間だった忍と尊、そして他の誰よりも少なからず接点のある慈だけだ。

悠里も表では何も言わずとも、実際の所はかなり不満を持っている。だがそれも今日の昼の出来事である程度払拭されていた。

「うーん、多分意味はあるんと思うんですけど……ミヤちゃん言わないからなー」

「そこがダメだよなあ。あたしだって何の為にやってるか教えてくれたら納得できるけど、聞いても『今はバリケードの事だけ考えておけ』って……由紀は何か聞いてたりする?」

「な、なんにも……」

ろくに情報を得られず、しばらくの沈黙。この中に雅から事前に話を聞いた人間はゼ口、それも教師である慈はおろか、古くから付き合いのある尊ですらも知らないとなれば――

「……ちよつとカチコミ行ってくる」

「恵比寿沢さん!？」

持ち前の足を活かし、華麗なスタートダッシュを決めた胡桃は全速力で引き留めようとする慈を振り切り階段を登って行く。慌てて追い掛ける慈だが……悲しいかな、学生時代よりも運動量の減った体は思うように動かず階段の折り返し地点まで駆け上がった所で息が切れ始める。こんな風になるなら少しは運動しておけばよかった、と後悔していた。

そんな慈を尊も追う。2人の距離はあまり縮まらない。というより、尊自身あまり運動が得意な方ではない為か徐々に引き離されていった。

— 3日目 — 生徒会室 —

どたどたと騒がしい足音が聞こえる。何だ、今度は何が起きた？ Gの大群にでも出

くわしたか？ うちら男面子は総じてGへの耐性がほぼ皆無だからなあ、その中でも俺は……体に付いたり飛んで来たりすれば失神モノだ。少なくとも3mかそれ以降の距離でエアガンで安全に始末したい。まあ、後処理は誰かに任せる事になるが。

そんな馬鹿な事を考えている間にも、足音はどんどん近付いてきた。……ん？

「おい雅!!」

扉を粉碎するんじゃないかと思うぐらいの音に、その音に負けないレベルの怒号。流石に俺も一瞬間食らってしまったが、今やこの校舎はかなり風通しが良くなっている。そんな大声を出されればあいつらを寄せ付けてしまおうだろうに。

「うるさいぞ」

「てめえ人を馬車馬みたいに働かしておいて自分のはのんびりお絵かきか!!」

恵比寿沢は机に広げられているノートに描かれている書きかけの図を見てガチギレしている。遂にこの時が来たか、遅かれ早かれこうなるとは思っていたが予想より早い。あまり我慢はできないタイプみたいだ。

「バリケードはどうした」

「んなもん終わったよ!! それより——」

完了報告を聞いて、俺は恵比寿沢の顔にノートを突きつける。どうやらそこに書かれている文を読むだけの冷静さは残っているらしい。

「遠征……物資、調達？」

「この校舎にある物資はいずれ底を尽く。まあ量が量だから一朝一夕とはいかないが、備えは多いに越した事はない。それに……武器も必要だ、お前もスコップ一本でこのままって訳にもいかないだろ」

「ま、まあ……確かに。でもあれはシャベルだからな」

「……そうか、なら“シャベル”で。それで、いくらシャベルとは言え金属製だ、木刀より武器としての機能は高いが限界はある」

恵比寿沢はさつきまで鬼の形相で掴み掛ろうとしていた事も忘れ、真面目に考えている。ちよろい……いや真面目な話をしてるんだからそれに応えてくれるだけ人間が出来るのか。

「確かに木刀じゃ足止めぐらいしか出来ないよな、でもどこから武器を取って来るんだ？」

「こいつを見てくれ」

棚からここら一带の地図を取り出してくると、机の上に広げる。地図には無数の付箋が貼られており、それぞれの施設から得られる物資の見込み量……それと生存者が逃げ込みやすそうな場所まで、想定段階ではあるが一応の目星はつけておいた。

そして比較的この校舎から近い地点——ホームセンターを指で示す。

「……ホームセンターって、またありきたりな」

「そう、ありきたりにして序盤最強装備が揃う場所。それがここだ。ゾンビ蔓延る世界になった時、大多数の人間はまずここを挙げる。工具から日常雑貨、武器もあれば……店舗にもよるが加工設備もある。ここ以外に当面必要な物資が揃う場所は少ない」

「そこなら行つた事あるけど、加工設備とかはなかったな」

「そうか……残念だが仕方ない。まあ電力が無ければ動かないものが大半だからな。とにかくここを目指そうと思う。こればかりは若狭や佐倉先生の意見も聞かないといけないだろうから、全員集めて話し合おう」

恵比寿沢はこくりと頷くと、改めて地図に貼られた無数の付箋を見ていた。

「なんだ、サボってるのかと思つたら案外ちゃんとしてたんだな」

「当たり前だろう、この状況でサボる程余裕があると思うか？」

「教えてくれたらいいのに」

「今やっている事で手一杯の奴にこの後どれだけ仕事量があると言えばやる気なくすに決まってる。まずは1つ、完璧にやらせてから自分の能力を自覚させた方がいいと考えたまでだ」

それは過去から学んだ教訓の1つだ。とあるサバイバル系ゲームにて、俺はあらゆる予定を最初からシノと尊さんに提示した。その結果、全く以て自由な時間がないと感じ

たシノはやる気を喪失。そのゲームは半年ほど積むハメになった。

……尊さんは嫌な顔せずやってくれたけど、「ミヤちゃん、この詰め方かなりブラックだよ」と言われたのは今でも覚えている。

「み、ミヤちゃん……」

「ん？」

若干足を引き摺りながら部屋に入ってくる尊さん、続いてそれに付き添う佐倉先生。その姿に俺と恵比寿沢はなんのこっちゃと頭の上に疑問符を浮かべる。

「あー、そうだ。あたし雅にカチコミにいくつて飛び出したんだつた」

「あー」

それを追う途中で転びでもしたか、災難だな尊さん。

「丁度いいな、シノ達が戻り次第緊急会議を始める。尊さんは傷の応急処置を。恵比寿沢、救急箱を頼む」

「あ、よ」

佐倉先生は……ああ、もう尊さん座らせて応急処置の態勢に入ってるな。なら問題ない。後はシノ達の帰りを待つだけだ。

それから忍と悠里が生徒会に戻るまでは20分程掛かり、その間に尊さんの応急処置は終わった。幸い骨折や捻挫もせず、脛にあざができた程度だったものの……遠征には

行かない方がよさそうだな。こここの守りを任せる大任もある事だし。